

## 独立行政法人国立美術館の平成22年度に係る業務の実績に関する評価

### 全体評価

<参考> 業務の質の向上:A 業務運営の効率化:A 財務内容の改善:A

#### ①評価結果の総括

- ・第2期中期計画の達成に向けて順調に進捗している。
- ・平成22年度の独立行政法人国立美術館の活動は、当初の目標を期待どおりに達成した。各館の常設展(所蔵作品展)と国立新美術館の年次展、すなわち「アーティスト・ファイル」及び「文化庁メディア芸術祭」に文化的感性を養成する実りある成果がみられ、企画展も充実した水準にあることは、高く評価できる。
- ・研究部門と管理部門が体系的・組織的に活動しており、業務運営の効率化・財務内容の改善に寄与していると認められる。

#### ②平成22年度の評価結果を踏まえた、事業計画及び業務運営等に関して取るべき方策(改善のポイント)

##### (1)事業計画に関する事項

・美術振興の中心的拠点として当初の事業計画に沿って、各館独自の活動や各展覧会活動を展開し、業績をあげていることは認められる。一方で、5館で構成される一法人として、加えてナショナルセンターとしての使命を持つ法人として、高い理念を構築することが望まれる。また、5館の横断的企画・総合的プロジェクトについては、引き続き積極的に取り組むことが期待される。

・国立美術館5館が東京・京都・大阪の大都市圏に設置されていることもあり、「国民の財産であるナショナルコレクション」の認知が、まだ浅いと思われる。地域の美術館と連携し、国民がナショナルコレクションに触れる機会の増大を図るなど、当該コレクションの存在が浸透するための方策を検討すべきである。

・キュレーター研修については、公私立美術館等のニーズを踏まえた実施が求められる。

##### (2)業務運営に関する事項

・業務運営効率化への取り組みは成果を上げているが、今後その限界について定量的な検討ではなく、定性的な解釈の検討を行うことが期待される。その際、文化行政においては人材育成とその継続性が重要であるため、人件費削減が人材の採用・開発・育成に支障をきたさないようにすべきである。

##### (3)その他

・特になし

#### ③特記事項

- ・事業仕分けや「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」等については、着実に対応を進めている。
- ・東日本大震災のような、想定外の事態が発生することを考慮し、節電対策やそれに伴う収蔵品の管理及び耐震設備など、具体的な方策を独立行政法人国立美術館全体で対応し、他の美術館にとって先導的役割を果たすことを期待する。

# 文部科学省独立行政法人評価委員会 文化分科会国立美術館部会委員名簿

## <正委員>

前田 富士男 中部大学人文学部教授

## <臨時委員>

市川 政憲 茨城県近代美術館館長

金原 宏行 常葉学園大学教授

武田 潔 早稲田大学文学学術院教授

宮島 博和 公認会計士

(以上5名)

# 独立行政法人国立美術館の平成22年度に係る業務の実績に関する評価

## 項目別評価総表

項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※				
	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度		18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
(大項目名)国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A	A	A	(小項目名)ナショナルセンターとしての人材育成	B	B	B	B	B
(中項目名)美術振興の中核的拠点としての多彩な活動の展開	A	A	A	A	A	(小項目名)フィルムセンターの取組状況	A	A	A	S	S
(小項目名)展覧会への取組(常設展)	A	A	A	A	A	(大項目名)業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A	A	A
(小項目名)展覧会への取組(企画展)	A	A	A	A	A	(小項目名)業務の効率化の状況	A	A	A	A	A
(小項目名)国立新美術館の取組	B	A	A	A	A	(大項目名)財務、人事、施設整備に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A	A	A
(小項目名)情報の発信	A	A	S	S	A	(小項目名)財務の状況	A	A	A	A	A
(小項目名)教育普及活動の実施状況	A	A	A	A	A	(小項目名)短期借入金の限度額	A	A	A	A	A
(小項目名)調査研究の実施状況	B	B	A	A	A	(小項目名)重要な財産の処分等に関する計画	A	A	A	A	A
(小項目名)観覧環境の提供	B	A	A	A	A	(小項目名)剰余金の使途	A	A	A	A	A
(小項目名)国立新美術館の開館	B	/				(小項目名)人事の状況	A	A	B	A	A
(中項目名)我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・継承	A	A	A	A	A	(小項目名)施設整備の状況	A	A	A	A	A
(小項目名)収蔵品の収集	A	A	A	A	A	(小項目名)関連公益法人	A	A	A	A	A
(小項目名)収蔵品の保管・管理	B	A	A	A	A						
(小項目名)収蔵品の修理	A	A	A	A	A						
(小項目名)収集・保管のための調査研究	A	A	A	A	A						
(中項目名)我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与	B	A	A	A	A						
(小項目名)ナショナルセンターとしての国内外の美術館等との連携・協力	B	A	A	A	A						

※当該中期目標期間の初年度から経年変化を記載。

※「-」は当該年度では該当がないことを、「/」は終了した事業を表す。

備考(法人の業務・マネジメントに係る意見募集結果の評価への反映に対する説明等)  
 本法人の業務・マネジメントに係る意見募集を実施した結果、意見は寄せられなかった。

## 【参考資料1】予算、収支計画及び資金計画に対する実績の経年比較

(単位:百万円)

区分	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	区分	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
収入						支出					
運営費交付金	6,779	6,042	5,790	5,773	5,859	運營業業費	7,274	13,417	16,133	14,787	15,237
展示事業収入	744	1,485	1,311	1,294	1,432	人件費	1,181	1,267	1,112	1,189	1,038
受託収入	42	18	33	4	0	管理部門※1	420	441	331	346	285
寄附金収入	29	11	35	17	13	事業部門※1	761	826	781	843	753
消費税等還付税額	0	0	0	0	0	業務経費	6,093	5,757	5,771	5,399	6,307
施設整備費補助金	0	6,393	9,250	7,205	7,836	一般管理費	816	1,960	1,607	1,467	1,315
文化芸術情報電子化推進費補助金	0	0	0	1,049	0	展覧事業費	2,183	2,906	2,964	2,735	3,642
						調査研究事業費	201	233	201	198	172
						教育普及事業費	489	658	999	999	1,178
						国立新美術館 ※2	2,404	0	0	0	0
						施設整備費補助金	0	6,393	9,250	7,150	7,892
						文化芸術情報電子化推進費補助金	0	0	0	1,049	0
計	7,594	13,949	16,419	15,342	15,140	計	7,274	13,417	16,133	14,787	15,237

※1 平成18年度より管理部門と事業部門を分けて記載

※2 国立新美術館設立等準備事業費(平成18年度は国立新美術館開館準備等事業費等)

(単位:百万円)

区分	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	区分	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
費用						収益					
経常費用	5,886	6,097	5,930	5,704	5,795	運営費交付金収益	5,231	4,802	4,485	4,297	4,554
収集保管事業費	316	339	323	341	411	資産見返運営費交付金戻入	109	140	145	156	148
展覧事業費	1,468	1,901	1,861	1,714	1,815	資産見返寄付金戻入	0	0	1	1	3
調査研究事業費	444	382	296	322	302	資産見返物品受贈額戻入	21	14	15	15	14
教育普及事業費	714	788	1,154	1,156	1,288	入場料収入	601	921	774	786	932
新館設置対応費	554	0	0	0	0	その他事業収入	139	563	533	500	491
受託事業費	41	18	33	4	0	受託収入	42	18	33	4	0
一般管理費	2,217	2,509	2,083	1,992	1,810	補助金等収益	0	0	0	10	0
減価償却費	131	156	164	172	165	寄附金収益	16	16	10	41	8
臨時損失	1	4	16	3	4	施設費収益	0	11	127	66	175
						雑益	4	2	6	7	9
						臨時利益	1	8	8	18	0
計	5,886	6,097	5,930	5,704	5,795	計	6,164	6,495	6,137	5,901	6,334
						純利益	278	398	207	197	539
						目的積立金取崩額	0	0	0	6	0
						総利益	278	398	207	203	539

(単位:百万円)

区分	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	区分	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
資金支出						資金収入					
業務活動による支出	7,315	7,213	6,972	6,681	7,940	業務活動による収入	7,557	7,628	7,111	7,340	8,185
投資活動による支出	430	6,355	8,486	7,858	6,610	運営費交付金収入	6,779	6,042	5,790	5,773	5,859
財務活動による支出	0	4	3	1	0	入場料収入	605	919	774	785	931
国庫納付金の支払額	1,499	0	0	0	0	その他事業収入	136	605	479	575	485
資金に係る換算差額	0	0	0	0	4	寄附金収入	27	12	35	18	13
翌年度への繰越金	1,409	1,765	1,777	2,435	2,755	受託収入	10	50	33	33	4
						補助金等収入	0	0	0	156	894
						投資活動による収入	0	6,300	8,362	7,858	6,688
						前年度よりの繰越金	3,096	1,409	1,765	1,777	2,435
計	10,653	15,337	17,238	16,975	17,309	計	10,653	15,337	17,238	16,975	17,309

## 【参考資料2】貸借対照表の経年比較

(単位:百万円)

区分	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	区分	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
資産						負債					
流動資産	1,487	1,910	2,840	3,692	4,261	流動負債	1,202	1,351	2,061	2,681	2,638
固定資産	121,326	127,036	135,218	142,359	149,765	固定負債	1,265	1,192	1,144	1,085	1,102
						負債合計	2,467	2,543	3,205	3,766	3,740
						純資産					
						資本金	81,019	81,019	81,019	81,019	81,019
						資本剰余金	38,668	44,327	52,570	59,805	67,268
						利益剰余金	659	1,057	1,264	1,461	1,999
						(うち当期末処分利益)	(278)	(398)	(207)	(203)	(539)
						純資産合計	120,346	126,403	134,853	142,285	150,286
資産合計	122,813	128,946	138,058	146,051	154,026	負債・純資産合計	122,813	128,946	138,058	146,051	154,026

## 【参考資料3】利益(又は損失)の処分についての経年比較 (単位:百万円)

区分	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
I 当期末処分利益	278	398	207	203	539
当期総利益	278	398	207	203	539
II 利益処分額	278	398	207	203	539
積立金	278	398	207	203	539
独立行政法人通則法第44条第3項により主務大臣の承認を受けた額	0	0	0	0	0
美術作品購入・修理積立金	0	0	0	0	0
設備積立金	0	0	0	0	0

備考：今中期目標期間については、通則法第44条第3項の目的積立金の申請を平成18～19年度に行ったものの、認定されなかった。理由として「独立行政法人の経営努力認定について（平成18年7月21日（平成19年7月4日改訂）総務省行政管理局）」の（3）「独立行政法人の経営努力認定の基準」、②「経営努力認定の対象案件の利益の実績が原則として前年度実績額を上回ること（ただし、前年度実績が前々年度の実績を下回っている場合には、その理由を合理的に説明することが必要。）。」に対する合理的説明が認められなかったことにより、全額積立金への計上となっている。

また、平成20年度においては207百万円、平成21年度においては203百万円の利益が生じた。これは、主として入場料収入等が収入予算額を上回ったことにより生じた利益であるが、両年度とも前年度よりも利益が下がっており、「独立行政法人の経営努力認定について」に対する合理的な理由を見つけることが難しいため、目的積立金の申請を行わないこととした。

## 独立行政法人国立美術館の平成22年度に係る業務の実績に関する評価

段階的評価の区分及び定量的な評価を行う際の各段階別評価の達成度の目安については、次の考え方とする。

- S : 特に優れた実績を上げている。  
(客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特性に応じて評価を付す。)
- A : 中期計画どおり、又は中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、又は中期目標を上回るペースで実績を上げている。  
(当該年度に実施すべき中期計画の達成度が100%以上)
- B : 中期計画通りに履行しているとは言えない面もあるが、工夫や努力によって、中期目標を達成し得ると判断される。  
(当該年度に実施すべき中期計画の達成度が70%以上100%未満)
- C : 中期計画の履行が遅れており、中期目標達成のためには業務の改善が必要である。  
(当該年度に実施すべき中期計画の達成度が70%未満)
- F : 評価委員会として業務運営の改善その他の勧告を行う必要がある。  
(客観的基準は事前に設けず、業務改善の勧告が必要と判断された場合に限りFの評価を付す。)

# 独立行政法人国立美術館の平成 22 年度に係る業務の実績に関する評価

<p>【(大項目)1】</p>	<p>I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置</p>	<p>【評定】</p> <p style="text-align: center;">A</p>			
		<p>H18</p>	<p>H19</p>	<p>H20</p>	<p>H21</p>
		<p>A</p>	<p>A</p>	<p>A</p>	<p>A</p>
<p>【(中項目)1-1】</p>	<p>1. 美術振興の中核的拠点としての多彩な活動の展開</p>	<p>【評定】</p> <p style="text-align: center;">A</p>			
		<p>H18</p>	<p>H19</p>	<p>H20</p>	<p>H21</p>
		<p>A</p>	<p>A</p>	<p>A</p>	<p>A</p>

<p>【(小項目)1-1-1】</p>	<p>展覧会への取組</p>	<p>【評定】(常設展)</p> <p style="text-align: center;">A</p>			
<p>【法人の達成すべき計画】</p>		<p>H18</p>	<p>H19</p>	<p>H20</p>	<p>H21</p>
<p>(1)多様な鑑賞機会の提供</p>		<p>A</p>			
<p>①-1 利用者のニーズ、学術的動向を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。</p>		<p>【評定】(企画展)</p> <p style="text-align: center;">A</p>			
<p>①-2 常設展は、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与することを目指す。</p>		<p>H18</p>	<p>H19</p>	<p>H20</p>	<p>H21</p>
<p>①-3 企画展は、積年の研究成果に基づき、時宜を得たものを企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、利用者のニーズに対応しつつ、特に次の観点に留意して実施する。</p>		<p>A</p>			
<p>(イ) 国際的視野に立ち、海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。</p>		<p>H18</p>	<p>H19</p>	<p>H20</p>	<p>H21</p>
<p>(ロ) 展覧会テーマの設定やその提示方法等について新しい方向性を示すことに努める。</p>		<p>A</p>	<p>A</p>	<p>A</p>	<p>A</p>
<p>(ハ) メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。</p>					



(二) 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に努める。

なお、企画展の開催回数は概ね以下のとおりとする。

(東京国立近代美術館)

本館 年3回～5回程度

工芸館 年2回～3回程度

フィルムセンター 年5番組～6番組程度

(京都国立近代美術館)

年6回～7回程度

(国立西洋美術館)

年3回程度

(国立国際美術館)

年5回～6回程度

(国立新美術館)

年6回～7回程度(公募展を除く。)

①-4 各館で展覧会を開催するにあたっては、実施目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努める。

①-5 各館の連携による共同企画展の実施について検討し推進する。

② 地方における鑑賞機会の充実、所蔵作品の効果的活用を図る観点から、地方のニーズを反映させた地方巡回展を積極的に行う。また、公立文化施設等と連携協力して、所蔵映画フィルムによる優秀映画鑑賞会を実施する。

③ 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに実施目的、想定する入館者層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境の確保、広報活動、過去の入館者等の状況等を踏まえて入館者数の目標を設定し、その達成に努める。

④ 映画フィルム・資料の所蔵作品を活用した上映、展示等の活動に重点的に取り組む。

**【インプット指標】**

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	1,468	1,900	1,861	1,714	1,815
従事人員数(人)	60	61	59	59	57

1) 決算額は損益計算書 展覧事業費を計上している。

2) 従事人員数は、すべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績	分析・評価					
(1)多様な鑑賞機会の提供 ①-1 国立美術館は、利用者のニーズ、研究成果を踏まえ、各館の特色を	(1)多様な鑑賞機会の提供 ① 所蔵作品展 <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td>館名</td> <td>開催日数</td> <td>展示替回数</td> <td>入館者数</td> <td>目標数</td> </tr> </table>	館名	開催日数	展示替回数	入館者数	目標数	(常設展に関する分析・評価) ○常設展(所蔵作品展)を計画どおり開催し、設定した目標入館者数を達成したと評価できる。
館名	開催日数	展示替回数	入館者数	目標数			

活かした所蔵作品展を開催したか。  
また、あわせて企画展では、建築、アニメーションやアジアに目を向けた展覧会、作家・作品の再発見・再評価、海外の美術館との連携協力により世界の美術の紹介を目指した展覧会を開催したか。

また、各館の企画・連携のあり方を検討し、各館における展覧会企画等の連絡調整を引き続き行うとともに、9月に「影」をテーマとした5館合同企画展「陰影礼讃－国立美術館コレクションによる」を国立新美術館で開催したか。

映画については、保存・復元の成果を最大に活用しつつ、作家や時代、国やジャンル等さまざまな切り口による上映会を実施して、多様な鑑賞機会の提供を図ったか。また、大使館等の機関、団体との連携により外国作品を紹介する上映会を開催するほか、前年度に引き続き、映画産業の枠外で製作された日本映画の上映を行ったか。

なお、入館者に対するアンケート調査を行い、そのニーズや満足度を分析し、結果を展覧会事業等に反映させるとともに、各館のホームページを活用し展覧会事業等の広報により一層努めたか。

(東京国立近代美術館)

本館・工芸館

目標入館者数計：49万4千4百人

東京国立近代美術館(本館)	267	5	172,795	162,000
東京国立近代美術館(工芸館)	201	4	56,418	55,000
京都国立近代美術館	223	5	127,234	104,000
国立西洋美術館	278	4	271,823	250,000
国立国際美術館	197	4	423,557	252,000
計	1,166	22	1,051,827	823,000

#### 各館の特徴

##### ア 東京国立近代美術館 (本館)

所蔵作品展「近代日本の美術」では、絵画・彫刻・水彩・素描・版画・写真など、約10,000点のコレクションから、毎回170～220点の作品を選び、時代ごとに章分けした構成を施し、20世紀初頭から現代に至る近代日本美術の流れを系統的に分かりやすく概観できるように展示した。あわせて、各階の時代区分などの大枠や主要作品の出品は一定に保ちながら、会期ごとに(前年度からの継続を含め6会期)大幅な展示作品の入れ替え(日本画・版画・写真はすべて)を行った。

また4F 特集コーナー、3F 版画コーナー・写真コーナー、2F ギャラリー4では、「特集 長谷川利行」、所蔵作品による小企画「手探りのドローイング」、テーマで歩こう「庭－作家の小宇宙」など13回の小企画展・テーマ展を実施した。さらに、年間計画に既に組まれたもの以外に「盛田良子コレクション」など適宜小特集コーナーを増設した。全体として、来館者の満足度を上げる工夫を行うなど、編年順の所蔵作品展とは異なった視点を導入し、新鮮さと会期ごとの変化を印象づけるよう努めた。

##### (工芸館)

陶磁、ガラス、染織、漆工、木竹工、金工・ジュエリー、人形、グラフィック・デザイン等の各分野にわたるコレクションの中から、本年度は春の恒例的な企画となっている「近代工芸の名品－花－」のほか、「アール・デコ時代の工芸とデザイン」、「こども工芸館／おとな工芸館 イロ×イロ」、「現代の人形」、「近代工芸の名品」を実施した。このうち、「こども工芸館／おとな工芸館」では、本展にあわせて児童・生徒を対象の中心とした鑑賞プログラムを連動させて開催した。また、引き続き、展示会場の作品キャプションや出品目録の作家名、作品名にフリガナをふるとともに、素材や技法を標記するなど、来館者サービスの充実に努めた。

##### イ 京都国立近代美術館

当館の「コレクション・ギャラリー」では、本年度も継続して、コレクションの有効活

○常設展は、近年重視される方向にあり、特にテーマ設定を明確化した展覧会は、いわば小企画展として入館者からの注目度も高い。4館それぞれの個性・相違を生かした取組も興味深く、高く評価できる。各館とも、もっぱら所蔵作品中の特定の優作を静かに鑑賞しようとするリピーターの存在も忘れることなく、バランスのよい展覧会運営がなされていることは評価に値する。

○常設展の広報は以前に比較して改善されているが、「テーマ・コレクション展」のかたちをとる場合は、そのテーマの設定や前回のテーマからの継続性など、ホームページで丁寧に紹介する努力を怠らないでほしい。また、一般向けに、わかりやすい100字キャプションなどが必要である。

#### (企画展に関する分析・評価)

○企画展は高水準の展覧会がみられた。入館者数、展覧会内容、運営業務など、年度当初の目標をよく達成した。

○東京国立近代美術館の「生誕100年岡本太郎展」、京都国立近代美術館の「『日本画』の前衛1938－1949」、「パウル・クレー／終わらないアトリエ」、国立国際美術館では「東芋」、「死なないための葬送－荒川修作初期作品展」、国立新美術館では「マン・レイ展」、そして毎年開催の方式が良い内容をもたらしている「アーティスト・ファイル展」を評価する。

また、ブラングイン展は、国立西洋美術館の出自を探る企画であり、一般には知られぬ情報が公開された意義は大きいと認められる。

<p>&lt;本館&gt;</p> <p>所蔵作品展では、近代日本美術の流れを通史的に展覧するという同館の役割を踏まえつつ、鑑賞者が関心をもちやすいようめりはりのある展示を行う。また、所蔵作品研究の成果に基づき、解説文の一層の掲出に努めるとともに、南薫造、長谷川利行といった作家の特集展示や、「しみ」、「手探りのドローイング」、「空虚の形態学」等のテーマに基づく小企画を実施したか。</p> <p>企画展では、時代やジャンルのバランスを考慮しつつ編成したか。具体的には、回顧展として、近代日本画の代表的作家である小野竹喬と上村松園、近代洋画の重要作家である麻生三郎をとりあげるとともに、戦後の前衛美術の中心作家岡本太郎の個展及び京都国立近代美術館との共同企画により1938年から49年の日本画の前衛的動向を扱う『『日本画』の前衛 1938-1949』展を開催する。写真部門では鈴木清の個展を、また、美術館による建築へのアプローチを模索しつつ、「建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション」を開催したか。</p> <p>目標入館者数計：41万5千4百人</p> <p>ア 所蔵作品展 目標入館者数計：16万2千人 「近代日本の美術」展(285日間)</p>	<p>用との視点から、5回の展示替えを行うとともに、「上村松園展」に関連し、法人全体の取組によって新たに収蔵となった作品の披露も兼ねた「創る女ーハンナ・ヘヒの世界」、「『日本画』の前衛 1938-1949」に関連し「玉村方久斗特集」、「麻生三郎展」に関連し「麻生三郎をめぐる画家たち」など、企画展に関連したコレクションによる小企画展やテーマ展示を実施した。また、引き続き、事前に「コレクション・ギャラリー」の展示内容とともに、テーマ展示や小企画についてもその開催意図などをホームページ上で紹介した。</p> <p>ウ 国立西洋美術館</p> <p>所蔵作品から約200点の絵画・彫刻を選んでおおむね時代順に配列し、中世末期から20世紀までの西洋美術の流れを辿ることのできる展示を行った。この間、4回の展示替えを行ったが、それによる休室は最小限にとどめ、絵画・彫刻コレクションの主要作品を常時公開するよう努めた。</p> <p>また、版画素描展示室では、開館50周年記念事業の一環として、また「フランク・ブラングイン展」の関連展示として企画された「所蔵水彩・素描展—松方コレクションとその後」ははじめ5本の小企画展を開催し、素描・版画コレクションの多様な側面を紹介した。</p> <p>なお、常設展用の新しい音声映像ガイド「Touch the Museum」を本格的に稼働させたが、ダウンロード数は約5万件弱に及ぶものの、実際の展示室での利用者の数は少なかった。広報等を通じてさらなる周知に努めていきたい。</p> <p>エ 国立国際美術館</p> <p>本年度の所蔵作品展は、共催展及び企画展の開催にあわせて4回行った。特にコレクション4では当館が開館以来、開館ポスターやロゴタイプの制作を依頼し、非常につながるの深いデザイナーを特集し「早川良雄ポスター展」を開催した。また、これまで展示する機会が無かった作品や寄贈作品を積極的に活用して展示を構成するとともに、実施する機会の少なかった講演会をあわせて実施した。</p> <p>全体的に、本年度は、企画展に併せて、関連の作家、作品を展示したり、あるいは、近年の収蔵品を中心に展示を構成するなど、創意、工夫を凝らした展覧会を行った。</p> <p>② 企画展</p> <p>企画展は、利用者のニーズに応え、以下の観点に留意して実施した。</p> <p>イ 国際的視野に立ち、海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世</p>	<p>○しかし、ゴッホ展については、2005年にきわめて優れた独自の企画展が実現されており、同一の法人が6年後に同じゴッホ展を開催するならば、より高水準な内容を期待することになる。その点で、企画内容については慎重な検討を加えて欲しい。</p> <p>○国立美術館5館合同企画展である「陰影礼讃」は、国のコレクションの活用という点で、各館の連携に基づき、資源のよく生かされた好企画であり、恒例化されることが望ましい。</p> <p>一方で共同企画であるがゆえに、テーマの掘り下げにやや不足があったと思われる。こうした共同企画の努力はおよそ中断すべきでない以上、5館による研究水準での綿密な協力と真摯な取り組みなど、今後の改善をおおいに期待したい。</p> <p>○企画展については、キュレーション・コンセプトの欠如したいわゆる名品展などはやはり自己点検すべき段階にあると考える。</p>
---	--	--

5回展示替え、あわせて8回程度の小・中規模の特集展示、小企画の実施

イ 企画展

目標入館者数計：25万3千4百人

(ア)「生誕120年 小野竹喬展」

期間：平成22年3月2日(火)～4月11日(日)(37日間(うち平成22年度10日間))

共催：毎日新聞社、NHK、NHKプロモーション

目標入館者数：3万人(うち平成22年度8千人)

(イ)「建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション」

期間：平成22年4月29日(木・祝)～8月8日(日)(88日間)

目標入館者数：2万9千人

(ウ)「上村松園展」

期間：平成22年9月7日(火)～10月17日(日)(36日間)

共催：日本経済新聞社  
目標入館者数：15万人

(エ)「麻生三郎展」

期間：平成22年11月9日(火)～12月19日(日)(36日間)

共催：京都国立近代美術館  
目標入館者数：1万2千人

(オ)「鈴木清展」

界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。

ロ 展覧会テーマの設定やその提示方法等について新しい方向性を示すことに努める。

ハ メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。

ニ 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に努める。

ホ その他

館名	展覧会名	開催日数	入館者数	目標数	企画趣旨	共催者
東京国立近代美術館(本館)	①生誕120年 小野竹喬展	10	30,933	8,000	ロ、ニ	毎日新聞社、NHK、NHKプロモーション
	②建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション	88	36,705	29,000	ロ、ハ	
	③上村松園展	36	155,520	150,000	ロ	日本経済新聞社
	④麻生三郎	36	10,303	12,000	ニ	京都国立近代美術館
	⑤鈴木清写真展 百の階梯、千の来歴	45	15,170	12,000	ニ	
	⑥『日本画』の前衛 1938—1949	32	10,406	8,000	ニ	京都国立近代美術館
	⑦ 生誕100年 岡本太郎展【※1】	16	26,896	34,400	ロ	川崎市岡本太郎美術館、NHK、NHKプロモーション
	計	263	285,933	253,400		
東京国立近代美術館(工芸館)	①現代工芸への視点—茶事をめぐって	60	12,692	11,000	ロ	
	②栄木正敏のセラミック・デザイン—リズム&ウェーブ	32	8,623	8,000	ホ	
	③ガラス★高橋禎彦展【※2】	22	4,449	5,000	ロ	
	計	114	25,764	24,000		
京都国立近代	①マイ・フェイバリット—とある美術の検索目録／所蔵作品から	31	14,018	8,000	ロ、ニ	

<p>期間：平成22年10月29日(金)～12月19日(日)(45日間)</p> <p>会場：本館ギャラリー4</p> <p>目標入館者数：1万2千人</p> <p>(カ)「『日本画』の前衛1938-1949」</p> <p>期間：平成23年1月8日(土)～2月13日(日)(32日間)</p> <p>共催：京都国立近代美術館</p> <p>目標入館者数：8千人</p> <p>(キ)「生誕100年 岡本太郎展」</p> <p>期間：平成23年3月8日(火)～5月8日(日)(55日間(うち平成22年度22日間))</p> <p>共催：NHK、NHKプロモーション、川崎市立岡本太郎美術館(予定)</p> <p>目標入館者数：8万6千人(うち平成22年度3万4千4百人)</p> <p>&lt;工芸館&gt;</p> <p>所蔵作品展では、年間を通して企画性のある特集展示を行ったか。具体的には、春に恒例の花を主題とした「近代工芸の名品—花」や、近年の収集で充実してきた「アール・デコ」、夏休み企画としての「こども工芸館／おとな工芸館」、さらに巡回展で好評だった「現代の人形」等の展覧会を開催したか。</p> <p>なお、夏季の「こども工芸館／おとな工芸館」では、小・中学校教職</p>	美術館	②稲垣仲静・稔次郎兄弟展	36	11,247	13,000	ニ	京都新聞社
	③ローマ追想—19世紀写真と旅	34	7,232	14,000	イ,ニ	国立グラフィック研究所(ローマ), ジュゼッペ・パニーニ写真美術館(モデナ), モデナ貯蓄銀行基金	
	④京都市立芸術大学創立130周年記念事業協賛 Trouble in Paradise/生存のエシックス	39	10,009	10,000	ロ,ハ		
	⑤『日本画』の前衛 1938—1949	39	8,504	13,000	ロ	東京国立近代美術館	
	⑥上村松園展	36	126,979	100,000	ホ	日本経済新聞社, 京都新聞社	
	⑦麻生三郎展	41	9,558	10,000	ニ	東京国立近代美術館	
	⑧パウル・クレ—おわらないアトリエ	17	14,149	17,000	イ,ロ	日本経済新聞社, 京都新聞社	
	計	273	201,696	185,000			
	国立西洋美術館	①フランク・ブラングイン展	53	66,198	50,000	イ,ロ,ニ	読売新聞社
	②ナポリ・宮廷と美—カポディモンテ美術館展 ルネサンスからバロックまで	81	152,747	250,000	イ,ニ	イタリア文化財省・カポディモンテ美術館, TBSテレビ, 東京新聞	
	③アルブレヒト・デューラー版画・素描展 宗教／肖像／自然	67	69,599	30,000	イ,ロ	朝日新聞社, メルボルン国立ヴィクトリア美術館	
	④レンブラント 光の探求/闇の誘惑【※3】	5	12,533	40,000	イ	日本テレビ放送網, 読売新聞社	
	計	206	301,077	370,000			

<p>員を対象とする研修の実施や工芸館作成のセルフガイドを利用した鑑賞授業のための指導案等を配布するほか、教育現場からの意見も取り入れて、各成長段階にあった鑑賞補助教材を作成し、児童・生徒による工芸鑑賞の一層の推進に努めたか。また、大人向けの鑑賞の手引きを作成し、子どもだけでなく、大人も子どもと一緒に展覧会を楽しく鑑賞できるようにしたか。</p> <p>企画展では、「現代工芸への視点」のシリーズ化を図り、近年若い世代で再見されつつある茶の工芸をめぐる新たな動向を検証する特別展や、現代のガラス作家を代表する一人である高橋禎彦の個展を開催したか。また、本館ギャラリー4を会場に、現代のプロダクト・デザイン界で重要な地位にある栄木正敏の回顧展を開催したか。</p> <p>目標入館者数計：7万9千人</p> <p>ア 所蔵作品展 目標入館者数計：5万5千人 「近代工芸の名品－花」他 (207日間)4回展示替え</p> <p>イ 企画展 目標入館者数計：2万4千人 (ア)「現代工芸への視点－茶事をめぐって(仮称)」 期間：平成22年9月15日(水)</p>	国立国際美術館	①国立国際美術館新築移転 5周年記念 絵画の庭—ゼロ年代日本の地平から	4	6,980	1,000	口	朝日新聞社、朝日放送
	②ルノワール—伝統と革新	63	321,024	131,000	イ,ニ	読売新聞社、読売テレビ	
	③死なないための葬送—荒川修作初期作品展	63	325,412	133,000	ニ		
	④東芋：断面の世代	56	47,609	25,000	ハ	読売新聞社	
	⑤横尾忠則全ポスター	54	37,259	24,000	口,ハ,ニ	日本経済新聞社	
	⑥マン・レイ展	42	26,413	20,000	口	日本経済新聞社	
	⑦ウフィツィ美術館 自画像コレクション 巨匠たちの「秘めた素顔」1664-2010	67	60,589	90,000	イ	朝日新聞社	
	⑧風穴 もうひとつのコンセプトアリズム、アジアから	21	4,015	5,000	口		
	計	370	829,301	429,000			
	国立新美術館	①ルノワール—伝統と革新	5	35,317	20,000	イ	読売新聞社、日本テレビ放送網
	②アーティスト・ファイル 2010 —現代の作家たち	31	17,766	15,000	ホ		
	③ルーシー・リー展	48	113,584	48,000	ニ	東京国立近代美術館、日本経済新聞社	
	④オルセー美術館展 2010 「ポスト印象派」	72	777,551	280,000	イ,口	オルセー美術館、日本経済新聞社	
	⑤マン・レイ展	54	75,124	81,000	口,ニ	日本経済新聞社	
	⑥陰影礼讃—国立美術館コレクションによる	36	29,143	18,000	イ		
⑦没後 120年 ゴッホ展	70	595,346	270,000	イ	東京新聞、TBS		
⑧未来を担う美術家たち DOMANI 明日展 2010 文化庁芸術家在外研修の成果	26	15,881	13,000	ホ	文化庁、読売新聞社		
⑨平成22年度[第14回]文化庁メディア芸術祭	11	63,490	45,000	ハ	文化庁メディア芸術祭実行委員会(文化庁、C)		

～11月23日(火・祝)(60日間)

目標入館者数:1万1千人

(イ)「高橋禎彦展」

期間:平成23年3月1日(火)～5月8日(日)(63日間)(うち平成22年度28日間)

目標入館者数:1万1千人(うち平成22年度5千人)

(ウ)「栄木正敏展」

期間:平成23年1月8日(土)～2月13日(日)(32日間)

会場:本館ギャラリー4

目標入館者数:8千人

#### <フィルムセンター>

上映会では、所蔵作品を活用して「映画の中の日本文学 Part3」、「生誕百年 映画監督 黒澤明」等の企画を開催するとともに、フィルムセンターの開館40周年にあわせ、「発掘された映画たち2010」、「フィルム・コレクションに見るNFCの40年」、「新収蔵作品選集」の3つの上映企画を実施する。また、共催企画としては、「第32回びあフィルムフェスティバル」や「びあフィルムフェスティバルの軌跡Vol.3」を開催し非商業映画の上映を本年度も継続するとともに、「EUフィルムデーズ2010」、「ポルトガル映画祭2010」、「シネマアフリカ2010」を開催して外国映画の紹介にも力を注いだ

						G-ARTS協会)
	⑩シュルレアリスム展 ーパリ、ポンピドゥセンター所蔵作品によるー【※4】	36	82,316	132,000	イ	ポンピドゥセンター, 読売新聞社, 日本テレビ放送網
	⑪アーティスト・ファイル 2011 ー現代の作家たちー【※5】	8	1,632	13,000	ハ	
	計	397	1,807,150	935,000		
合計		1,623	3,450,921	2,196,400		

備考:【※1, 2】東日本大震災の影響により臨時休館 6 日間, 開館時間を短縮した。

【※3】東日本大震災の影響により臨時休館 12 日間, 開館時間を短縮した。

【※4, 5】東日本大震災の影響により臨時休館 8 日間(⑩は 6 日間), 開館時間を短縮した。

#### ③ 国立美術館5館合同企画展

国立美術館全体の所蔵作品を最大限に活かした 5 館合同企画による「陰影礼讃」展については、「影」をテーマにした独立行政法人国立美術館のコレクションの充実をものがたる好企画として、話題となった。

展覧会名:「陰影礼讃ー国立美術館コレクションによる」

会 期:平成 22 年 9 月 8 日(水)～10 月 18 日(月)(36 日間)

会 場:国立新美術館

出 点 数:170 点

入館者数:29,143 人

#### ④ 巡回展

企画館	展覧会名	開催館	開催日数	入館者数
国立国際美術館	新しい美術の系譜 術館の名作	宮城県美術館	52	8,290
	セザンヌ、ピカソから現代まで 展 国立国際美術館の名作	都城市立美術館	44	7,038
東京国立近代美術館(工芸館)	東京国立近代美術館工芸館所蔵名品展「耀くわざと美ー日本工芸のいま」	香川県立ミュージアム	51	5,351

か。

展覧会では、スチル写真やポスターの所蔵コレクションを活用しつつ、文学という切り口を導入した「映画の中の日本文学 Part3」や、所蔵の大藤信郎監督資料による「アニメーションの先駆者 大藤信郎」を開催したか。また、上映企画と関連させて「生誕百年 映画監督 黒澤明」を開催したか。さらに所蔵作品展(映画遺産)の大規模なリニューアルを実施したか。

上映会・展覧会

目標入館者数計：11万6千5百人

ア 上映会

目標入館者数計：10万5千5百人

(大ホール)

(ア)「映画の中の日本文学Part 3」

期間：平成22年4月6日(火)～5月9日(日)(30日間)

目標入館者数：1万2千人

(イ)「フィルムセンター開館40周年記念① 発掘された映画たち2010」

期間：平成22年5月11日(火)～5月27日(木)(15日間)

目標入館者数：4千人

(ウ)「EUフィルムデーズ2010」

期間：平成22年5月28日(金)

		愛媛県美術館	38	6,783
	東京国立近代美術館工芸館名品展—四季の花を愛で—	和光ホール(和光本館6階)	15	3,205
計			200	30,667

企画館	タイトル	会場数	開催日数	入館者数
東京国立近代美術館(フィルムセンター)	平成 22 年度優秀映画鑑賞推進事業	195会場	443 (延べ日数)	90,331
	「生誕百年 映画監督 山中貞雄」巡回事業	3会場	16	1,143
	フィルムセンターの至宝—アニメの源へ：日本のアニメーション映画(1924～1952年)	1会場	4	187
	ポルデノーネ無声映画祭2010 松竹の三巨匠—島津保次郎,清水宏,牛原虚彦	1会場	8	8,000
	第1回中之島映像劇場 美術と映像：戦前から戦後へ—東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵作品による上映会—	1会場	2	340
計		201会場	473	100,001

⑤ 東京国立近代美術館フィルムセンター映画上映等

【上映会】

タイトル	会場	上映回数	日数	入館者数	目標数	企画趣旨	共催者
①映画の中の日本文学 Part3	大ホール	90	30	13,584	12,000	口	
②フィルムセンター開館40周年記念① 発掘された映画たち 2010	大ホール	30	15	3,217	4,000	口・ニ	
③EUフィルムデーズ 2010	大ホール	44	21	9,602	7,500	ホ	
④フィルムセンター開館 40周年記	大ホール	98	49	10,909	10,000	ホ	



<p>～6月20日(日)(21日間) 共催:駐日欧州連合代表部、EU加盟国大使館・文化機関 目標入館者数:7千5百人 (エ)「フィルムセンター開館40周年記念② フィルム・コレクションに見るNFCの40年(仮称)」 期間:平成22年6月29日(火)～7月15日(木) 平成22年7月31日(土)～9月9日(木)(50日間) 目標入館者数:1万人 (オ)「第32回びあフィルムフェスティバル」 期間:平成22年7月16日(金)～7月30日(金)(13日間) 共催:PFFパートナーズ 目標入館者数:5千5百人 (カ)「日葡交流150周年記念 ポルトガル映画祭2010(仮称)」 期間:平成22年9月17日(金)～10月3日(日)(15日間) 共催:コミュニティシネマセンター、ポルトガル大使館 目標入館者数:4千人 (キ)「映画監督 吉田喜重」 期間:平成22年10月5日(火)～10月31日(日)(24日間) 目標入館者数:7千人 (ク)「生誕百年 映画監督 黒澤明」 期間:平成22年11月9日(火)～12月26日(日)(42日</p>	念② フィルム・コレクションに見るNFCの40年								
	⑤第32回びあフィルムフェスティバル	大ホール	40	14	5,283	5,500	ロ・ニ	PFFパートナーズ(びあ、TBS)、財団法人日本映像国際振興協会	
	⑥日本ポルトガル修好通商条約150周年 ポルトガル映画祭2010 マノエル・ド・オリヴェイラとポルトガル映画の巨匠たち	大ホール	37	15	7,613	4,000	ニ	コミュニティシネマセンター、ポルトガル大使館	
	⑦映画監督五十年 吉田喜重	大ホール	48	24	7,395	7,000	ニ		
	⑧生誕百年 映画監督 黒澤明	大ホール	123	42	21,483	26,500	ニ		
	⑨フィルムセンター開館40周年記念③ よみがえる日本映画—映画保存のための特別事業費による【※】	大ホール	44	18	7,971	8,500	ニ		
	⑩映画の教室2010 [京橋映画小劇場 No.18]	小ホール	18	9	1,988	2,000	ホ		
	⑪日本インディペンデント映画史シリーズ③ びあフィルムフェスティバルの軌跡 vol.3	小ホール	34	17	647	1,000	ロ・ニ	びあ株式会社	
	⑫アニメーションの先駆者 大藤信郎 [京橋映画小劇場 No.19]	小ホール	18	9	1,544	1,500	ニ		
	⑬アンコール特集:2009年度上映作品より[京橋映画小劇場 No.20]	小ホール	18	9	1,616	2,000	ホ		
	⑭日本—南アフリカ交流100周年記念 シネマアフリカ2010	小ホール	26	11	1,597	2,500	ホ	シネマアフリカ2010実行委員会	
	⑮現代フランス映画の肖像 ユニフランス寄贈フィルム・コレクション	小ホール	135	45	14,649	11,500	ニ		

間)  
 目標入館者数:2万6千5百人  
 (ケ)「現代フランス映画選集(仮称)」  
 期間:平成23年1月7日(金)~  
 2月27日(日)(45日間)  
 目標入館者数:1万1千5百人  
 (コ)「フィルムセンター開館40周年  
 記念③ 新収蔵作品選集(仮称)」  
 期間:平成23年3月1日(火)~  
 3月27日(日)(24日間)  
 目標入館者数:8千5百人

(小ホール)  
 (サ)「京橋映画小劇場No.18 映画  
 の教室2010」  
 期間:平成22年5月7日(金)~  
 5月23日(日)(9日間)  
 ※金、土、日曜日のみ上映  
 目標入館者数:2千人  
 (シ)「日本インディペンデント映画史  
 シリーズ③ ぴあフィルムフェスティ  
 ヴァルの軌跡Vol.3」  
 期間:平成22年6月29日(火)  
 ~7月23日(金)(22日間)  
 共催:ぴあ株式会社  
 目標入館者数:1千人  
 (ス)「京橋映画小劇場No. 19 アニ  
 メーションの先駆者 大藤信郎」  
 期間:平成22年8月20日(金)  
 ~9月5日(日)(9日間)  
 ※金、土、日曜日のみ上映  
 目標入館者数:1千5百人  
 (セ)「京橋映画小劇場No.20 アンコ  
 ール特集:2009年度上映作品よ

より							
計		803	328	109,098	105,500		

備考:【※】東日本大震災の影響で会期を24日から実質18日となり、上映回数も72回から実質44回となり、実施できた上映回数は予定60%にとどまった。

【展覧会】

展覧会名	日数	入館者数	目標数	企画趣旨
①映画資料でみる 映画の中の日本文学 Part3	66	2,783	3,000	口・ニ
②アニメーションの先駆者 大藤信郎	63	3,397	2,500	口・ハ・ニ
③生誕百年 映画監督 黒澤明	81	5,970	4,000	口
④フィルムセンター設立40周年企画 展示室リニューアル記念 NFC 映画展覧会の15年 1995-2010	36	1,402	1,500	口
計	246	13,552	11,000	

備考:【※】東日本大震災の影響で会期を42日から実質36日と短縮となった。

<p>り」  期間:平成22年10月1日(金)  ～10月17日(日)(9日間)  ※金、土、日曜日のみ上映  目標入館者数:2千人</p> <p>(ノ)「シネマアフリカ2010(仮称)」  期間:平成22年11月13日  (土)～11月25日(木)(11  日間)  共催:シネマアフリカ実行委員  会、南アフリカ共和国大  使館  目標入館者数:2千5百人</p> <p>イ 展覧会  目標入館者数計:1万1千人</p> <p>(ア)「映画資料でみる 映画の中の日  本文学 Part3」  期間:平成22年4月6日(火)～  6月20日(日)(66日間)  目標入館者数:3千人</p> <p>(イ)「アニメーションの先駆者 大藤信  郎」  期間:平成22年6月29日(火)  ～9月9日(木)(63日間)  目標入館者数:2千5百人</p> <p>(ウ)「生誕百年 映画監督 黒澤明」  期間:平成22年9月17日(金)  ～10月31日(日)  平成22年11月9日(火)  ～12月26日(日)(81日  間)  目標入館者数:4千人</p> <p>(エ)常設展「日本映画のあゆみ(仮</p>		
---	--	--

称)」

期間:平成23年2月1日(火)～

3月27日(日)(48日間)

目標入館者数:1千5百人

(京都国立近代美術館)

所蔵作品展では、従来の方針を維持し京都を中心とする近代美術の回顧、展望を試みるとともに、企画展と連動したテーマ性の高い小企画をさらに充実させ、関西を中心とした近代美術を積極的に展示する。また、日本画については、第二次大戦前後の日本画の前衛運動の研究を集中的に紹介したか。

企画展では、「京都市立芸術大学創立130年記念事業協賛 Trouble in Paradise:生存のエシックス」展で現代美術と最新の科学技術が重なり合う新しい領域を紹介し、『『日本画』の前衛 1938-1949』展では、戦後日本画の前衛運動の母体となった、日本画の革新運動の調査研究成果を展示したか。

目標入館者数計:28万9千人

ア 所蔵作品展

目標入館者数計:10万4千人

コレクション展「近代の美術・  
工芸・写真」(223日間)4回展  
示替え

企画展と関連した小企画及  
びコレクション展単独での特集

企画 2回程度

イ 企画展

目標入館者数計:18万5千人  
(ア)「マイ・フェイバリットとある  
美術の検索目録／所蔵作品  
から」

期間:平成22年3月24日(水)  
～5月5日(水・祝)(38日  
間(うち平成22年度31日  
間))

目標入館者数:1万人(うち平  
成22年度8千人)

(イ)「稲垣仲静・稔次郎兄弟展」

期間:平成22年5月18日(火)  
～6月27日(日)(36日間)

共催:京都新聞社

目標入館者数:1万3千人

(ウ)「ローマ追想－19世紀写真  
と旅」

期間:平成22年5月20日(木)  
～6月27日(日)(34日間)

共催:国立グラフィック研究所  
(ローマ)、ジュゼッペ・パニ  
ーニ写真美術館(モデ  
ナ)、モデナ貯蓄銀行基金

目標入館者数:1万4千人

(エ)「京都市立芸術大学創立130  
年記念事業協賛 Trouble in  
Paradise: 生存のエシックス」

期間:平成22年7月9日(金)～  
8月22日(日)(39日間)

目標入館者数:1万人

(オ)「『日本画』の前衛 1938－

<p>1949」  期間:平成22年9月3日(金)～  10月17日(日)(39日間)  共催:東京国立近代美術館  目標入館者数:1万3千人  (カ)「上村松園展」  期間:平成22年11月2日(火)  ～12月12日(日)(36日  間)  共催:日本経済新聞社  目標入館者数:10万人  (キ)「麻生三郎展」  期間:平成23年1月5日(水)～  2月27日(日)(47日間)  共催:東京国立近代美術館  目標入館者数:1万人  (ク)「パウル・クレー 創成する芸  術(仮称)」  期間:平成23年3月12日(金)  ～5月15日(日)(57日間  (うち平成22年度17日  間))  共催:日本経済新聞社  目標入館者数:7万4千人(うち  平成22年度1万  7千人)</p> <p>(国立西洋美術館)  所蔵作品展では、松方コレクション  とあわせて版画素描展示室における  小企画として、フランス近代作家の素  描を中心とする「所蔵水彩・素描展」  のほか、「フランス近代版画展」、「イ  タリア版画展」を開催したか。</p>		
--	--	--

企画展では、「ナポリ・宮廷と美ーカポディモンテ美術館展 ルネサンスからバロックまで」において、ナポリ宮廷が収集したイタリア、ルネサンスとバロック期の美術を一堂に会しナポリのカポディモンテ美術館の優品を紹介したか。「アルブレヒト・デューラー版画・素描展 宗教／肖像／自然」では、海外の美術館から借用した作品と同館の所蔵作品によって、デューラーの版画芸術の全貌を「宗教」、「肖像」、「自然」という三つの観点から紹介したか。「レンブラント:光の画家(仮称)」では、オランダのレンブラント・ハウスとの共同企画により、油彩画のほか、和紙を用いたレンブラントとレンブラント派の版画に関する最新の研究成果を紹介したか。

目標入館者数計:62万人

ア 所蔵作品展

目標入館者数計:25万人

(310日間)

「ルネッサンス以降のヨーロッパ近世絵画」

「近・現代絵画と彫刻」

イ 企画展

目標入館者数計:37万人

(ア)「フランク・ブラングイン展」

期間:平成22年2月23日

(火)~5月30日(日)(85

日間(うち平成22年度53

<p>日間))</p> <p>共催:読売新聞社</p> <p>目標入館者数:7万人(うち平成22年度5万人)</p> <p>(イ)「ナポリ・宮廷と美ーカポディモンテ美術館展 ルネサンスからバロックまで」</p> <p>期間:平成22年6月26日(土)~9月26日(日)(81日間)</p> <p>共催:TBS、東京新聞</p> <p>目標入館者数:25万人</p> <p>(ウ)「アルブレヒト・デューラー版画・素描展 宗教/肖像/自然」</p> <p>期間:平成22年10月26日(火)~平成23年1月16日(日)(67日間)</p> <p>共催:朝日新聞社</p> <p>目標入館者数:3万人</p> <p>(エ)「レンブラント:光の画家(仮称)」</p> <p>期間:平成23年3月12日(土)~6月12日(日)(81日間(うち平成22年度17日間))</p> <p>共催:日本テレビ放送網</p> <p>目標入館者数:20万人(うち平成22年度4万人)</p> <p>(国立国際美術館)</p> <p>所蔵作品展では、現代美術の動向</p>		
---	--	--



を発信するため、特に新収蔵作品を有効に活用した展示を行ったか。

企画展では、国際的に知られるグラフィックデザイナーで画家の横尾忠則から寄贈を受けた全ポスターによる展覧会を開催するとともに、「ウフィツィ美術館 自画像展」では、同館秘蔵の自画像コレクションを一堂で紹介したか。

また、若手の映像作家 東芋の新作個展やアジアを中心とした新しいコンセプトチュアル・アートをとらえる展覧会を開催し、幅広い客層の関心に応じたか。

目標入館者数計:68万1千人

ア 所蔵作品展

目標入館者数計:25万2千人

「コレクション1～4」

(197日間)3回展示替え

イ 企画展

目標入館者数計:42万9千人

(ア)「国立国際美術館新築移転

5周年記念 絵画の庭 ゼロ年代日本の地平から」

期間:平成22年1月16日(土)

～4月4日(日)(68日間(うち平成22年度4日間))

共催:朝日新聞社、朝日放送

目標入館者数:2万人(うち平成22年度1千人)

<p>(イ)「ルノワールー伝統と革新」  期間:平成22年4月17日(土)  ～6月27日(日)(63日間)  共催:読売新聞社、読売テレ</p> <p>目標入館者数:13万1千人</p> <p>(ウ)「死なないための葬送ー荒川  修作初期作品展」  期間:平成22年4月17日(土)  ～6月27日(日)(63日間)  目標入館者数:13万3千人</p> <p>(エ)「束芋:断面の世代」  期間:平成22年7月10日(土)  ～9月12日(日)(56日間)  目標入館者数:2万5千人</p> <p>(オ)「横尾忠則全ポスター」  期間:平成22年7月13日(火)  ～9月12日(日)(54日間)  共催:日本経済新聞社  目標入館者数:2万4千人</p> <p>(カ)「マン・レイ展」  期間:平成22年9月28日(火)  ～11月14日(日)(42日  間)  共催:日本経済新聞社  目標入館者数:2万人</p> <p>(キ)「ウフィツィ美術館 自画像  展」  期間:平成22年11月27日  (土)～平成23年2月20  日(日)(67日間)  共催:朝日新聞社  目標入館者数:9万人</p> <p>(ク)「風穴ーもうひとつのコンセプト</p>		
---	--	--

チュアリズム、アジアから」

期間：平成23年3月8日(火)

～6月5日(日)(78日間(う

ち平成22年度21日間))

目標入館者数：1万9千人(う

ち平成22年度

5千人)

(国立新美術館)

自主企画展では、日本を中心に海外にも眼を配り、新しい現代美術の状況を、若手作家の先鋭な活動を中心に毎年定期的に開催しているグループ展「アーティスト・ファイル」(2010及び2011)において紹介したか。

共催展では、広く近現代美術及び西洋美術を対象とし、新たな視点による展覧会を実施しているが、本年度は特に19世紀後半から20世紀にかけての西欧の近代美術の展開に焦点を当てたか。

印象派からポスト印象派への展開を新しい視点から捉えた「オルセー美術館展2010「ポスト印象派」」や印象派の巨匠ルノワールの全貌を捉える回顧展、ポスト印象派の巨匠ゴッホの芸術の成立に迫った個展では、19世紀後半から末における近代絵画の誕生を検証し、紹介したか。また、20世紀を代表する陶芸家ルーシー・リーの回顧展、ポンピドゥー・センターの所蔵作品によるシュルレアリスムの誕生と展開をたどった展覧会、20世紀の前衛芸術と写真に大きな足跡を残

したマン・レイの回顧展により、20世紀のモダニズム芸術の多様な展開を検証したか。

さらに、本年度の新たな試みとして、独立行政法人国立美術館の5つの美術館が共同し企画した「美術における影」をテーマとする展覧会を開催し、ナショナルコレクションの充実と研究員の企画力を示したか。

目標入館者数計：93万5千人

(ア)「ルノワールー伝統と革新」

期間：平成22年1月20日(水)  
～4月5日(月)(66日間(うち平成22年度5日間))

共催：読売新聞社、日本テレビ放送網

目標入館者数：22万人(うち平成22年度2万人)

(イ)「アーティスト・ファイル2010ー現代の作家たち」

期間：平成22年3月3日(水)～5月5日(水・祝)(56日間(うち平成22年度31日間))

目標入館者数：2万7千人(うち平成22年度1万5千人)

(ウ)「ルーシー・リー展」

期間：平成22年4月28日(水)～6月21日(月)(48日間)

共催：東京国立近代美術館、

<p>日本経済新聞社  目標入館者数:4万8千人  (エ)「オルセー美術館展2010  「ポスト印象派」  期間:平成22年5月26日(水)  ~8月16日(月)(72日間)  共催:日本経済新聞社  目標入館者数:28万人  (オ)「マン・レイ展」  期間:平成22年7月14日(水)  ~9月13日(月)(54日間)  共催:日本経済新聞社  目標入館者数:8万1千人  (カ)「陰影礼讃ー国立美術館コレ  クションによる」  期間:平成22年9月8日(水)~  10月18日(月)(36日間)  目標入館者数:1万8千人  (キ)「ゴッホ展」  期間:平成22年10月1日(金)  ~12月20日(月)(70日  間)  共催:東京新聞、TBS  目標入館者数:27万人  (ク)「DOMANI・明日展2010」  期間:平成22年12月11日  (土)~平成23年1月23  日(日)(26日間)  共催:文化庁  目標入館者数:1万3千人  (ケ)「平成22年度[第14回]文化  庁メディア芸術祭」  期間:平成23年2月2日(水)~  2月13日(日)(11日間)</p>		
---	--	--

共催：文化庁、CG-ARTS協  
会

目標入館者数：4万5千人

(コ)「シュルレアリスム展(仮称)」

期間：平成23年2月9日(水)

～5月9日(月)(78日間(う

ち平成22年度44日間))

共催：読売新聞社

目標入館者数：23万4千人(う

ち平成22年度1

3万2千人)

(サ)「アーティスト・ファイル2011

－現代の作家たち」

期間：平成23年3月2日(水)～

5月5日(木・祝)(57日間

(うち平成22年度26日

間))

目標入館者数：2万8千人(うち

平成22年度1万

3千人)

#### 国立美術館

目標入館者数計：313万5千9百  
人

所蔵作品展(展示)：83万4千人

企画展(企画上映)：230万1千9百  
人

- ①-2 国立美術館における企画機能の強化を図るため、引き続き、①交換展・共同企画展の充実と、②所蔵作品の相互貸出の推進に努めるとともに、③平成23年度以降における新たな5館合同企画による展覧会

の開催について検討を行ったか。また、さらなる企画機能強化のため、各館研究員の協働や人材の活用等について検討したか。

- ①-3 国立美術館全体の所蔵作品を最大限に活かした5館合同企画による展覧会を開催したか。

名称:「陰影礼讃－国立美術館コレクションによる」

会期:平成22年9月8日(水)～10月18日(月)(36日間)

会場:国立新美術館2階企画展示室

概要:視覚芸術の起源と深く関わるにも関わらず、総合的に顧みられることが従来ほとんどなかった「影」をテーマとした展覧会。約160点で構成。

- ② 地方における鑑賞機会の充実及び美術の普及を図るため、全国の公私立美術館等と連携して、地方巡回展を実施したか。また、全国の公立文化施設等において優秀映画鑑賞推進事業を実施したか。

ア 国立美術館巡回展

「現代美術への誘い(仮称)」(担当館:国立国際美術館)

国立国際美術館が所蔵する現代絵画・写真作品から、戦後の欧米の代表作から最新の動向までを展示し、現代美術の多様な拡がり

<p>を採る。あわせて、講演会・シンポジウム等を実施したか。</p> <p>(ア)期間:平成22年8月5日(土)～10月3日(日) 会場:宮城県美術館</p> <p>(イ)期間:平成22年10月16日(土)～12月5日(日) 会場:都城市立美術館(宮崎県)</p> <p>イ 各館の巡回展</p> <p>(ア)巡回展「東京国立近代美術館 工芸館名品展」</p> <p>a 期間:平成22年7月17日(土)～9月5日(日) 会場:香川県立ミュージアム</p> <p>b 期間:平成22年9月18日(土)～10月31日(日) 会場:愛媛県美術館</p> <p>(イ)「東京国立近代美術館所蔵 工芸名品展」</p> <p>期間:平成22年8月26日(木)～9月11日(土) 会場:和光ホール(東京都)</p> <p>ウ 優秀映画鑑賞推進事業</p> <p>広く国民に優れた映画鑑賞の機会を提供し、あわせて国民の映画文化や映画芸術への関心を高め、映画フィルム保存の重要性についての理解を促進するため、文化庁との共催事業として、教育委員会、公共文化施設等と連携・協力して、全国各地で映画の巡回上映を実施したか。</p>		
--	--	--



プログラム:100作品25プログラム(1プログラム4作品)

日本映画史を彩る名匠たちの代表作やスターが活躍するヒット作、時代劇、青春映画等、それぞれのジャンルを代表する名作、時代を画した話題作等で構成し、同時に、地域の特色を持った構成により、多くの会場が参加できる工夫したか。

期間:平成22年7月12日(月)~平成23年3月13日(日)

#### エ 巡回上映

(ア)「生誕百年 映画監督 山中貞雄」巡回事業

期間:平成22年4月~平成23年3月(予定)

会場:全国5会場(予定)

共催:コミュニティシネマセンタ

—

(イ)「日本の初期アニメーション映画」

期間:平成22年5月(予定)

会場:韓国映像資料院 KOF Aシネマテーク

共催:韓国映像資料院

- ③ 国立美術館は、展覧会ごとに実施目的、想定する入館者層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境の確保、広報活動、過去の入館者等の状況等を踏まえて入館者数の目標を設定し、その達成に努めたか。

【(小項目)1-1-2】	国立新美術館等の取組	【評定】 A																					
<p>【法人の達成すべき計画】</p> <p>(2)美術創造活動の活性化の推進</p> <p>国立新美術館は、全国的な活動を行っている美術団体等に展覧会会場の提供を行うとともに、新しい美術の動向を紹介することなどを通じて、美術に関する新たな創造活動の展開やアーティストの育成等を支援し、我が国の美術創造活動の活性化に資する。</p> <p>また、メディアアート、アニメ、建築など世界から注目される新しい芸術表現の国内外に向けた拠点的な役割を果たすことを目指し、その取組みを積極的に進める。</p>		H18	H19	H20	H21																		
<p>【インプット指標】</p> <table border="1" data-bbox="120 485 1308 651"> <thead> <tr> <th>(中期目標期間)</th> <th>H18</th> <th>H19</th> <th>H20</th> <th>H2</th> <th>H22</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>決算額(百万円)</td> <td>2,160</td> <td>2,366</td> <td>2,157</td> <td>2,050</td> <td>2,092</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td>9</td> <td>9</td> <td>8</td> <td>8</td> <td>8</td> </tr> </tbody> </table> <p>1) 決算額は、評価基準①はセグメント情報 国立新美術館経常費用を計上している。 評価基準②は展覧事業費の一部であり、個別に計上できないため、本項目では計上していない。</p> <p>2) 従事人員数は、国立新美術館のすべての研修職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>		(中期目標期間)	H18	H19	H20	H2	H22	決算額(百万円)	2,160	2,366	2,157	2,050	2,092	従事人員数(人)	9	9	8	8	8	B	A	A	A
(中期目標期間)	H18	H19	H20	H2	H22																		
決算額(百万円)	2,160	2,366	2,157	2,050	2,092																		
従事人員数(人)	9	9	8	8	8																		
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績				分析・評価																		
<p>(2)美術創造活動の活性化の推進</p> <p>① 国立新美術館は、さまざまな美術表現を紹介し、新たな視点を提起する展覧会事業を行ったか。</p> <p>ア 美術団体等に次の展覧会(「公募展」)会場の提供等を行ったか。</p> <p>(ア)平成22年度に公募展を開催する美術団体等に会場を提供したか。</p> <p>(イ)平成24年度に施設を使用する美術団体等を決定したか。</p> <p>(ウ)美術団体等が快適に施設を使用できる環境と、連携して行う教育普及事業の充実を図ったか</p> <p>(エ)公募団体関係者からの意見を踏まえ、バックヤード等の使用や</p>	<p>(2)美術創造活動の活性化の推進</p> <p>① 公募団体等への展覧会会場の提供(国立新美術館)</p> <p>公募展団体数:69 団体 年間利用室数:延べ 3,500 室/年 稼働率:100% 入館者数:1,266,989 人</p> <p>1 公募団体等から寄せられた意見・要望も参考としつつ、公募展の効率的な開催準備と円滑な運営を図るため、以下のような取組みを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作品搬入出時の車両の入退館時間の指定や駐車場の割振りを団体ごとに実施。</li> <li>・作品用エレベータの使用時間割振りや使用備品の事前配置等の徹底。</li> <li>・審査、展示等に必要の備品の充実。</li> <li>・展示作品の素材や陳列方法等について、施設の管理運営上問題の生じる可能性のある公募団体等との事前協議の徹底。</li> <li>・公募展運営サポートセンターにおいて、使用公募団体等に関する電話(国立新美術館公募展案内ダイヤル)への問い合わせ対応の実施。</li> <li>・公募展のポスター掲示や公募展開催案内チラシの作成及び配布による広報の実施。</li> <li>・館ホームページの公募展紹介ページに、文字情報に加えポスター等の画像情報</li> </ul>				<p>○国立新美術館においては公募団体等への展覧会会場の提供が順調に推移し、目標を達成したと評価できる。</p> <p>○「アーティスト・ファイル」「文化庁メディア芸術祭」などは毎年開催の先導的活動として定着したと評価できる。</p>																		

展覧会開催に当たっての改善方法を検討したか。

イ 多様化する内外の新しい美術の動向を積極的に取り上げ、支援するとともに、広く紹介するため、グループ展「アーティスト・ファイル」をはじめとする企画展等を実施したか。

② メディアアートなど、国際的にも注目される新しい芸術表現を取り上げる展覧会等について、以下のとおり実施したか。

ア 東京国立近代美術館では、世代もタイプも異なる7組の日本の建築家の新作インスタレーションにより「建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション」を開催し、美術館ならではの建築との関わりを探究したか。

イ 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、前年度に引き続き、日本の初期アニメーション映画のパッケージを、ソウル(韓国)等で上映したか。

ウ 京都国立近代美術館では、京都市立芸術大学と京都大学医学部の協力を得て、現代美術と最新のテクノロジー、特に精神医療の分野での重なり合う活動を検証し、現代美術とテクノロジーが切り拓く新しい表現と、現実世界での有効性を探る「Trouble in Paradise: 生存のエシックス」展を開催したか。

エ 国立西洋美術館では、社団法人

を掲載することにより広報を充実。

- ・国立新美術館ニュースへ公募団体からの寄稿を掲載することにより、広報の支援を実施。
- ・公募展と企画展の観覧料の相互割引について、実施団体の情報を館内で周知。

2 公募団体等が行う教育普及活動

館を使用する公募団体等が実施する教育普及活動に対し、講堂及び研修室の提供や運営管理上必要な助言を行った。

3 平成24年度展示室(公募展用)使用団体の募集について

平成24年度に展示室(公募展用)を使用する70団体(野外展示場のみ使用を含む。)を決定した。

② 新しい芸術表現への取組

【東京国立近代美術館本館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション	88	建築	36,705	29,000	—

- ・上記のほか、平成22年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「1960～70年代のビデオ・アート: 作品の所在調査とデータ・ベース構築」を得て、調査と資料収集を実施した。

【東京国立近代美術館フィルムセンター】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
フィルムセンターの至宝—アニメの源へ: 日本のアニメーション映画(1924～1952年)	4	アニメーション	187	—	韓国映像資料院

【京都国立近代美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
京都市立芸術大学創立130周年記念事業協賛 Trouble in Paradise /生存のエシックス	39	医療, 科学, 現代芸術から総合的に構成	10,009	10,000	

- ・京都市立芸術大学、京都大学大学院医学研究科等と連携し、これまでの現代芸術の領域でも展覧会として取り上げられなかった医療や科学などの領域を横断的にとらえ、将来登場するであろう芸術表現に、美術館がいかにかかわってゆくかという問題への最初の試みとした。

日本建築学会とともに国立西洋美術館本館の保存活用計画策定に関する調査を引き続き実施したか。

また、世界遺産登録に向けて、引き続き地域住民との連携を図るため、台東区住民等を対象とした国立西洋美術館本館見学会を台東区と共同して実施したか。

オ 国立国際美術館では、現代のアニメーション作品で最も注目されている作家の一人である東芋の新作展を実施したか。

カ 国立新美術館では、「アーティスト・ファイル」(2010、2011)及び5館合同企画展「陰影礼讃－国立美術館コレクションによる」においてビデオアート等の作品を、「文化庁メディア芸術祭」においてメディアアートやアニメ作品を紹介したか。

また、館内モニターを活用し、メディアアートを上映したか。

【国立西洋美術館】

・国立西洋美術館の世界遺産登録推薦に関する改修履歴調査及び建物維持方策策定のための調査

ル・コルビュジエ作品としての建築的特色を保持している当館は、世界遺産登録に向けて、保存と復元並びに美術館としての機能の維持・向上を図るために必要な計画を策定することが求められており、特に今回重要である改修履歴調査及び建築維持方策策定のための調査を中心に、「空調調和設備調査」「光環境調査」「躯体性能調査」「コンクリート材料調査」「構法・改修履歴調査」の各調査を社団法人日本建築学会へ依頼し、調査を実施した。

また、当該調査結果を受けて、国立西洋美術館としての機能を維持しつつ、将来に向けて文化財としての復元、保存及び保全の措置、並びに敷地全体の景観等の今後の在り方を検討するため、学識経験等を有する外部委員及び内部委員で構成する「国立西洋美術館修理検討委員会」を設置した。

・国立西洋美術館本館見学会等の実施

地域住民等の来館者を対象とした国立西洋美術館本館見学会について、開館日の第2・第4日曜日に本館建物ツアーを実施した。さらに、本年度は台東区の区民講座の「まちづくり大学」(10月16日)の見学会の中で、世界遺産登録に向けた当館の取り組みについての学習に協力し、建築ツアーを実施した。

【国立国際美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
東芋:断面の世代	56	映像インスタレーション	47,609人	25,000人	読売新聞社

・東芋は、アニメーションを用いた映像作品で、現在、日本国内外で精力的な活動をしている若手作家であり、2011年に行われる第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展の日本館代表作家として、国際的な現代美術展に出品することが決定している。

本展覧会では、東芋の世界観を表現するため、展示室全体を暗闇とすることで、一体感のある会場構成を行った。また、展覧会関連イベントとして、今回の展覧会テーマである「断面の世代」のきっかけとなった劇団ワンダリング・パーティーによる演劇「トータル・エクリプス」を上演し、作家、作品への理解を深めてもらうよう心がけた。

【国立新美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
アーティスト・ファイル 2010—現代の作家たち	31	ビデオ・インスタレーション、アニメーション	17,766	15,000	
未来を担う美術家たち DOMANI・明日展 2010 文化庁芸術家在外研修の成果	26	ビデオ・インスタレーション	15,881	13,000	
平成 22 年度[第	11	ビデオ・アー	63,490	45,000	

14 回]文化庁メディア芸術祭		ト、アニメーション、ンガ、ゲーム、インタラクティブ・アート			
アーティスト・ファイル 2011—現代の作家たち	8	ビデオ・インスタレーション	1,632	13,000	
計	76		98,769	86,000	

- ・ アニメーション表現などの新しい視覚表現を紹介するための試みとして、(A)「館内映像設備による映像作品上映」、(B)「インターカレッジアニメーションフェスティバル(ICAF)2010(文化庁 平成 22 年度メディア芸術人材育成支援事業)への特別協力」を行い、(C)「TOKYO ANIMA!2011 への共催」を企画した。ICAF2010 では国内の大学などの学生によるアニメーション作品 128 点に加え、韓国とヨーロッパの映像作品を 4 日間に渡り講堂にて上映したほか、人形美術家・アニメーション作家の川本喜八郎を追悼するシンポジウムを開催し、日本のアニメーション表現のこれからの可能性を紹介した。4 日間の会期中、来場者は 1128 名であった。また(A)として、ICAF2010 の開催期間中、従前の上映場所に加え、研修室でも上映を行なった。「TOKYO ANIMA!2011」は六本木アートナイト 2011 のイベントのひとつとして企画され、30 名の若手映像作家の近作・新作を中心に 2 日間に渡り上映する予定であったが、東日本大震災のため、六本木アートナイト 2011 が中止となり、「TOKYO ANIMA!2011」も開催を延期することとなった。

【(小項目)1-1-3】	情報の発信	【評定】 A																					
<p>【法人の達成すべき計画】</p> <p>(3)美術に関する情報の拠点としての機能の向上</p> <p>国立美術館について、所蔵作品、展覧会活動、その他の活動状況を積極的に広く社会に紹介し、国立美術館についての理解を得るよう努めるとともに、国内外の美術に関する情報の収集・提供・利用の促進に努める。</p> <p>① ICT(情報通信技術)を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等の積極的な情報発信やホームページの充実を図り、ホームページのアクセス件数の年間の平均が、前中期目標期間の年間平均を上回る実績となるよう努める。</p> <p>②-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料、国内外の美術館や展覧会に関する情報及び資料を収集し、展覧会活動の推進に役立てるとともに、図書室等において芸術文化の情報サービスを広く提供するよう努め、その利用者数が前中期目標期間の年間平均を上回るよう努める。</p> <p>②-2 所蔵作品データ、所蔵資料データのデジタル化を一層推進し、ネットワークを通じてより良質で多様なコンテンツの提供を進めるとともに、本5年間の中期目標期間中のインターネット上での公開件数の実績が、前中期目標期間の実績を上回るよう努める。</p>		<table border="1"> <tr> <td>H18</td> <td>H19</td> <td>H20</td> <td>H21</td> </tr> <tr> <td>A</td> <td>A</td> <td>S</td> <td>S</td> </tr> </table>				H18	H19	H20	H21	A	A	S	S										
H18	H19	H20	H21																				
A	A	S	S																				
<p>【インプット指標】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>(中期目標期間)</th> <th>H18</th> <th>H19</th> <th>H20</th> <th>H21</th> <th>H22</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>決算額(百万円)</td> <td>714</td> <td>788</td> <td>1,153</td> <td>1,156</td> <td>1,288</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td>60</td> <td>61</td> <td>59</td> <td>59</td> <td>57</td> </tr> </tbody> </table> <p>1) 決算額は損益計算書 教育普及事業費を計上している。(本項目は教育普及事業費の一部であり、個別に計上できないため、教育普及事業費全額を計上している。)</p> <p>2) 従事人員数は、すべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>		(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	決算額(百万円)	714	788	1,153	1,156	1,288	従事人員数(人)	60	61	59	59	57				
(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22																		
決算額(百万円)	714	788	1,153	1,156	1,288																		
従事人員数(人)	60	61	59	59	57																		
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績			分析・評価																			

(3)美術に関する情報の拠点としての機能向上

① 国立美術館は、所蔵作品、展覧会活動、その他の活動状況をホームページ等を活用し積極的に広く社会に紹介し、国立美術館についての理解を得よう努めたか。

また、所蔵作品情報については、前年度に実施した国内版画家の著作権者の調査等に基づき、許諾を得たものについて所蔵作品総合目録検索システムに掲載し、収録画像の増加に努めるとともに、本年度は水彩素描その他の作品の著作権者の調査を実施したか。

これらにあわせて、所蔵作品総合目録検索システム、東京国立近代美術館・国立新美術館図書検索システム、国立新美術館アート commons 及び国立西洋美術館作品検索等の連携情報システム(国立美術館版「想-IMAGINE」)を継続して公開したか。

また、国立美術館の情報資源と国立国会図書館デジタルアーカイブポータル(PORTA)及び国立情報学研究所による WebcatPlus、文化遺産オンライン等に掲載の文化情報資源を、国立情報学研究所の「想-IMAGINE」において連携するための調査研究を継続して実施したか。

国立新美術館では、インターネットによる展覧会情報システム「アート commons」の利便性向上とともに、引き続き国内美術展カタログの海外への寄贈事業(Japan Art Catalog プロジェクト)の充実を図ったか。

② 法人本部のホームページについて内容の充実を図り、国立美術館の活動について周知広報を強化したか。

また、各館の日本語版・英語版ホームページの内容の充実に努め、展覧会情報や調査研究成果の公表等、積極的な情報発信に努めたか。

(東京国立近代美術館)

ア 研究紀要15号(平成22年度刊

(3)美術に関する情報の拠点としての機能の向上

① 情報通信技術(ICT)を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等

ア ホームページアクセス件数

館名	アクセス件数	目標数(第1期平均)
本部	11,523,314	74,434
東京国立近代美術館 (本館・工芸館・フィルムセンター含む)	11,645,025	4,341,163
京都国立近代美術館	2,412,796	222,502
国立西洋美術館	7,789,085	720,126
国立国際美術館	4,085,283	366,054
国立新美術館	11,754,976	—
計	49,210,479	5,724,279

注 国立新美術館は、第2期中期計画の平成18年度から設置のため、目標数を設定していない。

イ 各館の ICT 活用の特徴

(ア)本部

法人ホームページにおいて、引き続き国立美術館5館の開催展覧会および各種催事等トピックスの一覧を掲出するとともに、国立美術館キャンパスメンバーズについてメンバー校の一覧を整備するなど広報に努めた。

(イ)東京国立近代美術館

平成19年度より稼働のコンテンツ・マネジメント・システム(CMS)を用いて、ホームページ・コンテンツの追加更新を迅速化するとともに、「建築はどこにあるの? 7つのインスタレーション」などにおいては特設サイトを設けて広報につとめた。

独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムに新収蔵作品の文字画像データを追加するとともに、同システムへの著作権のある作品画像掲載を進めるため、許諾を得た版画作品1,308点について画像を新規登録した。また、写真についての著作権者情報を整備するとともに、著作権許諾申請手続を開始した。

フィルムセンターでは、図書閲覧室にある検索用端末で、FIAP データベース(世界の映画雑誌やアーカイブのコレクションに関する情報を収録)と JSTOR(米国非営利公益法人の提供による学術雑誌アーカイブ)という2つの電子ジャーナルを公開した。

○ICT にもとづく情報発信は、優秀な水準にあり、諸外国にくらべて遜色がない水準に達している。国立情報学研究所との連携、あるいは収蔵図書検索のシステム共有なども軌道にのり、評価できる。展覧会情報や調査研究成果の公表も、PDF 化を含め、順調に推移していると評価できる。

○美術情報の収集やデジタル化等も目標を達成している。しかし、各館の独自性は尊重するが、相互の連携性はより拡充すべきであり、図書資料の共有化・充実化なども、より一層の改善が求められる。

行予定)の全文を、平成23年3月を目途にホームページで公開したか。

イ 企画展、所蔵作品展に関する紹介の英文ホームページを日本語ページと同じくCMS機能の活用により、そのデータの拡充・更新に努めたか。

(京都国立近代美術館)

ア 研究誌「CROSS SECTIONS」第3号を刊行し、日頃の研究成果、館独自の活動を公表する。また、前年度から継続する科学研究費の成果も同誌に盛り込んだか。

イ 展覧会図録を寄贈している京都府立図書館、大阪府立中央図書館、滋賀県立図書館、兵庫県立図書館、奈良県立図書情報館において、前年度に引き続き各図書館のホームページに、寄贈した図録を蔵書リストとして掲載・更新したか。

(国立西洋美術館)

ア 所蔵作品に関して、引き続き国内外に向けての積極的な情報開示に努める。常設展(所蔵作品展)に何が展示されているか、また個々の作品はどのような資料に言及されているか等について、ホームページに日本語及び英語データの追加登録、更新を行ったか。あわせてデジタル画像の利便性についての検討を行ったか。

イ 展覧会情報やイベント情報等の同館の活動全般に関し、引き続き日英二ヶ国語で情報を発信したか。「国立西洋美術館ニュース ZEPHYROS」の全文掲載を継続して行ったか。

(国立国際美術館)

ア 所蔵作品、展覧会情報、講演会、教育普及事業等のイベント情報をホームページに掲載したか。

(ウ) 京都国立近代美術館

展覧会情報や講演会、教育普及等のイベント情報に加え、コレクション・ギャラリーの展示替えごとに、出品目録および企画する小企画やテーマ展示に関する開催意図を掲載し、情報発信の充実に努めた。さらに、美術館ニュースや研究論集など、刊行物の発行に際して掲載内容を更新した。

(エ) 国立西洋美術館

ホームページ上で公開している収蔵作品データベースでは、作品の基礎データだけではなく、より専門的な来歴・展覧会歴・文献歴等の情報も日英2ヶ国語で入力し、国際化、情報化の要求に応えるよう努めた。本年度、米国の主要な美術専門誌『Master Drawings』(vol.48, no.3, 2010)収録のオンライン・リソース集で、アジアから唯一、美術館収蔵作品データベースとして掲載されたことは、こうした取り組みが国際的に認められつつあることを示しているといえる。なお、英文項目を含むデータの遡及入力作業については、本年度も科学研究費補助金により実施することができた。

また、同データベースの画像の表示機能を改良し、作品の全図の拡大表示を行えるようにし、これをきっかけにホームページのサイトポリシーを見直し、専ら教育目的で利用する場合に限り(学校の授業、美術館の講演会など)、画像を許諾なく利用できるようルールを改善した。それに伴い申請が不要になった事により、実態を統計的に把握することは難しくなったが、当館に寄せられた米ボストン美術館の講演会での使用事例などからは、ねらい通り教育普及活動支援に結びついていることが窺える。

(オ) 国立国際美術館

本年度は、ホームページのリニューアルを行い、来館者への展覧会情報、関連イベント情報、施設利用案内の充実を図った。

また、展覧会ごとに英語版ホームページを引き続き作成し、海外への情報発信、外国人来館者への情報提供に努めた。

(カ) 国立新美術館

パソコンや携帯電話から閲覧可能なホームページで館の活動に関する情報を伝えるほか、「アーティスト・ファイル 2011」について視覚的な効果を多用して同展への興味や関心を持ってもらうことを目的とした特設ウェブサイトを公開した。

当館が所蔵する安齊重男氏撮影の写真資料群に関する書誌的情報の検索システム「ANZAI フォトアーカイブ」及び中島理嘉氏監修の『日本の美術展覧会開催実績 1945-2005』を基とした検索システム「日本の美術展覧会記録 1945-2005」を公開した。



イ 情報コーナーのパソコンによる所蔵作品閲覧の充実を図ったか。

ウ ホームページの全面改訂も視野に入れ、視認性、操作性に優れたホームページについての調査研究を行ったか。

(国立新美術館)

ア 携帯版ホームページやメールマガジンの充実を図り、一層の情報発信を推進したか。

イ 所蔵する写真資料や戦後日本の展覧会のテキスト・データをホームページ上で公開し、情報資源の積極的な活用を図ったか。

③ 美術史その他関連諸学に関する資料、国内外の美術館や展覧会に関する情報及び資料を収集し、各館の情報コーナー、アートライブラリー、資料閲覧室等において、情報サービスの提供を実施したか。

また、全国美術館会議情報・資料研究部会の企画セミナー(2010年9月実施予定)に講師として参加(東京国立近代美術館、国立西洋美術館、国立新美術館から)し、全国の美術館学芸員に対し、近年の美術情報・資料に関わる動向について紹介し最新情報の提供に努めたか。

ア 東京国立近代美術館では、近現代美術関連資料を本館アートライブラリー、近現代工芸関連資料を工芸館図書閲覧室、映画関連の図書資料をフィルムセンター図書室において収集し、公開する活動を継続的に進めたか。

イ 国立西洋美術館では、研究資料センターにおいて西洋美術に関する資料の収集・公開活動を継続的に行ったか。図書検索システムの継続的運用及び電子ジャーナルとの連携機能

展覧会情報収集提供事業(アートコモンズ)では、収集した展覧会情報と関連する美術情報(国立美術館の所蔵する作品情報や図書情報)と結びつけるため、国立情報学研究所の協力の下、本部事業として進められた「国立美術館版 想—IMAGINE」に平成 21 年度に引き続いて、国内で開催された展覧会情報を提供した。

また、当館の活動を携帯電話等でも手軽に閲覧できることを目指して、メールマガジンを平成 21 年 12 月より月 1 回継続発行している。さらに臨時休館の告知等の広報媒体としても使用し、現在約 2,300 名(平成 23 年 3 月 31 日現在)の受信登録がなされ、昨年よりおよそ 1,000 名強の登録の増加となった。

## ② 美術情報の収集、記録の作成・蓄積、デジタル化、レファレンス機能の充実

### ア 図書資料等の収集

館名	収集件数	累計件数	利用者数	目標数 (第 1 期平均)	
東京国立近代美術館	本館	3,823	11,734	2,707	1,853
	工芸館	1,659	20,693	291	317
	フィルムセンター	3,619	33,451	3,347	3,085
京都国立近代美術館	1,025	19,437	—	—	
国立西洋美術館	170	44,620	509	119	
国立国際美術館	1,244	34,617	—	—	
国立新美術館	10,272	107,568	35,190	—	
計	21,812	375,120	42,044	5,374	

注1 京都国立近代美術館は 4 階、国立西洋美術館は 1 階、国立国際美術館は地下 1 階に図録等が閲覧できる情報コーナーを設け、入館者が自由に閲覧できるようにしており、その場所については、利用者数の把握はしていない。

注2 国立新美術館は、第 2 期中期計画の平成 18 年度から設置のため、目標数を設定していない。

### イ 特記事項

#### (ア) 東京国立近代美術館

本館では、本年度において、平成 18 年度開催の藤田嗣治展の後、19 年度に寄贈された藤田家旧蔵書 836 点の登録を完了し、公開した。また、平成 24 年度の 60 周年事業の一環である年史編集のため、ミュージアム・アーカイブの整備に着手した。工芸館では、近代工芸及びデザインの資料を体系的に収集している数少ない施設であるという使命を認識し、図書資料の収集・提供に努めた。

フィルムセンターでは、平成 20・21 年度に続いて、ゆまに書房の刊行により、戦前期の重要な映画雑誌である「キネマ週報」を復刻し、すべての刊行が完了した。今回復刻される 259 冊のうち本年度内には第 6 回と補遺篇の配本として 224 号から 345 号までのうち 46 冊の原本提供を行った。また、図書室内の映画雑誌のリスト化を着

強化を図るため、老朽化した図書館システムの更新について検討したか。

ウ 国立国際美術館では、情報コーナーにおける国内外の美術図書の充実に取り組みとともにパソコンによる所蔵作品閲覧の充実を図ったか。

エ 国立新美術館では、日本の現代美術に関する資料アーカイブの構築を引き続き進めるとともに、貴重図書等の特別閲覧サービスの充実及び普及に努めたか。

④ 所蔵作品データのデジタル化及び公開を推進したか。特に国内版画家に続き、国内水彩素描その他の作品の著作権許諾手続きを進め、国立美術館所蔵作品総合目録検索システムの掲載画像の増加に努めたか。あわせて、同システムにおいて、作家及び作品に関する解説文の閲覧が可能となるようコンテンツの充実を図ったか。

また、いわゆる情報セキュリティポリシーにあたる「国立美術館情報資産安全対策基本方針」、「国立美術館情報資産安全管理規則」を踏まえ、安全管理のための実施細則の策定を進めたか。

実に進めているほか、リスト化の終了した映画パンフレットについてはデータベースへの登録を開始した。

(イ) 京都国立近代美術館

前年度から継続して採択されている科学研究費補助金によって、研究内容に関連した高額な図書を購入・収集するとともに、ハンナ・ヘッヒの「絵本」(1945年)や現代美術に関する雑誌、『富本憲吉模様集』(1923-27年)、『富本憲吉陶器集』(1933年)などの貴重図書を収集した。

(ウ) 国立西洋美術館

図書・資料に関する情報提供サービスを継続的に運用するため、インターネットで公開している蔵書検索システムのハードウェア・ソフトウェアを一新し、あわせて新旧システム間のデータ移行作業を行った。

また、これらインフラ整備と並んで、作家研究のスタンダード・レファレンスで収集対象としても重要なカタログ・レゾネ(作品総目録)を発見しやすくするため、キーワード(件名)記述作業を集中的に行った。なお、新たに生じた件名データ遡及入力の課題については、通常業務従事者への負担増を回避するとともに、インターン生に西洋美術情報の拠点として相応しい職場体験の機会を提供するため、インターンシップ・プログラムの一部として実施した。

(エ) 国立国際美術館

国内外の現代美術に関連する図書資料等を中心に収集を継続して行った。

特に、企画展や所蔵作家関連の文献に加え、国際展に関する文献なども積極的に収集を行った。

(オ) 国立新美術館

前年度より引き続き、日本の展覧会カタログを中心に網羅的、遡及的収集に努めた。国内約300、国外約60の美術館・博物館と展覧会カタログの相互寄贈関係を構築したほか、複数の個人から展覧会カタログの大口寄贈を受けた。また、安齊重男氏撮影の日本の現代美術の記録写真資料について、これまで未収蔵だった2007年～2009年分395枚を新たに収集し、さらなる充実を図った。

ウ 所蔵作品データ等のデジタル化

館名	画像データ				テキストデータ				
	デジタル化件数	デジタル化累計	公開件数	目標公開件数	デジタル化件数	デジタル化累計	公開件数	目標公開件数	
東京国立近代美術館	本館	200	10,258	5,458	1,394	170	10,612	9,985	9,144
	工芸館	320	3,368	368	23	40	3,748	3,009	2,516
	フィルムセンター(映画関連資料)	-	-	-	-	5,048	114,505	-	-

京都国立近代美術館	41	6,462	1,582	517	438	10,249	8,687	5,612
国立西洋美術館	63	5,128	202	202	20	4,573	4,389	4,058
国立国際美術館	129	6,248	2,881	2,356	104	7,110	6,206	5,101
計	753	31,464	10,491	4,492	5,820	150,797	32,276	26,431

注「公開件数」は、所蔵作品総合目録における画像及びテキストデータの公開件数である。なお、国立西洋美術館は「国立西洋美術館所蔵作品データベース」で画像データ 4,322 点を公開している。フィルムセンターについては、映画フィルムを除いた映画の関連資料についての件数を掲載している。

#### エ インフォメーションデータセンター(IDC)の確立

国立美術館 5 館全体で採用している VPN(Virtual Private Network: 暗号化された通信網)を用いて情報ネットワークの安定かつ高速化を実現するとともに、VPN を用いたグループウェアおよびテレビ会議システムを稼働させた。

国立美術館所蔵作品総合目録検索システムは引き続きデータの追加更新を行うとともに、画像掲載の増加を図るため、前年度許諾を得た版画作品 2,914 点の画像を掲載するとともに、写真についての著作権許諾の手続きを開始した。

また、国会図書館ならびに関係機関作成のデジタルアーカイブとの横断検索を可能とする「国会図書館デジタルアーカイブポータル(PORTA)」に登録している国立美術館所蔵作品総合目録検索システムのデータの新規登録分を更新するとともに、国立情報学研究所と共同開発した国立美術館版「想-IMAGINE」のデータ等を更新して国立美術館の所蔵作品、図書、展覧会に関わる情報資源の連携検索システムを公開した。

独立行政法人国立美術館の情報資産の安全な運用に努めるため、「国立美術館情報資産安全対策基本方針」「国立美術館情報資産安全管理規則」を策定した。

【(小項目)1-1-4】 教育普及活動の実施状況		【評定】 A																																		
<b>【法人の達成すべき計画】</b> (4)国民の美的感性の育成 ① 国立美術館における美術教育に関する調査研究の成果を踏まえ、学校や社会教育施設等との連携強化により、子どもから高齢者までを対象とした幅広い学習機会を提供し、各館の年間の平均参加者数が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう、それらの参加者数の増加に積極的に取り組む。 ② ボランティアや支援団体の育成と相互協力による教育普及事業の充実を図る。また、ボランティアの参加人数及び活動日数の増加に積極的に取り組む。 ③ 映画フィルム・資料の所蔵作品を活用した教育普及活動に重点的に取り組む。		H18	H19	H20	H21																															
		A	A	A	A																															
<b>【インプット指標】</b> <table border="1"> <tr> <td>(中期目標期間)</td> <td>H18</td> <td>H19</td> <td>H20</td> <td>H21</td> <td>22</td> </tr> <tr> <td>決算額(百万円)</td> <td>714</td> <td>788</td> <td>1,153</td> <td>1,156</td> <td>1,288</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td>10</td> <td>10</td> <td>10</td> <td>11</td> <td>11</td> </tr> </table> <p>1) 決算額は損益計算書 教育普及事業費を計上している。  2) 従事人員数は、教育普及事業を担当するすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>						(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	22	決算額(百万円)	714	788	1,153	1,156	1,288	従事人員数(人)	10	10	10	11	11													
(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	22																															
決算額(百万円)	714	788	1,153	1,156	1,288																															
従事人員数(人)	10	10	10	11	11																															
<b>評価基準(年度計画及び評価の視点)</b> (4)国民の美的感性の育成 ① 引き続き、年齢や理解の程度に応じたきめ細かい多様な事業を展開するとともに、美術教育に携わる教員等に対する美術館を活用した鑑賞教育に関する研修や学校で活用できる教材「アートカード」の貸し出しなどの事業を行い美術の一層の普及を図ったか。また、学校や社会教育施設に対して、これら事業の広報に努めたか。 ② 若年層の鑑賞機会の拡大を図るため、高校生以下及び18歳未満の観覧料無料化の普及広報に努めるとともに、大学等を対象とする会員制度「キャンパスメンバーズ」の加入校増加を目指したか。また、昨年度まで対象外であ	<b>実績</b> (4)国民の美的感性の育成 ① 幅広い学習機会の提供(講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トーク等) <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>実施回数</th> <th>参加者数</th> <th>目標数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">東京国立近代美術館</td> <td>本館</td> <td>118</td> <td>7,198</td> </tr> <tr> <td>工芸館</td> <td>41</td> <td>1,527</td> </tr> <tr> <td>フィルムセンター</td> <td>168</td> <td>12,027</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>89</td> <td>4,161</td> <td>1,590</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>113</td> <td>4,358</td> <td>5,582</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>59</td> <td>3,587</td> <td>2,662</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>79</td> <td>8,325</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>667</td> <td>41,183</td> <td>15,307</td> </tr> </tbody> </table> <p>ア 各館の特徴  (ア)東京国立近代美術館(本館)  幅広い層への解説プログラム(所蔵品ガイド、ハイライトツアー、キュレータートーク、アーティストトーク、音声ガイド、子ども用セルフガイドやイベント等)や来館者サービス(ライブラリ、ショップ、レストラン、休憩室、バリアフリー情報、夜間開館、無料観覧日、MOMAT パスポート等)を一覧できるリーフレット「活用ガイド」を制作している。また、特集展示などにあわせてキュレータートークを増やすなど、所蔵作品の解説プ</p>	館名	実施回数	参加者数	目標数	東京国立近代美術館	本館	118	7,198	工芸館	41	1,527	フィルムセンター	168	12,027	京都国立近代美術館	89	4,161	1,590	国立西洋美術館	113	4,358	5,582	国立国際美術館	59	3,587	2,662	国立新美術館	79	8,325	—	計	667	41,183	15,307	<b>分析・評価</b> ○教育普及活動として、目標の達成に向けて充実した学習機会が実現できており、若年層を焦点とする活動は、教員等との連携を得て着実な地歩を確立しつつあると評価できる。 ○ボランティア、支援団体との連携も順調に推移しており、全般にプログラムが経常的活動として定着し、認知されてきたと評価する。 ○フィルムセンターの所蔵品の京都国立近代美術館での上映は、コレクションの活用として新たな活路を開いたことが評価される。
館名	実施回数	参加者数	目標数																																	
東京国立近代美術館	本館	118	7,198																																	
	工芸館	41	1,527																																	
	フィルムセンター	168	12,027																																	
京都国立近代美術館	89	4,161	1,590																																	
国立西洋美術館	113	4,358	5,582																																	
国立国際美術館	59	3,587	2,662																																	
国立新美術館	79	8,325	—																																	
計	667	41,183	15,307																																	

った東京国立近代美術館フィルムセンターの上映会にも拡大を図ったか。

(東京国立近代美術館)

<本館>

所蔵作品展、企画展ともに、幅広い層にあわせたレベルと内容の教育普及プログラムを実施したか。特に小・中学生、高校生への鑑賞教育は、生涯にわたって美術と美術館に親しむための基礎的な学びの機会として位置づけ、学校と連携しつつ実施し、調査・研究を進めたか。

ア 企画展に関する講演会やシンポジウム、ギャラリートークの実施

イ 所蔵作品展に関するアーティスト・トーク(5回)、キュレーター・トーク(約15回)、解説ボランティアによる所蔵品ガイドやハイライトツアー(300回程度)の実施

ウ 企画展に関する教員のためのレクチャー付き内見会、小・中学生のためのセルフガイドの会場配布(通年)、スクールプログラムのパンフレットを学校へ送付

エ 小・中・高等学校や大学からの要請に応じた、児童・生徒・学生へのギャラリートーク、教員研修の実施、鑑賞教材の貸出(アートカード)

オ 夏季の「こども美術館」において、子どもの創作活動に関連付けた鑑賞プログラムの充実

カ 教員研究団体(東京都図画工作研究会・東京都中学美術研究会)との連携による研修の実施

プログラムを充実させたほか、特別展「建築はどこにあるの」ではダンスパフォーマンスに多くの観客を集めた。

教職員研究会の協力としては、都図研(小学校)・都中美(中学校)の二つの公的な研究団体との合同研修を、初めて共催で開催した。先生のための鑑賞講座は、2回目として「岡本太郎展」で3月11日に予定し140名の申し込みを得ていたが、当日起こった地震により中止となった(代わりに4月1日～3日に「先生のための特別鑑賞日」を設定し、69名の参加があった)。

(工芸館)

「現代工芸への視点—茶事をめぐって」,「栄木正敏のセラミックデザイン」及び「ガラス★高橋禎彦展」の各開催中にギャラリートーク及び作家による講演会を実施した。

また、「現代工芸への視点—茶事をめぐって」の開催では、作家等から構成される茶事研究のグループとの共同開催によって茶会を実施し、企画主旨に基づいた新しい鑑賞のスタイルを提言する事ができた。

(フィルムセンター)

大ホールの5企画、小ホールの3企画(うち一つはトーク・イベントの回を大ホールで開催)、展示室の3企画で、計79回のトーク・イベントを行った。上映作品にゆかりのある映画人や研究者、評論家を招いてのトークも開催したが、特に「発掘された映画たち 2010」では、国内各地のフィルム・アーカイブ機関・団体の担当者による解説を行い、映画保存業務の重要性についてアピールを試みた。また「EU フィルムデーズ 2010」では来日ゲストのトークやQ&Aに加え、昨年に続きゲスト全員を集めてのシンポジウムも開催した。

教育普及を目的とする上映イベントでは、小中学生を対象とする「こども映画館」と若い観客層の開拓を目的とした「カルト・ブランシュ～期待の映画人・文化人が選ぶ日本映画～」を開催した。

(イ)京都国立近代美術館

来館者が展覧会を自らの力で理解し観察しようとする意欲を育成することを目的として、活動を継続している。京都市立芸術大学創立130年記念事業である「Trouble in Paradise/生存のエシックス」で行われたワークショップでは、10名程の少人数制で行うことで、参加者と美術館職員・作家との間に密接なコミュニケーションが生まれ、ワークショップへの参加を機会に他の活動への興味を生みだす役割を果たした。

平成18年から5年間行われ、本年度で最後となる京都教育大学・石川誠教授による科学研究費補助金による研究プロジェクトにおいては、『『日本画』の前衛1938-1949』会場で、ノートルダム学院小学校の美術クラブの児童達を対象に鑑賞教室を行い、製作活動なども部活動におりませることで、学校教育と美術館を効果的に繋げる方法論を模索した。さらにこれを美術家教育学会、鑑賞教育研究プロジェクトと共に主催する「2010美術科教育学会地区研究会<フォーラム in 京都>美術鑑賞の問題—みる・つくる、そして状況—」で発表し、鑑賞とは何か、これからの鑑賞教育(美術教育)は何を目指すのかを考察する機会とした。

<工芸館>

所蔵作品展、企画展ごとにギャラリートークや工芸館ガイドスタッフによる鑑賞プログラム「タッチ&トーク」のほか、観覧者の層に応じた様々な教育プログラムを実施したか。

ア 研究員のほか、外部研究者や作家によるギャラリートーク(12回)及び講演会等(1回)の実施

イ 解説ボランティア(工芸館ガイドスタッフ)による鑑賞プログラム「タッチ&トーク」(90回程度)の実施

ウ 各種教育機関からの要請に応じて、児童・生徒に対するギャラリートークや「タッチ&トーク」の実施

エ 夏季の「こども工芸館」において、小・中学校教職員等を対象とした事前研究会の実施、指導案の配布

オ 夏季の「こども工芸館」において、児童を対象とした工芸作品の鑑賞補助教材の作成・配布と会期中の鑑賞教室(こどもタッチ&トーク)の実施

カ 夏季の「おとな工芸館」において、中学生以上の観覧者を対象とした工芸作品の鑑賞補助教材の作成・配布

キ 作家指導による児童・生徒を対象とした染織の技法体験を通じた、鑑賞教育のモデルケースの開発

<フィルムセンター>

ア 上映会・展覧会におけるトークイベント等の実施

イ 研究員の解説や弁士の公演等も

本年度から隔月で行われるようになった「MoMAK Films @ home」では、フィルムセンターの所蔵作品の中から 28 作品を上映した。

なお、本年度だけで 10 回以上実施したバックヤードツアーは、美術館の施設機能を紹介するもので、建築を専攻する学生を初めとする多くの参加者が興味を示している。

(ウ)国立西洋美術館

本年度は予算の関係から、恒例の「FUN DAY」、「Fun with Collection」など実施できなかったプログラムもあったが、一方で三菱商事株式会社との連携で開催している「障がい者のための鑑賞プログラム」は好評で、本年度は回数を増やして実施した。また、法人全体で作成した「アートカード」は学校教員へ周知され、貸し出しの件数も増加した。

さらに、台東区と連携して区内の小学校を対象に、ル・コルビュジエによって設計された本館や前庭についての見学会も実施した。

(エ)国立国際美術館

企画展ごとに講演会、対談、ギャラリートークなどを実施するとともに、シンポジウム「オーストラリアのメディアアート」と、「ウフィツィ美術館 自画像コレクション 巨匠たちの「秘めた素顔」1664-2010」に関連したシンポジウム「自画像の美術史—ルネサンスから現代まで」を開催した。

「自画像の美術史—ルネサンスから現代まで」では、関係者による基調講演が行われ、ルネサンス期から近代、現代までの自画像の美術史を振り返るとともに討議を行い、126 名の参加者を得ることとなった。

また、上記のほか、以下の教育プログラムを実施した。

- ・鑑賞支援教材制作に関連した「ジュニア・セルフガイド」の発行(コレクション 2, 3, 4 で配布)
- ・大学の課外授業及びスクーリングによる団体鑑賞の受入れ(9 校を受入れ)
- ・小・中・高等学校団体鑑賞の受入れ(151 校を受入れ)
- ・教員研修の実施(4 回)

(オ)国立新美術館

「森から始まるリレートーク—暮らし、環境、デザイン、そしてアートと「木」」では、「木」と「森」をテーマに、建築家やプロダクトデザイナー、美術家のほか、文化財保護の専門家や林業経営者、植物生態学者など各方面で活躍する専門家の講演とパネル・ディスカッションを行なうとともに、家具モデラーが製作した木製椅子を通して 200 近い樹種を紹介した。身近なテーマを幅広い分野から考察することにより、アートやデザインを環境や暮らしといった視点から捉えることを試みる、ユニークなプロジェクトであった。

毎年複数回開催しているアーティスト・ワークショップは、美術以外の分野からもアーティストを招き、アーティストと実際に触れ合いながら創作やレクチャーを行なうものである。企画に時間を要し、また開催場所や内容により参加人数も限られるが、参加者の満足度は極めて高く、教育普及事業の一つの柱となっている。また、その成果を録画し館内で上映するなど、ワークショップをより多くの人に知って

交えながら映画の多様性に触れる機会をつくることを目指す「こども映画館」を実施(夏休み期間、4日間程度)

ウ エイベックス・グループ・ホールディングス株式会社との共同主催により学生層を対象にした「カルト・ブランシュ 期待の映画人・文化人が選ぶ日本映画」を実施(年間4日間程度)

エ 相模原分館増築工事の進捗状況を踏まえつつ、相模原市及び独立行政法人宇宙航空研究開発機構との文化事業等協力協定に基づく上映会及び相模原市内の小・中学生を対象とした上映会の実施(相模原市教育委員会との協力事業)に努めたか。

(京都国立近代美術館)

前年度に引き続き、幅広い層の美術鑑賞教育への関心を高めることを重点目標に置き、外部からの自発的要望を積極的に支援し、美術鑑賞教育の核としての現場指導者の質の向上及び指導者の数的拡大を目指したか。

ア 学校等からの要請による美術館利用についての教員研修会等の受入れの促進

イ 教員やNPO団体の美術館利用プログラムに対する支援

ウ 学校、各種団体からの要請による解説の実施

エ 小・中・高等学校及び大学の授業

もらうための試みも行っている。

## ② ボランティアや支援団体の育成等による教育普及事業

### ア ボランティアによる教育普及事業

館名		ボランティア登録者	ボランティア参加者数	事業参加者数
東京国立近代美術館	本館	33	453	4,955
	工芸館	28	213	706
京都国立近代美術館		34	244	—
国立西洋美術館		33	537	4,116
国立国際美術館		35	86	—
国立新美術館		77	223	—
計		240	1,756	9,777

### イ 各館の特徴

#### (ア) 東京国立近代美術館

本館では、ガイドスタッフ4期生を募集し(10月～12月)、10名の研修生への養成研修を実施していた。しかしながら、震災による所蔵品ギャラリー閉鎖により、3月12日以降はガイド活動を休止した。

工芸館では、前年度の研修を受けた4期ボランティアの参加により、本年度の登録人数は24人から28人に増員した。増員の目的は学校等の団体受入れに対しより柔軟な対応を可能とするためである。「現代の人形」展開催時には、2時間で250人のトーク受入れを行い、今後の学校との連携の可能性を広げることができた。

#### (イ) 京都国立近代美術館

各企画展・共催展ごとに、ボランティアスタッフによるアンケート調査回収・集計を行った。また、10のプロジェクトチームにより実施された「Trouble in Paradise/生存のエシックス」では、「水のゆくえ」プロジェクトで制作ボランティアを募った。事前に募集・登録したボランティアだけでなく、来館者の自発的参加もあり、会期中の完成に至るまで制作が進められた。

#### (ウ) 国立西洋美術館

開始から2年目を迎えた「美術トーク」と「建築ツアー」は、毎回一定の参加者人数を保つようになり、プログラム自体が定着してきたようだ。特に「美術トーク」は、実施時間や方法を改善したところ、参加者が大幅に増えた。リピーターもいて人気が出てきているプログラムであると言える。クリスマスには、本年度で3回目と恒例になりつつある一般向け10分トークに加え、家族向けの「クリスマス物語」でもボランティア・スタッフが活躍した。申込が増えているスクール・ギャラリートークも含め、常設展を利用した幅広いプログラムがボランティア・スタッフによって支えられた。

#### (エ) 国立国際美術館

学生ボランティアを広く募り、教育普及事業の実施補助、広報資料の発送、図書資料等の整理などの美術館運営の補助業務を実施することを通じて、美術館活動に接する機会を提供した。

<p>や課外活動との積極的な連携  オ 企画展に関連した講演会(8回程度)の実施  カ 東京国立近代美術館フィルムセンターとの共同主催による映画上映を定期的に(年4回程度)実施  (国立西洋美術館)  児童・生徒を対象としたプログラムをはじめ、多くの人々に美術と美術館に親んでもらうためのプログラム、コレクションを活用したテーマ性のある企画、対象を限定したプログラム等、それぞれの効果を考慮した幅広いレベルと内容のプログラムを提供したか。  ア 企画展に関連した「先生のための観賞プログラム」の実施(小・中・高等学校の教員対象)(3回)  イ ファミリー・プログラム「どうびじゅつ」(16回程度)、「びじゅつーる」(12回程度)の実施  ウ 「スクール・ギャラリートーク」(小・中・高等学校の団体対象)の実施(予約制)  エ クリスマス・プログラム(10分トーク、クリスマスキャロル・コンサート)の実施  オ 障害者を対象とする特別プログラムの実施(1回)  カ 企画展に関連した講演会(6回程度)、スライドトーク(9回程度)及び音楽プログラム(1回)の実施  キ 毎週日曜日にボランティアによる「美術トーク」、「建築ツアー」の実施</p>	<p>なお、本年度は、「横尾忠則全ポスター」を開催するにあたり、ボランティアに協力を依頼し、額装作業の補助業務などを行い、美術館における展示活動についての理解を深める機会を提供した。</p> <p>(オ)国立新美術館  ワークショップや講演会の運営補助のほか、図書資料の整理や保全作業など、幅広い分野でサポート・スタッフが活動を行なった。</p> <p>ウ 支援団体等の育成と相互協力による事業  (ア)コンサート等の実施  東京藝術大学、東京・春・音楽祭実行委員会、東京都、読売新聞、朝日新聞、大阪クラシック実行委員会、ダイキン工業現代美術振興財団、新国立劇場との協力による各館におけるコンサートの実施及び館企画・主宰ロビーコンサートを開催した(17回)。  (イ)ぐるっとパスへの参加  東京の美術館・博物館等 70 館が実施する共通入館券事業「東京・ミュージアムぐるっとパス 2010」及び関西の美術館・博物館等 67 館が実施する「ミュージアムぐるっとパス・関西 2010」に参加(京近美を除く)し、所蔵作品展観覧料の無料化や企画展観覧料の割引などを実施した。  (ウ)NPO 法人との連携  東京国立近代美術館において、平成 23 年 1 月 2 日(日)NPO 法人美術ファンクラブとの連携により、本館所蔵作品展「近代日本の美術」、工芸館所蔵作品展「現代の人形 珠玉の人形コレクション」の無料観覧。また、本館及び工芸館の来館者には図録及びオリジナルグッズのプレゼントを実施。(本館には 1,585 人、工芸館には 1,912 人の来場。)  (エ)企業との連携  国立西洋美術館では、三菱商事株式会社と共同で行っている障がい者のための鑑賞プログラムが毎回好評であり、参加希望者も多いことから、本年度は実施回数を 2 回に増やして、より多くの参加者を受け入れることとした。本プログラムはレギュラーのプログラムとして、定着しつつある。  国立国際美術館では、企業とのタイアップによる前売券の発券、企業等が発行する印刷物・ホームページへの展覧会情報の掲載等、企業との連携を進めた。  ①朝日新聞グループ 朝日友の会、(株)阪急阪神カード、(株)京阪カード及び大阪市交通局の情報誌・ホームページに展覧会情報を掲載するとともに割引を実施した。  ②近隣ホテルと連携し、広報誌への情報掲載及びホームページのリンク等を実施した。  ③「Osaka メセナカード」と連携し、カードの普及広報を行った。  ④水辺のまちづくり企画推進委員会に協力するとともに、同委員会の構成団体である京阪電鉄の広報誌において、展覧会及びイベントの広報を行った。</p> <p>(オ)その他  フィルムセンターにおいては、中央区及び中央区文化・国際交流振興協会が実施する「中央区まるごとミュージアム」に協力し、平成 22 年 10 月 31 日(日)を</p>	
--	---	--



(国立国際美術館)

幅広い層の人々が美術館に親しみ、美術鑑賞の機会を身近に感じられるよう、企画展ごとに関連講演会、ギャラリートーク等を開催したか。また、低年齢層も同様に美術鑑賞の機会を享受できるよう、子ども向けの各種プログラムを実施したか。その他、美術館がより開かれた場所となるよう、各種イベントを開催したか。

ア 鑑賞支援教材制作に関連した「ジュニア・セルフガイド」の発行

イ 鑑賞実践プログラムに関連した「こどもびじゅつあー」(8回程度)の実施

ウ 鑑賞支援制作プログラムに関連した「こどものためのワークショップ」(4回程度)の実施

エ 大学の課外授業及びスクーリングによる団体鑑賞の受入れ

オ 小・中・高等学校の団体鑑賞の受入れ

カ 鑑賞教育に関する教員研修の実施(予約制)

キ 企画展に関連した講演会(12回程度)、ギャラリートーク及びアーティストトーク(8回程度)、コンサート等、イベントの実施

(国立新美術館)

来館者の作品鑑賞の充実を目的として、展覧会ごとに講演会やアーティストトークを実施するほか、より多くの人々に美術に親しむ機会を提供するためのプログラムを幅広い層を対象

展覧会の無料観覧日とし、146 人の入館者があった。

### ③ 映画フィルム・資料を活用した教育普及活動

平成 22 年度で 4 年目となるフィルムセンターと京都国立近代美術館との共同開催による映画の上映会については、本年度は「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films@home」の名称で、会場を前年度のドイツ文化センター(京都)から京都国立近代美術館の講堂に移し、国や地域、ジャンル別に計 5 回(28 本)の上映を行った。

・「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films@home」(10 回) 638 名

9 回目を迎えた「こども映画館」では、本年度も映画上映に施設見学や弁士・伴奏付きの無声映画上映などを組み合わせるスタイルを踏襲しつつ、子どもたちが日常のテレビや DVD などでは接する機会を持ちにくい映画遺産に触れる機会を作るとともに、写真画像や手作りの動画、アニメーションなどの投影も行いながらわかりやすい解説を行うよう心がけた。

・「こども映画館 2010 年の夏休み」(4 回) 322 名

<p>に実施したか。</p> <p>ア 展覧会に合わせた講演会及びアーティストトーク等の実施(10回)</p> <p>イ 講演会及び子どもから大人まで幅広い層を対象にした作家等によるワークショップの実施(6回)</p> <p>ウ 美術団体等との連携による講演会、鑑賞会及びギャラリートーク等の実施</p> <p>エ 中学生以上を対象とした鑑賞ガイドの作成及び配布(2回)</p> <p>オ 児童、生徒、学生を対象とした鑑賞ガイダンスの実施</p> <p>③ ボランティアや支援団体の育成と相互協力による教育普及事業の充実を図ったか。</p> <p>(東京国立近代美術館)</p> <p>&lt;本館&gt;</p> <p>ア 本館ガイドスタッフ(ボランティア)約40名により、所蔵作品展の所蔵作品ガイド(開館時毎日、300回程度)及び「ハイライト・ツアー」(10回程度)を実施する。</p> <p>イ 本館ガイドスタッフによる小・中学生グループの受入れ等、鑑賞教育の充実を図る。</p> <p>ウ 研究員等によるフォローアップ研修を開催して、ガイドスタッフの意欲とガイドテクニックの向上を図る(年2回)。</p> <p>エ ボランティア活動報告書を作成する。</p> <p>&lt;工芸館&gt;</p>		
--	--	--

<p>ア 工芸館ガイドスタッフ(ボランティア)約30名により、一般観覧者向けの鑑賞プログラム「タッチ&amp;トーク」(会期中の水・土曜日、90回程度)及び夏季の児童向けの鑑賞プログラム「こどもタッチ&amp;トーク」を実施する。</p> <p>イ 工芸館ガイドスタッフにより、外国人及び国際的な文化交流に関心を持つ日本人を対象とした英語による鑑賞教室を実施する。</p> <p>ウ 研究員等によるフォローアップ研修や作家によるレクチャーを開催して、ガイドスタッフの意欲とガイドテクニックの向上を図る。</p> <p>(京都国立近代美術館)</p> <p>ア 京都市との連携により、京都市教育委員会が主催する「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座」の中からボランティアを受け入れ、来館者へのアンケート調査等に携わってもらうことで、ボランティアの経験、知識の向上等に協力する。</p> <p>イ 友の会については、幅広い年齢層の会員参加が可能となるような行事の開催等、活動内容等の充実を図るとともに、京都国立博物館、京都市美術館、京都文化博物館と連携して会員証提示による優待割引を実施する。</p> <p>(国立西洋美術館)</p> <p>ア ボランティアスタッフによる、ファミリープログラム、小・中・高等学校生の団体を対象とした常設展(所蔵作</p>		
---	--	--

<p>品展)でのスクール・ギャラリートーク、週末の一般向け「美術トーク」及び「建築ツアー」を実施する。ファミリープログラムの「どようびじゅつ」(16回程度)については企画から参加してもらうことでボランティアの育成にもつながるようにする。その他に、クリスマス・プログラムを行う。</p> <p>イ ボランティアの育成を目的として、プログラム遂行のためのスキルアップ研修及び広く美術に関する知識を学ぶための研修を実施する(年2回程度)。</p> <p>ウ 都立上野高校の「奉仕」課外授業に協力し、高校生ボランティアを育成する。</p> <p>(国立国際美術館)</p> <p>ア 学生ボランティアを受け入れ、展覧会、講演会及びワークショップ等のプログラムに参加させるなど、活動の充実を図る。また、美術資料の整理を通じ、美術館活動の基本を学べるようにする。</p> <p>イ 友の会については、会員参加型のイベントの開催等、活動内容等の充実を図るとともに、法人会員の加入に努める。</p> <p>(国立新美術館)</p> <p>ア 国立新美術館サポート・スタッフとして学生ボランティアを受け入れ、美術館における業務の補助を通じた実務経験の機会を提供する。</p> <p>イ 教育普及事業等への企業協賛の継続を図る。</p>		
--	--	--

<p>ウ 近隣関係施設と連携・協力し、マップを配布する。</p> <p>④ 東京国立近代美術館フィルムセンターと京都国立近代美術館との共同主催により、所蔵フィルムを用いた上映会を京都で開催し、鑑賞機会の拡大と映画文化の普及を図ったか。(年4回程度)</p>		
--	--	--

<b>【(小項目)1-1-5】 調査研究の実施状況</b>		<b>【評定】</b>			
<b>【法人の達成すべき計画】</b> (5)調査研究成果の反映 各館の役割・任務に従い、展示、教育普及その他の美術館活動の推進のため、計画的に調査研究を実施するとともに、これらの成果を確実に美術館活動に反映させる。なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館及び大学等の機関とも連携を図るものとする。		A			
		H18	H19	H20	H21
		B	B	A	A
<b>【インプット指標】</b>					
(中期目標期)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	444	382	296	322	302
従事人員数(人)	60	61	59	59	57
1) 決算額は損益計算書 教育普及事業費を計上している。 2) 従事人員数は、すべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。					
<b>評価基準(年度計画及び評価の視点)</b>	<b>実績</b>				<b>分析・評価</b>

(5)国立美術館における展示、教育普及その他の美術館活動の推進を図るため、調査研究を計画的に実施し、その成果を美術館活動に反映させる。実施に当たっては、国内外の博物館・美術館及び大学等の機関との連携を図ったか。さらに、館外の学術雑誌、学会等に掲載・発表するとともに、研究紀要を発行するなど、調査研究成果を発信するよう努めたか。

また、募集情報等の共有を図り、科学研究費補助金等の研究助成金の申請や外部資金の獲得を促進したか。

(東京国立近代美術館)

<本館>

① 展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施したか。

ア 現代日本の建築に関する研究

イ 上村松園に関する研究(京都国立近代美術館との共同研究)

ウ 麻生三郎に関する研究(京都国立近代美術館、愛知県美術館との共同研究)

エ 鈴木清に関する研究(ノルデルリヒト・フォト・ギャラリー(オランダ・フローニンゲン)との共同研究)

オ 岡本太郎に関する研究(川崎市岡本太郎美術館との共同研究)

カ パウル・クレーに関する調査研究(クレー財団(スイス)、京都国立近代美術館との共同研

**(5)調査研究成果の美術館活動への反映**

**① 調査研究一覧**

**ア 東京国立近代美術館**

調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
現代日本の建築に関する研究	「建築はどこにあるの？」を開催しカタログを編集発行	
上村松園に関する研究	「上村松園展」を開催しカタログを編集発行	京都国立近代美術館
麻生三郎に関する研究	「麻生三郎展」を開催しカタログを編集発行	京都国立近代美術館、愛知県美術館
鈴木清に関する研究	「鈴木清展」を開催しカタログを編集発行	ノルデルリヒト・フォト・ギャラリー(オランダ、フローニンゲン)
岡本太郎に関する研究	「岡本太郎展」を開催しカタログを編集発行	川崎市立岡本太郎美術館
パウル・クレーに関する研究	「パウル・クレー展」を開催しカタログを編集発行	パウル・クレー・センター(スイス)、京都国立近代美術館
鑑賞教育に関する美術館と学校の連携や、学校の授業と美術館お鑑賞の連続性に関する調査研究	教育団体との合同研修の開催、「岡太郎展セルフガイド」の発行・送付など	東京都図画工作研究会 東京都中学美術教育研究会
国立美術版「想-IMAGINE」の収録コンテンツの拡充とユーザーインターフェイスの改良についての調査研究	美術館情報資源の多角的公開	国立情報学研究所
国立美術館の情報資源およびWebcatPlus、文化遺産オンライン等文化情報資源の「想-IMAGINE」における連携検索システムの公開に関する調査研究	美術館情報資源の多角的公開	国立情報学研究所
「1960～70年代のビデオ・アート: 作の所在調査とデータベース」(科研費補助金)3年目	今後の収蔵作品候補に関する情報収集	京都国立近代美術館、国立新美術館
プロダクト・デザイナーの栄木正敏を主としたセラミック・デザインの展開に関する調査研究	特別展「栄木正敏のセラミックデザインリズム&ウェーブ」企画開催	瀬戸市美術館
現代の茶の工芸に関する調査研究	特別展「現代工芸への視点—茶事をめぐって」	
国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会員、その他同種	『ドレミハ先生』(1951年)『海に生きる人々』(1959年頃)の復元及び上映	福岡市総合図書館 神戸映画資料館

○充実したカタログや掲載論文が発表されたと評価できる。

○紀要とニュースは、それぞれ優秀な水準の研究論考、報告を掲載しており、目標を達成していると評価できる。しかし、研究活動の記録であれば、研究紀要とニュースとは分離してほしい。

<p>究)</p> <p>② 教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア 鑑賞教育に関する美術館と学校の連携や、学校の授業と美術館での鑑賞の連続性に関する調査研究(東京都図画工作研究会、東京都中学美術研究会等との共同研究)</p> <p>イ 前年度本版として公開した国立美術館版「想－IMAGINE」の収録コンテンツの拡充と、ユーザーインターフェイスの改良について国立情報学研究所と連携した開発</p> <p>ウ 国立美術館の情報資源と国立情報学研究所によるWebcatPlus、文化遺産オンライン等に掲載の文化情報資源を、「想－IMAGINE」において連携して検索・閲覧できるシステムの公開に関する調査研究</p> <p>エ 「1960～70年代のビデオ・アート: 作品の所在調査とデータベース構築」(科学研究費補助金)3年目</p> <p>&lt;工芸館&gt;</p> <p>① 展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア 現代の茶の工芸に関する調査研究</p> <p>イ 陶芸家ルーシー・リーに関する調査研究(国立新美術館、益</p>	<p>機関、現像所等からの情報に基づく、未発見の日本映画フィルムの所在調査</p>	<p>・戦前から戦後直後の日本アニメーション映画について、未所蔵作品本の収集</p> <p>・映画同人シネ・アソシエ、村野鐵太郎氏等からのフィルム寄贈</p>	<p>株式会社IMAGICA</p>			
	<p>文化庁との共同事業による「近代歴史資料調査」の結果に基づき、新たに残存が確認された映画フィルムの詳細調査</p>					
	<p>映画フィルムの登録・長期保管・保存、アナログ及びデジタル技術を活用した復元、及び映写に関する調査研究(FIAF会員、国内外の同種機関、映画研究教育機関、美術館・博物館、映像機器メーカー、現像所等との共同研究)</p>	<p>・『長恨』(1927年)『忠次旅日記』(1929年)のデジタル復元および再染色</p> <p>・『さらば青春』(1919年)のデジタル復元テスト</p> <p>・KEM製16mm編集台への画像取り込みシステムの付設</p>	<p>株式会社IMAGICA、株式会社IMAGICAウエスト</p> <p>チネテカ・ディ・ポローニヤ</p> <p>株式会社ナックイメージテクノロジー</p>			
	<p>全国の映画関連資料の所蔵機関を対象としたコレクション等の状況調査</p>					
	<p>日本映画の歴史的な美術資料に関する調査研究</p>			<p>日本映画・テレビ美術監督協会</p>		
	<p>3D映画の歴史と技術に関する調査研究</p>	<p>ユネスコ「世界視聴覚文化遺産の日」記念特別イベント「講演と上映 3D映画の歴史」の開催</p>				
	<p>フランスにおける映画保存機関の国内外での連携・役割分担に関する研究(科学研究費補助金)</p>	<p>京都国立近代美術館との共同主催企画上映「MoMAK Films@home」</p>	<p>※科学研究費・若手研究(B)「フランスにおける映画保存機関の国内外での連携・役割分担に関する研究」(研究代表者・赤崎陽子、課題番号: 21720063。平成21-22年度)として実施</p>			
	<p>昭和期戦後の日本文学と日本映画の関係に関する調査研究</p>	<p>上映会「映画の中の日本文学 Part3」及び展覧会「映画資料でみる 映画の中の日本文学Part3」の開催</p>				



<p>子陶芸美術館、大阪市立東洋陶磁美術館との共同研究)</p> <p>ウ プロダクトデザインの近年における展開についての調査研究</p> <p>② 教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア 工芸作品の鑑賞方法や美術館教育のあり方の調査研究(東京家政大学、実践女子大学との共同研究)</p> <p>イ 染織制作体験によって児童・生徒が、より質の高い作品理解を得るための鑑賞教育のあり方に関する調査研究(多摩美術大学との共同研究)</p> <p>&lt;フィルムセンター&gt;</p> <p>① 収集・保存のための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア 国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会員、その他同種機関、現像所等からの情報に基づき、未発見の日本映画フィルムの所在調査</p> <p>イ 文化庁との共同事業による「近代歴史資料調査」の結果に基づき、新たに残存が確認された映画フィルムの詳細調査</p> <p>ウ 映画フィルムの登録・長期保管・保存、アナログ及びデジタル技術を活用した復元、及び映写に関する調査研究(FIAF</p>	<p>新たに発掘、復元された映画とその作者、技術フォーマットや時代背景に関する調査研究</p>	<p>上映会「フィルムセンター開館40周年記念① 発掘された映画たち2010」の開催</p>	<p>京都府京都文化博物館、広島市映像文化ライブラリー、川崎市市民ミュージアム、福岡市総合図書館、立命館大学アート・リサーチセンター、映画保存協会、大阪芸術大学玩具映画プロジェクト</p>		
	<p>現代欧州映画に関する研究</p>	<p>上映会「EUフィルムデーズ2010」の開催</p>	<p>駐日欧州連合代表部、EU加盟国大使館・文化機関</p>		
	<p>フィルムセンターの歩みとコレクションの歴史に関する調査研究</p>	<p>上映会「フィルムセンター開館40周年記念②フィルム・コレクションに見るNFCの40年」</p>			
	<p>映画産業の枠外で制作された日本映画・インディペンデント映画等の歴史に関する調査研究</p>	<p>上映会「日本インディペンデント映画史シリーズ③ ぴあフィルムフェスティバルの軌跡Vol.3」の開催</p>			
	<p>吉田喜重監督に関する調査研究</p>	<p>上映会「映画監督五十年 吉田喜重」の開催</p>			
	<p>黒澤明監督に関する調査研究</p>	<p>上映会「生誕百年 映画監督 黒澤明」及び展覧会「生誕百年 映画監督 黒澤明」の開催</p>			
	<p>現代フランス映画に関する調査研究</p>	<p>上映会「現代フランス映画の肖像ユニフランス寄贈フィルム・コレクションより」の開催</p>			
	<p>映画保存のための特別事業費により購入した新規収蔵作品とその作者や時代背景に関する調査研究</p>	<p>上映会「フィルムセンター開館40周年記念③ よみがえる日本映画 一映画保存のための特別事業費による」の開催</p>			
	<p>アニメーション作家・大藤信郎に関する調査研究</p>	<p>上映会「アニメーションの先駆者 大藤信郎」及び展覧会「アニメーションの先駆者 大藤信郎」の開催</p>			
	<p>アフリカ映画の歴史と現在に関する調査研究</p>	<p>上映会「日本—南アフリカ交流100周年記念 シネマアフリカ2010」の開催</p>	<p>シネマアフリカ実行委員会、南アフリカ共和国大使館</p>		
	<p>ポルトガル映画に関する調査研究</p>	<p>上映会「日本ポルトガル修好通商条</p>	<p>コミュニティシネマセン</p>		

<p>会員、国内外の同種機関、映画研究教育機関、美術館・博物館、映像機器メーカー、現像所等との共同研究)</p> <p>エ 全国の映画関連資料の所蔵機関を対象としたコレクション等の状況調査</p> <p>② 上映会、展覧会及び教育普及事業のための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア 昭和期戦後の日本文学と日本映画の関係に関する調査研究</p> <p>イ 新たに発掘、復元された映画とその作者、技術フォーマットや時代背景に関する調査研究</p> <p>ウ 現代欧州映画に関する研究</p> <p>エ フィルムセンターの歩みとコレクションの歴史に関する調査研究</p> <p>オ 映画産業の枠外で制作された日本映画・インディペンデント映画等の歴史に関する調査研究</p> <p>カ ポルトガル映画に関する調査研究</p> <p>キ 吉田喜重監督に関する調査研究</p> <p>ク 黒澤明監督と俳優志村喬に関する調査研究</p> <p>ケ 現代フランス映画に関する調査研究</p> <p>コ 新収蔵作品とその作者や時</p>	<p>査研究</p>	<p>約150周年 ポルトガル映画祭2010 マノエル・ド・オリヴェイラとポルトガル映画の巨匠たち」の開催</p>	<p>ター、ポルトガル大使館</p>																																					
<p>イ 京都国立近代美術館</p>																																								
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 33%;">調査研究テーマ</th> <th style="width: 33%;">美術館活動への反映</th> <th style="width: 33%;">連携機関</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>京都国立近代美術館所蔵の現代美術作品についての包括的研究</td> <td>・「マイ・フェイバリット」とある美術の検索目録／所蔵作品から展を開催。 ・「マイ・フェイバリット」展の図録を「所蔵作品目録Ⅶ」として刊行。</td> <td></td> </tr> <tr> <td>日本画家・稲垣仲静及び染織家・稲垣稔次郎に関する調査研究</td> <td>「稲垣仲静・稔次郎兄弟展」を開催し、同展の図録を刊行。</td> <td>練馬区立美術館 笠岡市立竹喬美術館</td> </tr> <tr> <td>19世紀イタリアの写真に関する調査研究</td> <td>「ローマ追想—19世紀写真と旅」展を開催し、同展の図録を刊行。</td> <td>ジュゼッペ・パニーニ写真美術館(イタリア・モデナ)</td> </tr> <tr> <td>現代美術の先鋭的な部分と最新の科学技術、医療技術が重なり合う領域に関する調査研究</td> <td>「京都市立芸術大学創立130周年記念事業協賛 Trouble in Paradise/生存のエシックス」展を開催し、同展の図録を刊行。</td> <td>京都市立芸術大学 京都大学医学研究科</td> </tr> <tr> <td>戦後の日本画前衛運動の母体となった諸運動に関する調査研究</td> <td>「『日本画』の前衛 1938-1949」展を開催し、同展の図録を刊行。</td> <td>東京国立近代美術館</td> </tr> <tr> <td>日本画家・上村松園に関する調査研究</td> <td>「上村松園展」を開催し、同展の図録を刊行。</td> <td>東京国立近代美術館</td> </tr> <tr> <td>麻生三郎に関する調査研究</td> <td>「麻生三郎展」を開催し、同展の図録を刊行。</td> <td>東京国立近代美術館 愛知県美術館</td> </tr> <tr> <td>パウル・クレーに関する調査研究</td> <td>「パウル・クレー—おわらないアトリエ」展を開催し、同展の図録を刊行。</td> <td>パウル・クレー・センター(スイス) チューリヒ大学美術史研究所 東京国立近代美術館</td> </tr> <tr> <td>美術館教育に関する研究</td> <td>「2010美術科教育学会 地区研究会&lt;フォーラム in 京都&gt;」シンポジウムを開催。</td> <td>美術科教育学会</td> </tr> <tr> <td>大学他諸機関との教育普及を目的とした展示についての調査研究</td> <td>京都教育大学石川誠教授が研究代表者となる科学研究費補助金による研究「美術・博物館の知的財産活用による生涯学習を見通した鑑賞学習システムの構築」にて実施。</td> <td>京都教育大学大学院</td> </tr> <tr> <td>1960～70年代のビデオ・アート: 作品の所在調査とデータベース構築(科学研究費補助金)3年目</td> <td>研究成果を基に戦後の映像表現を含む展覧会を平成25年度に開催する予定。</td> <td>東京国立近代美術館</td> </tr> </tbody> </table>					調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関	京都国立近代美術館所蔵の現代美術作品についての包括的研究	・「マイ・フェイバリット」とある美術の検索目録／所蔵作品から展を開催。 ・「マイ・フェイバリット」展の図録を「所蔵作品目録Ⅶ」として刊行。		日本画家・稲垣仲静及び染織家・稲垣稔次郎に関する調査研究	「稲垣仲静・稔次郎兄弟展」を開催し、同展の図録を刊行。	練馬区立美術館 笠岡市立竹喬美術館	19世紀イタリアの写真に関する調査研究	「ローマ追想—19世紀写真と旅」展を開催し、同展の図録を刊行。	ジュゼッペ・パニーニ写真美術館(イタリア・モデナ)	現代美術の先鋭的な部分と最新の科学技術、医療技術が重なり合う領域に関する調査研究	「京都市立芸術大学創立130周年記念事業協賛 Trouble in Paradise/生存のエシックス」展を開催し、同展の図録を刊行。	京都市立芸術大学 京都大学医学研究科	戦後の日本画前衛運動の母体となった諸運動に関する調査研究	「『日本画』の前衛 1938-1949」展を開催し、同展の図録を刊行。	東京国立近代美術館	日本画家・上村松園に関する調査研究	「上村松園展」を開催し、同展の図録を刊行。	東京国立近代美術館	麻生三郎に関する調査研究	「麻生三郎展」を開催し、同展の図録を刊行。	東京国立近代美術館 愛知県美術館	パウル・クレーに関する調査研究	「パウル・クレー—おわらないアトリエ」展を開催し、同展の図録を刊行。	パウル・クレー・センター(スイス) チューリヒ大学美術史研究所 東京国立近代美術館	美術館教育に関する研究	「2010美術科教育学会 地区研究会<フォーラム in 京都>」シンポジウムを開催。	美術科教育学会	大学他諸機関との教育普及を目的とした展示についての調査研究	京都教育大学石川誠教授が研究代表者となる科学研究費補助金による研究「美術・博物館の知的財産活用による生涯学習を見通した鑑賞学習システムの構築」にて実施。	京都教育大学大学院	1960～70年代のビデオ・アート: 作品の所在調査とデータベース構築(科学研究費補助金)3年目	研究成果を基に戦後の映像表現を含む展覧会を平成25年度に開催する予定。	東京国立近代美術館
調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関																																						
京都国立近代美術館所蔵の現代美術作品についての包括的研究	・「マイ・フェイバリット」とある美術の検索目録／所蔵作品から展を開催。 ・「マイ・フェイバリット」展の図録を「所蔵作品目録Ⅶ」として刊行。																																							
日本画家・稲垣仲静及び染織家・稲垣稔次郎に関する調査研究	「稲垣仲静・稔次郎兄弟展」を開催し、同展の図録を刊行。	練馬区立美術館 笠岡市立竹喬美術館																																						
19世紀イタリアの写真に関する調査研究	「ローマ追想—19世紀写真と旅」展を開催し、同展の図録を刊行。	ジュゼッペ・パニーニ写真美術館(イタリア・モデナ)																																						
現代美術の先鋭的な部分と最新の科学技術、医療技術が重なり合う領域に関する調査研究	「京都市立芸術大学創立130周年記念事業協賛 Trouble in Paradise/生存のエシックス」展を開催し、同展の図録を刊行。	京都市立芸術大学 京都大学医学研究科																																						
戦後の日本画前衛運動の母体となった諸運動に関する調査研究	「『日本画』の前衛 1938-1949」展を開催し、同展の図録を刊行。	東京国立近代美術館																																						
日本画家・上村松園に関する調査研究	「上村松園展」を開催し、同展の図録を刊行。	東京国立近代美術館																																						
麻生三郎に関する調査研究	「麻生三郎展」を開催し、同展の図録を刊行。	東京国立近代美術館 愛知県美術館																																						
パウル・クレーに関する調査研究	「パウル・クレー—おわらないアトリエ」展を開催し、同展の図録を刊行。	パウル・クレー・センター(スイス) チューリヒ大学美術史研究所 東京国立近代美術館																																						
美術館教育に関する研究	「2010美術科教育学会 地区研究会<フォーラム in 京都>」シンポジウムを開催。	美術科教育学会																																						
大学他諸機関との教育普及を目的とした展示についての調査研究	京都教育大学石川誠教授が研究代表者となる科学研究費補助金による研究「美術・博物館の知的財産活用による生涯学習を見通した鑑賞学習システムの構築」にて実施。	京都教育大学大学院																																						
1960～70年代のビデオ・アート: 作品の所在調査とデータベース構築(科学研究費補助金)3年目	研究成果を基に戦後の映像表現を含む展覧会を平成25年度に開催する予定。	東京国立近代美術館																																						

<p>代背景に関する調査研究</p> <p>サ 大藤信郎と日本アニメーションの歴史に関する調査研究</p> <p>シ アフリカ映画の歴史と現在に関する調査研究</p> <p>(京都国立近代美術館)</p> <p>① 展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア 日本画家・稲垣伸静及び染織家・稲垣稔次郎に関する調査研究(練馬区立美術館、笠岡市立竹喬美術館との共同研究)</p> <p>イ 19世紀イタリアの写真に関する調査研究(ジュゼッペ・パニーニ写真美術館(イタリア・モデナ)との共同研究)</p> <p>ウ 現代美術の先鋭的な部分と最新の科学技術、医療技術が重なり合う領域に関する調査研究(京都市立芸術大学、京都大学医学部との共同研究)</p> <p>エ 戦後の日本画前衛運動の母体となった諸運動に関する調査研究(東京国立近代美術館、広島県立美術館との共同研究)</p> <p>オ 日本画家・上村松園に関する調査研究(東京国立近代美術館との共同研究)</p> <p>カ 麻生三郎に関する調査研究(東京国立近代美術館、愛知県美術館との共同研究)</p> <p>キ パウル・クレーに関する調査研究(クレー財団(スイス)、東京国立近代美術館との共同研究)</p>	<p>染め型紙のジャポニスムへの影響に関する研究(科学研究費補助金)3年目</p>	<p>研究成果を基に展覧会「型紙スタイルーもうひとつのジャポニスム(仮称)」を平成24年度に開催予定。</p>	<p>日本女子大学 共立女子大学 文化女子大学 三菱一号館美術館 三重県立美術館</p>																															
	<p>東西文化の磁場ー日本近代建築・デザイン・工芸の脱一、超一領域的作用史の基盤研究(科学研究費補助金)2年目</p>	<p>国際シンポジウム「東西文化の磁場」《Orient / Occident : une attraction mutuelle》を実施。</p>																																
	<p>イディッシュ語文化圏における芸術活動の調査研究(科学研究費補助金)2年目</p>	<p>研究成果の一部を平成24年度に実施予定の展覧会「型紙スタイルーもうひとつのジャポニスム(仮称)」で発表予定。</p>	大阪大学																															
	<p>オーラルヒストリーによる1960年代前衛美術研究の再構築(科学研究費補助金)1年目</p>	<p>開館50周年記念事業の準備に向け、過去当館で行われた主要な講演会の映像記録をデータ化した。</p>	広島市立大学																															
	<p>ウ 国立西洋美術館</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>調査研究テーマ</th> <th>美術館活動への反映</th> <th>連携機関</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ナポリ宮廷におけるイタリア、ルネサンス及びバロック期の美術に関する調査研究</td> <td>「ナポリ・宮廷と美ーカポディモンテ美術館展 ルネサンスからバロックまで」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。</td> <td>カポディモンテ美術館、京都府京都文化博物館</td> </tr> <tr> <td>アルブレヒト・デューラーの版画芸術に関する調査研究</td> <td>「アルブレヒト・デューラー 版画・素描展 宗教／肖像／自然」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。</td> <td>メルボルン・ナショナル・ギャラリー・オブ・ヴィクトリア、アルベルティナ版画素描館</td> </tr> <tr> <td>ギリシャ美術研究</td> <td>「大英博物館 古代ギリシャ展 究極の身体、完全なる美」(平成23年開予定)</td> <td>大英博物館、神戸市立博物館</td> </tr> <tr> <td>旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究</td> <td>収集、作品・文献調査、常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等。</td> <td></td> </tr> <tr> <td>中世末期から20世紀初頭の西洋美術に関する調査研究</td> <td>収集、作品・文献調査、常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等</td> <td></td> </tr> <tr> <td>所蔵版画作品に関する調査研究</td> <td>収集、作品・文献調査、常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等</td> <td></td> </tr> <tr> <td>美術館教育に関する調査研究</td> <td>教育普及プログラムを実施。ワークショップ等制作、インターンシップ、ボランティア指導、解説(企画展作品解説パネル制作等)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>「国立西洋美術館所蔵作品データベース」に関する研</td> <td>国立西洋美術館所蔵作品データベース</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>			調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関	ナポリ宮廷におけるイタリア、ルネサンス及びバロック期の美術に関する調査研究	「ナポリ・宮廷と美ーカポディモンテ美術館展 ルネサンスからバロックまで」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。	カポディモンテ美術館、京都府京都文化博物館	アルブレヒト・デューラーの版画芸術に関する調査研究	「アルブレヒト・デューラー 版画・素描展 宗教／肖像／自然」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。	メルボルン・ナショナル・ギャラリー・オブ・ヴィクトリア、アルベルティナ版画素描館	ギリシャ美術研究	「大英博物館 古代ギリシャ展 究極の身体、完全なる美」(平成23年開予定)	大英博物館、神戸市立博物館	旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究	収集、作品・文献調査、常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等。		中世末期から20世紀初頭の西洋美術に関する調査研究	収集、作品・文献調査、常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等		所蔵版画作品に関する調査研究	収集、作品・文献調査、常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等		美術館教育に関する調査研究	教育普及プログラムを実施。ワークショップ等制作、インターンシップ、ボランティア指導、解説(企画展作品解説パネル制作等)		「国立西洋美術館所蔵作品データベース」に関する研	国立西洋美術館所蔵作品データベース					
調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関																																
ナポリ宮廷におけるイタリア、ルネサンス及びバロック期の美術に関する調査研究	「ナポリ・宮廷と美ーカポディモンテ美術館展 ルネサンスからバロックまで」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。	カポディモンテ美術館、京都府京都文化博物館																																
アルブレヒト・デューラーの版画芸術に関する調査研究	「アルブレヒト・デューラー 版画・素描展 宗教／肖像／自然」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。	メルボルン・ナショナル・ギャラリー・オブ・ヴィクトリア、アルベルティナ版画素描館																																
ギリシャ美術研究	「大英博物館 古代ギリシャ展 究極の身体、完全なる美」(平成23年開予定)	大英博物館、神戸市立博物館																																
旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究	収集、作品・文献調査、常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等。																																	
中世末期から20世紀初頭の西洋美術に関する調査研究	収集、作品・文献調査、常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等																																	
所蔵版画作品に関する調査研究	収集、作品・文献調査、常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等																																	
美術館教育に関する調査研究	教育普及プログラムを実施。ワークショップ等制作、インターンシップ、ボランティア指導、解説(企画展作品解説パネル制作等)																																	
「国立西洋美術館所蔵作品データベース」に関する研	国立西洋美術館所蔵作品データベース																																	

<p>② 教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア 美術館教育に関する研究</p> <p>イ 大学他諸機関との教育普及を目的とした展示についての調査研究</p> <p>(国立西洋美術館)</p> <p>① 展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア ナポリ宮廷におけるイタリア、ルネサンス及びバロック期の美術に関する調査研究</p> <p>イ アルブレヒト・デューラーの版画芸術に関する調査研究</p> <p>② 教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア 旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究</p> <p>イ 中世末期から20世紀初頭の西洋美術に関する調査研究</p> <p>ウ 所蔵版画作品に関する調査研究</p> <p>エ ル・コルビュジエによる国立西洋美術館本館の設計に関する調査研究</p> <p>オ 美術館教育に関する調査研究</p> <p>カ 「国立西洋美術館所蔵作品データベース」に関する研究」(科学研究費補助金)</p> <p>キ 「レンブラント及びレンブラント派における和紙による版画素描作品の研究」(科学研究費補助金)3</p>	<p>究」 (科学研究費補助金)</p>													
	「レンブラント及びレンブラント派における和紙による版画素描作品の研究」 (科学研究費補助金)3年目	「レンブラント 光の探求/闇の誘惑」展を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。												
	「アメリカのミュージアムにおける教育プログラムの公共性と民間資金に関する基礎的研究」 (科学研究費補助金)2年目	教育普及事業												
	「美術の機関アーカイブズに関する調査研究」2年目	美術資料の提供事業												
	「ル・コルビュジエによる国立西洋美術館本館の設計に関する調査研究」 (科学研究費補助金)	刊行物、講演発表、解説、広報記事等。世界遺産登録に向けた基礎資料。	ル・コルビュジエ財団(パリ)、東京理科大学、日本大学、京都工芸繊維学											
	「カーレル・ファン・マンデル『北方画家列伝』の成立と影響に関する比較芸術論的研究」 (科学研究費補助金)2年目	常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等	東北大学											
	「西洋近世版画史の一次資料調査」1年目 (科学研究費補助金)1年目	収集、作品・文献調査、常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等。												
	「クロスセクション上でのメデイウムの染色法の改善」1年目	所蔵作品の保存のための基礎資料。												
	「美術館ライブラリー&アーカイブズ部門における、美術館アーカイブズ活動視察・業務体験」 (科学研究費補助金)1年目	美術資料の提供事業	カナダ国立美術館											
	<p><b>エ 国立国際美術館</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>調査研究テーマ</th> <th>美術館活動への反映</th> <th>連携機関</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>荒川修作に関する調査研究</td> <td>「死なないための葬送 荒川修作初期作品展」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。</td> <td></td> </tr> <tr> <td>横尾忠則に関する調査研究</td> <td>「横尾忠則全ポスター」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。</td> <td>富山県立近代美術館、福島県立美術館</td> </tr> <tr> <td>マン・レイに関する調査研究</td> <td>「マン・レイ展」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。</td> <td>国立新美術館</td> </tr> </tbody> </table>			調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関	荒川修作に関する調査研究	「死なないための葬送 荒川修作初期作品展」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。		横尾忠則に関する調査研究	「横尾忠則全ポスター」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。	富山県立近代美術館、福島県立美術館	マン・レイに関する調査研究	「マン・レイ展」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。
調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関												
荒川修作に関する調査研究	「死なないための葬送 荒川修作初期作品展」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。													
横尾忠則に関する調査研究	「横尾忠則全ポスター」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。	富山県立近代美術館、福島県立美術館												
マン・レイに関する調査研究	「マン・レイ展」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。	国立新美術館												

<p>年目</p> <p>ク 「アメリカのミュージアムにおける教育プログラムの公共性と民間資金に関する基礎的研究」(科学研究費補助金)2年目</p> <p>ケ 「美術館の機関アーカイブズに関する調査研究」(科学研究費補助金)2年目</p> <p>(国立国際美術館)</p> <p>① 展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア 荒川修作に関する調査研究</p> <p>イ 横尾忠則に関する調査研究</p> <p>ウ マン・レイに関する調査研究(マン・レイ財団、国立新美術館との共同研究)</p> <p>エ ウフィツィ美術館所蔵作品に関する調査研究</p> <p>オ 森山大道に関する調査研究</p> <p>カ 現代のコンセプチュアル・アートに関する調査研究</p> <p>キ メディアアートに関する調査研究</p> <p>ク ルノワールの技法と芸術に関する調査研究(国立新美術館、ポーラ美術館との共同研究)</p> <p>② 教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア 美術館教育に関する研究</p> <p>イ アジアの現代美術並びに美術館運営に関する調査研究(アジア次世代キュレーター会議での共同研究)</p>	ウフィツィ美術館所蔵作品に関する調査研究	「ウフィツィ美術館 自画像コレクション 巨匠たちの「秘めた」素顔1664-2010」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。	損保ジャパン東郷青児美術館	
	森山大道に関する調査研究	「オン・ザ・ロード 森山大道写真展」(平成23年度開催)		
	現代のコンセプチュアル・アートに関する調査研究	「風穴 もうひとつのコンセプチュアリズム、アジアから」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。		
	メディアアートに関する調査研究	「束芋:断面の世代」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。	横浜美術館	
	ルノワールの技法と芸術に関する調査研究	「ルノワールー伝統と革新」を開催。同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施。	ポーラ美術館、国立新美術館	
	美術館教育に関する調査研究	美術館、展覧会運営(ジュニア・セルフガイド作成、びじゅつあー／なつやすみびじゅつあー／びじゅつあーすぺしゃる／ワークショップの企画)		
	アジアの現代美術並びに美術館運営に関する調査研究	美術館、展覧会運営	アジア次世代キュレーター会議	
	展示における所蔵作品の活用方法についての調査研究	美術館、展覧会運営	大阪市立近代美術館建設準備室	
	ライアン・ガンダーの調査・研究	展覧会の企画構成		
	高松次郎の調査・研究	展覧会の企画構成		
	影をめぐる作品の調査・研究	「陰影礼讃ー国立美術館コレクションによる」	東京国立近代美術館 京都国立近代美術館 国立西洋美術館 国立新美術館	
	オ 国立新美術館			
		調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
	日本の現代美術の動向に関する調査研究	「アーティスト・ファイル」展を開催、同展の図録を刊行。		
	海外の現代美術の動向に関する調査研究	「アーティスト・ファイル」展を開催、同展の図録を刊行。		

<p>ウ 展示における所蔵作品の活用方法についての調査研究(国立新美術館)</p> <p>① 展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア 日本の現代美術の動向に関する調査研究</p> <p>イ 海外の現代美術の動向に関する調査研究</p> <p>ウ ルーシー・リーとヨーロッパの20世紀工芸に関する調査研究(東京国立近代美術館工芸館との共同研究)</p> <p>エ ポスト印象派とその影響についての調査研究(オルセー美術館、オーストラリア国立美術館との共同研究)</p> <p>オ マン・レイの芸術と生涯に関する調査研究(マン・レイ財団、国立国際美術館との共同研究)</p> <p>カ 近代及び現代の美術を中心とした影の表現、意味、機能等についての調査研究(東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館との共同研究)</p> <p>キ ゴッホの芸術と生涯に関する調査研究(国立ゴッホ美術館、クレラ＝ミューラー美術館、名古屋市美術館との共同研究)</p> <p>ク シュルレアリスムの起源とその展開についての調査研究(ポンピドゥー・センターとの共同研究)</p> <p>② 教育普及その他の美術館活動の</p>	ルーシー・リーとヨーロッパの20世紀工芸に関する調査研究(東京国立近代美術館工芸館との共同研究)	「ルーシー・リー展」を開催、同展の図録を刊行。	東京国立近代美術館
	ポスト印象派とその影響についての調査研究(オルセー美術館、オーストラリア国立美術館との共同研究)	「オルセー美術館展2010「ポスト印象派」」を開催、同展の図録を刊行。	オルセー美術館、オーストラリア国立美術館
	マン・レイの芸術と生涯に関する調査研究(マン・レイ財団、国立国際美術館との共同研究)	「マン・レイ展」を開催、同展の図録を刊行。	マン・レイ財団、国立国際美術館
	近代及び現代の美術を中心とした影の表現、意味、機能等についての調査研究(東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館との共同研究)	「陰影礼賛展」を開催、同展の図録を刊行。	東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館
	ゴッホの芸術と生涯に関する調査研究(国立ゴッホ美術館、クレラ＝ミューラー美術館、名古屋市美術館との共同研究)	「没後120年 ゴッホ展」を開催、同展の図録を刊行。	国立ゴッホ美術館、クレラ＝ミューラー美術館、名古屋市美術館
	シュルレアリスムの起源とその展開についての調査研究(ポンピドゥー・センターとの共同研究)	「シュルレアリスム展」を開催、同展の図録を刊行。	ポンピドゥー・センター
	美術館の教育普及事業(ワークショップ、鑑賞ガイド等)に関する調査研究	教育普及事業	
	日本の近現代美術資料に関する調査研究	美術資料の収集・提供事業	
	戦後の日本の美術館における展覧会データの収集及び公開に関する調査研究	美術情報の収集・提供事業	
	美術情報の収集・提供システムに関する調査研究	美術情報の収集・提供事業	
	美術館におけるデジタル・アーカイブの構築に関する調査研究	美術情報の収集・提供事業	
	② 展覧会カタログの執筆		
	ア 東京国立近代美術館		
タイトル	執筆者職名・氏名	展覧会名	

<p>ための調査研究を次のとおり実施したか。</p> <p>ア 美術館の教育普及事業(ワークショップ、鑑賞ガイド等)に関する調査研究</p> <p>イ 日本の近現代美術資料に関する調査研究</p> <p>ウ 戦後の日本の美術館における展覧会データの収集及び公開に関する調査研究</p> <p>エ 美術情報の収集・提供システムに関する調査研究</p> <p>オ 美術館におけるデジタル・アーカイブの構築に関する調査研究</p>	エッセイ「建築はどこにあるの？」	研究員・保坂健二郎	建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション
	「いみありげなしみ」展ブローシャ	美術課長・蔵屋美香	いみありげなしみ
	「上村松園, その画業に託されたもの」	研究員・中村麗子	上村松園展
	「祖母松園を語る(インタビュー)」	日本芸術院会員, 画家・上村淳之	上村松園展
	作品目録	研究員・中村麗子	上村松園展
	章解説	研究員・中村麗子	上村松園展
	作品解説	研究員・中村麗子	上村松園展
	作品解説	主任研究員・鶴見香織	上村松園展
	「手探りのドローイング 展ブローシャ	研究員・保坂健二郎	手探りのドローイング
	麻生三郎の絵画	主任研究員・大谷省吾	麻生三郎展
	麻生三郎のリアリズム絵画	副館長・松本透	麻生三郎展
	文献目録	主任研究員・都築千重子 編	麻生三郎展
	出品目録	主任研究員・大谷省吾 主任研究員・都築千重子 編	麻生三郎展
	章解説	主任研究員・大谷省吾	麻生三郎展
	写真集への旅	主任研究員・増田玲	鈴木清写真展 百の階段、千の来歴
	アシンメトリーな蜘蛛の巣	写真家・マヒル・ポットマン	鈴木清写真展 百の階段、千の来歴
	解説	客員研究員・小林美香	鈴木清写真展 百の階段、千の来歴
	解説	主任研究員・増田玲	鈴木清写真展 百の階段、千の来歴
	「空虚の形態学」展ブローシャ	主任研究員・鈴木勝雄	空虚の形態学
	岡本太郎なんて、ケトバシてやれ!	主任研究員・大谷省吾	生誕 100 年 岡本太郎展
	章解説	主任研究員・大谷省吾	生誕 100 年 岡本太郎展
	作品解説	主任研究員・大谷省吾 副館長・松本透	生誕 100 年 岡本太郎展
	岡本太郎略年譜	主任研究員・大谷省吾編	生誕 100 年 岡本太郎
主要文献目録	主任研究員・大谷省吾編	生誕 100 年 岡本太郎展	
隠崎隆一, 福本潮子, 和田的	工芸課主任研究員・今井陽子	現代工芸への視点—茶事をめぐって	

ガラスの冒険	工芸課主任研究員・今井陽子	ガラス★高橋禎彦展
略歴, 用語解説, 目録	工芸課客員研究員・内藤裕子, 工芸課研究補佐員・齊藤佳代	ガラス★高橋禎彦展
参考文献	工芸課研究補佐員・齊藤佳代, 工芸課インターン・伊藤昌代, 稲葉麻里子, 星野立子, 三石恵莉	ガラス★高橋禎彦展
栄木正敏—量産陶磁器のオリジナリティ	工芸課主任研究員・諸山正則	栄木正敏のセラミック・デザイン—リズムウェーブ
池田巖, 川瀬忍, 長野烈, 畠山耕治	工芸課主任研究員・諸山正則	現代工芸への視点—茶事をめぐって
作家略歴(伊勢 晃一郎, 今泉毅, 村瀬治兵衛)	工芸課主任研究員・北村仁美	現代工芸への視点—茶事をめぐって
年譜, 参考文献, 目録	工芸課主任研究員・北村仁美	栄木正敏のセラミック・デザイン—リズム&ウェーブ
茶の湯の器にみる現在性	工芸課長・唐澤昌宏	現代工芸への視点—茶事をめぐって
作家解説(江田蕙, 金重有邦, 林邦佳, 若尾経, 渡明)	工芸課長・唐澤昌宏	現代工芸への視点—茶事をめぐって

#### イ 京都国立近代美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	展覧会名
とある種別の検索目録, あるいは【その他】への誘い………京都国立近代美術館・所蔵作品目録Ⅷ	特任研究員・河本信治	マイ・フェイバリット—とある美術の検索目録/所蔵作品から
稲垣稔次郎の軌跡	主任研究員・松原龍一	稲垣仲静・稔次郎兄弟展
稲垣仲静 年譜・参考文献	主任研究員・小倉実子	稲垣仲静・稔次郎兄弟展
稲垣稔次郎 略年譜・主要参考文献	主任研究員・松原龍一	稲垣仲静・稔次郎兄弟展
参考資料案内	研究補佐員・池澤茉莉	ローマ追想—19 世写真と旅
『日本画』の前衛 1938-1949	学芸課長・山野英嗣	「日本画」の前衛 1938-1949
出品作紹介	学芸課長・山野英嗣	「日本画」の前衛 1938-1949
『日本画』の前衛 1938-1949 関連年表	学芸課長・山野英嗣 研究補佐員・川井遊木	「日本画」の前衛 1938-1949
松園の「序の舞」	主任研究員・小倉実子	上村松園展



展覧会への序章	ヴォルフガング・ケルステン(チューリヒ大学教授) 池田祐子・主任研究員 三輪健仁(東京国立 代美術館・研究員)	パウル・クレー—おわらないアトリエ
アトリエ絵画	主任研究員・池田祐子	パウル・クレー—おわらないアトリエ
ミュンヘンのアトリエ写真	主任研究員・池田祐子	パウル・クレー—おわらないアトリエ
油彩転写素描	主任研究員・池田祐子	パウル・クレー—おわらないアトリエ
切断という創造的行為	主任研究員・池田祐子	パウル・クレー—おわらないアトリエ
年譜	主任研究員・池田祐子 三輪健仁(東京国立近代美術館・研究員)	パウル・クレー—おわらないアトリエ
作品リスト	主任研究員・池田祐子	パウル・クレー—おわらないアトリエ

#### ウ 国立西洋美術館

タイトル	執筆者 職名・氏名	展覧会名
ローマにおけるファルネーゼ家の美術/パトロネージ	主任研究員・渡辺晋輔	ナポリ・宮廷と美—カポディモンテ美術館展 ルネサンスからバロックまで
作家解説(編)	主任研究員・渡辺晋輔	ナポリ・宮廷と美—カポディモンテ美術館展 ルネサンスからバロックまで
パッション 「宗教」デューラーの受難=情熱	研究員・新藤 淳	アルブレヒト・デューラー版画・素描展 宗教肖像/自然
アルブレヒト・デューラー年譜	研究員・新藤 淳	アルブ ヒト・デューラー版画・素描展 宗教肖像/自然
「淡い色の紙」—レンブラントの和紙刷り版画	上席主任研究員・幸福 輝	レンブラント 光の探求/闇の誘惑

#### エ 国立国際美術館

タイトル	執筆者 職名・氏名	展覧会名
ルノワールと日本人画家たち 言葉でたどる巨匠の面影	主任研究員・安來正博	ルノワール—伝統と革新
フェティッシュを越えて	館長・建畠 哲	死 ないための葬送 荒川修作初期作品展

荒川修作の初期作品について	客員研究員・平芳幸浩	死ななための葬送 荒川修初期作品展
異教の王	館長・建畠哲	横尾忠則全ポスター
フェティッシュとしての横尾忠則ポスター	主任研究員・安來正博	横尾忠則全ポスター
束芋 外と内の往還	主任研究員・植松由佳	束芋:断面の世代
マン・レイ 年譜翻訳	主任研究員 植松由佳	マン・レイ展
作品解説	主任研究員・中井康之	ウフィツィ美術館 自画像コレクション 巨匠たちの「秘めた」素顔 1664-2010
風穴	研究員・橋本 梓	風穴 もうひとつのコンセプチュアリズム、アジアから

オ 国立新美術館

タイトル	執筆者職名氏名	展覧会名
中井川由季の10年、その後	副館長・福永 治	アーティスト・ファイル 2011—現代の作家たち
マン・レイとマルセル・デュシャン—出品作品についてのノート	学芸課長・南雄介	マン・レイ展
マルセル・デュシャンとシュルレアリスム	学芸課長・南雄介	シュルレアリスム展—パリ、ボンピドゥセンター—所蔵作品による
岩熊力也の絵画について	学芸課長・南雄介	アーティスト・ファイル 2011—現代の作家たち
抽象絵画の創設と1900年前後のフランス絵画—ヴァシリー・カンディンスキーの視点から	主任研究員・長屋光枝	オルセー美術館展 2010「ポスト印象派」
鬼頭健吾—どこまでいっても表面しかありえない世界	主任研究員・長屋光枝	アーティスト・ファイル 2011—現代の作家たち
ビョルン・メルフス	主任研究員・長屋光枝	アーティスト・ファイル 2011—現代の作家たち
西洋絵画の影と光	主任研究員・宮島綾子	陰影礼讃—国立美術館コレクションによる
風景画の影と光	主任研究員・宮島綾子	陰影礼讃—立美術館コレクションによる

絵画の力	主任研究員・宮島綾子	シュルレアリスム展— パリ, ポンピドゥセンター —所蔵作による
タラ・ドノヴァン	主任研究員・西野華子	アーティスト・ファイル 2011—現代の作家た ち
松江泰治	主任研究員・本橋弥生	アーティスト・ファイル 2011—現代の作家た ち
バードヘッドと今回の出品 作品について	主任研究員・平井章一	アーティスト・ファイル 2011—現代の作家た ち

### ③ 研究紀要, 館ニュース等の執筆

#### ア 東京国立近代美術館

タイトル	執筆者職名・ 氏名	掲載誌名	発年月日
いみありげなしみ	美術課長・蔵屋 美香	『現代の眼』581号 (2010年4-5号)	平成22年4月1 日
実験の場としての庭—「庭 —作家の小宇宙」にちなん で	研究員・中村麗 子	『現代の眼』581号 (2010年4-5月号)	平成22年4月1 日
菱田春草《賢首菩薩》—朦 朧体の次にあるもの	主任研究員・鶴 見香織	『現代の眼』581号 (2010年4-5月号)	平成22年4月1 日
平成21年度の新収蔵作品 (美術作品)について	美術課長・蔵屋 美香 主任研究員・増 田玲	『現代の眼』582号 (2010年6-7月号)	平成22年6月1 日
手探りのドローイング たと えば照明を暗くしてみる— 美術館での共感覚的体験 を目指して	研究員・保坂健 二郎	『現代の眼』583号 (2010年8-9月号)	平成22年8月1 日
榎倉康二のしみ—「いみあ りげなしみ」展覚え書き	美術課長・蔵屋 美香	『現代の眼』583号 (2010年8-9月号)	平成22年8月1 日
「石膏原型のオリジナリテ ー」 塑像という迷宮	主任研究員・鈴 木勝雄	『現代の眼』584号 (2010年10-11月)	平成22年10月 1日
長谷川利行《カフェ・パウリ スタ》収蔵の経緯と修復・分 析の報告	研究員・保坂健 二郎	『現代の眼』584号 (2010年10-11月号)	平成22年10月 1日
教育普及リポート KIDS★MOMAT 2010 報告 夏休みの教育普及活動	主任研究員・一 條彰子	『現代の眼』585号 (2010年12-2011年1 月号)	平成22年12月 1日
「建築はどこにあるの?7つ のインスタレーション」イベ ント ダンスパフォーマンス	研究員・保坂健 二郎 研究補佐員・柴	『現代の眼』585号 (2010年12-2011年1 月号)	平成22年12月1 日

アフタートークから	原聡子		
コレクションを中心とした小企画「空虚の形態学」「造形の凹み・穴・空洞」	主任研究員・鈴木勝雄	『現代の眼』586号(2011年2-3月号)	平成23年2月1日
マチエール(画肌)の魅力—画面の多様な表皮	主任研究員・都築千重子	『現代の眼』586号(2011年2-3月号)	平成23年2月1日
作品解説	主任研究員・一條彰子	『国立美術館アートカード・ガイド』(独立行政法人国立美術館)	平成23年3月31日
鑑賞の位相—美術出版社刊『日本の彫刻』をめぐって	主任研究員・増田玲	『東京国立近代美術館研究紀要』第15号	平成23年3月31日
長谷川利行作《カフェ・パウルスタ》の調査報告 来歴、「価格」、主題、修復、成分分析、X線透過写真について	研究員・保坂健二郎	『東京国立近代美術館研究紀要』第15号	平成23年3月31日
高橋禎彦展	工芸課主任研究員・今井陽子	現代の眼 585号(2010年12-2011年1月号)	平成22年12月 - 平成23年1月
高橋禎彦、私の仕事	工芸課主任研究員・今井陽子	現代の眼 586号(2011年2-3月号)	平成23年2-3月
「伝統工芸と倣作：草創期の日本伝統工芸展の模索	工芸課主任研究員・木田拓也	東京国立近代美術館研究紀要 第15号	平成23年3月31日
栄正敏のセミック・ザイン	工芸課主任研究員・北村仁美	現代の眼 584号(2010年10-11月号)	平成22年10-11月
所蔵作品展「現代の人形」によせて	工芸課主任研究員・北村仁美	現代の眼 585号(2010年12-2011年1月号)	平成22年12月 - 平成23年1月
平成21年度の新収蔵作品(工芸作品)について	工芸課長・唐澤昌宏	現代の眼 582号(2010年6-7月号)	平成22年6-7月
現代工芸への視点—事をめぐって	工芸課長・唐澤昌宏	現代の眼 582号(2010年6-7月号)	平成22年6-7月
アーティスト・トークから 伊勢崎晃一郎、川瀬忍	工芸課長・唐澤昌宏	現代の眼 586号(2011年2-3月号)	平成23年2-3月

(フィルムセンター)

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
フィルムセンターにおける復元の新たな展開—アマチュア映画の取り組み	主任研究員・板倉史明	NFCニューズレター 第90号	平成22年4月1日

「史劇 楠公訣別」重要文化財指定へ	主任研究員・板倉史明	NFCニューズレター 第90号	平22年4月1日
パリ市立フランソワ・トリオ―映画図書館を訪ねて	情報資料室長・岡田秀則	NFCニューズレター 第91号	平成22年6月1日
デジタル・コンテンツの長期保存―問題の整理と更新に向けて	主幹・岡島尚志	NFCニューズレター 第92号	平成22年8月1日
「コレクションにする」ことから「コレクションになる」ことへ	映画室長・榎本章(筆名:とちぎあきら)	NFCニューズレター 第92号	平成22年8月1日
途方もない拡がりを見渡す―黒澤明の“映画遺産”	情報資料室長・岡田秀則	NFCニューズレター 第93号	平成22年10月1日
FIAF オスロ会議報告 A Report on the 66 <sup>th</sup> FIAF Congress in Oslo JTS2010におけるデジタル保存・管理の新提案	主任研究員・板倉史明	NFCニューズレター 第93号	平成22年10月1日
アキラ・クロサワを崇める人々―いくつかの点景	主幹・岡島尚志	NFCニューズレター 第94号	平成22年12月1日
第29回ポルデノーネ無声映画祭報告	情報資料室長・岡田秀則	NFCニューズレター 第94号	平成22年2月1日
第29回ポルデノーネ無声映画祭 前日談	映画室長・榎本章(筆名:とちぎあきら)	NFCニューズレター 第94号	平成22年12月1日
黙して、語れ―新しい常設展「日本映画の歴史」の射程	情報資料室長・岡田秀則	NFCニューズレター 第95号	平成23年2月1日
松本俊夫監督、『銀輪』(1956年)のデジタル復元を語る	映画室長・榎本章(筆名:とちぎあきら)	東京国立近代美術館研究紀要 第15号	平成23年3月31日
日本映画におけるトーキー初期の画面比率	主任研究員・板倉史明	東京国立近代美術館 研究紀 第15号	平成23年3月31日

イ 京都国立近代美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
「十九世紀末京都」への一視点―田村宗立、伊東忠太を中心に―	学芸課長・山野英嗣	京都国立近代美術館ニユース 視る 442号	平成22年10月15日
ゴットフリート・ワグネルと京都	主任研究員・松原龍一	京都国立近代美術館ニユース 視る 442号	平成22年10月15日
資料紹介 垣仲静『夏休日誌』	主任研究員・小倉実子	京都国立近代美術館ニユース	平22年12月25日

		視る 448号	
『日本画』の前衛」に出品され初公開作品について	学芸課長・山野英嗣	京都国立近代美術館ニユース 視る 450号	平成23年1月31日
クリスチャン・マークレイ試論—見ることによって聴く	客員研究員・中川克志	京都国立近代美術館研究論集 CROSS SECTIONS —VOL.3	平成22年12月15日
上野伊三郎、日本インターナショナル建築会とバウハウス	学芸課長・山野英嗣	京都国立近代美術館研究論集 CROSS SECTIONS —VOL.3	平成22年12月15日
海外所の日本の染型紙の調査研究—チェコとハンガリー	主任研究員・池田祐子	京都国立近代美術館研究論集 CROSS SECTIONS —VOL.3	平成22年12月15日
ゴットフリート・ワグネルと京都	主任研究員・松原龍一	京都国立近代美術館研究論集 CROSS SECTIONS —VOL.3	平成22年12月15日

ウ 国立西洋美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
ラファエル前派: ヴィクトリア朝と近代(ティム・パリンジャー著)	学芸課主任研究員 大屋 美那(翻訳)	国立西洋美術館研究紀要No. 15	平成23年3月31日
屋内彫刻の展示と地震対策	学芸課主任研究員 河口 公夫	国立西洋美術館研究紀要 No. 15	平成23年3月31日
国立西洋美術館所蔵タピスリー《シャンボール城: 九月》の色と素材	学芸課研究補佐員 高嶋 美穂	国立西洋美術館研究紀要 No. 15	平成23年3月31日
ナポリ・宮廷と美—カポディモンテ美術館展 ルネサンスからバロックまで	学芸課主任研究員 渡辺 晋輔	ZEPHYROS43号	平成22年5月20日
2009年度新収蔵作品 ジョルジュ・ブラック《静物》	学芸課長 村上 博哉	ZEPHYROS43号	平成22年5月20日
アルブレヒト・デューラー版画・素描展 宗教/肖像/自然	学芸課主任研究員 佐藤 直樹	ZEPHYROS44号	平成22年8月20日

保存修復の仕事	学芸課研究補佐員 内田 香里	ZEPHYROS44号	平成22年8月20日
常設展のための新しい鑑賞ガイド Touch the Museum	学芸課研究員 新藤 淳	ZEPHYROS44号	平成22年8月20日
アルブレヒト・デューラー版 画・素描展 宗教肖像／ 自然	学芸課研究員 新藤 淳	ZEPHYROS45号	平成22年11月0日
松方コレクションをめぐる エピソード:セガンティーニ	学芸課主任研究員 大屋 美那	ZEPHYROS45号	平成22年11月20日
小企画展「アウトサイダーズ」	学芸課主任研究員 渡辺 晋輔	ZEPHYROS45号	平成22年11月20日
専門家のために美術図書館ができること	学芸課主任研究員 川口 雅子	ZEPHYROS46号	平成23年2月20日

・陳岡めぐみ(国立西洋美術館学芸課研究員)著『市場のための紙上美術館』(2009年)が、2010年度渋沢クロードル賞ルイ・ヴィトン・ジャパン特別賞を受賞。

#### エ 国立国際美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
館蔵品紹介《抗生物質と子音にはさまれたアインシュタイン》荒川修作	客員研究員・平芳幸浩	国立国際美術館ニュース 第177号	平成22年4月1日
束芋:断面の世代	主任研究員・植松由佳	国立国際美術館ニュース 第178号	平成22年6月1日
歴史の中のルノワール「ルノワールー伝統と革新」展に寄せて	主任研究員・安來正博	国立国際美術館ニュース 第178号	平成22年6月1日
館蔵品紹介《空間のポエム No.1「ことばのイベント」》	研究員・橋本 梓	国立国際美術館ニュース 第178号	平成22年6月1日
美術と映像	客員研究員・森下明彦	国立国際美術館ニュース 第179号	平成22年8月1日
ワークショップ報告	研究員・藤吉祐子	国立国際美術館ニュース 第179号	平成22年8月1日
農民はヘリコプターの夢を見るか? 蔡國強とディン・Q・レー	研究員・橋本 梓	国立国際美術館ニュース 第180号	平成22年10月1日
館蔵品紹介 《The Smoke of the Incense》館勝生	主任研究員 安來博	国立国際美術館ニュース 第180号	平成22年10月1日
展覧会出品作品紹介 エリザベート・シャプランーフ	主任研究員・中井康之	国立国際美術館ニュース 第181号	平成22年12月1日

イレンツェのフランス人画家ー			
館蔵品紹介《無題》エルヴィン・ヴルム	主任研究員・中西博之	国立国際美術館ニュース 第181号	平成22年12月1日
大阪から東京へ 早川良雄の第一歩「早川良雄ポスター展」に寄せて	主任研究員・安來正博	国立国際美術館ニュース 第182号	平成23年2月1日
館蔵品紹介《彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁さえも(グリーン・ボックス)》マルセル・デュシャン	客員研究員・平芳幸浩	国立国際美術館ニュース 第182号	平成23年2月1日

オ 国立新美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
研究員レポート「アーティスト・ファイル」という構想	副館長・福永治	「国立新美術館ニュース」No.14(4月)	平成22年4月
“横軸”の存在意義「アーティスト・ファイル」雑感	主任研究員・平井章一	「国立新美術館ニュース」No.4(4月)	平成22年4月
アートのとびら 国立美術館ガイドブック Vol.5	主任研究員・西野華子	「アートのとびら 国立新美術館ガイドブック Vol.5」	平成22年9月
研究員レポート マローティ・ゲーザ:20世紀初頭にハンガリーがみた夢ーヴェネツィア・ビエンナーレのハンガリー館	主任研究員・本橋弥生	「国立新美術館ニュース」No.17(1月)	平成23年1月



【(小項目)1-1-6】 観覧環境の提供		【評価】																					
<b>【法人の達成すべき計画】</b> (6)快適な観覧環境の提供 ①-1 高齢者、身体障害者、外国人等を含めた入館者本位の快適な鑑賞環境の形成のために展示方法・外国語表示・動線等の改善、施設の整備を計画的に行う。 ①-2 展示や解説パネルを工夫するとともに、音声ガイド等を導入するなど、鑑賞しやすさ、理解のしやすさに配慮する。 ② 入館者を対象とする満足度調査を定期的実施し、入場料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善に努める。 ③ 入館者にとって快適な空間となるよう、利用者ニーズを踏まえてミュージアムショップやレストラン等の充実を図る。		A																					
		H18	H19	H20	H21																		
		B	A	A	A																		
<b>【インプット指標】</b> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>(中期目標期間)</th> <th>18</th> <th>H19</th> <th>H20</th> <th>H21</th> <th>H22</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>決額(百円)</td> <td>1,468</td> <td>1,900</td> <td>1,861</td> <td>1,714</td> <td>1,815</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td>72</td> <td>75</td> <td>70</td> <td>71</td> <td>70</td> </tr> </tbody> </table> <p>1) 決算額は損益計算書 展覧事業費を計上している。(本項目は展覧事業費の一部であり、個別に計上できないため、展覧事業費全額を計上している。)            2) 従事人員数は、すべての研究職員数及び事業担当事務職員を計上している。その際、役員及び事業担当を除く事務職員は勘案していない。</p>						(中期目標期間)	18	H19	H20	H21	H22	決額(百円)	1,468	1,900	1,861	1,714	1,815	従事人員数(人)	72	75	70	71	70
(中期目標期間)	18	H19	H20	H21	H22																		
決額(百円)	1,468	1,900	1,861	1,714	1,815																		
従事人員数(人)	72	75	70	71	70																		
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績	分析・評価																					
(6)快適な観覧環境等の提供 ① 各館において、引き続き動線の改善や鑑賞しやすさ、理解のしやすさに配慮するための工夫を行ったか。 また、より良い鑑賞環境を提供するためのさまざまな方途について検討したか。 なお、引き続きアンケート調査等の結果を踏まえ、快適な観覧環境等の提供に努めたか。 (東京国立近代美術館) <本館> ア 展覧会カレンダーを配布したか。 イ 美術館活用ガイドを配布したか。 ウ 所蔵作品展において「フロアガイド(日本語、英語、独語、仏語、中国語、韓国語)」を配布したか。 エ 企画展において可能な限り「フロ	<b>(6)快適な観覧環境の提供</b> <b>① 高齢者、身体障害者、外国人等への対応</b> 平成 21 年度に引き続き、各館とも次のような対応を実施している。 ・多目的(身体障害者用)トイレ、エレベータ(エスカレーター)、スロープ(手摺り)の設置 ・車椅子、ベビーカーの貸出 ・自動体外式除細動器(AED)の設置 ・盲導犬、介助犬の同伴による観覧 ・多言語による館案内表示 ・多言語による館内リーフレット、ミュージアムカレンダー等の配布 ・国土交通省の実施する「YOKOSO! JAPAN WEEKS 2011」に参加し、外国人旅行者の所蔵作品展観覧料の割引等を実施 ・観覧者の休憩のための椅子を展示室に配置 ・オストメイト(人工肛門、人工膀胱保有者)用の設備を設置 ・キャプションに英語表記を併記 ・英語版ホームページの公開 ・東京国立近代美術館、国立西洋美術館、国立新美術館においては、東京都が実施する「ウェルカムカード」に参加し、外国人来館者の所蔵作品展観覧料を割引	○施設や展示に係る付帯物は整備されており、優れた水準にあると評価できる。ただし、入場者の増加を図る一方では観覧環境はむしろ悪化するため、多くの観客が見込まれる展覧会の混雑の緩和策が検討されることを望む。  ○国立西洋美術館の「Touch the Museum」の試みなど、英語版の音声ガイドの充実を評価する。  ○入場料金や開館時間の弾力化は適切に推移している。しかし、東日本大震災以降の状況をふまえると、節電などから今後の弾力化については新しい対応が課題となる。  ○キャンパスメンバーズについては、より一層の参加機関拡充の努力を望む。																					

<p>アガイド」を配布したか。</p> <p>オ 企画展(年1回)、所蔵作品展(通年)において、小・中学生向けのセルフガイドを配布したか。</p> <p>カ アンケート調査、予備調査に基づき、小企画の開催場所を会期によって移動させ、会場構成・動線の改善を継続したか。</p> <p>キ 重要文化財11点(うち1点は寄託作品)の展示における重点化を、解説の掲出等で引き続き行ったか。</p> <p>＜工芸館＞</p> <p>ア フロアガイド、作家名・作品名の読み方、素材・技法等を記載した出品リストを作成・配布するとともに、作家や作品の解説パネルやキャプションを作成・掲示するなど、鑑賞のための情報提供を促進したか。</p> <p>イ 所蔵作品展開催時に設置している各作品の注目ポイントを写真と文章で明示した鑑賞シート(館内設置式のシート)の充実を図り、来館者が興味深く鑑賞できるよう情報提供に努めたか。</p> <p>ウ 夏季の「こども工芸館／おとな工芸館」において、子ども向けセルフガイドに加え、親子で鑑賞できるよう大人向けの鑑賞補助資料(鑑賞の手引き)を配布したか。また、中学生以上を対象としたセルフガイドを配布し、年代に応じた多様な鑑賞の方法を提案したか。</p> <p>エ 屋外展示作品についての情報を館内に掲示し、来館者への関心を</p>	<p>・東京国立近代美術館本館においては、所蔵作品展のための英語版音声ガイドを作成した(運用は平成23年度から)。</p> <p>・国立西洋美術館においては、観光庁が実施する訪日外国人旅行者の受入環境整備事業の一環として、外国人旅行者の受入環境の現状を把握・分析するための重点地域調査に協力した。(①基礎調査:平成22年10月 ②外国人モニター調査:平成22年12月)</p> <p>・国立国際美術館においては、貸出用拡大鏡(16個)を常備した。また、授乳室及び安全仕様のキッズルームを地下1階に設置し、幼児向け絵本400冊を常設した。</p> <p>・国立新美術館においては、文字を大きくし、見易くしたフロアガイド「大きな文字の利用案内」の館内配布を行った。</p> <p>② 展示、解説の工夫と音声ガイドの導入</p> <p>各館とも次のような対応を実施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・共催展における音声ガイドの導入</li> <li>・館内リーフレット、フロアプラン、ミュージアムカレンダー等の配布</li> </ul> <p>その他、東京国立近代美術館本館では所蔵作品展において、「重要文化財」のキャプション表示の追加やホームページに重要文化財作品の特設解説ページを引き続き設置するとともに、新たに所蔵作品展のための英語版音声ガイド作成(運用は、平成23年度から)等を行っている。工芸館では、キャプションのサイズ拡大、作品名のふりがな及び素材・技法を記載した。</p> <p>フィルムセンターでは、展覧会の開催に際し、展示作品の出品目録の配布(4回)とともに、新しい常設展「NFCコレクションでみる 日本映画の歴史」において、児童・生徒向けの「ジュニア・セルフガイド」を配布した。</p> <p>国立西洋美術館においては、共催展・自主企画展において「作品リスト(日本語、英語)」及び「ジュニア・パスポート」、常設展作品リスト、国立西洋美術館本館の建築探検マップ(日・英・仏・韓・中)の無料配布を引き続き行った。また、既に常設展ガイドとして、無料で配信しているiPhone専用アプリ「Touch the Museum」の多言語化に向けた修正・拡張を行い、英語版の制作に着手した。新たに版画展開催の際、版画の技法を説明した小冊子を展示室内に配置した。</p> <p>国立新美術館においては、「陰影礼讃展」鑑賞ガイドブック『アートのとびら vol.5』(日英併記)、「アーティスト・ファイル2011」鑑賞用パンフレット『ちいさなアーティスト・ファイル2011』を作成配布した。</p> <p>③ 入場料金、開館時間等の弾力化</p> <p>文化の日(11月3日)及び国際博物館の日(5月18日、京都国立近代美術館を除く、国立国際美術館は5月17日に実施)の観覧料を無料(国立新美術館を除く。)に</p>	<p>○若年層の観覧誘致を掲げるなら、セルフサービスの安価な飲食サービスの場が必要と考える。</p>
--	--	--

<p>高めたか。</p> <p>&lt;フィルムセンター&gt;</p> <p>ア 展覧会の開催に際し、展示作品の出品目録を配布したか。</p> <p>「映画資料でみる 映画の中の日本文学 Part3」(1回)</p> <p>「アニメーションの先駆者 大藤信郎」(1回)</p> <p>「生誕百年 映画監督 黒澤明」(1回)</p> <p>計3回配布</p> <p>(京都国立近代美術館)</p> <p>ア 館概要(日本語、英語、独語、仏語、西語、伊語、中国語、韓国語)を配布したか。</p> <p>イ 展覧会案内を配布したか。</p> <p>ウ 小・中学生に対してガイドブックを配布したか。</p> <p>エ 京都国立博物館、京都市美術館、京都文化博物館と共同して、年間展覧会案内を配布したか。</p> <p>(国立西洋美術館)</p> <p>ア 国立西洋美術館ブリーフガイドを配布したか。</p> <p>イ 常設展(所蔵作品展)「作品リスト(日本語、英語)」、企画展「作品リスト(日本語、英語)」及び小・中学生向け解説「ジュニアパスポート」を配布したか。</p> <p>ウ 国立西洋美術館本館の建築探検マップ(日本語、英語、仏語、中国語、韓国語)を配布したか。</p> <p>エ 「Touch the Museum」のダウンロード・サービス等を実施したか。</p>	<p>するとともに、夜間開館の実施、年始やゴールデンウイーク等休館日の臨時開館を実施した。また、所蔵作品展及び自主企画展の高校生以下及び18歳未満の者の観覧料の無料化についての周知に努めた。</p> <p>その他平成22年度の各館の取組は以下のとおりである。</p> <p>(ア)東京国立近代美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本館では、年始は1月2日(「美術館へ行こう ～ A Day in the Museum」の実施)から開館し、図録やオリジナルグッズをプレゼント</li> <li>・本館では、東京地下鉄株式会社主催のウォーキングイベント「東京まちさんぽ」(11月20日)に参加し、ウォーキングマップ持参者には所蔵作品展及び「麻生三郎展」の一般観覧料金を割引</li> <li>・フィルムセンターでは、「中央区まるごとミュージアム」へ協力し、10月31日の観覧料の無料化を実施</li> </ul> <p>(イ)京都国立近代美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・関西文化の日(11月20日、11月21日)の所蔵作品展観覧料の無料化</li> <li>・京都市駐車場公社と連携による駐車場料金の割引</li> <li>・「美術館へ行こう A Day in the Museum」(4月4日)の全館無料化</li> </ul> <p>(ウ)国立西洋美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「東京・春・音楽祭」(主催:音楽祭実行委員会)に協力し、講堂で無料イベント「レクチャー&amp;コンサート」(4月8日)を開催</li> <li>・「国際博物館の日」では、上野地区の諸機関や商業施設等と連携し、スタンプラリーや半券提示によるサービス提供などの事業に参加するとともに、来館者には絵はがきをプレゼント</li> <li>・「夏休み子ども音楽会 2010《上野の森文化探検》」(主催:東京文化会館(東京都歴史文化財団)ほか)に協力し、参加者については常設展の観覧料金を無料(8月4日)</li> <li>・「Museum X'mas in 国立西洋美術館《美術館でクリスマス》」において、「10分トーク」「クリスマスキャロルコンサート」などの各種イベントやクリスマスツリーの設置(期間:平成22年12月14日(火)～平成22年12月19日(日)) ※クリスマスツリーは12月26日(日)まで設置</li> </ul> <p>(エ)国立国際美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎月第一土曜日に所蔵作品展観覧料の無料化</li> <li>・関西文化の日(11月20日、11月21日)に所蔵作品展観覧料の無料化</li> </ul> <p>(オ)国立新美術館</p>	
--	--	--

(国立国際美術館)

ア 館概要リーフレット(日本語、英語、中国語、韓国語)を配布したか。

イ 展覧会において可能な限り「フロアガイド」を配布したか。

ウ 小・中学生向け解説「ジュニア・セルフガイド」を配布したか。

(国立新美術館)

ア 館フロアガイド(日本語、英語、独語、仏語、西語、中国語、韓国語)を配布したか。

イ 展覧会カレンダーを配布したか。

ウ 展覧会において「フロアガイド」を作成・配布したか。

エ 展覧会において中学生以上を対象とした鑑賞ガイドを作成・配布したか。

オ 文字を大きくし、見やすくした「大きな文字の利用案内」を配布したか。

カ 館内に「ご意見箱」を設置し、対応が必要な意見について適切な措置をとったか。

② 入館料及び開館時間の弾力化等により、入館者サービスの向上を図るため、次のとおり実施したか。

ア 高校生以下及び18歳未満の観覧料無料化の普及広報に努めたか。

イ 展覧会の混雑状況を考慮し、開館日・時間等について柔軟な対応を行ったか。

ウ 学生等の美術鑑賞への興味と関心を高めるため、キャンパスメンバ

・「平成22年度[第14回]文化庁メディア芸術祭」の観覧料の無料化

・六本木アート・トライアングル参加館との観覧料の相互割引及び共通マップの作成・配布

・公募団体展と企画展の観覧料の相互割引

・東京メトロ、都営地下鉄ワンデーパスによる観覧料割引

・共催展で、高校生無料観覧日の設定を推進

#### ④ キャンパスメンバーズ制度の実施

平成18年12月に規則を制定し、国立美術館全体の事業として発足した、大学、短期大学、高等専門学校及び専修学校等を対象とした会員制度「国立美術館キャンパスメンバーズ」については、平成22年度においてメンバー校は新規8校を加え64校、各館利用者数は72,356名となった。また、キャンパスメンバーズ入会校向けのサイトを作成し、公開した。あわせて、サイトを周知するための学内用ポスター及びチラシを作成した。

#### ⑤ ミュージアムショップ、レストラン等の充実

ミュージアムショップについては、所蔵作品の図版を使用したポストカードや図柄を活用したオリジナルグッズの開発に努め、ホームページにおいて展覧会図録やグッズの情報を紹介するなど広報宣伝を行った。

京都国立近代美術館では、多様な商品を展開するよう取り組むと共に「稲垣仲静・稔次郎兄弟展」に関連し、仲静の作品の絵柄の入ったTシャツや稔次郎の作品の図柄を使ったスタンプなどのオリジナルグッズを開発し、販売を行った。

国立西洋美術館では、販売品の充実のため例年に引き続きオリジナルグッズ新商品の開発を行った。

平成22年度の主な新商品

・絵はがきトレシー(メガネふき)4種類

・《考える人》Tシャツ

・トレシーカレンダー

・絵はがき(新図案:ブーグロー《少女》、セガンティーニ《羊の剪毛》)

・プリントオンデマンド グリーティングカード「マイ・ミュージアムカード」

国立国際美術館では、オリジナルグッズの充実のほか、企画展に合わせた出展作家に関連した書籍販売等来館者のニーズに合わせた運営を行った。

レストランについては、東京国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館で、企画展に関連した料理をメニューに取り入れ、ホームページにおいて、メニュー、サービスの紹介や店内の写真を掲載するなどの広報を行っ

<p>ーズ制度の普及広報に努めたか。 また、本年度から東京国立近代美術館フィルムセンターにおける上映会も対象に加え、キャンパスメンバーズ制度の充実を図ったか。</p> <p>エ 東京国立近代美術館本館・工芸館及び国立西洋美術館は、東京都が実施する外国人旅行者への観光事業「ウェルカムカード」に参加し、外国人旅行者に対して所蔵作品展の割引観覧を実施したか。</p> <p>オ 東京国立近代美術館、国立西洋美術館及び国立新美術館は、共通入館券事業「ぐるっとパス」に参加し、観覧料の低廉化を図ったか。</p> <p>カ 国立国際美術館は、共通入館券事業「ミュージアムぐるっとパス・関西2010」に参加し、観覧料の低廉化を図ったか。</p> <p>キ 東京国立近代美術館及び国立西洋美術館は、東京都が実施する青少年育成事業「家族ふれあいの日」に参加し、所蔵作品展観覧料の優待を実施したか。</p> <p>(東京国立近代美術館)</p> <p>ア 国民に広く美術作品等に親しんでもらうため、所蔵作品展を廉価で観覧できるパスポート観覧券について、ホームページへの情報掲載やチラシを配布するなど、広報に努めたか。</p> <p>&lt;本館・工芸館&gt;</p> <p>ア 年始は1月2日(日)から開館したか。</p>	<p>た。また、京都国立近代美術館では、京都らしさを意識し、旬のものをおいしく提供できるように春夏と秋冬でメニューを入れ替えるとともに、企画展に合わせたテーマランチやテーマデザートを提供を行った。</p>	
---	--	--

<p>イ 休館日のうち、3月28日(月)を開館したか。</p> <p>&lt;フィルムセンター&gt;</p> <p>ア 「映画の中の日本文学 Part3」、「第32回びあフィルムフェスティバル」、「生誕百年 映画監督 黒澤明」、「フィルムセンター開館40周年記念③ 新収蔵作品選集」において、1日3回上映を実施したか。また、「ポルトガル映画祭2010」、「シネマアフリカ2010」では週末及び祝日に1日3回上映を行ったか。</p> <p>(京都国立近代美術館)</p> <p>ア 休館日のうち、5月4日(火・祝)を開館したか。</p> <p>イ 前年度の3月26日から引き続き、10月15日までの企画展開催中の金曜日の閉館時間を、午後8時まで延長したか。</p> <p>ウ 企画展を開催しない土曜日について、コレクション・ギャラリーの無料観覧日を設けたか。</p> <p>エ 京阪カード会社、阪急阪神カード会社等と提携し、カード提示による優待割引を実施し、同社の広報誌による展覧会広報を行うとともに、観覧料の低廉化を図ったか。</p> <p>(国立西洋美術館)</p> <p>ア クレジットカード及び電子マネー(Suica 及び PASMO)による観覧券の窓口販売を行ったか。</p> <p>イ 休館日のうち、5月4日(火・祝)、8月16日(月)を開館したか。</p> <p>ウ 年始は1月2日(日)から開館した</p>		
---	--	--

<p>か。</p> <p>エ 春の企画展開催日から秋の企画 展閉会日までの開館時間を30分延 長し午後5時30分までとしたか。</p> <p>オ 「国際博物館の日」に上野地区の 諸機関と連携してイベントを行った か。</p> <p>カ 12月を中心にクリスマスイベント (10分トーク、クリスマスキャロル・コ ンサート)を開催したか。</p> <p>(国立国際美術館)</p> <p>ア 企画展開催中の金曜日の閉館時 間を午後7時まで延長したか。</p> <p>イ 休館日のうち、5月4日(火・祝)を 開館したか。</p> <p>ウ 毎月第1土曜日を地下2階で開催 するコレクション展、企画展の無料 観覧日としたか。</p> <p>エ 「大阪周遊パス2010」、大阪市 交通局「共通一日乗車券」に参加 し、観覧料の低廉化を図ったか。</p> <p>オ 近隣のホテルと提携し、宿泊客に 対し優待券を配布し、展覧会広報を 行うとともに、観覧料の低廉化を図 ったか。</p> <p>カ 京阪カード会社、阪急阪神カード 会社等と提携し、カード提示による 優待割引を実施し、同社の広報誌 による展覧会広報を行うとともに、 観覧料の低廉化を図ったか。</p> <p>(国立新美術館)</p> <p>ア 「六本木アート・トライアングル」を 構成する近隣の美術館と観覧料の 相互割引を行ったか。</p>		
---	--	--

<p>イ 美術団体等と協議の上、企画展及び公募展の観覧料の相互割引の実施を推進したか。</p> <p>ウ 同時期に開催する企画展の相互割引を実施したか。</p> <p>エ 共催者と協議の上、共催展の高校生無料観覧日を設定したか。</p> <p>オ クレジットカード及び電子マネー（Suica 及び PASMO）による観覧券の窓口販売を行ったか。</p> <p>カ 小学生以下の子どもを対象とした託児サービスを通年で実施したか。</p> <p>③ 利用者のニーズを踏まえ、ミュージアムショップやレストラン等の充実を図ったか。</p> <p>ア 東京国立近代美術館では、レストランにおける季節メニューや展覧会にちなんだ特別メニュー等、最新の情報をホームページで広報するとともに、より一層の利用者へのサービスを図るべく連携・協力を行ったか。</p> <p>イ 国立国際美術館では、レストランと連携・協力してホームページに掲載されているメニュー情報等を充実させ、美術館利用者への広報を行ったか。</p> <p>ウ 国立新美術館では、ミュージアムショップ内に設けたギャラリーの企画協力を行うとともに、レストランやミュージアムショップとの意見交換の場を設け、一体となって検討し、利用者へのサービスの向上を図ったか。</p>		
---	--	--



【(小項目)1-1-7】	国立新美術館の開館					【評定】 —																					
<b>【法人の達成すべき計画】</b> (7)国立新美術館の開館 我が国の美術創造活動の活性化を推進するため、「国立新美術館」を平成19年1月に開館し、これに向けた体制整備、展示等の実施準備を進める。										H18	H19	H20	H21														
<b>【インプット指標】</b> <table border="1" data-bbox="123 363 1310 534"> <thead> <tr> <th>(中期目標期間)</th> <th>H18</th> <th>H19</th> <th>H20</th> <th>H21</th> <th>H22</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>決算額(百万円)</td> <td>2,404</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td>16</td> <td>17</td> <td>16</td> <td>16</td> <td>16</td> </tr> </tbody> </table> <p>1) 決算額は国立新美術館開館準備等事業費等を計上している。  2) 従事人員数は国立新美術館職員数を計上している。</p>						(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	決算額(百万円)	2,404	—	—	—	—	従事人員数(人)	16	17	16	16	16	B      —      —      —			
(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22																						
決算額(百万円)	2,404	—	—	—	—																						
従事人員数(人)	16	17	16	16	16																						
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績					分析・評価																					

【(中項目)1-2】	2. 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・継承	【評定】			
		A			
		H18	H19	H20	H21
		A	A	A	A

【(小項目)1-2-1】	<b>収蔵品の収集</b> <b>【法人の達成すべき計画】</b> (1)-1 以下に掲げる各館の収集方針に沿って、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵作品の蓄積を図る。 なお、作品の収集に当たっては、その美術史的価値や意義等についての外部有識者の意見等を踏まえ、適宜適切な購入を図る。 また、収集活動を適時適切に行うために、美術作品の動向に関する情報の入手と機動性の向上に努める。 (東京国立近代美術館) 近・現代の絵画・水彩・素描・版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。 美術・工芸に関しては所蔵作品により近代美術全般の歴史的な常設展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。 また、映画フィルム等については、残存するフィルムの収集に努めるとともに積極的に復元を図る。 (京都国立近代美術館) 近代美術史における重要な作品など、近・現代の美術・工芸・写真・デザイン作品等を収集する。 その際、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した所蔵作品の充実にも配慮する。 (国立西洋美術館) 中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れの概観が可能となるように、松方コレクションを中心とした近代フランス美術の充実、近世ヨーロッパ絵画の充実及びヨーロッパ版画の系統的収集を行う。 (国立国際美術館) 日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、国際的な交流が極めて盛んになった1945年以降の国内外の美術並びに同時代の先端的な美術を中心に、総合的な影響関係を踏まえつつ、体系的に収集する。 (1)-2 所蔵作品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている部分を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。 (1)-3 各館の収集方針に則しつつ、緊密な情報交換と連携を図りながら、国立美術館全体のコレクションの充実に努める。	【評定】			
		A			
		H18	H19	H20	H21
		A	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H2
決算額(百万円)	1,043	1,034	1,134	2,093	1,694
従事人員数(人)	51	52	51	51	49

- 1) 決算額は固定資産明細美術工芸品増加額－寄贈による資産の取得額を計上している。  
 2) 従事人員数は、国立新美術館を除くすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績	分析・評価																																																							
<p>(1)-1 各館の収集方針に沿って、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵作品の蓄積を図る。作品の収集に当たっては、その美術史的価値や意義等についての外部有識者の意見等を踏まえ、適切な購入を図る。また、収集活動を適時適切に行うために、美術作品の動向に関する情報の入手と機動性の向上に努めたか。</p> <p>あわせて購入した美術作品に関する情報をホームページで引き続き公開したか。</p> <p>(東京国立近代美術館)</p> <p>&lt;本館&gt;</p> <p>近代日本美術の体系的コレクションの構築を引き続き図りつつ、近代日本美術に影響を与えた欧米作家作品の収集も積極的に行ったか。特に次の点に留意したか。</p> <p>① 日本人作家に多大な影響を与えた1900－1940年代の欧米作家作品の収集</p> <p>② 1970年代以降の日本人作家の作品の収集</p> <p>&lt;工芸館&gt;</p> <p>近代日本における工芸の体系的コ</p>	<p>2 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・継承</p> <p>(1) 美術作品の収集</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>購入点数</th> <th>購入金額(円)</th> <th>寄贈点数</th> <th>年度末所蔵作品数</th> <th>年度末寄託品数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">東京国立近代美術館</td> <td>本館</td> <td>122</td> <td>758,826</td> <td>128</td> <td>10,295</td> <td>242</td> </tr> <tr> <td>工芸館</td> <td>9</td> <td>47,027</td> <td>31</td> <td>2,961</td> <td>117</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>64</td> <td>261,606</td> <td>63</td> <td>9,806</td> <td>822</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>34</td> <td>167,478</td> <td>25</td> <td>4,659</td> <td>37</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>57</td> <td>141,025</td> <td>139</td> <td>6,305</td> <td>118</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>286</td> <td>1,375,962</td> <td>386</td> <td>34,026</td> <td>1,336</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>購入本数</th> <th>購入金額(千円)</th> <th>寄贈本数</th> <th>年度末所蔵本数</th> <th>年度末寄託品本数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館(フィルムセンター)</td> <td>413</td> <td>348,086</td> <td>852</td> <td>63,747</td> <td>8,018</td> </tr> </tbody> </table> <p>ア 収集作品の特徴</p> <p>(ア) 東京国立近代美術館(本館)</p> <p>近代日本美術の体系的コレクションの構築を引き続き図りつつ、近代日本美術に影響を与えた欧米作家作品の収集も積極的に行い、①特に日本人作家に多大な影響を与えた1900－1940年代の欧米作家作品、②1970年代以降の日本人作</p>	館名	購入点数	購入金額(円)	寄贈点数	年度末所蔵作品数	年度末寄託品数	東京国立近代美術館	本館	122	758,826	128	10,295	242	工芸館	9	47,027	31	2,961	117	京都国立近代美術館	64	261,606	63	9,806	822	国立西洋美術館	34	167,478	25	4,659	37	国立国際美術館	57	141,025	139	6,305	118	計	286	1,375,962	386	34,026	1,336	館名	購入本数	購入金額(千円)	寄贈本数	年度末所蔵本数	年度末寄託品本数	東京国立近代美術館(フィルムセンター)	413	348,086	852	63,747	8,018	<p>○東京国立近代美術館のクレー作品、国立西洋美術館のパニーニ作品、京都国立近代美術館のヘッヒ作品など、コレクションの核となりうる収集は研究員の努力によるところが大きく、評価できる。</p> <p>○特に東京国立近代美術館(本館)のコレクションは、近代美術から現代美術まで広範囲に年々充実していることから、常設展示が近代以降のナショナルコレクションとして見応えのあるものになってきた。外国人が、日本の近代以降の美術を歴史的に概観でき、評価できる。</p> <p>○東京国立近代美術館工芸館はデザイン美術館としての機能をもつべきで、その点から改善が望まれる。</p>
館名	購入点数	購入金額(円)	寄贈点数	年度末所蔵作品数	年度末寄託品数																																																				
東京国立近代美術館	本館	122	758,826	128	10,295	242																																																			
	工芸館	9	47,027	31	2,961	117																																																			
京都国立近代美術館	64	261,606	63	9,806	822																																																				
国立西洋美術館	34	167,478	25	4,659	37																																																				
国立国際美術館	57	141,025	139	6,305	118																																																				
計	286	1,375,962	386	34,026	1,336																																																				
館名	購入本数	購入金額(千円)	寄贈本数	年度末所蔵本数	年度末寄託品本数																																																				
東京国立近代美術館(フィルムセンター)	413	348,086	852	63,747	8,018																																																				

レクションの充実を図ったか。特に次の点に留意したか。

- ① 日本工芸の近代化を示す作品の補完
  - ② 戦後から現代にいたる伝統工芸やクラフト、造形的な表現の重要作品の収集
  - ③ 近代の茶の湯の工芸を代表する作品の収集
  - ④ 近・現代ヨーロッパの工芸及びデザイン作品の収集
- <フィルムセンター>

戦前の日本映画を中心に散逸や劣化、滅失の危険性が高い映画フィルム、日本劇映画のうちでビネガーシンドロームや褪色のおそれが強い1950年代後半から60年代の映画フィルム、委員会方式による製作等の原因により著作権の帰属や原版保管の継続性が不安定な1990年代以降の映画フィルム、デジタル技術により復元された映画フィルム及び複製物、上映会や共催事業、国際交流事業に必要な映画フィルム、これまで受入のなかった会社等からの寄贈映画フィルム、文化庁との共同事業による「近代歴史資料調査」によって残存が確認された映画フィルム、の収集に努めたか。

なお、平成22年度は次の点について、特に留意したか。

- ① アメリカ返還映画、小宮登美次郎コレクション、杉本五郎コレクション等、フィルムセンターにおけるフィル

家の作品の収集に努めた。

購入作品については、盛田良子氏旧蔵コレクションより、ジョルジュ・ブラック《女のトルソ》、パウル・クレー《山への衝動》、ニコラ・ド・スタール《コンポジション(湿った土)》の計3点を購入した。いずれも現在では市場に出回ることのきわめて稀な大型のミュージアム・ピースであり、日本近代美術に与えた影響の大きさを考えても、収蔵の意義は大きい。

また、下村観山の六曲屏風《唐茄子畑》は、やはり現在では収蔵の難しい大型の新出作品である。

寄贈作品については、上記盛田良子氏旧蔵コレクションのうち、ジャン・デュビュッフエ《土星の風景》の寄贈を受けた。また、昨年に引き続き収蔵を進めている写真家、奈良原一高のマスター・プリントにつき、株式会社ニコンの支援により、代表的シリーズ「王国」より全87点の寄贈を受けた。

(工芸館)

平成22年度においては、①日本工芸の近代化を示す作品の補完、②戦後から現代にいたる伝統工芸やクラフト、造形的な表現の重要作品の収集、③近代の茶の湯の工芸を代表する作品の収集、④近・現代ヨーロッパの工芸及びデザインの収集に努めた。

購入作品では、近現代工芸を牽引した松田権六の《鴛鴦蒔絵棗》と、現代に活躍の伝統工芸の石田亘(ガラス)や真栄城興茂、松枝哲哉(染織)の作品、日展の並木恒延(漆芸)のパネル作品、そして陶造形の結城美栄子の作品を収蔵した。ヨーロッパの工芸ではイタリアの国際的な陶芸家カルロ・ザウリの器物作品2点を、デザインではバウハウスのマリアンネ・ブランドの《ティーセット》を収蔵した。

寄贈作品については、重要無形文化財保持者(人間国宝)の市橋とし子(人形)の作品を初めて収蔵した。同じく保持者の荒川豊蔵、三代徳田八十吉、加藤孝造(陶芸)、松田権六(漆芸)らとともに、戦後の造形を代表する小川待子、十二代三輪休雪(龍作、陶芸)や麻田脩二(染織)、天野可淡(人形)らの重要な作品を収蔵した。

(フィルムセンター)

映画フィルムの購入作品については、上映企画に合わせ、『さらば夏の光』(1968年)など吉田喜重監督作品8作品、黒澤明脚本による作品2作品、次年度の上映企画に合わせ、『戦火の果て』(1950年)など吉村公三郎監督作品15作品、また共催事業となったポルデノーネ無声映画祭の企画「松竹の三巨匠」に合わせ、島

ム所蔵の形成において重要な役割を果たしたコレクションについて、適切な保存・復元を要する作品の複製物の収集

② 企業等の管理下に置かれていないため、散逸・劣化の可能性が著しい非商業映画、映画産業の枠外で製作された日本映画のより一層の収集

③ 海外との合作により製作された日本映画のより一層の収集

④ 戦前日本アニメーション映画の発掘・復元と、戦後日本アニメーション映画の主要な作品の一層の収集

(京都国立近代美術館)

① 我が国の近・現代において生み出された美術、工芸、建築、デザイン、写真等で、主として美術・工芸について、近代日本美術史の骨格を形成する代表作及び各時期において重要な位置を占める記念的作品、近代美術史に組み込まれていくことになる現代美術の秀作を積極的に収集するとともに、優れた写真作品の収集にも努めたか。あわせてダダ等ヨーロッパの前衛作品の収集を進めるほか、ヴィデオインスタレーション等のメディアアートの作品を引き続き収集したか。

また、池田満寿夫と並ぶ同時代の重要な版画家である吉原英雄と井田照一の作品調査を継続し、寄贈受入の準備を図ったか。さらに、故・川西英が所蔵した創作版画作品・

津保次郎『愛よ人類と共にあれ』(1931年)等を購入した。ビネガーシンドロームや褪色の危険性が高い1950年代後半から60年代にかけての作品については、1954年に製作を再開した日活の初期作品、沢島忠、本多猪四郎監督作品等を重点的に収集した。また、散逸・劣化の危険性が著しい非商業映画については、門田龍太郎『チェチェメ二号の冒険』(1976年)、鈴木志郎康『草の影を刈る』(1977年)等1970年代以降の日本文化・記録映画の作品に焦点を当て収集を行った。その他として、日本アニメーション映画については、大藤信郎『春の唄』(1931年)、村田安司『ジラフの首はなぜ長い』(1929年)等戦前から戦後直後にかけての作品18作品を購入するとともに、戦後日本アニメーション映画を代表する学研の人形アニメーション映画について37作品51本の購入を行い、アニメーション映画のコレクションの充実を図った。

寄贈作品については、高林陽一監督作品の原版及びプリント48本、文化記録映画の監督カメラマン高岩仁氏が関わった作品の原版及びプリント156本を初め、羽田澄子監督より『歌舞伎の魅力 菅丞相 片岡仁左衛門—義太夫狂言の演技—』(1982年)等のプリント、村野鐵太郎監督より『遠野物語』(1982年)等の原版及びプリント等の寄贈を受け入れた。また、国際的に知名度の高いアニメーション作家・山村浩二の『頭山 Mt.HEAD』(2002年)等のプリントとともに、本年度も継続して、大峠プロダクション等の作品を継承された山内隆一氏から、362本の原版の寄贈を受けた。

(イ) 京都国立近代美術館

我が国の近・現代における絵画や版画、工芸、建築、デザイン、写真等で、主として絵画・工芸について、近代日本美術史の骨格を形成する代表作及び各時期において重要な位置を占める記念的作品、並びに将来美術史に組み込まれていくであろう現代美術の秀作を積極的に収集するとともに、優れた写真作品についても収集に努めた。特にダダ等ヨーロッパの前衛作品の収集を行った。

購入作品については、本部留保金を活用し、わが国にはほとんど収蔵されていないダダの女性作家ハンナ・ヘッヒの代表作《「Angst(不安)」》他を収蔵するとともに、継続して収蔵をすすめている川西英旧蔵コレクションのなかから、竹久夢二の未公開肉筆画《ショールの女(ふらんすの)》他を購入した。さらに浅井忠《干綱》をはじめ水彩画の秀作をまとめて購入した。

寄贈作品については、工芸分野の重要作家でありながら、これまで収蔵の機会を逃してきた平石碧外の《黄楊浄香座》ほか木工作品をまとめて、さらには《偶一B》ほか麻田脩二の染織作品を多数、作家本人より寄贈を受けた。

<p>資料の収集を継続し、グラフィック関連作品の集中的アーカイブの構築を目指したか。</p> <p>② 京都に設置されている立地条件から、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した所蔵作品の充実を図ったか。また、京都画壇作品の収集を継続し、その充実を図ったか。</p> <p>(国立西洋美術館)</p> <p>① 15世紀～20世紀初頭のヨーロッパ絵画の収集に努めたか。</p> <p>② ドイツ・フランドル・イタリア・フランスを中心にヨーロッパ版画のコレクションを充実させたか。</p> <p>③ 旧松方コレクション作品の情報収集を継続したか。</p> <p>(国立国際美術館)</p> <p>日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするため、主として、次のとおり収集したか。</p> <p>① 1945年以降の日本の現代美術の系統的収集(日本の戦後美術を跡づける主要作)。</p> <p>② 国際的に注目される国内外の同時代の美術の収集。</p> <p>また、映像・メディアアート担当客員研究員による収集候補作品のリストアップを行ったか。</p> <p>(1)-2 寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、所蔵作品展等における積極的な活用を図ったか。</p>	<p>(ウ)国立西洋美術館</p> <p>本年度においては、①15世紀～20世紀初頭のヨーロッパ絵画の収集、②ドイツ・フランドル・イタリア・フランスを中心にヨーロッパ版画のコレクションの充実とともに、③旧松方コレクション作品の情報収集を継続して行った。</p> <p>購入作品については、18世紀イタリアの画家ジョヴァンニ・パオロ・パニーニ《古代建築と彫刻のカプリッチョ》を購入した。また、ファンタン＝ラトゥール《自画像》、16世紀ポローニャ派《聖母子と洗礼者聖ヨハネ》はじめ旧松方コレクションの絵画8点・素描9点・版画(詩画集)1点を一括購入した。</p> <p>寄贈作品については、アンリ・ファンタン＝ラトゥール《トリトンに追われるナイアス》ほか旧松方コレクションの素描8点・参考作品(作者不詳の作品)12点の寄贈を受けた。</p> <p>(エ)国立国際美術館</p> <p>日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするため、①1945年以降の日本の現代美術の系統的収集(日本の戦後美術を跡づける主要作)②国際的に注目される国内外の同時代の美術の収集を行った。</p> <p>購入作品については、ベルギーを代表する現代作家ミヒヤエル・ボレマンス《Automat(3)》やアメリカを代表する現代作家マイク・ケリーの近作彫刻《City 3(4 oh 5)(From serise Kandors)》をはじめ、現代日本の若手画家、町田久美、杉戸洋など、現代日本の新しい絵画同行を反映した作家とともに、大阪出身で現代日本を代表する写真家 森山大道の大阪を主題にした写真の連作を収蔵することができた。</p> <p>寄贈作品については、戦後の抽象絵画を代表するオノサト・トシノブ《1つの丸・朱》他絵画作品13点及び京都を拠点に活躍した井田照一の絵画、版画、彫刻など12点の寄贈を受けた。また、寄贈作品を多数所蔵している横尾忠則のポスター102点を受贈し、横尾作品の更なる充実を図ることができた。</p>	
--	--	--

<p>(1)-3 各館の陳列品購入費を一部留保し、高額作品の購入、緊急な購入等に対応したか。</p> <p>なお、作品収集に関しては、学芸課長会議等で情報交換や連絡調整を行ったか。</p>		
--	--	--

【(小項目)1-2-2】 収蔵品の保管・管理		【評価】			
<p>【法人の達成すべき計画】</p> <p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世に伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵庫等保存施設の狭隘・老朽化への対応に積極的に取り組む。</p> <p>(2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。</p>		A			
		H18	H19	H20	H21
		B	A	A	A
【インプット指標】					
(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	316	339	323	341	411
従事人員数(人)	44	45	43	43	40
<p>1) 決算額は損益計算書 収集保管事業費を計上している。</p> <p>2) 従事人員数は、収集保管業務に携わるすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>					
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績	分析・評価			
<p>(2)-1 保存施設の狭隘・老朽化への対応に取り組む。</p> <p>① 引き続き、東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館に隣接する国有地の利用について検討する「キャンブ淵野辺留保地整備計画検討委員会」に参加し、検討・協議を行うなど、収蔵施設・設備の拡充について検討したか。</p> <p>② 平成21年度補正予算において認められた東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館の増築工事に着手、竣工するとともに、既存施設の老朽化等の対応について検討を行ったか。</p> <p>(2)-2 京都国立近代美術館において老朽化した空気調和設備・建物等の改修工事を実施したか。</p>	<p><b>(2) 収蔵庫等保存施設の狭隘・老朽化への対応と適切な保存環境の整備等</b></p> <p>① 収蔵庫等の狭隘・老朽化への対応</p> <p>ア 東京国立近代美術館</p> <p>本館では、これまで新収蔵庫に収められていた写真用及び版画・素描用の汎用額全てを、旧収蔵庫前室に棚を新設することで集密化した。これにより、新収蔵庫内の作品保管状況は改善されたものの、平成22年度において新収蔵作品250点の増加により、結果として収納率に大きな変化はなしとなった。</p> <p>工芸館では、平成22年度は購入・寄贈40点を収蔵した。パネル状の染織作品5点と漆芸作品2点とは各々に立てかけて収納したが、陶芸の大型作品1点は積み上げて収納した。いずれの収蔵庫も床面積の狭小化が進んでいる。</p> <p>フィルムセンターでは、平成22年度末にフィルムセンター相模原分館の増築棟が完成し、映画フィルム保存庫が増床され、併せて映画関連資料庫も新設されたため、保存庫の狭隘は解消されることとなった。さらに、フィルム缶収納棚受皿の形状を改良し、1000フィート、1500フィート、2000フィート缶のどのタイプにも対応可能な、缶の形状にとらわれない効率的な収納ができることとなった。</p> <p>イ 京都国立近代美術館</p> <p>空気調和設備改修計画に則り、空冷ヒートポンプチラー等の更新を実施した。これにより収蔵庫内の保存環境が改善された。また、展示室を含む美術館全体の空気調和設備に関しては、設計図面が完成した。</p> <p>ウ 国立西洋美術館</p> <p>新館空気調和機更新工事の竣工にともない、空調設備の安定化及び収蔵庫</p>	<p>○保存環境の整備等については適切に対応していると評価できる。</p> <p>○フィルムセンター相模原分館の増築の取り組みなど、実績は評価する。しかし、東京国立近代美術館工芸館ほか、収蔵庫施設の狭隘、老朽化が著しいため、改善が望まれる。</p>			



内の躯体劣化の修繕が行われ、収蔵庫内の環境が改善されたが、常設展示室の一部閉室等に伴って多数の作品を収蔵庫へ収める場合には、絵画ラックの面積不足が常時問題となっている。一方、本年度にいたり、ラックそのものの不具合が発生したことから、収納率が大きく減少し、現在その修繕を試みているところではあるが、大規模な作品移動が実施できる状況にはないため、限定的な対処に留まらざるを得なかった。

エ 国立国際美術館

既に収納率が実質 100%以上となっているが、積み重ねられる作品をまとめて収納したり、ラックの隙間を可能な限り小さくしたりして、適切な保存環境を維持するよう努めた。

オ その他

東京国立近代美術館を含め、国立美術館の収蔵庫について、既に限界に達しており各館限りでの対応では限度がある。このため、東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館に隣接する「キャンプ淵野辺留保地」の利用について、相模原市が設置する検討委員会に参画するとともに、利用計画の素案をとりまとめ、その中で、留保地の一部については、国立美術館の要望も踏まえつつ今後更に検討することとなったところである。引き続き、地元等関係機関との協議を進める。

② 保存環境の整備等と防災対策の推進・充実

ア 東京国立近代美術館

(本館・工芸館)

地震対策として、新収蔵庫の木製棚をビスと金具で連結した。

麴町消防署の査察に従い、適正な防火管理に努め、平成 23 年 1 月 24 日に、麴町消防署と合同で東京国立近代美術館自衛消防訓練を実施した。

収蔵庫エリアへのアクセスに関する徹底した制限、可燃物の管理等を行った。

(フィルムセンター)

消防用設備、自家発電設備など定期点検を実施し、点検により判明した不活性ガス消火設備、蓄電池設備などの老朽箇所の修理を行った。また、消防訓練を行い、非常時における来館者誘導方法等の確認を行った。

イ 京都国立近代美術館

平成 22 年 9 月 13 日に消防署指導のもとで避難誘導訓練・消火訓練を実施した。

	<p>ウ 国立西洋美術館 大型彫刻の免震台座への設置と、耐震強度の高い絵画展示用ワイヤーの使用により、展示室内の地震対策を継続している。</p> <p>エ 国立国際美術館 地震に伴う火災発生、津波発生時の適切な避難誘導、初期消火にあたるため、職員、警備員、看視員等による全館避難訓練を近隣の大阪市立科学館と共同で実施した。</p>	
--	---	--

【(小項目)1-2-3】 収蔵品の修理		【評価】			
<b>【法人の達成すべき計画】</b> (3) 修理・修復に関しては、各館の連携を図りつつ、外部の保存科学の専門家等とも連携して、所蔵作品の保存状況を確実に把握し、修理・修復の計画的実施に努める。		A			
		H18	H19	H20	H21
		A	A	A	A
<b>【インプット指標】</b>					
(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	316	339	323	341	411
従事人員数(人)	51	52	51	51	49
1) 決算額は損益計算書 収集保管事業費を計上している。(本項目は収集保管事業費の一部であり、個別に計上できないため、収集保管事業費全額を計上している。) 2) 従事人員数は、国立新美術館を除くすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。					
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績				分析・評価
(3)所蔵作品の保存状況について、各館の連携・調整を行い、特に緊急に処置を必要とする作品について重点的に修理・修復を行ったか。 ① 東京国立近代美術館本館では、作品貸与時の対応も含め、保存科学と修復に関する外部の専門家との定常的な連携を引き続き進めたか。洋画全点点検を終了させ、版画保管状況改善を進めたか。また、日本画の大規模修復を計画的に推進したか。 ② 東京国立近代美術館工芸館では、引き続き、展示や貸出の頻度の高い松田権六の漆芸作品、木村雨山や志村ふくみの染織作品等の保存修復を行ったか。 ③ 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、日本における本格的な記録映画の嚆矢となった『日本南極探検』(1912年)について、文化庁との「近代歴史資料調査」により確認され	<b>(3)所蔵作品の修理・修復</b> ① 東京国立近代美術館 絵画 22 件、版画 2 件、彫刻 1 件、工芸 25 件、デザイン 10 件、資料その他 1 件、映画フィルムデジタル復元 10 本、ノイズリダクション等 59 本、不燃化作業 33 本 (本館) 使用頻度の高い作品のうち、全面にしみが発生していた菊池芳文《小雨降る吉野》や、裏打ち紙が固く強い折れが発生していた跡見玉枝《桜花図巻》など、大規模な解体修理を行った。また主として表具の仕立て直しによって、鍋木清方《晩涼》や小茂田青樹《松江風景》などの保存状態を改善した。重要文化財の新海竹太郎の《ゆあみ》の台座については、修復家、文化庁と相談のうえ、劣化をこれ以上進行させない最低限の修復を施し、石膏原型とオリジナルの台座をあわせた特集展示「石膏原型のオリジナリティー」を実現した。加えて小倉遊亀、東山魁夷、杉山寧など 20 点を越える日本画額作品のアクリルを低反射アクリルに交換し、鑑賞環境の飛躍的な向上を実現した。 (工芸館) 継続して行ってきた漆芸で松田権六や田口善国らの汚れやすり傷、漆劣化の養生等の保存修復と、染織の志村ふくみや木村雨山、森口華弘らのシミやカビの除去と変色等の保存修復を実施した。また、懸案であった金工の内藤四郎や増田三男の錆びや変色等、杉浦非水のポスターや富本憲吉の書額面作品のシミやカビ、虫食い等の保存修復を行った。				○収蔵品の修理については、適切に取り組まれており、良好な水準にあると評価できる。

た可燃性フィルムと、所蔵フィルムとの比較調査を行ったか。また、日本における個人映画の草創期の作品について、寄贈フィルムからの復元により、上映用プリントの作成を行ったか。

- ④ 京都国立近代美術館では、藤田嗣治《タピスリーの裸婦》への低反射ガラスの装着、寄贈を受けた須田国太郎洋画作品の修復・額装を行ったか。
- ⑤ 国立西洋美術館では、版画・素描作品及び緊急に処置を要する絵画作品について、保存修復処置を行ったか。
- ⑥ 国立国際美術館では、デザイン(横尾忠則)等の保存修復処置を行ったか。

(フィルムセンター)

伊藤大輔監督の代表作『長恨』(1927年)、『忠次旅日記』(1929年)のデジタル復元において、最適なスキヤニング素材を得るためのテストを行うとともに、元素材に施された染色をできるかぎり忠実に復元するために、修復後のデータを白黒フィルムにレコーディングし、再染色を試みた。

チネテカ・デル・フリウリ(イタリア・FIAF加盟機関)との共催による「ポルデノーネ無声映画祭 2010 松竹の三巨匠—島津保次郎、清水宏、牛原虚彦」において、提供した14本中、13本について新たに英語字幕付の35mmプリントを作成するとともに、『麗人』(島津保次郎監督、1930年)など必要に応じて、16mmからのブローアップやネガの作成等を行った。

鈴木志郎康監督の『草の影を刈る』(1976年)と『15日間』(1980年)について、16mm反転プリントと磁気トラックから、35mmへのブローアップによる画ネガ、デジタル処理による音ネガ及び上映用プリントの作成を行った。

白井更生『ヒロシマ 1966』(1966年)について、所蔵する35mmプリントと16mmプリントから、画郭調整、画調調整等を綿密に行ったうえで、最長版ネガとプリントの作成を行った。

また、映画関連資料については、以下の作業を行った。

- ・劣化・損傷が著しい単行本・雑誌 205冊について、修復作業を行った。
- ・酸性紙の酸化が著しい雑誌 255冊について脱酸化作業を行った。
- ・修復が必要と認められるソビエト映画ポスターのうち4点について、紙修復の専門家による修復作業を行った。

② 京都国立近代美術館

絵画 7件、水彩 5件

藤田嗣治《タピスリーの裸婦》への低反射ガラスの装着を行うとともに、これまでに収蔵してきた水彩画作品の一部の額装および、寄贈を受けた須田国太郎洋画作品の修復・額装の見積り、優先順位の検討を行った。

また、『『日本画』の前衛』展に出品の船田玉樹の新収蔵作品についても、屏風装をあらためるとともに、次年度開催予定の「川西英旧蔵コレクション展」に含まれる竹久夢二の肉筆画4点についても、画面洗浄をし、表具装を新調した。

③ 国立西洋美術館

絵画 22件、版画 83件

2011年にアメリカで開催される「ピサロ展」への貸出が予定されているピサロ《收穫》の修復を行い、あわせて同作品の技法に関する科学調査を実施した。

また、当館の常設展・小企画展および国立美術館5館共同展への出品と、公私

	<p>立美術館からの貸出依頼に対応して、修復処置や額縁の製作を行った。</p> <p>また、ポール・ゲッティ研究所での材料分析の共同調査を行った。</p> <p>④ 国立国際美術館</p> <p>絵画 2 件, 版画 16 件, デザイン 7 件</p> <p>本年度は、外部の絵画に関する修復家と連携し、当館所蔵作品のコンディションチェックを行い、修復の緊急性が高いと判断した「ヴォルス《構成》1947 年」について、作品裏面清掃、作品側面に付着したコルクの除去、剥落止め、カンバスの補修、欠損部の充填・整形、補彩を行うとともに、「中原浩大《海の絵》1987 年」の剥落止めなどの修復を行った。</p>	
--	--	--

【(小項目)1-2-4】	収集・保管のための調査研究	【評定】 A											
【法人の達成すべき計画】		<table border="1"> <tr> <td>H18</td> <td>H19</td> <td>H20</td> <td>H21</td> </tr> <tr> <td>A</td> <td>A</td> <td>A</td> <td>A</td> </tr> </table>				H18	H19	H20	H21	A	A	A	A
H18	H19	H20	H21										
A	A	A	A										
(4) 各館の方針に従い、所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究を計画的に行い、その成果を業務に反映させる。なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館等及び大学等の機関とも連携を図るものとする。													
【インプット指標】													
(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22								
決算額(百万円)	303	310	271	296	276								
従事人員数(人)	51	52	51	51	49								
<p>1) 決算額は損益計算書 調査研究事業費(国立新美術館を除く)を計上している。(本項目は調査研究事業費の一部であり、個別に計上できないため、収集・保管業務のない国立新美術館を除く、調査研究事業費全額を計上している。)</p> <p>2) 従事人員数は、国立新美術館を除くすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>													
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績				分析・評価								
<p>(4)国内外の博物館・美術館、大学等と連携し、所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究を実施し、その成果を業務に反映させたか。</p> <p>① 東京国立近代美術館本館では、代表的な所蔵作品の一つ、鬚光《眼のある風景》につき、東京文化財研究所による光学的調査に協力し、その成果を所蔵作品展内で活用したか。</p> <p>② 東京国立近代美術館工芸館では、愛知県陶磁資料館や国際デザインセンター、日本クラフトデザイン協会、日本工芸会等と、陶芸並びにプロダクトデザイン作品の調査を実施し、近年の傾向の分析と展示に関する研究を行ったか。</p> <p>③ 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、映画フィルムの登録・長期保管・保存、アナログ及びデジタル技</p>	<p>(4)美術作品の保管・修理等に関する調査研究</p> <p>各館における調査研究の実施状況は、以下のとおりである。</p> <p>ア 東京国立近代美術館(本館)</p> <p>(ア)所蔵作品に関する調査研究</p> <p>本年度修復を行った山元春拳《塩原の奥》、川合玉堂《彩雨》について、解体修理の過程で技法や当初の表装に関する新知見が明らかになった。油彩では鬚光《眼のある風景》につき、東京文化財研究所と赤外線写真撮影による調査を行い、描き直しの痕跡など制作のプロセスを示す新発見を得た。同様に岡田三郎助《婦人半身像》でも、これまで不明であった特殊な技法が修理によって明らかになった。これらの知見は今後作品解説や特集展示のなかで生かされる予定である。</p> <p>(イ)保管・修理に関する調査研究</p> <p>藤田嗣治《五人の裸婦》について、過去の修復箇所を特定すると同時に、今後の修復方針を検討すべく東京芸術大学と協力して詳細な調査を行った。また、岸田劉生資料のうち、経年劣化が著しい書籍数冊に関して、修復家とともに修理・保存方法の研究を行った。次年度以降具体的な修理作業を開始する予定である。</p> <p>(ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p>				<p>○収集・保管のための調査研究については、美術品の科学的調査によって、制作に関する事実が公表され、かつ展示に生かされるようになったことはおおむね評価される。</p> <p>○しかし、報告から見る限りでは、修理によって得られた知見が研究としてテーマ化されていない側面もある。</p> <p>○国立西洋美術館には保存・修理のための研究機器等が整備されていることから、法人内での活用が望まれる。</p>								

術を活用した復元に関する調査研究 (FIAF会員、国内外の同種機関、映画研究教育機関、美術館・博物館、映像機器メーカー、現像所等との共同研究)を行い、その成果を上映企画等に反映させたか。

④ 京都国立近代美術館では、客員研究員の指導のもとに、引き続き写真作品の管理保管システムの再編成を進め、安全で迅速な利用態勢を整えたか。

平成 21 年度修復の長谷川利行《カフェ・パウルスタ》に関して、修復家の協力のもと、修復研究所 21 にエックス線撮影及び資料調査を依頼した。修復のプロセスと、この分析によって明らかになった利行の描法について、所蔵作品展「近代日本の美術」内の特集展示「長谷川利行」、および館ニュース『現代の眼』、『東京国立近代美術館 研究紀要』第 15 号において、詳細な報告を行った。

(工芸館)

(ア)所蔵作品に関する調査研究

工芸館所蔵作品巡回展を香川県ミュージアムと愛媛県立美術館で、東京・銀座和光ホールにて名品展を開催するため、作品の状態等の調査を実施した。。

(イ)保管・修理に関する調査研究

松田権六、田口善国の漆芸作品や木村雨山、志村ふくみの染織作品、杉浦非水のグラフィックデザイン作品など展示等活用頻度の高い作品と、平成 22 年度に寄贈を受け 23 年度に企画展が予定された増田三男の金工作品等の現状保存修復が実施した。各々の専門的な修復者と修復について調査・検討を行い、計画的な修復と大きな成果があった。

(ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映

巡回展「東京国立近代美術館工芸館名品展—輝くわざと美—」を香川県ミュージアム及び愛媛県立美術館で開催し、また東京・銀座和光ホールと連携した所蔵作品による「工芸館名品展—四季の花を愛でる—」を実施し、近代工芸への普及と当館事業への理解が得られた。

(フィルムセンター)

(ア)所蔵作品に関する調査研究

・アメリカからの返還映画を主にした戦前日本ニュース映画の詳細な内容調査を継続した。

・映画保存のための特別事業費により前年度収集したフィルムについて、データの採取、静止画像の取り込み、データベースへの登録を行うなかで、文献資料等による調査を行った。

・平成 5 年度に寄贈を受け入れた、戦後アメリカ、イギリスで製作された教材映画である外国文化・記録映画 1,579 本について、全巻の遡及調査を行うとともに、データベースへの登録を行った。

・昭和期戦後の日本文学と日本映画の関係に関する調査研究

・新たに発掘、復元された映画とその作者、技術フォーマットや時代背景に関する調査研究

・フィルムセンターの歩みとコレクションの歴史に関する調査研究

・吉田喜重監督に関する調査研究

・映画監督黒澤明に関する調査研究

・現代フランス映画に関する調査研究

・アニメーション作家大藤信郎に関する調査研究

・映画保存のための特別事業費により購入した新収蔵作品とその作者や時代背景に関する調査研究

・新しい常設展「NFC コレクションでみる 日本映画の歴史」のオープンを前提とした、未整理分を含めた日本映画史関連資料の調査研究

・過去にフィルムセンターで実施した展覧会に関する調査

・写し絵資料に関する調査研究

(イ) 保管・修理に関する調査研究

<映画フィルムの保管に関する調査研究>

・所蔵フィルムの運用前後における検査やクリーニングに関する研究

・フィルム検査において必要な画像取り込みシステムに関する研究

・小型映画フィルムの検査に関する研究

・フィルム保存庫の設備、保管環境、運用等に関する研究

<映画フィルムの修理に関する調査研究>

・デジタル復元における最適な複製素材の作成に関する研究

・三色分解素材からのデジタル復元に関する研究

・再染色作業に関する研究

・フォーマットや画郭の異なる素材からの復元に関する研究

<映画関連資料に関する調査研究>

長期的な視野に立って、酸性紙を用いた図書の脱酸化や劣化したポスターの修復など、紙資料の保存法に関する調査研究を行った。また、2008年度に開始されたプレス資料のリスト化を進めたほか、映画パンフレットや映画関連カレンダーといった、過去に寄贈されながらも未整理であった分野の資料のリスト化に取り組んだ。とりわけパンフレットについてはデータベース登録作業を開始するに至っている。アニメーション作家の大藤信郎など映画人の個人資料のカタロギングも終了し、俳優志村喬の旧蔵資料など、正式な寄贈手続を終えたものもある。

(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の



美術館活動への反映

<映画フィルムの保管における反映>

- ・フィルム検査の体制について、京橋、相模原分館との間における役割分担を明確にし、検査工程の整理をすることに反映された。
- ・16mmフィルム用のKEM社製編集台への画像取り込みシステムの付設に反映された。
- ・寄贈受入予定の小型映画フィルムの検査に反映された。
- ・相模原分館の映画フィルム保存庫における保管環境、設備、導線等の検証に反映された。

<映画フィルムの修理における反映>

- ・『長恨』(1927年)、『忠次旅日記』(1929年)のデジタル復元、『さらば青春』(1919年)の復元テストに反映された。
- ・『地獄門』(1953年)のデジタル復元に反映された。
- ・『長恨』(1927年)、『忠次旅日記』(1929年)の復元された白黒ポジフィルムの再染色作業に反映された。
- ・『ヒロシマ 1966』(1966年)の最長版作成に反映された。

イ 京都国立近代美術館

(ア)所蔵作品に関する調査研究

「『日本画』の前衛 1938-1949」展では、出品作 87 点のうち 20 点が所蔵作品であったが、これはここ 10 年間に収集してきた作品の収集成果の発表の場であるとともに、これまで近代美術史上においても、まったく触れられてこなかった動向を紹介するものであり、調査研究の成果を広く公開する意味においても、意義深いものであった。

さらに、これまで収集をすすめてきた「川西英旧蔵コレクション」に含まれた一部の作品(竹久夢二の肉筆画 4 点)について、次年度展覧会として紹介するに際し、画面洗浄を行うとともに、表具装も新調し、公開に備える体勢を整えた。

(イ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映

平成 23 年度に開催する川西英旧蔵コレクション展に向け、あらためて作品調査と写真撮影を行った。さらには、展覧会の開催に向け、コレクションカタログの作成に着手した。

ウ 国立西洋美術館

(ア)所蔵作品に関する調査研究

- ・旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究を実施した。
- ・中世末期から 20 世紀初頭の西洋美術に関する調査研究を実施した。
- ・所蔵版画作品に関する調査研究を実施した。
- ・ル・コルビュジエによる国立西洋美術館本館の設計に関する調査研究を実施した。
- ・デューラー版画に関する調査研究を実施した。
- ・レンブラント版画および和紙に関する調査研究を実施した。
- ・ピサロ《収穫》の材料および技法に関する調査研究を実施した。
- ・「国立西洋美術館所蔵作品データベース」に関する研究を実施した。

(イ)保存・修復に関する調査研究

所蔵作品の絵画技法調査の参考とするため、古典的な色彩のサンプルを古典絵画技法に従って作成した。

LED 照明導入に向けた調査のための色彩見本及びチャートを作成し、色温度の違いによる発色効果を検証した。

修復処置過程での紫外線、赤外線等の調査を実施し、絵画作品の状態及び制作過程を検証する調査を実施した。作品によっては周辺部の絵具層を分析し、その材質を明らかにした。

(ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保存・修復に関する調査研究成果の美術館活動への反映

- ・イタリア、ルネサンス・バロック美術調査研究は、平成 22 年度開催の「ナポリ・宮廷と美—カポディモンテ美術館展 ルネサンスからバロックまで」とそのカタログに反映された。
- ・アルブレヒト・デューラーの版画調査研究は、平成 22 年度開催の「アルブレヒト・デューラー版画・素描展 宗教／肖像／自然」点を実施し、その成果はカタログに反映された。
- ・レンブラントの和紙版画に関する調査研究は、平成 23 年度開催予定の「レンブラント：光の探求／闇の誘惑」展とそのカタログに反映される。

エ 国立国際美術館

(ア)所蔵作品に関する調査研究

所蔵作品のうち、マルセル・デュシャン、塩見允枝子、横尾忠則、館勝生、

	<p>エルヴィン・ヴルム, 早川良雄, イサム・ノグチの作品を取り上げて調査研究を行い, 館広報物(国立国際美術館ニュース)において作品説明を行った。</p> <p>(イ) 保管・修理に関する調査研究</p> <p>絵画修復の専門家と共同で, ピカソやセザンヌ, カンディンスキー, エルンスト, 佐伯祐三, 国吉康雄など, 当館が所蔵する名作絵画のコンディションチェックを行い, 今後の処置について検討を行った。</p> <p>(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <p>長年, 収集をしてきた横尾忠則の全ポスター作品をまとめて展示する機会を得たとともに, 出版社と共同で, 大部の出版物を刊行することができた。</p> <p>また, コレクション4の特集展示で, 当館と関わりの深いデザイナーである早川良雄のポスター作品を一堂に展示することにより, 早川良雄のデザイン世界を検証することができた。なお, 早川良雄のポスターを展示するにあたり, 紙に関する専門家と共同で, 当館所蔵の早川良雄のポスターについてのコンディションチェックを行い, 破れなど修復した方がよいものを調査した。</p>	
--	---	--

【(中項目)1-3】	3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与	【評定】			
		A			
		H18	H19	H20	H21
		B	A	A	A

【(小項目)1-3-1】	ナショナルセンターとしての国内外の美術館等との連携・協力	【評定】			
		A			
		H18	H19	H20	H21
		B	A	A	A

**【法人の達成すべき計画】**

(1)所蔵作品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

(2)-1 国内外の優れた研究者を招聘しシンポジウムを開催するなど、美術館活動に対する示唆が得られるよう努めるとともに、人的ネットワークの構築を推進する。

(2)-2 海外の美術館において、我が国の優れた作家や美術作品を世界に広く紹介する展覧会が活発に行われるよう、海外の美術館との連携・協力を積極的に取り組む。

(3)国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等と保存・修復に関する情報交換を図りながら、修復・保存活動の充実に寄与する。

(4)所蔵作品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に行う。

**【インプット指標】**

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	495	788	1,153	1,156	1,288
従事人員数(人)	60	61	59	59	57

1) 決算額は損益計算書 教育普及事業費を計上している。(本項目は教育普及事業費の一部であり、個別に計上できないため、教育普及事業費全額を計上している。)

2) 従事人員数は、すべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績	分析・評価
-------------------	----	-------

(1) 各館の調査研究の成果については、研究紀要、図録への論文発表等によって広く発信したか。

国立美術館5館の事業成果を取りまとめた国立美術館年報について、本部において編集し発行したか。

(東京国立近代美術館)

<本館>

① 研究紀要、展覧会や企画上映に伴う図録、「現代の眼」、「NFCニューズレター」等の刊行物を発行したか。

② 小・中学生向け解説パンフレット「セルフガイド」を発行したか。

<工芸館>

① 展覧会に伴う図録を発行したか。

② 夏季に開催する「こども工芸館／おとな工芸館」展において、小学生と未就学児向け解説パンフレット「セルフガイド」及び中学生以上を対象とした「セルフガイド」を発行したか。

③ 引き続き「ルーシー・リー展」(平成22年度国立新美術館で開催予定)に関連して、イギリスの研究者、工芸家との研究交流を行い、東洋陶磁学会研究会等で発表したか。

④ 「グエッリーノ・トラモンティ展」(平成23年度工芸館で開催予定)に関連して、イタリアの研究者との研究交流を行い、東洋陶磁学会研究会等で発表したか。

<フィルムセンター>

「第63回国際フィルム・アーカイブ連

### 3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与

#### (1) 所蔵作品等に関する調査研究成果の発信

##### ① 研究紀要、学術雑誌、展覧会刊行物、学会等での発信

ア 館の刊行物による研究成果の発信

各館において、展覧会図録(計36冊)、研究紀要(計3冊)、館ニュース(計6種、36冊発行)等の刊行物により、研究成果を発信した。

館名		展覧会図録	研究紀要	館ニュース	所蔵品目録	パンフレット・ガイド等	その他
東京国立近代美術館	本館	5	1	6	0	3	4
	工芸館	4			0	2	0
	フィルムセンター	0			6	0	1
京都国立近代美術館		8	1	6	1	0	1
国立西洋美術館		3	1	4	0	3	2
国立国際美術館		7	0	10	0	7	1
国立新美術館		9	0	4	-	2	1
計		36	3	36	1	18	9

注1 京都国立近代美術館の展覧会図録には「マイ・フェイバリット」展、巡回展を含み、所蔵品目録には「マイ・フェイバリット」展の図録を「所蔵作品目録Ⅷ」として刊行した。

注2 「パンフレット・ガイド等」には、小企画展の内容や所蔵作品の解説を掲載したパンフレット、子ども向けの鑑賞ガイド等が含まれる。

注3 「その他」には、「東京国立近代美術館のスクール・プログラム」「岡本太郎展こどもセルフガイド」「MOMATコレクションこどもセルフガイド」、「平成20-21年度 独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館活動報告」(東京国立近代美術館)、「京都国立近代美術館 活動報告 MoMAK Report 2009」(京都国立近代美術館)、「国立西洋美術館報 No.44」「平成22年 独立行政法人国立美術館 国立西洋美術館概要」(国立西洋美術館)、「平成21年度 国立新美術館活動報告」(国立新美術館)、「平成21年度 国立国際美術館活動報告」(国立国際美術館)が含まれる。

イ 館外の学術雑誌、学会等における調査研究成果の発信

(ア)東京国立近代美術館

[学会等発表](本館・工芸館)

○全体として適切な水準にあると評価できる。しかし、諸外国のナショナル・ミュージアムと比較すると、国際的な学会での発表や機関誌への寄稿が乏しい。研究員の努力不足ではなく、研究職の人員が縮減され、自館の業務におわれて研究を展開する余裕がないのではないか。中長期的なナショナルセンターの役割を想起すると、博士号取得者が少ないなど、眼に見えないこうした側面は法人がよく配慮すべき課題である。

○所蔵作品等に関する調査研究成果の発信については、所蔵作品等に関するセミナー等の開催を含め、当初の目標を達成していると評価できる。

○国内外の美術館等との連携については、シンポジウムの開催等を通して、国内外の優れた研究者等とのネットワークを構築できたと評価できる。また、海外の美術館において、我が国の作家、美術作品による展覧会開催のため、連携・協力したと評価できる。

○国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等との保存・修復に関する情報交換については、適切に実施されていると評価できる。こうした活動はナショナルセンターとしてより一層の拡充を求めたい。

○所蔵作品の貸与等については、適切に実施されている。

○映画フィルムについては貸与を通して上映に協力するなど、適切に実施されたと評価できる。

盟東京会議」の記録集の編集・発行を行ったか。

(京都国立近代美術館)

① 展覧会に伴う図録、美術館ニュース「視る」を発行したか。

② 京都国立近代美術館研究誌「CROSS SECTIONS」第3号を発行したか。

③ コレクション・ギャラリーでの小企画に対応した解説をホームページ上に公開したか。

(国立西洋美術館)

① 研究紀要、展覧会に伴う図録、「国立西洋美術館ニュース ZEPHYROS」を発行したか。

② 展覧会に伴う小・中学生向け解説パンフレット「ジュニアパスポート」を発行したか。

(国立国際美術館)

① 展覧会に伴う図録及び「美術館ニュース」を発行したか。

② 小・中学生向け解説「ジュニア・セルフガイド」を発行したか。

(国立新美術館)

① 展覧会に伴う図録及び「国立新美術館ニュース」を発行したか。

② 中学生以上を対象とした鑑賞ガイドを発行したか。

(2)-1 国内外の研究者を招へいし、各種セミナー・シンポジウムを開催したか。

① 東京国立近代美術館本館では、「建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション」の開催に関連して、

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
ループル美術館における教育普及体制とクラス・ループル	第 49 回大学美術教育学会	主任研究員・一條彰子	平成 22 年 9 月 19 日	武蔵野美術大学	約 80 名
国立美術館のとりくみ—5 年間の鑑賞教育研修を振り返って	平成 22 年度美術館等運営研究協議会	主任研究員・一條彰子	平成 23 年 2 月 1 日	学術総合センター	140 名
パネリスト「CCA キュレーター・ミーティング 2010」	CCA 北九州	研究員・保坂健二郎	平成 22 年 10 月 1 日～3 日	現代美術センター CCA 北九州	20 名
日本のアール・ブリュットについて	Halle St Pierre, Paris	研究員・保坂健二郎	平成 22 年 10 月 17 日	Halle St Pierre, Paris	60 名
シンポジウム   なにかいってくれ いまさがす—半影のモニタージュ	港区アート・アーカイヴ＝地域芸術資源探掘プロジェクト MARM	研究員・三輪健仁	平成 23 年 1 月 30 日	慶應義塾大学三田キャンパス	100 名
美術ワーキンググループ ヒアリング(アーカイブ関係)	文化審議会第 8 期文化政策部会美術ワーキンググループ第 3 回	主任研究員・水谷長志	平成 22 年 5 月 7 日	文化庁	20 名
極私的アート・アーカイヴ小史	アート・ドキュメンテーション学会	主任研究員・水谷長志	平成 22 年 6 月 13 日	慶應義塾大学	120 名

<p>また、科学研究費補助金による研究「1960～70年代のビデオ・アート：作品の所在調査とデータ・ベース構築」(3年目)の総括として、研究者等を招きセミナーないしシンポジウムを開催したか。</p> <p>② 東京国立近代美術館工芸館では、「現代工芸への視点」展にあわせ、テーマとなる茶の工芸に関するイベント、講演会を開催したか。</p> <p>③ 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」(10月27日)を記念して講演会等を開催したか。</p> <p>④ 京都国立近代美術館では、「マイ・フェイバリットとある美術の検索目録／所蔵作品から」展、『『日本画』の前衛 1938－1949』展及び「パウル・クレー 創成する芸術(仮称)」展にあわせ、連続講演会やシンポジウムを開催したか。</p> <p>また、パリ日本文化会館で開催される「近代日本工芸 1900－1930展(仮称)」にあわせ、国際シンポジウムを開催したか。</p> <p>⑤ 国立西洋美術館では、「フランク・ブラングイン展」にあわせ、ブラングインの芸術活動に焦点を合わせた記念講演会を開催する。「レンブラント：光の画家(仮称)」展では、レンブラントとレンブラント派の作品における光の表現を巡って平成23年3月13、14日の2日間で国際シンポジウムを開催したか。</p>	<p>総論 美術情報・資料の活用法—提供と利用のはざまにおいて」</p> <p>「第Ⅲ講 今日の図書館から俯瞰する美術館の資料活動」</p> <p>「第Ⅳ講 電子的リソース(二次資料)」</p>	<p>全国美術館会議</p>	<p>主任研究員・水谷長志</p>	<p>平成22年9月9-10日)</p>	<p>愛知芸術文化センター・アートスペースEF</p>	<p>20名</p>												
	<p>AAML は(manuscript + ephemera) archives : Today's Ephemera , Tomorrow's Historical Documentation</p>	<p>アート・ドキュメンテーション学会ほか</p>	<p>主任研究員・水谷長志</p>	<p>平成22年10月9日</p>	<p>東京国立近代美術館講堂</p>	<p>100名</p>												
	<p>ARLIS at 40—美術図書館協会(ARLIS)の活動の足跡とその出版物</p>	<p>アート・ドキュメンテーション学会</p>	<p>主任研究員・水谷長志</p>	<p>平成22年11月14日</p>	<p>同志社大学寒梅館</p>	<p>80名</p>												
	<p>John D. Rockefeller III's Travels in Japan in the 1950s: Japanese Crafts and USA 'Soft Power' in the Cold War Era</p>	<p>7th Conference of the International Committee of Design History and Design Studies</p>	<p>主任研究員・木田拓也</p>	<p>平成22年9月21日</p>	<p>ベルギー王立アカデミー</p>	<p>30名</p>												
	<p>[学会等発表](フィルムセンター)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>タイトル</th> <th>学会等名</th> <th>発表者職名・氏名</th> <th>日付</th> <th>場所</th> <th>聴講者数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> </tbody> </table>							タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数					
タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数													

<p>⑥ 国立新美術館では、「オルセー美術館展2010「ポスト印象派」」にあわせた講演会並びにポスト印象派に関するシンポジウム、美術資料をテーマにしたレクチャー、セミナー等を開催したか。</p> <p>(2)-2 東京国立近代美術館工芸館では、我が国の工芸美術を紹介するための海外展の開催の可能性について関係機関と協議したか。</p> <p>(3)東京国立近代美術館フィルムセンターでは、国際フィルム・アーカイブ連盟加盟機関及び国内映像関連団体並びに研究機関等と情報交換を図りながら、映画フィルム等の保存・修復活動を行ったか。</p> <p>(4)所蔵作品について、その保存状況や展示計画を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施したか。</p> <p>① 東京国立近代美術館本館では、作品の状態や同館での活用計画を踏まえ、借用依頼に積極的に対応したか。東京国立博物館の「細川家の至宝一珠玉の永青文庫コレクション」展、香川県立東山魁夷せとうち美術館の「道一心に刻まれた風景」展、札幌芸術の森美術館他の「片岡球子展」等に貸与したか。</p> <p>② 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、最新の保存・復元の成果を</p>	<p>Access to Archives - Seminar</p>	<p>国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)</p>	<p>主幹・岡島尚志</p>	<p>平成 22年 5月 5日</p>	<p>ノルウェー映画協会タンクレッド・シアター</p>	<p>50名</p>
	<p>アナログとデジタル映像環境はどこへ向うのかー「映画保存の視点から」</p>	<p>日本映像学会</p>	<p>主幹・岡島尚志</p>	<p>平成 22年 5月 29日</p>	<p>日本大学芸術学部江古田校舎・大講堂</p>	<p>100名</p>
	<p>An Idea to Build the Legal Backbone for Film Preservation: The Two Japanese Films Registered as National Treasures</p>	<p>東南アジア太平洋地域視聴覚アーカイブ協会(SEAPAVAA)年次会議</p>	<p>主幹・岡島尚志</p>	<p>平成 22年 8月 3日</p>	<p>バンコク・アート&amp;カルチャーセンター(BACC)</p>	<p>50名</p>
	<p>“メディア芸術センター”としてのコミュニティシネマの可能性</p>	<p>全国コミュニティシネマ会議 2010イン山口</p>	<p>主幹・岡島尚志</p>	<p>平成 22年 9月 10日</p>	<p>山口情報芸術センター(YCAM)大ホール</p>	<p>100名</p>
	<p>What Film Archives Must Need Now: FIAF, NFC Japan, Digital Impact and Others</p>	<p>ベトナム映画協会講演会</p>	<p>主幹・岡島尚志</p>	<p>平成 22年 10月 8日</p>	<p>ベトナム映画協会(VFI)</p>	<p>100名</p>
	<p>日本の映画遺産を守るためにーその現状と問題提起ー</p>	<p>映団連セミナー</p>	<p>主幹・岡島尚志</p>	<p>平成 22年 10月 24日</p>	<p>シネマート六本木スクリーン4</p>	<p>120名</p>



<p>広く紹介するために、所蔵日本映画を中心にパッケージ化し、地方及び海外の同種機関を中心に共催等による上映会を開催したか。また、所蔵日本映画について、DVDの作成・販売、CSチャンネルによるテレビ放映等を通じて、より広範な観客層への普及活動を検討したか。</p> <p>③ 京都国立近代美術館では、従来どおり、借用依頼に積極的に対応する。島根県立美術館と富山県水墨美術館に河井寛次郎のコレクションを、富山県立近代美術館に池田満寿夫のコレクションを、まとめて貸与したか。</p> <p>また、パリ日本文化会館で開催される「近代日本工芸 1900-1930 展(仮称)」にも所蔵作品の多くを貸与したか。</p> <p>④ 国立国際美術館では、作品の状態や同館での活用計画を踏まえ、借用依頼に積極的に対応したか。</p> <p>シカゴ現代美術館の「リュック・タイマンズ」展等に貸与したか。</p>	<p>Don't Throw Film Away - Considering the Bottom Line of Film Preservation in Digital Age</p>	<p>東京フィルメックス“ネクスト・マスターズ”</p>	<p>主幹・岡島尚志</p>	<p>平成 22 年 11 月 26 日</p>	<p>有楽町朝日スクエア(有楽町マリオン)</p>	<p>20 名</p>
	<p>袋一平とソビエト映画</p>	<p>工学院大学・朝日カレッジ</p>	<p>主任 研究員・岡田秀則</p>	<p>平成 22 年 5 月 15 日</p>	<p>工学院大学</p>	<p>10 名</p>
	<p>エクスペディション映画の世紀</p>	<p>国立民族学博物館</p>	<p>主任 研究員・岡田秀則</p>	<p>平成 22 年 6 月 5 日</p>	<p>国立民族学博物館</p>	<p>150 名</p>
	<p>松竹の三巨匠</p>	<p>ポルデノーネ無声映画祭</p>	<p>主任 研究員・榎木章(発表者名:とちぎあきら), 主任研究員・岡田秀則</p>	<p>平成 22 年 10 月 3 日</p>	<p>ポルデノーネ無声映画祭</p>	<p>40 名</p>
	<p>映像のアーカイビング</p>	<p>東京大学総合研究博物館</p>	<p>主任 研究員・岡田秀則</p>	<p>平成 22 年 11 月 8 日</p>	<p>東京大学総合研究博物館</p>	<p>12 名</p>
	<p>演劇博物館所蔵映画フィルムの調査・目録整備と保存活用</p>	<p>早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点での成果報告</p>	<p>主任 研究員・入江良郎</p>	<p>平成 23 年 3 月 5 日</p>	<p>早稲田大学早稲田キャンパス 6 号館 3 階レクチャールーム</p>	<p>35 名</p>

	The Digital Restoration of Akira Kurosawa's Rashomon (1950)/The Given Conditions of Film Archiving in Japan	香港電影資料館による映画復元のシンポジウム	主任研究員・ 榎木章(発表者名:とちぎあきら)	平成 23 年 4 月 3 日	香港電影資料館劇場	40 名		
	About Early Japanese Animation	韓国映像資料院	主任研究員・ 榎木章(発表者名:とちぎあきら)	平成 23 年 6 月 5 日	韓国映像資料院劇場	50 名		
	名画座フォーラム—日本映画クラシック作品の上映環境を考える	全国コミュニティシネマ会議 2010 イン山口	主任研究員・ 榎木章(発表者名:とちぎあきら)	平成 23 年 9 月 11 日	山口情報芸術センター・スタジオA	100 名		
	日本の最初期トーキー映画のアーカイビング	第 24 回近代の文化遺産の保存修復に関する研究会「映像・音声記録媒体の保存と利用について」	主任研究員・ 榎木章(発表者名:とちぎあきら)	平成 23 年 1 月 14 日	独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 地下セミナー室	40 名		
	研究員が語る 甦れ名作！デジタルシネマ	平成 22 年度講座「知りたい！シネマを支える人々」	主任研究員・ 榎木章(発表者名:とちぎあきら)	平成 23 年 2 月 19 日	江東区古石場文化センター	50 名		

仙台発！車座で語ろう「メディア芸術」つてよくわからないぞ	第5回メディア芸術オープントーク	主任研究員・ 榎木章(発表者名:とちぎあきら)	平成23年2月26日	せんだいメディアテークスタジオシアター	40名
カラーフィルムのデジタル復元と三色分解による長期保存の可能性——映画『銀輪』(松本俊夫監督 1955年)の場合	2010年度(社)日本写真学会年次大会	研究員・ 板倉史明	平成22年5月27日	キャンパス・イノベーションセンター 東京	40名
日本無声映画期における染色・調色の歴史と復元	日本映像学会第36回全国大会	研究員・ 板倉史明	平成22年5月30日	日本大学 芸術学部	50名
映画フィルムの重要文化財指定に付いて	第5回映画の復元と保存に関するワークショップ	研究員・ 板倉史明	平成22年8月29日	京都府京都文化博物館	80名
座談会「海外最新事情——関連諸団体の動向について」	第5回映画の復元と保存に関するワークショップ	研究員・ 板倉史明	平成22年8月29日	京都府京都文化博物館	80名
映画フィルム復元の方法論と、デジタル復元における三色分解を用いた映像の長期保存——映画『銀輪』(松本俊夫/1955年)の場合	平成22年度画像保存セミナー	主任研究員・ 板倉史明, 三浦和己(株式会社IMAGICA)	平成22年11月5日	東京都写真美術館	150名

[雑誌等論文掲載](本館・工芸館)

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
森口多里の生涯と仕事	主任研究員・ 大谷省吾	『美術批評家著作選集 第4巻 森口多里』(ゆまに書房)	平成22年6月

安井曾太郎／高松次郎 『影』を見つめてデッサンをきわめる 絵画を支える『影』の存在	主任研究員・大谷省吾	『美術の窓』324号(生活の友社)	平成22年9月
人と自然をつなぐもの—奥谷博の近作をめぐって	主任研究員・大谷省吾	『奥谷博自選展』カタログ(池田20世紀美術館)	平成22年10月
実験工房—メディアの交差点	主任研究員・大谷省吾	『ドキュメント実験工房』(東京パブリッシングハウス)	平成22年11月
外山卯三郎の生涯と仕事	主任研究員・大谷省吾	『美術批評家著作選集 第7巻 外山卯三郎』(ゆまに書房)	平成23年1月
「シルエットと表現」「須田国太郎と影」「影から読み解く北脇昇」「高松次郎の影—実在と不在をめぐる探究」	主任研究員・大谷省吾	『陰影礼讃 国立美術館コレクションによる』展カタログ(国立新美術館)	平成22年9月
日本近代美術と中村屋サロン—荻原守衛と中村彝の場合—	美術課長・蔵屋美香	『新宿中村屋に咲いた文化芸術』展カタログ(新宿歴史博物館)	平成22年2月
セッション3 絵画のオルタナティブ	研究員・保坂健二郎	『国立国際美術館新築移転5周年記念シンポジウム 絵画の時代—ゼロ年代の地平から 記録集』(国立国際美術館)	平成22年12月
モダニズムの影 始原の影	主任研究員・増田玲	『陰影礼讃』展カタログ(国立新美術館)	平成22年9月
文脈をとらえ直す—1960年代末から1970年代初頭の美術と写真について	主任研究員・増田玲	『Seeing—6人の作家による写真表現』展カタログ(富士ゼロックスアートスペース)	平成22年11月

	原口典之一物質と非物質	副館長・ 松本透	『美術フォーラム 21』第 23 号(醍醐書房)	平成 22 年 11 月 30 日		
	『MLA 連携の現状・課題・将来』	主任研究 員・ 水谷長志	(勉誠出版)	平成 22 年 6 月		
	〈動向〉専門図書館におけるアーカイブズ学の流入と展開－専門図書館協議会での言説を中心に	主任研究 員・ 水谷長志	『アーカイブズ学研究』13 号 (日本アーカイブズ学会)	平成 22 年 11 月		
	「artlibraries.net と「美術書誌の未来 (FAB: the Future of Art Bibliography) 」 会 議 (2010.10.28-30, Gulbenkian, Lisbon)参加報告」	主任研究 員・ 水谷長志	『アート・ドキュメンテーション通信』88 号 (アート・ドキュメンテーション学会)	平成 23 年 1 月		
	鑑 文化芸術へのいざない 国立美術館の情報発信－館(やかた)の壁を越えて, MLAが連携するために	主任研究 員・ 水谷長志	『文化庁月報』 (文化庁)	平成 23 年 2 月		
	国立美術館の情報発信－近年の展開と発信	主任研究 員・ 水谷長志	『全国美術館会議 学芸員 研修会 報告書』 (全国美術館会議)	平成 23 年 3 月		
	自身を織り込む－中島晴美の陶造形－	工 芸 課 長・ 唐澤昌宏	陶説	平成 22 年 7 月 1 日		
	工芸のイメージとこれからの工芸	工 芸 課 長・ 唐澤昌宏	日展ニュース	平成 22 年 9 月 2 日		
	人形をめぐる幾つかの視点	工芸課主 任 研 究 員・今井 陽子	美学美術史論集(成城大学 文学研究科)	平成 22 年 3 月 28 日		
	[雑誌等論文掲載](フィルムセンター)					
	パウロ・ローシャ 異郷と故郷の間 で立ちつくす映画詩人	主幹・ 岡島尚志	『ポルトガル映画祭 2010』 (コミュニティシネマセンタ ー)	平成 22 年 9 月 17 日		

映画文化財の長期保存——問題 点の整理とフィルム・アーカイブの 役割	主幹・ 岡島尚志	『書物の映像と未来—ゲー グル化する世界の知の課 題とは—』(岩波書店)	平成 22 年 11 月 2 日		
Film Archives in the Digital Age: Impact, Shift, and Dilemma	主幹・ 岡島尚志	『香港電影資料館十周年紀 念』(香港電)影資料館)	平成 23 年 1 月 1 日		
今日もノンフィルム日和	主任研究 員・ 岡田秀則	『映画天国』2010 年 5—6 月 号(韓国映像資料院)	平成 22 年 4 月 26 日		
彩られた冒険—小津安二郎と木下 恵介の色彩実験をめぐって	主任研究 員・ 岡田秀則	『日本映画は生きている 第 2 巻 映画史を読み直す』 (岩波書店)	平成 22 年 8 月 27 日		
もう一つの戦後ロマン 産業PR映 画	主任研究 員・ 岡田秀則	『東京人』2010 年 11 月号 (都市出版)	平成 22 年 11 月 3 日		
ライブラリー・日本人のフランス体 験 第 15 巻 映画のなかのパリ	主任研究 員・ 岡田秀則	ライブラリー・日本人のフラ ンス体験 第 15 巻 映画の なかのパリ(柏書房)	平成 22 年 12 月 10 日		
Approaching Imamura Taihei and the Originality of His Film Theory	主任研究 員・ 入江良郎	『城西大学国際学術文化振 興センター紀要』Vol. XXII	平成 22 年 12 月		
死の記録としての活動写真	主任研究 員・ 榎木章 (筆名:と ちぎあき ら)	『日本のドキュメンタリー3 生活・文化編』(岩波書店)	平成 22 年 6 月 10 日		
人智の礎としてのアーカイブ—映 画フィルムのアーカイビングという 仕事—	主任研究 員・ 榎木章 (筆名:と ちぎあき ら)	『情報の技術と科学』 Vol.60, No.11(社団法人情 報科学技術協会)	平成 22 年 11 月 1 日		

	8つの質問	主任研究員・ 榎木章 (筆名:とちぎあきら)	『フィルムメーカーズ—個人映画の作り方』(アーツアンドクラフツ社)	平成23年3月	
	映画館における観客の作法——歴史的な受容研究のための序論	研究員・ 板倉史明	『日本映画は生きている 第一巻』(岩波書店)	平成22年7月29日	
	「関連年表」「参考文献」	主任研究員・板倉史明	『ライブラリー・日本人のフランス体験 第15巻 映画のなかのパリ』(柏書房)	平成22年12月10日	
	デジタル復元における三色分解を用いた映像の長期保存——映画『銀輪』の場合	主任研究員・板倉史明, 三浦和己(株式会社IMAGICA)	『日本写真学会誌』第74巻第1号	平成23年2月25日	
	東京国立近代美術館フィルムセンター	研究員・ 赤崎陽子	『日本近代文学館』第235号	平成22年5月15日	
	名画の指定席『砂の女』	研究員・ 赤崎陽子	『東商新聞』	平成22年4月20日	
	名画の指定席『リトアニアへの旅の追憶』	研究員・ 赤崎陽子	『東商新聞』	平成22年5月20日	
	名画の指定席『燈台守』	研究員・ 赤崎陽子	『東商新聞』	平成22年6月20日	
	名画の指定席『アメリカの影』	研究員・ 赤崎陽子	『東商新聞』	平成22年7月20日	
	名画の指定席『馬具田城の盗賊』	研究員・ 赤崎陽子	『東商新聞』	平成22年8月20日	
	名画の指定席『七人の侍』	研究員・ 赤崎陽子	『東商新聞』	平成22年9月30日	
	(イ) 京都国立近代美術館 [学会等発表]				

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
関西の近代美術事情 京都	明治美術学会	学芸課長・山 野英嗣	7月 24 日	京都国立近 代美術館	50名

[雑誌等論文掲載]

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
<建築>が<現代美術>になる とき	主任研究 員・ 池田祐子	DOCOMOMO Japan News Letter(DOCOMOMO Japan)	No.11 2010年 春号
「デザイン」前夜—第一次世界 大戦前後のドイツにおける Kunstgewerbe—	主任研究 員・ 池田祐子	「デザインの力」永井隆則編 著(晃洋書房)	2010年11月

(ウ) 国立西洋美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
フランク・ブラングィン、美術館のデザインと壁面装飾	ジャポニスム学会シンポジウム「ブラングィンとその時代 ジャポニスムの視点から」	主任研究員・大屋美那	平成22年4月24日(土)	国立西洋美術館講堂	80名
ミュージアムとプライベート・セクターのポリティクス:ジョージ・ワシントン像を事例に	全日本博物館学会第36回研究大会	研究員・横山佐紀	平成22年6月13日(日)	明治大学	123名
ネガティブな自己の像	美術史学会東支部大会シンポジウム「自画像を考え、自画像から語る」パネル報告	学芸課長・村上博哉	平成22年10月23日	損保ジャパン本社ビル大会議室	85名



ミロ研究 近年の動向	スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会	学芸課長・村上博哉	平成23年1月8日	慶應義塾大学日吉キャンパス	30名
書物芸術としてのデューラーの『聖母伝』—その物語構造と修道院人文主義の影響をめぐって—	美術史学会東支部例会	学芸課研究員新藤淳	平成23年3月26日	東京大学本郷キャンパス	約50名

[雑誌等論文掲載]

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
フランク・ブラングイン, 美術館のデザインと壁面装飾	主任研究員・大屋美那	『ジャポニスム研究』(ジャポニスム学会)	平成22年12月3日
19世紀フランスの複製版画: 紙の手ざわり	主任研究員・陳岡めぐみ	『青淵』第742号(渋沢栄一記念財団)	平成23年1月
歴史ミュージアムとプライベート・セクターのポリティクス—ジョージ・ワシントン像《ランズダウン》収蔵の経緯から	主任研究員・横山佐紀	『アメリカ学会』(アメリカ学会)	平成23年3月25日
美術館図書室と一過性資料: 国立西洋美術館研究資料センターのアーティスト・ファイル公開について	主任研究員・川口雅子	『アート・ドキュメンテーション通信』(アート・ドキュメンテーション学会)	平成22年(85号)
件名付与の新たな試み: カタログ・レゾネと美術館図書室	主任研究員・川口雅子	『アート・ドキュメンテーション通信』(アート・ドキュメンテーション学会)	平成22年(87号)

(エ) 国立国際美術館  
[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
感性と鑑賞	こども環境学会	研究員・藤吉祐子	平成 22 年 4 月 25 日	広島	—
あいちトリエンナーレ 2010 を取り繕う	あいちトリエンナーレ勉強会	主任研究員・中井康之	平成 23 年 3 月 22 日	名古屋	30 名
キュレーターになったきっかけと美術との出会い	キュレーターミーティング	主任研究員・植松由佳	平成 22 年 10 月 1 日～10 月 3 日	北九州	20 名

[雑誌等論文掲載]

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
制作することの大義について	主任研究員・中井康之	「美術の地上戦」展図録 (OVER TONE II 実行委員会)	平成 22 年 12 月 7 日

(オ) 国立新美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
総合芸術への志向と 20 世紀美術—ナビ派からカンディンスキーへ—	国立新美術館、日仏美術学会、日本経済新聞社シンポジウム「ポスト印象派とその時代—1880～90 年代のフランス絵画—」	主任研究員・長屋光枝	平成 22 年 7 月 24 日	国立新美術館	—
作品情報のアクセスと発信	全国美術館会議情報・資料研究部会企画 セミナー II 美術情報・資料の活用	主任研究員・室屋泰三	平成 22 年 9 月 10 日	愛知県美術館	—

具体美術協会の活動とその意義	日仏美術学会 国際シンポジウム「戦後抽象美術における国際交流」	主任研究員・ 平井章一	平成 22 年 11 月 21 日	日仏会館	—
私の経験から—美術館での研究、キュレーションとオーラルヒストリー	日本オーラル・ヒストリー・アーカイヴ第 2 回シンポジウム「オーラル・アート・ヒストリーの実践」	主任研究員・ 平井章一	平成 22 年 11 月 27 日	東京藝術大学	—
戦後日本の現代美術 その国際性をめぐって	米国学芸員招聘プログラム	学芸課長・ 南 雄介	平成 23 年 3 月 8 日	国際交流基金	—

[雑誌等論文掲載]

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
作品情報のアクセスと発信	主任研究員・ 室屋泰三	全国美術館会議情報・資料研究部会 企画 セミナーⅡ 美術情報・資料の活用—展覧会カタログから Web まで—(全国美術館会議情報・資料研究部会)	平成 22 年 9 月
「日本創作版画運動」関連年表 1904-1945	特任研究員・ 三木哲夫	「日本近代の青春 創作版画の名品」展覧会カタログ(和歌山県立近代美術館、宇都宮美術館)	平成 22 年 9 月
La rivista “Gutai”	主任研究員・ 平井 章一	GUTAI: DIPINGERE CON IL TEMPO E LO SPAZIO (Museo Cantonale d’ Arte Lugano, Silvana Editoriale)	平成 22 年 10 月
恩地孝四郎年譜	特任研究員・ 三木哲夫	新装普及版 恩地孝四郎 装本の業 (三省堂)	平成 23 年 1 月
美術館の情報発信—参加する、つながる、共有する、ウェブの新時代	主任研究員・ 室屋泰三	全国美術館会議平成 21 年度第 25 回学芸員研修会報告書 美術館の情報発信—参加する、つながる、共有する、ウェブの新時代—(全国美術館会議情報・資料研究部会)	平成 23 年 3 月

ウ インターネットによる調査研究成果の発信

(ア) 東京国立近代美術館

『研究紀要』の収録論文をホームページ上に掲載した。

フィルムセンターでは、主任研究員の講演が修正のうえ「つなぐことはまぜること

『リオ 40 度』を巡って——ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス 講演と上映シリーズ」アテネ・フランセ文化センターウェブページに採録された。

(イ) 京都国立近代美術館

コレクション・ギャラリーの展示替えごとに、出品目録および企画する小企画やテーマ展示に関する開催意図を掲載し、情報発信の充実に努めた。さらに、美術館ニュースや研究論集など、刊行物の発行に際して掲載内容を更新した。

(ウ) 国立国際美術館

『artscape』(URL: <http://www.dnp.co.jp/artscape/>)「学芸員レポート」に 4 回、現代美術及び展覧会に関する研究を紹介するとともに、『ARTiT』(URL: <http://www.art-it.asia/top>)「展覧会レーティング」に 8 回レヴュアーとして参加した。

エ その他

(ア) 東京国立近代美術館

(本館・工芸館)

本館では、読売新聞、朝日新聞、日本経済新聞、『美術手帖』『すばる』他に多数の執筆を行った。工芸館では、これまで連載してきた工芸館所蔵作品の解説を一冊にまとめるとともに、研究員が新規に執筆した論文を合わせて『工芸の見かた・感じかた: 感動を呼ぶ、近現代の作家と作品』(東京国立近代美術館工芸課編)を淡交社より、刊行した。

(フィルムセンター)

- ①「第63回国際フィルム・アーカイブ連盟東京会議」の記録集の編集を行った。
- ②所蔵資料の研究に基づき、新しい常設展「NFC コレクションでみる 日本映画の歴史」にかかわる「ジュニア・セルフガイド」を発行した。
- ③前年度に実施したアンケートに基づいて「全国映画資料館録」を刊行した。

(イ) 国立国際美術館

産経新聞「審美のアンゲル」にて、1 年を通じて毎月 1 回、展覧会評を執筆するとともに、京都新聞「アート解剖学 現代美術再入門」にて、1 年を通じて毎月 1 回作品評を執筆した。

② 所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催

ア 東京国立近代美術館

(本館・工芸館)

セミナー・シンポジウム名	東京都図画工作研究会・美術館連携鑑賞研究研修会	開催日	平成 22 年 9 月 21 日
場所	東京国立近代美術館 講堂、所蔵品ギ	聴講者	146 人

	ギャラリー	数	
講師・パネリスト等の氏名(職名)	司会進行: 一條彰子(東京国立近代美術館企画課主任研究員), 進行補佐: 藤田百合(同研究補佐員), ギャラリートーク指導: 今井陽子・北村仁美(東京国立近代美術館工芸課主任研究員), 齊藤佳代(同研究補佐員), 他。講師: 秋田喜代美(東京大学大学院教授)		
内容	東京国立近代美術館の所蔵作品について小学校教員にギャラリートークを指導, その後実際に小学生に実施したものをビデオ撮影し, 教育学上から分析した。		
セミナー・シンポジウム名	東京都中学校美術教育研究会 平成22年度美術館研修	開催日	平成22年8月23日
場所	東京国立近代美術館 講堂, 所蔵品ギャラリー	聴講者数	42人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	司会進行: 一條彰子(東京国立近代美術館企画課主任研究員), 進行補佐: 藤田百合(同研究補佐員), グループワーク進行: 北村仁美(東京国立近代美術館工芸課主任研究員), 齊藤佳代(同研究補佐員), 講師: 寺島洋子(国立西洋美術館主任研究員), 他		
内容	鑑賞の実践手法のひとつVTSを使って東京国立近代美術館の所蔵品を鑑賞する研修。		
セミナー・シンポジウム名	「建築はどこにあるの?」展連続講演会	開催日	平成22年5月29日, 6月5日, 12日, 7月3日, 17日, 24日, 31日
場所	東京国立近代美術館講堂	聴講者数	各回約120人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	菊地宏, 中山英之, アトリエ・ワン, 伊東豊雄, 鈴木了二, 中村竜治, 内藤廣		
内容	本展に参加した建築家7名が, 本展のテーマに即して自身の建築観を語る。		
セミナー・シンポジウム名	「所蔵作品展 こども工芸館/おとな工芸館 イロ×イロ」工芸鑑賞研修会	開催日	平成22年6月12日
場所	東京国立近代美術館工芸館	聴講者数	18人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師: 今井陽子(工芸課主任研究員), 齊藤佳代(工芸課研究補佐員)		

内容	「所蔵作品展 こども工芸館／おとな工芸館 イロ×イロ」の事前研修として実施。児童・生徒を対象とする工芸鑑賞の可能性について検証した。		
セミナー・シンポジウム名	石川支部無形文化財事業「現代工芸への視点」	開催日	平成 22 年 2 月 20 日
場所	金沢市文化ホール	聴講者数	50 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	今井陽子		
内容	当館所蔵作品を中心に、工芸の今日的動向を考察した。		
セミナー・シンポジウム名	講演会「日本工芸の現在(いま)」	開催日	平成 22 年 7 月 25 日
場所	香川県立ミュージアム 講堂	聴講者数	70 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	唐澤昌宏		
内容	工芸館巡回展に伴う講演会。当館所蔵作品を中心に日本の工芸の現状と今後の動向について考察した。		
セミナー・シンポジウム名	講演会「日展の工芸について」	開催日	平成 22 年 11 月 6 日
場所	国立新美術館 講堂	聴講者数	120 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	唐澤昌宏		
内容	日本の工芸の現状を紹介しつつ、これからの工芸について考察した。		
セミナー・シンポジウム名	陶芸館開館記念シンポジウム「陶による造形表現の可能性」	開催日	平成 22 年 10 月 16 日
場所	山口県立萩美術館・浦上記念館 講堂	聴講者数	60 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	基調講演: 金子賢治(茨城県陶芸美術館長)、発表 1: 徳丸鏡子(陶芸家)、発表 2: 北川宏人(陶芸家)、発表 3: 唐澤昌宏(東京国立近代美術館工芸課長)		

内容	現代陶芸における造形表現の可能性について、研究者および陶芸家の立場から考察した。		
セミナー・シンポジウム名	講演会「辻清明の陶芸とコレクション」	開催日	平成 23 年 1 月 16 日
場所	愛知県陶磁資料館 講堂	聴講者数	85 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	唐澤昌宏		
内容	辻清明の陶芸作品とコレクションを紹介した展覧会に伴う講演会。辻清明のコレクションと自身の作品との関係を紹介しながら、何をヒントに制作に取り組み、そして独自性を見つけていったかを明らかにした。		

(フィルムセンター)

セミナー・シンポジウム名	ユネスコ「世界視聴覚文化遺産の日」記念特別イベント「講演と上映 3D映画の歴史」※詳細は②に記載	開催日	平成 22 年 11 月 6 日(1 日間)
場所	東京国立近代美術館フィルムセンター 大ホール	聴講者数	357 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師:シュテファン・ドレスラー(ミュンヘン映画博物館ディレクター)		
内容	ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」(10月27日)を記念するイベント事業の第3回目として、ミュンヘン映画博物館ディレクターのシュテファン・ドレスラー氏を講師に招き、世界映画史に現れた 3D 映画の抜粋映像を、最新のデジタル 3D 技術でスクリーン上に再現しながら、それぞれの技術や背景を解説する講演会を開催した。		

イ 国立西洋美術館

セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「デューラー受容の 500 年」	開催日	平成 22 年 11 月 13 日
場所	明治学院大学	聴講者数	100 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	パネリスト:大原まゆみ(明治学院大学教授), 勝國興(同志社大学名誉教授), 秋山聰(東京大学准教授), 下村耕史(九州産業大学教授), 尾関幸名(東京学芸大学准教授), 平川佳世(京都大学准教授), 田中淳(東京国立文		

	化財研究所企画情報部長), 新藤淳(国立西洋美術館研究員), 佐藤直樹(東京藝術大学准教授)		
内容	ドイツ語圏美術研究連絡網, 明治学院大学, 国立西洋美術館により, デューラー受容に関して, 16世紀から20世紀までの500年にわたり具体的な作例をあげつつ, 発表および討議を行った。		
セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「レンブラント 光の探求 / 闇の誘惑」	開催日	平成23年3月13日
場所	国立西洋美術館	聴講者数	—
講師・パネリスト等の氏名(職名)	パネリスト: マーティン・ロイヤルトン=キッシュ(前大英博物館), エリク・ヒンテルディング(ニュー・ホルシュタイン・レンブラント版画カタログ編纂者), ポプ・ファン・デン・ボーヘルト(レンブラントハイス), 尾崎彰宏(東北大学教授), 熊澤弘(国立西洋美術館客員研究員), 幸福輝(国立西洋美術館上席主任研究員), 保井亜弓(金沢美術工芸大学教授)		
内容	* 地震の影響により中止。		

### エ 国立国際美術館

セミナー・シンポジウム名	荒川修作初期作品をめぐって	開催日	平成22年5月29日
場所	国立国際美術館地下1階講堂	聴講者数	78人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	馬場駿吉(名古屋ポストン美術館館長), 建畠哲(当館館長), 司会: 平芳幸浩(当館客員研究員)		
内容	馬場駿吉氏と建畠哲前館長による対談の形式をとりつつ, 当館所蔵の荒川修作初期作品に関するセミナーを実施した。		

### (2) 国内外の美術館等との連携

#### ① シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築

ア 東京国立近代美術館  
(本館・工芸館)

セミナー・シンポジウム名	東洋陶磁学会平成22年度第4回研究会	開催日	平成23年1月30日
--------------	--------------------	-----	------------



ウム名			
場所	東京国立近代美術館 講堂	聴講者数	約 60 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	五味良子(名古屋市立博物館), 花井久穂(茨城県陶芸美術館), 栄木正敏(陶磁器デザイナー), 前田正博(陶芸家)		

(フィルムセンター)

セミナー・シンポジウム名	ユネスコ世界視聴覚文化遺産の日記念特別イベント「講演と上映 3D映画の歴史」	開催日	平成 22 年 11 月 6 日(1 日間)
場所	東京国立近代美術館フィルムセンター大ホール	聴講者数	357 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師:シュテファン・ドレスラー(ミュンヘン映画博物館ディレクター)		

イ 京都国立近代美術館

セミナー・シンポジウム名	国際シンポジウム「Creative Engagement/生存のエシックス」Part 1: 生命・環境・芸術	開催日	平成 22 年 7 月 10 日
場所	京都国立近代美術館 講堂	聴講者数	101 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	森本幸裕(京都大学大学院地球環境学学教授) デヴィッド・ダン(環境音楽家, アメリカ合衆国) スサーナ・ソアーズ(美術家, イギリス) スティーヴン・カーツ(クリティカル・アート・アンサンブル, メディア・アクティヴィズム, アメリカ合衆国) 京都市立芸術大学「生存のエシックス」プロジェクトチーム(高橋悟, 井上明彦, 中ハシクシゲ, 松井紫朗, 加須屋明子)		
セミナー・シンポジウム名	国際シンポジウム「Creative Engagement/生存のエシックス」Part 2: 宇宙・医療・芸術	開催日	平成 22 年 7 月 31 日
場所	京都国立近代美術館 講堂	聴講者数	100 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	テンブル・グランディン(動物行動学・自閉症, コロラド州立大学教授) 岩城見一(哲学, 京都大学名誉教授)		

	ミロスワフ・パウカ(美術家, ポーランド) 十一元三(認知神経科学・児童精神医学, 京都大学大学院医学研究科教授) 京都市立芸術大学「生存のエシックス」プロジェクトチーム(石原友明, 中原浩大, 井上明彦, 高橋 悟, 松井紫朗, 森公一, 加須屋明子)		
セミナー・シンポジウム名	国際シンポジウム「東西文化の磁場」	開催日	平成 22 年 11 月 18 日
場所	パリ日本文化会館	聴講者数	71 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	発表 1・尾崎正明(京都国立近代美術館長)「レオナルド・藤田(藤田嗣治)と日本画壇」 発表 2・松原龍一(京都国立近代美術館主任研究員)「パリで開催されたふたつの万国博覧会と近代日本工芸 1900-1930 年」 発表 3・稲賀繁美(国際日本文化研究センター教授)「工藝的思考と触覚的契機」 発表 4・出川哲朗(大阪市立東洋陶磁美術館長)「明治, 大正期の陶芸作家による, 伝統と革新のはざまでの中国古陶磁器の倣製品の制作について」 発表 5・加藤哲弘(関西学院大学教授)「装飾における日本的なもの」 発表 6・クリストフ・マルケ(ソルボンヌ・パリ・シテ研究高等教育拠点フランス国立東洋言語文化研究学院 日本語・日本文化学部長)「東京ーパリー京都: 20 世紀初頭の浅井忠における『装飾』芸術再発見への道程」		
セミナー・シンポジウム名	クレーと自然	開催日	平成 23 年 3 月 14 日
場所	立命館大学アトリサーチセンター	聴講者数	10 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ヴォルフガング・ケルステン(チューリヒ大学美術史研究所) ベッティナー・ゴツケル(チューリヒ大学美術史研究所)		
<b>ウ 国立西洋美術館</b>			
セミナー・シンポジウム名	全国美術館会議 情報・資料研究部会企画セミナーII「美術情報・資料の活用」	開催日	平成 22 年 9 月 10、11 日
場所	愛知芸術文化センター	聴講者数	約 20 人

講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師:水谷長志(東京国立近代美術館主任研究員),住広昭子(東京国立博物館学芸企画部博物館情報課図書・映像サービス室),中村節子(石橋財団ブリヂストン美術館司書),室屋泰三(国立新美術館主任研究員),川口雅子(国立西洋美術館主任研究員)		
セミナー・シンポジウム名	人文社会科学系若手研究者セミナー	開催日	平成23年1月29日
場所	日仏会館	聴講者数	約15人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	発表者:互盛央(雑誌編集者,思想史研究者),陳岡めぐみ(国立西洋美術館研究員),田口卓臣(宇都宮大学講師)		

### エ 国立国際美術館

セミナー・シンポジウム名	オーストラリアのメディアアート	開催日	平成22年6月6日
場所	国立国際美術館地下1階講堂	聴講者数	—
講師・パネリスト等の氏名(職名)	アレッシオ・カヴァレロ(オーストラリア動画センターシニアキュレーター),トロイ・イノセント(モナッシュ大学マルチメディア・デジタルアート科教員),久保田晃弘(多摩美術大学情報デザイン学科教授),グレッグ・モア(RMIT ロイヤルメルボルン工科大学空間情報建築研究室教員),マリ・ヴェロナキ(シドニー大学ソーシャルロボティクスセンター共同所長)		
セミナー・シンポジウム名	自画像の美術史—ルネサンスから現代まで	開催日	平成22年12月11日
場所	国立国際美術館地下1階講堂	聴講者数	126人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	小佐野重利(東京大学文学部教授),園府寺司(大阪大学文学部教授),中井康之(当館主任研究員)		

### オ 国立新美術館

セミナー・シンポジウム名	シリーズ 美術雑誌と戦後美術—創り手たちの証言 第2回 伝統を引き継いで	開催日	平成22年4月24日
場所	国立新美術館 講堂	聴講者数	44人

講師・パネリスト等の 氏名(職名)	生尾慶太郎氏(元『みづゑ』編集長)		
セミナー・シンポジ ウム名	森から始まるリレートーク—暮らし、環境、 デザイン、そしてアートと「木」	開催日	平成22年5月21日、 22日、23日
場所	国立新美術館 講堂	聴講者 数	602人
講師・パネリスト等の 氏名(職名)	隈研吾(建築家/東京大学教授)、宮本茂紀(モデラー)、田中裕人(エリアデ ザイナー、文筆家/多摩川アートラインプロジェクト事務局長)、喜多俊之(プロ ダクトデザイナー/大阪芸術大学教授)、島崎信(北欧デザイン研究家、デザイ ナー/武蔵野美術大学名誉教授)、速水亨(速水林業代表/(社)日本林業経営 者協会会長)、國安孝昌(美術作家/筑波大学大学院准教授)、窪寺茂(建築 装飾技術史、文化財修復(建造物)/文化財建造物保存技術協会 技術・研修 センター長代理)、榎島みどり(植物生態学、景観デザイナー/目白大学教授、 東京農業大学客員教授)		
セミナー・シンポジ ウム名	シリーズ 美術雑誌と戦後美術—創り手 たちの証言 第3回 企業文化の発信地として	開催日	平成22年6月20日
場所	国立新美術館 講堂	聴講者 数	52人
講師・パネリスト等の 氏名(職名)	芦野公昭(元『アールヴィヴァン』編集者)		
セミナー・シンポジ ウム名	『オルセー美術館展 2010「ポスト印象派」』 関連シンポジウム「ポスト印象派とその時 代—1880~90年代のフランス絵画—」	開催日	平成22年7月24日
場所	国立新美術館 講堂	聴講者 数	250人
講師・パネリスト等の 氏名(職名)	三浦篤(東京大学教授)、六人部昭典(実践女子大学教授)、坂上佳子(早稲田 大学教授)、廣田治子(美術史家/多摩美術大学他講師)、喜多崎親(一橋大 大学教授)、長屋光枝(国立新美術館主任研究員)		
セミナー・シンポジ ウム名	シリーズ 美術雑誌と戦後美術—創り手 たちの証言 第4回 関西のアートシーン 制作と批評の交差点	開催日	平成22年8月1日
場所	国立新美術館 講堂	聴講者 数	28人

講師・パネリスト等の 氏名(職名)	原久子(元『A&C』編集者)		
セミナー・シンポジ ウム名	シリーズ 美術雑誌と戦後美術—創り手 たちの証言 第5回 美の荒廃から復興 へ	開催日	平成22年10月17日
場所	国立新美術館 講堂	聴講者 数	49人
講師・パネリスト等の 氏名(職名)	小川熙(元『藝術新潮』編集者)		
セミナー・シンポジ ウム名	シリーズ 美術雑誌と戦後美術—創り手 たちの証言 第6回 グローバリゼーショ ン時代のアートメディア	開催日	平成22年12月12日
場所	国立新美術館 講堂	聴講者 数	25人
講師・パネリスト等の 氏名(職名)	小崎哲哉(元『ART iT』編集長)		
セミナー・シンポジ ウム名	第5回アジア美術館長会議	開催日	平成22年9月27日～ 28日
場所	江蘇省美術館	聴講者 数	—人
講師・パネリスト等の 氏名(職名)	[参加者]林田英樹(館長), 加茂川幸夫(東京国立近代美術館長), 李梦迪(学芸 課事務補佐員)		
セミナー・シンポジ ウム名	ICOM第22回代表大会	開催日	平成22年11月7日～ 12日
場所	ワールド・エキスポ・センター	聴講者 数	—人
講師・パネリスト等の 氏名(職名)	[参加者]林田英樹(館長), 南雄介(学芸課長), 矢島絢(庶務課一般職員)		

② 我が国の作家, 美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力  
ア 東京国立近代美術館  
本館では, 「草間彌生展」(2011年5月～2012年9月, レイナ・ソフィア美術館,

ポンピドー・センター, テート・モダン, ホイットニー美術館), 「李禹煥展」(2011年6月-9月, グッゲンハイム美術館), 「田中敦子展」(2011年7月-2012年5月, アイコン・ギャラリー, カステージョ現代美術センター, 東京都現代美術館)開催のための作品調査(作品実見, 資料教示, 意見交換など)に協力した。

(フィルムセンター)

・韓国映像資料院(韓国・ソウル, FIAF加盟機関)と共同主催した「フィルムセンターの至宝—アニメの源へ:日本のアニメーション映画(1924~1952)」は,平成19度に開催した番組を基に,草創期から戦後直後までの日本アニメーション映画の動向を俯瞰するとともに,初期アニメーション映画のパイオニアの一人,大藤信郎の業績を顕彰するために,先方の学芸員との協議のうえ,21作品,4番組に再編成した番組で上映を行った(会期:平成22年6月2日~5日)。あわせて,研究員が上映に立会い,韓国人のアニメーション映画専門家との間で,日本における初期アニメーション映画の製作と受容,諸外国からの影響などについて討論を行うとともに,観客との間で質疑応答を行った。その内容は後日,韓国映像資料院のホームページにも掲載され(韓国語のみ),韓国における日本アニメーション映画の源流についての理解促進に寄与した。

・チネテカ・デル・フリウリ(イタリア・ウディネ, FIAF加盟機関)と共同主催した「ポルデノーネ無声映画2010 松竹の三巨匠—島津保次郎,清水宏,牛原虚彦」は,松竹の草創期を牽引した3人の映画監督の業績を顕彰すべく,2名の外国人日本映画研究者による企画に,フィルムセンター研究員が協力して,14作品による番組を編成(会期:平成22年10月2日~9日)。そのうち,13作品について,新たに英語字幕付35ミリプリントを作成・提供した。会期中は,フィルムセンター研究員2名がすべての上映に立会うとともに,今回の特集をテーマとしてシンポジウムに研究員が参加し,映画史的な背景や無声映画の保存状況について解説するとともに,参加者との間で質の高い質疑応答を行った。

イ 京都国立近代美術館

イタリア・モデナのジュゼッペ・パニーニ写真美術館の写真コレクションを紹介した「ローマ追想—19世紀写真と旅」展の交換展として,当館の写真コレクションの軸となる野島康三の写真作品を紹介する展覧会「野島康三展」が,本年度末よりジュゼッペ・パニーニ写真美術館に巡回している。

**(3) 国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等との保存・修復に関する情報交換**

ア 東京国立近代美術館

フィルムセンターでは,ドイツ・キネマテーク(FIAF加盟機関)における所蔵日

本映画の調査, 福岡市総合図書館(FIAF 加盟機関)所蔵の日本文化・記録映画, 神戸映画資料館所蔵の日本劇映画, 文化・記録映画, アニメーション映画の調査, 記録映画保存センター, IMAGICA 等を通じて日本劇映画, 文化・記録映画の所在情報を得た。

「近代歴史資料調査」で明らかになった『日本南極探検』(1912年)の残存フィルムについて, 先行調査の整理を行った。また, ライオン株式会社による回答資料に基き, 所蔵フィルムの現地調査を行った。

チネテカ・ディ・ボローニャ, ドイツ・キネマテーク, 韓国映像資料院, チネテカ・デル・フリウリ, 福岡市総合図書館(以上, FIAF 加盟機関), 広島市映像文化ライブラリー, 記録映画保存センター等との間で, 映画フィルムの保存・復元に関する調査や情報交換を行った。また, 香港電影資料館(FIAF 加盟機関), 国立民族学博物館, 東京文化財研究所, 京都府京都文化博物館等が主催するシンポジウムやワークショップに参加することで, 参加者との情報交換に務めた。

#### イ 国立西洋美術館

分析依頼として, J.P.ゲッティ美術館(ロサンゼルス)保存修復センターに, カミュー・ピサロ作《収穫》(西美所蔵作品)のメディウム分析を依頼するとともに, 分析法についてのトレーニングを受けた。

共同研究として共立女子大学と, 「LED ランプの美術館照明としての適正—演色性の評価—」, 歴史民俗博物館と, 「江戸から明治初期にかけての絵画材料および製作・流通に関する調査研究」をそれぞれ行った。

#### (4)所蔵作品の貸与等

##### ①作品の貸与

館名	貸出件数	貸出点数	特別観覧件数	特別観覧点数
東京国立近代美術館(本館)	70	277	128	337
東京国立近代美術館(工芸館)	28	249	34	126
京都国立近代美術館	60	540	81	155
国立西洋美術館	10	31	66	141
国立国際美術館	21	221	11	13
計	189	1,318	320	772

東京国立近代美術館本館では, 「橋本平八・北園克衛」(2010年8月~12月, 三重県立美術館, 世田谷美術館 6点), 「牧野虎雄展」(2011年2月~3月, 新潟県立近代美術館 7点)など, 開催館の長年の調査研究に基づく企画に, 核となる代表作を

含む複数点を貸与した。また、作品の貸与のほか引き続き写真閲覧制度(プリントスタディ)を実施した(利用件数 8 件, 閲覧者数 129 人, 閲覧作品数 286 点)。

『『日本画』の前衛 1938-1949』(2010 年 9 月～2011 年 3 月, 京都国立近代美術館, 広島県立美術館 13 点), 「国立美術館コレクションによる 陰影礼賛」(2010 年 9 月～10 月 51 点)など, 法人内の企画への出品を積極的に推進した。

京都国立近代美術館では, 島根県立美術館「生誕 120 年記念 河井寛次郎展 —すべてのものは自分の表現」および富山県水墨美術館「生誕 120 年記念 河井寛次郎展 ゆかりの作家 濱田庄司・芹澤銈介・棟方志功など」に 121 点の作品貸出を行った。また, 当館主任研究員が企画・監修を務めたパリ日本文化会館「近代日本工芸 1900-1930 —伝統と変革のはざまに」展に 21 点, 平成 21 年度に当館で「ローマ追想—19 世紀写真と旅」展を共催したジュゼッペ・パニーニ写真美術館の「野島康三展」に 112 点の作品貸出を行った。

国立西洋美術館では, 所蔵作品の貸出は前年度に比べ 1 件・15 点増加した。公立美術館への貸出は, 三菱一号館美術館の開館記念展「マネとモダン・パリ」, ブリヂストン美術館・ひろしま美術館の「セーヌの流れに沿って」展など, 8 件・12 点である。

国立国際美術館では, 「アメリカ抽象絵画の巨匠 バーネット・ニューマン」展(川村記念美術館), 「プライマリー・フィールドⅡ 絵画の現在—七つの〈場〉との対話」(神奈川県立近代美術館 葉山館), 「田窪恭治展 風景芸術」(東京都現代美術館)などからの貸与依頼に対し, 積極的に貸し出しを行った。

② 映画フィルム等の貸与

種別	貸出		特別映写観覧		複製利用	
	件数	点数	件数	点数	件数	点数
映画フィルム	71	181	93	351	38	74

種別	貸出		特別観覧	
	件数	点数	件数	点数
映画関連資料	0	0	28	167

海外への貸与のうち, 共同主催事業では, 韓国映像資料院(FIAF 加盟機関)との間で開催した「フィルムセンターの至宝—アニメの源へ: 日本の初期アニメーション映画(1923～1952)に対し日本アニメーション映画 21 本, チネテカ・デル・フリウリ(イタリア, FIAF 加盟機関)との間で開催した「ポルデノーネ無声映画祭 2010 松竹の三巨匠—島津保次郎, 清水宏, 牛原虚彦」に対し日本劇映画 14 本を提供した。また, 韓国映像資料院, 国家電影資料館(台湾), シネマテーク・フランセーズ等 FIAF 加盟機関及



	<p>びベルリン国際映画祭、パリ・シネマ国際映画祭、韓国シネマテーク協議会等が主催する日本人監督や俳優の特集上映に貸与を通じて協力するとともに、チネテカ・ディ・ポローニャや英国映画協会(ともに FIAF 加盟機関)が主催する映画祭には、世界でも貴重な外国劇映画のフィルムを貸与した。</p> <p>国内への貸与のうち、共同主催事業では、前年度に引き続き京都国立近代美術館との間で開催した「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films@home」の上映会に対し、『月よりの使者』(1934 年)等日本映画 15 本、『ベリッシマ』(1951 年)等外国映画 13 本を提供した。また、一般社団法人コミュニティシネマセンターとの間で前年度に引き続き開催した「生誕百年 映画監督 山中貞雄」では福岡市総合図書館(FIAF 加盟機関)を含む全 3 会場に日本劇映画 3 本のフィルムを提供した。また、川崎市市民ミュージアム、アテネ・フランセ文化センター等のシネマテーク、東京国際映画祭、京都映画祭、東京フィルメックス等の映画祭、新文芸坐、神保町シアター、ラピュタ阿佐ヶ谷等の名画座における特集上映に際し欠くことのできない作品の映画フィルムの貸与を行った。</p> <p>映画関連資料については、本年度は貸与の要請が寄せられなかった。</p>	
--	--	--

【(小項目)1-3-2】	ナショナルセンターとしての人材育成					【評定】 B																					
<p>【法人の達成すべき計画】</p> <p>(5)-1 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして、全国の小・中学校等や公私立美術館における教育普及活動の充実に資するため、先導的・先駆的な教材やプログラムの開発を行う。</p> <p>(5)-2 全国の小・中学校等における鑑賞教育や、全国の美術館における教育普及活動の活性化を図るため、指導にあたる人材の育成を目指した全国レベルの教員、学芸員等の研修を実施する。</p> <p>(6) 大学院生等を対象としたインターンシップ等の事業を進め、今後の美術館活動を担う中核的人材を育成する。</p> <p>(7) 全国の美術館等の運営に対する援助、助言を適時行うとともに、企画展の共同主催やそれに伴う共同研究及びその他の研修制度を通じて、関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努める。</p>										H18	H19	H20	H21														
<p>【インプット指標】</p> <table border="1" data-bbox="123 507 1310 673"> <thead> <tr> <th>(中期目標期間)</th> <th>H18</th> <th>H19</th> <th>H20</th> <th>H21</th> <th>H22</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>決算額(百万円)</td> <td>32</td> <td>42</td> <td>46</td> <td>48</td> <td>59</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td>63</td> <td>65</td> <td>61</td> <td>62</td> <td>60</td> </tr> </tbody> </table> <p>1) 決算額はセグメント情報 本部 教育普及事業費を計上している。((5)-1 は本部の教育普及事業費の一部であり、個別に計上できないため、本部の教育普及事業費全額を計上している。その他の事業については各館の教育普及事業費の一部であり、個別に計上できないため、本項目では計上していない。)</p> <p>2) 従事人員数は、すべての研究職員数及び研修担当事務職員数を計上している。その際、役員及び研修担当を除く事務職員は勘案していない。</p>						(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	決算額(百万円)	32	42	46	48	59	従事人員数(人)	63	65	61	62	60	B	B	B	B
(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22																						
決算額(百万円)	32	42	46	48	59																						
従事人員数(人)	63	65	61	62	60																						
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績				分析・評価																						

(5)美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして、次の事業を行ったか。

- ① 小・中学校の教員や学芸員が、学校や美術館で活用できる鑑賞教育用教材の普及を図ったか。
- ② 各地域の学校と美術館の関係の活性化を図るとともに、子どもたちに対する鑑賞教育の充実のため、各地域の鑑賞教育や教育普及事業に携わる小・中学校の教員と学芸員等が一堂に会し、グループ討議等を行う「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を国立美術館の研究員の研究成果と協働により実施したか。

あわせて、法人ホームページでの実施概要の掲載、記録集の発行、配布を通じ幅広い層への広報に努めたか。

期間：平成22年7月26日～28日

会場：東京国立近代美術館、国立新美術館

- ③ 上記②の研修について教員免許更新講習として実施したか。
- ④ これまでの参加者にアンケートとヒアリングを行い、次期中期計画での実施を検討したか。

(6)インターンシップ等の事業を次のとおり実施したか。

- ① 各館においてインターンシップ制度を実施したか。
- ② 東京国立近代美術館工芸館及びフィルムセンターにおいて、大学生の学芸員資格取得のための博物館実習を実施したか。
- ③ 国立西洋美術館において、大学院

(5) 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとしての活動

① 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施

平成 22 年度「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を実施し、その後本研修の記録集を作成、過去 4 年の研修参加者及び全国の美術館教育普及関係者に配布した(参加人数:112 名(小中学校教諭 74 名, 指導主事 11 名, 学芸員 27 名), 会期:7 月 26 日～28 日(3 日間), 会場:東京国立近代美術館(7 月 26 日), 国立新美術館(7 月 27 日・28 日))。

また、本研修において平成 22 年度「教員免許状更新講習」を実施した(教員免許状更新講習:受講者 12 名(全員に履修証明書を授与))。

東京国立近代美術館及び国立西洋美術館では、東京都図画工作研究会、東京都現代美術館(8 月 20 日, 9 月 2 日, 9 月 21 日, 於いて東京国立近代美術館)及び東京都中学校美術教育研究会との共催の教員研修(8 月 23 日, 於いて東京国立近代美術館)を実施した。

② 先駆的・実験的な教材やプログラムの開発

ア 国立美術館

鑑賞教材「アートカード」を各館から学校へ貸し出しを行ったほか、教員の研修などの機会をとらえて積極的に紹介した。

イ 東京国立近代美術館

本館では、コレクションこどもセルフガイド(A5カード型)に10種類加えて全30種類とし、展示替ごとに6枚程度を組み合わせて小中学生の来館者に無料配布した。また、「岡本太郎展こどもセルフガイド」を作成し、都内および近郊の小中学校に事前配布、館内配布を行った。

工芸館では、「所蔵作品展 こども工芸館／おとな工芸館 イロ×イロ」開催にあわせて、小学生を対象としたセルフガイドを作成し、都内及び近郊の小学校に事前配布するとともに、館内で来館者に配布した。同時に、より詳細な情報を記載したセルフガイドを作成・配布し、各成長段階あわせた自発的かつ高度な鑑賞を促すとともに、教職員向けの指導案としても提示した。また、中学生以上を対象として、染織を題材とするワークシートを作成・配布した。

ウ 国立西洋美術館

「音」と美術作品を関連させた新規の「びじゅつーる」の開発と運用及び画像(含動画)と音声による常設展の鑑賞ガイド「Touch the Museum」の開発と運用を行った。

(6)美術館活動を担う中核的人材の育成

館名	インターンシップ受入数	博物館実習受入数
----	-------------	----------

○美術館を活用した鑑賞教育の充実のため、美術館教育普及関係者や教員を対象とした研修会を実施するなど適切に行われたが、より一層の拡充が求められる。

○鑑賞教育の充実のために学校に教材を貸し出すなど、適切に実施されたと評価できる。

○公私立美術館等のニーズを踏まえたキュレーター研修の実施が求められる。

○企画展・上映会等の共同主催と共同研究については、目標は達成しているが、展覧会主体の協力の側面が強く、ナショナルセンターとして中期的な展望が望まれる。今後は、公立美術館などとの連携も視野に入れたネットワークの構築が必要である。

(東京大学大学院人文社会系研究科)と連携して西洋美術に関する教育を行ったか。

(7)公立美術館の学芸担当職員を対象としたキュレーター研修を実施し、その専門的知識及び技術の向上を図ったか。

東京国立近代美術館	本館	6	—
	工芸館	4	2
	フィルムセンター	1	15
京都国立近代美術館		0	—
国立西洋美術館		5	—
国立国際美術館		7	—
国立新美術館		6	—
計		29	17

**(7)全国の美術館等との連携・人的ネットワークの構築**

**① 企画展・上映会等の共同主催と共同研究**

館名	共同主催件数	共同研究件数
東京国立近代美術館(本館・工芸館)	3	5
東京国立近代美術館(フィルムセンター)	5	4
京都国立近代美術館	5	6
国立西洋美術館	2	2
国立国際美術館	5	5
国立新美術館	7	7
計	27	29

特記事項(共同研究によって特に得られた成果等)

(ア)東京国立近代美術館

(本館)

「小野竹喬展」では大阪市立美術館、笠岡市立竹喬美術館と、「上村松園展」では京都国立近代美術館と共同研究を行った。また、「麻生三郎展」では愛知県美術館、京都国立近代美術館と、「岡本太郎展」では川崎市岡本太郎美術館とそれぞれ共同研究を行い、さらに展覧会を共催した。

(工芸館)

「ルーシー・リー展」において国立新美術館と共同主催、共同研究を行った。とりわけ、東京国立近代美術館工芸課が企画・立案を行い、国立新美術館からの助言を参考に、会場の広さを十分に生かした展示構成を考えた。

(フィルムセンター)

・「発掘された映画たち 2010」:フィルムセンターの他, 国内各地のフィルム・アーカイブ機関・団体 7 つの参加を得て, 近年の復元作品や貴重コレクションの上映, トーク・イベント等を開催した。

・「EU フィルムデーズ 2010」: 駐日欧州連合代表部, EU 加盟国大使館・文化機関と協議し, 近年の EU 加盟各国の映画動向や作品の評価を踏まえながら作品選定を行った。

・「ぴあフィルムフェスティバルの軌跡 vol. 3」: ぴあ株式会社と協議しながら作品選定を行った。

・「第 32 回ぴあフィルムフェスティバル」: PFF パートナーズと協議し, 招待作品部門の作品選定を行った。

・「ポルトガル映画祭 2010 マノエル・ド・オリヴェイラとポルトガル映画の巨匠たち」: コミュニティシネマセンター, ポルトガル大使館と協議しながら作品選定を行った。

・「シネマアフリカ 2010」: シネマアフリカ 2010 実行委員会と協議しながら作品選定を行った。

・「アニメーションの先駆者 大藤信郎」展: アニメーション史研究家の協力を得て, 展示会の実現に至るまでの資料整理や展示品の選定を行った。また, ヤマムラアニメーションとの共同により, 大藤が遺した未完成作品『竹取物語』のセル画を用いて動画製作を行い, 35mm 版プリントを作成した。

・「生誕百年 映画監督 黒澤明」展: 黒澤プロダクションや龍谷大学の黒澤明デジタルアーカイブなどの協力を得て, 監督自身の遺した多数の貴重な資料を積極的に活用する形で展示品の選定を行った。

(イ) 京都国立近代美術館

「稲垣仲静・稔次郎兄弟展」では練馬区立美術館, 笠岡市立竹喬美術館と共同研究・共同開催を行い, 「パウル・クレー—終わらないアトリエ」展では東京国立近代美術館と共同研究・共同開催を行い, パウル・クレー・センター(ベルン), チューリヒ大学美術史研究所と共同研究を行った。

東京国立近代美術館フィルムセンター(NFC)との共同主催により, NFC 所蔵フィルムを用いた上映会「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films@home」を定期的で開催した。

(ウ) 国立西洋美術館

「ナポリ・宮廷の美—カポディモンテ美術館展」については京都文化博物館と, 「レンブラント 光の探求／闇の誘惑展」では名古屋市立美術館と共同企画により

展覧会を開催した。

(エ) 国立国際美術館

「ルノワール—伝統と革新展」ではポーラ美術館、国立新美術館と、「東芋：断面の世代」では横浜美術館と、「マン・レイ展」では国立新美術館と、「ウフィツィ美術館 自画像コレクション 巨匠たちの「秘めた素顔」1664-2010」では損保ジャパン東郷青児美術館と共同研究を行った。

とりわけ、「ウフィツィ美術館 自画像コレクション 巨匠たちの「秘めた素顔」1664-2010」に関連し、現代作家の草間彌生、杉本博司、横尾忠則の3者に自画像を制作してもらい、その3作品がウフィツィ美術館にコレクションに加わることとなった。このことは、損保ジャパン東郷青児美術館、東京大学、国立国際美術館とウフィツィ美術館による共同研究の成果を示すものである。

(オ) 国立新美術館

「ルノワール—伝統と革新」では国立国際美術館、ポーラ美術館と、「ルーシー・リー展」では東京国立近代美術館と、「オルセー美術館展 2010「ポスト印象派」」ではオルセー美術館、オーストラリア国立美術館と、「マン・レイ展」ではマン・レイ財団、国立国際美術館と共同企画及び共同研究を行った。「没後 120 年 ゴッホ展」では国立ゴッホ美術館、クレラー＝ミュラー美術館、名古屋市美術館と、「シュルレアリスム展」ではポンピドゥーセンターと共同企画及び共同研究を行った。このうち、「ルーシー・リー展」は東京国立近代美術館と、「オルセー美術館展 2010「ポスト印象派」」はオルセー美術館と、「シュルレアリスム展」はポンピドゥーセンターと共同主催で開催した。

また、「陰影礼讃」展は、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館との共同企画、共同開催であり、独立行政法人国立美術館の5館が、法人設立以来始めて連携して企画した展覧会で、「陰」・「影」の表現に焦点を当てた企画は高い評価を得た。

② キュレーター研修

館名	受入人数
東京国立近代美術館(本館・工芸館)	1
京都国立近代美術館	-
国立西洋美術館	-
国立国際美術館	-
国立新美術館	1
計	2

【(小項目)1-3-3】 フィルムセンターとしての取組状況		【評定】																					
<p>【法人の達成すべき計画】</p> <p>(8)-1 フィルムセンターは我が国の映画文化振興の中核的機関として、国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員として、引き続き国際的な事業等に取り組む。また、「日本映画情報システム」の運営に主体的に関わるとともに、「所蔵映画フィルム検索システム」を拡充する等、各種情報の収集・発信を行う。さらに、映画関係団体や大学等が行う各種取組について連携・調整の役割を積極的に果たすため、当該団体等との連絡会議を年に2～3回程度主宰する。</p> <p>(8)-2 フィルムセンターが、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、東京国立近代美術館の映画部門から、同館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館等とならぶ独立した一館となることを検討する。</p>		S																					
		H18	H19	H20	H21																		
		A	A	A	S																		
<p>【インプット指標】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>(中期目標期間)</th> <th>H18</th> <th>H19</th> <th>H20</th> <th>H21</th> <th>H22</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>決算額(百万円)</td> <td>1,506</td> <td>1,384</td> <td>1,365</td> <td>1,306</td> <td>1,490</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td>11</td> <td>11</td> <td>11</td> <td>11</td> <td>10</td> </tr> </tbody> </table> <p>1) 決算額はセグメント情報 東京国立近代美術館 経常費用を計上している。(本項目は、フィルムセンターの経費を個別に計上できないため、東京国立近代美術館の経費全額を計上している。)</p> <p>2) 従事人員数は、フィルムセンターの職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>						(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	決算額(百万円)	1,506	1,384	1,365	1,306	1,490	従事人員数(人)	11	11	11	11	10
(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22																		
決算額(百万円)	1,506	1,384	1,365	1,306	1,490																		
従事人員数(人)	11	11	11	11	10																		
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績	分析・評価																					
<p>(8)-1 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、我が国の映画文化振興の中核的機関として次のとおり実施したか。</p> <p>① 国内外で実施される各種映画祭や大学等の映画・映像に関する研究会等に協力したか。</p> <p>② 大学等との連携事業を図るための委員会において、連携事業の実施のための検討したか。</p> <p>③ 映画の保存事業等について助言を求めるとともに、当該事業に関連した人材育成のあり方について検討を進める</p>	<p>(8) 我が国の映画文化振興の中核的機関としてのフィルムセンターの活動</p> <p>① 国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員としての活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・フィルムセンター主幹が、平成21年5月30日にFIAF会長に就任した。</li> <li>・ノルウェー・オスロで4月30日から5月8日まで開催された第66回国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会議に、主幹及び研究員が出席し、シンポジウム等で発表を行った。</li> <li>・ユネスコ世界視聴覚文化遺産の日記念特別イベントとして「講演と上映 3D 映画の歴史」を開催した。</li> </ul> <p>② 日本映画情報システムの運営</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文化庁が実施する「日本映画情報システム」に対して、本年度も資料提供、当館公開データベースへの接続に関する協力を行った。</li> <li>また、「日本映画情報システム」に関連し、所蔵映画フィルムの調査カードおよびコマ抜き情報の閲覧を許可し、データベース作りへの協力を行った。</li> </ul>	<p>○フィルムセンターの活動実績は、同センター主幹が国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会長を務めていることをはじめ、海外の機関との連携など、国際交流に大きく貢献しており、極めて大きな意義が認められる。</p> <p>○フィルムセンターは、文字どおり我が国の映画文化振興の中核的機関として機能している。とりわけ調査研究成果の学会での発表や、雑誌等での論文掲載など、館外に積極的に発信しており、極めて高く評価できる。</p>																					

<p>ため、識者や関係者を集め会議を開催したか。</p> <p>④ 文化庁が実施する映画関連の事業に、施設の提供等で協力したか。</p> <p>⑤ 文化庁が実施する「日本映画情報システム」事業に協力したか。</p> <p>⑥ 相模原市及び独立行政法人宇宙航空研究開発機構との文化事業等協力協定に基づき、資源及び情報等を活用し、文化事業を連携・協力して行ったか。</p> <p>⑦ 第66回国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会議に研究員等が出席し、シンポジウム等で発表したか。</p> <p>(8)-2 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、国立美術館内における独立した一館となることを含むさまざまな独立の可能性を探るべく、その機能拡充について、検討を行う。</p>	<p><b>③ 所蔵映画フィルム検索システムの拡充</b> 「所蔵映画フィルム検索システム」については、本年度中に日本劇映画のレコード481件を新たに公開し、公開件数は5,627件となった。</p> <p><b>④ 映画関係団体等との連携</b> ・国内では、福岡市総合図書館(FIAF加盟機関)、京都府京都文化博物館、川崎市市民ミュージアム、鎌倉市川喜多映画記念館、早稲田大学演劇博物館、山口情報芸術センター、東京都写真美術館、神戸映画資料館等へ、映画フィルムの貸与を通じて協力を行った。海外では、韓国映像資料院及びチネテカ・デル・フリウリ(ともにFIAF加盟機関)との共催事業において、フィルムセンター研究員が上映会に参加し、ディスカッションへの参加や質疑応答を行った。また、オーストラリア国立映画音響アーカイブ、韓国映像資料院、国家電影資料館(台湾)、シネマテーク・フランセーズ、オーストリア映画博物館、チネテカ・ディ・ポローニャ(イタリア)、英国映画協会(以上FIAF加盟機関)等へ、映画フィルムの貸与を通じて協力を行った。加えて、香港電影資料館、早稲田大学演劇博物館、東京大学総合研究博物館、東京文化財研究所等フィルム・アーカイブや博物館、研究機関、立命館大学映像学部等教育機関、日本映像学会等関連学会、映画産業団体連合会に「映画の保存と復元に関するワークショップ」等が主催するシンポジウム、講演会、授業等に研究員が参加し、研究成果の発表やディスカッションを通じて協力した。 ・前年度に実施したアンケートに基づいて「全国映画資料館録」を刊行し、映画関連資料を所蔵する全国各地の機関にかかわる情報集積と公開に取り組んだ。</p> <p><b>⑤ フィルムセンターの東京国立近代美術館からの独立の検討</b> 独立の可能性を探る内部打合せを2回実施した。 第1回:平成23年1月20日(木) 第2回:平成23年1月21日(金)</p>	
--	--	--



## S 評定の根拠(A 評定との違い)

### 【定量的根拠】

まず、一般へのサービス提供の根幹をなす上映会については、年 5～6 番組程度、105,500 人の入館者が目標とされていたのに対し、実績としては 15 番組、入館者 109,098 人を数え、(東日本大震災の影響で一部番組の会期短縮および上映回数の削減を余儀なくされたにもかかわらず)所期の目標を大きく上回っている。展覧会についても、同様に震災の影響を受けらる中で、入館者の目標 11,000 人に対して 13,552 人の実績を上げている。

また、海外機関との連携を含む優れた調査研究を実施しているのみならず、それらの研究成果を、学会等での発表や雑誌等への論文掲載などのかたちで館外に積極的に発信しており、その件数が他の国立美術館のそれに比して群を抜いていることも特筆に値する。

### 【定性的根拠】

上映会・展覧会の開催から、調査研究の推進やフィルム・資料の貸与に至るまで、フィルムセンターがその平素の活動を通じてわが国で唯一の国立の映画機関として、日本における映画文化振興の中核を担っていることは明らかであるが、昨年度はさらに、同センター主幹がアジア人としては初めて、国際フィルム・アーカイヴ連盟(FIAF)会長に就任した。

これは無論、同連盟の正会員として、これまでフィルムセンターが積み重ねてきた努力の賜物にほかならないが、これを機に、その存在と活動がいっそう高い国際的評価を得ることになろう。

他方で、本年度から新たにフィルムセンターでの上映会がキャンパスメンバーズの対象に加えられたことは、若年層の観客を開拓し、それを通じて映画文化に対する国民の理解を永続的に高めてゆく上で有効な方策と認められる。学生・生徒・児童を対象とした教育普及活動のいっそうの充実が望まれる。

【(大項目)2】	Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	【評定】			
		A			
		H18	H19	H20	H21
		A	A	A	A

【(小項目)2-1】	業務の効率化の状況	【評定】			
	【法人の達成すべき目標(計画)の概要】	A			
	<p>1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き5年期間中に一般管理費15%以上、業務経費5%以上の業務の効率化を図る。</p> <p>具体的には下記の措置を講ずる。</p> <p>(1)各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>(2)使用資源の削減</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・省エネルギー(5年計画中1年に1.03%の減少)</li> <li>・廃棄物減量化(排出量を5年期間中5%減少)</li> <li>・リサイクルの推進</li> </ul> <p>(3)施設有効使用の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・美術館施設の利用推進</li> </ul> <p>(4)民間委託の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一般管理部門を含めた組織・業務の見直しを行い、民間開放をさらに積極的に進める。</li> <li>・館の広報・普及業務について民間委託を推進する。</li> </ul> <p>(5)競争入札の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・契約業者の競争を一層推進することにより、経費の効率化を図る。</li> </ul> <p>2 外部有識者も含めた事業評価を年1回以上実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。</p> <p>3 国立美術館が管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとる。</p> <p>4 「行政改革の重要方針」(平成17年12月24日閣議決定)を踏まえ、人件費については、平成22年度にいて、平成17年度に比較して、5%以上削減する。ただし、今後の人事院勧告を踏まえた給与改定分については削減対象より除く。また、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額とし、退職金、福利厚生費は含まない。</p> <p>また、民間賃金との地域差、給与カーブのフラット化、勤務実績の給与への反映を内容とする国家公務員の給与構造改革を踏まえて、給与体系の見直しに取り組む。</p>	H18	H19	H20	H21
		A	A	A	A

評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績	分析・評価																																																																					
<p>1 業務運営の一層の効率化を進めるため、次のような措置を講じたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>国立美術館5館の事業成果を取りまとめた国立美術館年報について、本部において編集し発行したか。</li> <li>国立美術館5館の情報システムネットワークの一元化を基盤として、引き続きTV会議システム、グループウェア等の活用による効率化を進めたか。</li> </ul>	<p>1 業務の効率化のための取り組み</p> <p>(1)各美術館の共通的な事務の一元化 引き続き、事務局長のトップマネジメントの下、各館の事務組織が有機的に連携し、効果的・効率的な業務を遂行するとともに、各館で行っていた出版物のうち年報について法人本部において一元的に実施した。</p> <p>また、法人内で採用しているVPN(Virtual Private Network:暗号化された通信網)を用いたグループウェア及びテレビ会議システム、特にテレビ会議システムについては、定期的な会議等に本格的な利用を開始し、東日本大震災後は、本システムを利用し本震災に伴う節電対策等の臨時会議を実施している。 本年度テレビ会議システムの利用実績:会議 14 回/臨時館長会議 5 回)</p> <p>(2)使用資源の削減</p> <p>① 省エネルギー(5年計画中1年に1.03%の減少)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●使用量, 使用料金の削減割合(対前年度比(下段括弧書きは対平成17年度比))</li> </ul> <table border="1" data-bbox="622 643 1570 1251"> <thead> <tr> <th rowspan="2">館名</th> <th colspan="3">使用量</th> <th colspan="3">使用料金</th> </tr> <tr> <th>電気</th> <th>ガス</th> <th>合計</th> <th>電気</th> <th>ガス</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館本館</td> <td>86.2% (76.9%)</td> <td>87.9% (66.2%)</td> <td>87.2% (70.0%)</td> <td>94.7% (85.7%)</td> <td>96.8% (92.9%)</td> <td>95.4% (87.9%)</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館工芸館</td> <td>100.3% (98.1%)</td> <td>- (-)</td> <td>100.3% (98.1%)</td> <td>105.8% (91.9%)</td> <td>- (-)</td> <td>105.8% (91.9%)</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター</td> <td>100.8% (115.6%)</td> <td>- (-)</td> <td>100.8% (115.6%)</td> <td>107.6% (110.4%)</td> <td>- (-)</td> <td>107.6% (110.4%)</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>115.4% (92.6%)</td> <td>168.2% (98.6%)</td> <td>141.7% (96.0%)</td> <td>110.0% (92.7%)</td> <td>155.9% (124.3%)</td> <td>120.6% (100.3%)</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>100.2% (97.6%)</td> <td>103.3% (100.0%)</td> <td>102.0% (99.0%)</td> <td>101.6% (96.8%)</td> <td>114.7% (125.3%)</td> <td>105.9% (105.3%)</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>97.3% (86.8%)</td> <td>- (-)</td> <td>97.3% (86.8%)</td> <td>97.6% (93.6%)</td> <td>- (-)</td> <td>97.6% (93.6%)</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>91.5% (83.8%)</td> <td>92.6% (88.9%)</td> <td>92.1% (86.3%)</td> <td>98.4% (83.8%)</td> <td>99.0% (82.1%)</td> <td>98.6% (83.3%)</td> </tr> <tr> <td>法人全体</td> <td>95.1% (88.9%)</td> <td>97.9% (88.7%)</td> <td>96.4% (88.8%)</td> <td>100.2% (90.0%)</td> <td>105.6% (95.7%)</td> <td>101.5% (91.4%)</td> </tr> </tbody> </table> <p>※東京国立近代美術館工芸館・フィルムセンター及び国立国際美術館は、ガス設備を設置していない。 ※使用量の合計は、電気 1kwh あたり 3.6MJ、ガス 1 m<sup>3</sup>あたり 44.8MJ(資源エネルギー庁「エネルギー源別標準発熱量表」による。)に換算して合計したものである。 ※国立新美術館の下段括弧書きは、平成 19 年度がフルオープンであるため、対平成 19 年度比で計上している。</p>	館名	使用量			使用料金			電気	ガス	合計	電気	ガス	合計	東京国立近代美術館本館	86.2% (76.9%)	87.9% (66.2%)	87.2% (70.0%)	94.7% (85.7%)	96.8% (92.9%)	95.4% (87.9%)	東京国立近代美術館工芸館	100.3% (98.1%)	- (-)	100.3% (98.1%)	105.8% (91.9%)	- (-)	105.8% (91.9%)	東京国立近代美術館フィルムセンター	100.8% (115.6%)	- (-)	100.8% (115.6%)	107.6% (110.4%)	- (-)	107.6% (110.4%)	京都国立近代美術館	115.4% (92.6%)	168.2% (98.6%)	141.7% (96.0%)	110.0% (92.7%)	155.9% (124.3%)	120.6% (100.3%)	国立西洋美術館	100.2% (97.6%)	103.3% (100.0%)	102.0% (99.0%)	101.6% (96.8%)	114.7% (125.3%)	105.9% (105.3%)	国立国際美術館	97.3% (86.8%)	- (-)	97.3% (86.8%)	97.6% (93.6%)	- (-)	97.6% (93.6%)	国立新美術館	91.5% (83.8%)	92.6% (88.9%)	92.1% (86.3%)	98.4% (83.8%)	99.0% (82.1%)	98.6% (83.3%)	法人全体	95.1% (88.9%)	97.9% (88.7%)	96.4% (88.8%)	100.2% (90.0%)	105.6% (95.7%)	101.5% (91.4%)	<p>○グループウェア及びテレビ会議システムの利用は、前事業年度に記載したとおり、情報の共有化、出張費等の削減、役職員の時間の有効利用などの業務の効率化につながる。当事業年度においては、東日本大震災の対応に利用するなど有効に活用していると評価できる。今後も一層の活用が期待される。</p> <p>○国立西洋美術館と近隣施設との連携は望ましく、今後も実施することが望まれる。</p> <p>○電気及びガスの使用量は、省エネルギーへの取り組みの効果により、法人全体では着実に減少している。しかし、国立西洋美術館の電気及びガスの使用量は、平成 21 事業年度に引続き増加している。平成 21 事業年度は新館の空調工事完了によるフルオープン、平成 22 年事業年度は本館の空調設備設置年が古いことと猛暑の影響であるが、東日本大震災による節電の対応のためにも、空調設備交換等による省エネルギーの検討が必要である。</p>
館名	使用量			使用料金																																																																			
	電気	ガス	合計	電気	ガス	合計																																																																	
東京国立近代美術館本館	86.2% (76.9%)	87.9% (66.2%)	87.2% (70.0%)	94.7% (85.7%)	96.8% (92.9%)	95.4% (87.9%)																																																																	
東京国立近代美術館工芸館	100.3% (98.1%)	- (-)	100.3% (98.1%)	105.8% (91.9%)	- (-)	105.8% (91.9%)																																																																	
東京国立近代美術館フィルムセンター	100.8% (115.6%)	- (-)	100.8% (115.6%)	107.6% (110.4%)	- (-)	107.6% (110.4%)																																																																	
京都国立近代美術館	115.4% (92.6%)	168.2% (98.6%)	141.7% (96.0%)	110.0% (92.7%)	155.9% (124.3%)	120.6% (100.3%)																																																																	
国立西洋美術館	100.2% (97.6%)	103.3% (100.0%)	102.0% (99.0%)	101.6% (96.8%)	114.7% (125.3%)	105.9% (105.3%)																																																																	
国立国際美術館	97.3% (86.8%)	- (-)	97.3% (86.8%)	97.6% (93.6%)	- (-)	97.6% (93.6%)																																																																	
国立新美術館	91.5% (83.8%)	92.6% (88.9%)	92.1% (86.3%)	98.4% (83.8%)	99.0% (82.1%)	98.6% (83.3%)																																																																	
法人全体	95.1% (88.9%)	97.9% (88.7%)	96.4% (88.8%)	100.2% (90.0%)	105.6% (95.7%)	101.5% (91.4%)																																																																	

●特記事項(増減の理由等)

国立美術館については、業務の特殊性から、展覧会場における空調や美術作品収蔵庫における一定温湿度維持等が必要とされ削減が難しいものの、引き続き、美術作品のない区画におけるの設定温度の適格化(夏季28℃、冬季20℃)、夏季における服装の軽装化、不使用設備機器類のこまめな停止等、職員等の意識の啓発によりエネルギーの削減に努めた。

また、本年度は、エネルギーの使用の合理化に関する法律に基づき、エネルギー管理統括者を選任し、省エネルギー計画策定等に向けた体制整備を行うとともに、各館において可能な箇所から、蛍光灯のLED照明への交換、ガラス面への断熱加工を行い、省エネルギー効果を高めた。特に、国立新美術館においては、エネルギー効率の高い空調制御機器への更新工事を行い、エネルギー使用量を削減するとともに、引き続き、BEMS(Building and Energy Management System)により、詳細なエネルギーの使用量と室内環境の把握を行い、その情報を定例的に開催する省エネルギー推進会議へ報告し、省エネルギー対策に生かすなどの取り組みを行っている。

本年度における使用量の主な増減理由は、京都国立近代美術館が、前年度に収蔵ラック増設等工事に伴う休館により、平年と比較して大幅にエネルギー使用量が減少したことから、本年度は前年度と比較すると大幅に増加している。また、東京国立近代美術館工芸館・同フィルムセンター及び国立西洋美術館本館は、空調設備設置年が古いことからエネルギーの使用効率が低く、猛暑の影響で前年度より増加している。

なお、対平成17年度(国立新美術館においてはフルオープンが平成19年度のため、対平成19年度)と比較すると、国立美術館全体で、使用量は△11.3%、使用料金は△8.6%の削減を図っている。

② 廃棄物減量化(排出量を5年期間中5%減少)

- 排出量、廃棄料金の削減割合(対前年度比(下段括弧書きは対平成17年度比))

館名	排出量			廃棄料金	
	一般廃棄物	産業廃棄物	合計	一般廃棄物	産業廃棄物
東京国立近代美術館本館	61.7% (31.3%)	75.0% (63.0%)	66.5% (39.3%)	61.7% (43.8%)	81.3% (99.3%)
東京国立近代美術館工芸館	91.7% (89.7%)	102.3% (80.7%)	93.1% (88.3%)	91.7% (125.5%)	110.9% (127.2%)
東京国立近代美術館フィルムセンター	152.6% (49.3%)	122.8% (31.9%)	136.9% (39.2%)	89.4% (27.0%)	122.8% (18.6%)
京都国立近代美術館	12.7% (15.2%)	6.0% (4.1%)	10.0% (9.2%)	- (-)	74.7% (47.9%)
国立西洋美術館	100.5% (115.1%)	116.3% (148.6%)	106.6% (127.3%)	81.8% (62.6%)	75.6% (58.4%)
国立国際美術館・国立新美術館	65.6% (56.0%)	68.7% (47.5%)	66.8% (49.4%)	82.6% (58.4%)	81.4% (48.8%)

○廃棄物排出量は、法人の努力により、法人全体では減少しており評価できる。

館を除く法人全体					
----------	--	--	--	--	--

※京都国立近代美術館は、一般廃棄物の処理を清掃業者に一括して委託しているため、廃棄料金が算出できない。  
 ※国立国際美術館の産業廃棄物は、平成19年度に数量の計上方法が変更となった(業者が変わり、測定単位がkgからm<sup>3</sup>になった)ため、平成17年度と平成22年度の比較ができず、合計から除外している。  
 ※国立新美術館は、平成19年度に開館しており、平成17年度と比較できないため、合計から除外している。

**【参考】**

国立国際美術館	99.3% (101.7%)	- (-)	99.3% (101.7%)	100.0% (100.0%)	203.8% (6.5%)
国立新美術館	102.5% (87.1%)	92.3% (49.4%)	100.2% (75.4%)	157.5% (108.1%)	75.0% (136.5%)

※平成17年度の国立国際美術館は、平成16年度の移転後の整理のため、産業廃棄物が大量に発生したことから、平成22年度と比較して廃棄料金が大幅に差が出ている。  
 ※国立新美術館の下段括弧書きは、平成19年度に開館しており、平成17年度と比較できないため、対平成19年度比で計上している。

● 特記事項(増減の理由等)

国立美術館においては、開館日数や来館者数の増減による影響など、業務の性質上、廃棄物の計画的な削減が難しいものの、引き続き、事務・研究部門における電子メール、グループウェアの活用による通知文書の発信やサーバ保存文書の共同利用によるペーパーレス化、両面印刷の促進等による用紙の節減に努めるとともに、古紙の分別回収による再資源化を進めることにより、廃棄物の削減を図った。

一般廃棄物は、国立新美術館における来館者数の増加、東京国立近代美術館フィルムセンター及び国立西洋美術館における館内整理等により、前年度と比べ増加した。産業廃棄物については、不要となった展示ケースや展示パネル等の廃棄により増加しているものの、京都国立近代美術館の排出量が大幅に減少したため、法人全体では前年度と比べ減少した。一方で、京都国立近代美術館の産業廃棄物廃棄料金については、汚泥処理の委託経費を含んでいるため、排出量の減少と比較して料金は減少していない。

また、国立西洋美術館では、近隣施設(東京国立博物館及び東京藝術大学)と連携して、物品の共同調達及び廃棄物処理業務の共同委託を実施し、効率化等を図っている。

なお、対平成17年度(国立新美術館においてはフルオープンが平成19年度のため、対平成19年度)と比較すると、国立美術館全体では対排出量は△37.6%、廃棄料金は△31.6%と削減が図られている。

③ リサイクルの推進

前年度に引き続き、古紙含有率100%のコピー用紙の利用、古紙の裏

・ 施設の有効利用のため、引き続き外部貸出による講堂等の利用率の向上及び閉館時等におけるエントランスロビー等の活用を図ったか。

面利用による再利用，廃棄物の分別，OA機器等トナーカートリッジのリサイクルによる再生使用を行い，リサイクルの推進に努めた。

(3) 美術館施設の利用推進  
外部への施設の貸出

各館の貸出施設名	貸出日数
東京国立近代美術館本館(講堂)	26日
東近美フィルムセンター(小ホール)	15日
東近美フィルムセンター(会議室)	10日
京都国立近代美術館(講堂)	8日
京都国立近代美術館(会議室)	5日
国立西洋美術館(講堂)	19日
国立西洋美術館(会議室)	11日
国立国際美術館(講堂)	65日
国立国際美術館(会議室)	20日
国立新美術館(講堂)	60日
国立新美術館(研修室A)	81日
国立新美術館(研修室B)	56日
国立新美術館(研修室C)	34日
計	410日

●特記事項

当該施設については、展覧会事業にあわせた講演会やシンポジウム等に使用するものであるが、事業に差し支えない範囲で、外部への貸出を行った。

講堂については、引き続き利用促進PRのための利用案内をホームページに掲載し利用の促進を図った。フィルムセンターでは、小ホールについても、可能な限り外部への貸出を行った。

(4) 民間委託の推進

① 一般管理部門を含めた組織・業務の見直しと民間委託の推進  
次のとおり民間委託を行い業務の効率化を図った。

(ア) 会場管理業務，(イ) 設備管理業務，(ウ) 清掃業務，(エ) 保安警備業務，(オ) 機械警備業務，(カ) 収入金等集配業務，(キ) レストラン運営業務，(ク) アートライブラリ運営業務，(ケ) ミュージアムショップ運営業務，(コ) 美術情報システム等運営支援業務，(サ) ホームページサーバ運

・ 民間競争入札による民間委託を導入した東京国立近代美術館本館及び工芸館の管理・運営業務(展示事業の企

○リサイクルの推進は適切に実施されており評価できる。

○民間委託の推進については、「国立西洋美術館の省エネルギー対策に関する支援業務」を始め、新たな外部委託を行っている。今後は、民

<p>画等を除く)の成果について検証等を行い、その結果を踏まえ、対象範囲等の拡大について検討したか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>対象業務の拡大や契約の包括化により、引き続き競争入札を推進したか。</li> </ul> <p>国立美術館契約監視委員会における随意契約等に関する意見を踏まえ、契約方式の見直し等を実施したか。</p>	<p>用管理業務、(シ)電話交換業務、(ス)展覧会アンケート実施業務、(セ)省エネルギー対策支援業務、(ソ)展覧会情報収集業務</p> <p>東京国立近代美術館本館及び工芸館の管理運営業務(展示事業の企画等を除く。)については、引き続き、「競争の導入による公共サービスの改革に関する法律」に則り実施した。</p> <p>また、平成22年度は新たに次の業務について民間委託を行い、業務の効率化を図った。国立西洋美術館では、省エネルギー対策に関する支援業務を委託した。国立新美術館では、展覧会情報収集業務を委託した。京都国立近代美術館では平成23年度から実施する建物維持管理に関する業務並びに常駐警備及び出札・集札・看視等業務をそれぞれ一括して委託した。</p> <p>② 広報・普及業務の民間委託の推進</p> <p>次のとおり民間委託を行い業務の効率化を図った。</p> <p>(ア)情報案内業務、(イ)広報物等発送業務、(ウ)交通広告等掲載、(エ)ホームページ改訂・更新業務、(オ)インターネット検索サイト、(カ)ラジオCM等を利用した総合的な広報宣伝業務、(キ)雑誌「びあ」広告掲載年間契約及びチケット販売委託、(ク)講堂音響設備オペレーティング業務</p> <p>(5)競争入札の推進</p> <p>① 一般競争入札の実績</p> <p>ア 契約件数及び契約金額(少額随契を除く) 263件, 13,363,683,103円</p> <p>イ 契約種別毎の年間契約数</p> <p>①競争契約 100件(38.0%), 4,781,340,409円(35.8%)</p> <p>【内訳】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>一般競争入札 100件, 4,781,340,409円</li> </ul> <p>②随意契約 163件(62.0%), 8,582,342,694円(64.2%)</p> <p>【内訳】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>同一所管公益法人等 3件, 5,993,505,637円</li> <li>同一所管公益法人等以外の法人等 160件, 2,588,837,057円</li> <li>(うち美術作品の購入に関する随意契約 88件, 1,638,254,182円)</li> </ul> <p>ウ 公益調達の適正化(財計第2017号)等に即した実施状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>公共調達に関する問い合わせの総合窓口を本部事務局(財務担当)に設置した。</li> <li>監査計画等への随意契約の重点監査の記載については、平成23年度より実施する予定である。</li> </ul> <p>●特記事項</p> <p>本年度において、随意契約の占める割合は、件数では全体の62.0%、金額では全体の64.2%となっている。このうち、同一所管公益法人等の契約(3件, 5,993,505,637円)については、国立新美術館における土地購入及び土地借料が主なものである。</p>	<p>間委託が人件費・経費の削減や業務の効率化にどれだけ資するか検証する必要がある。</p> <p>○法人の性質上、随意契約によらざるを得ない契約を除き、競争入札は推進されている。また、独立行政法人国立美術館契約監視委員会による契約の点検見直しが行われており、特段の問題はないと判断している。平成23年度から実施予定の監査計画等への随意契約の重点監査において、競争入札の推進に伴う価格面と質的な面での効果を検証することが望まれる。</p>
--	--	---

<p>2 外部の有識者による評価及び職員の意識改善</p> <p>① 運営委員会及び外部評価委員会による業務の実績に関する評価を組織、事務、事業等の改善に反映させたか。</p> <p>② 会計・人事等の研修を通じて職員の意識改革と資質の向上を図り、あわせて組織の活性化を図ったか。</p> <p>③ 人事評価制度の見直しについて、国及び他の独立行政法人の状況等を参考とし、さらなる制度設計の検討を行ったか。</p>	<p>また、同一所管公益法人等以外の法人等の契約(160件、2,558,837,057円)の中には、本法人特有の業務である美術作品の購入に関する随意契約(88件、1,638,254,182円)が含まれている。これらの理由により、本法人の随意契約の割合は高くなっているが、これらの特殊な事由を除く比率で比較すると、随意契約の割合は件数で全体の27.4%、金額は全体の7.1%となる。</p> <p>また、随意契約見直し計画で競争性のある契約に移行することとしていた案件は、本年度において全て競争契約へ移行済みとなっており、本年度において新規に発生した案件に関しても、真にやむを得ない場合を除き、全て一般競争契約や公募、企画競争等の競争性のある契約を行っている。</p> <p>なお、本年度も引き続き独立行政法人国立美術館契約監視委員会を開催し、監事及び外部有識者の意見を踏まえ、契約の点検見直しを行ったところである。</p> <p><b>2 事業評価及び職員の研修等</b></p> <p><b>① 外部有識者による事業評価</b></p> <p>ア 本部 独立行政法人国立美術館運営委員会を2回(平成22年7月14日及び平成23年3月10日)開催し、平成21年度事業実績並びに、平成22年度事業の実施状況及び23年度事業計画(案)について説明聴取の上、意見交換を行った。 また、独立行政法人国立美術館外部評価委員会を3回(平成22年4月21日、5月12日及び6月9日)開催し、平成21年度事業実績について説明聴取の上、審議し評価報告書を取りまとめた。</p> <p>イ 東京国立近代美術館 評議員会(美術・工芸部会)を2回(平成22年7月6日及び平成23年2月16日)、評議員会(映画部会)を2回(平成22年6月29日及び平成23年2月24日)開催し、平成21年度事業実績、平成22年度事業の実施状況及び平成23年度事業計画(案)について説明聴取の上、意見交換を行った。</p> <p>ウ 京都国立近代美術館 評議員会を1回(平成22年7月21日)開催し、平成21年度事業実績、平成22年度年度計画及び事業実施状況について説明聴取の上、意見交換を行った。</p> <p>エ 国立西洋美術館 評議員会を1回(平成22年9月13日)開催し、平成21年度事業報告及び平成22年度事業計画について説明聴取の上、意見交換を行った。</p> <p>オ 国立国際美術館 評議員会を1回(平成23年3月24日)開催し、平成22年度事業報告及び平成23年度事業計画について説明聴取の上、意見交換を行った。</p> <p>カ 国立新美術館 評議員会を1回(平成22年8月16日)開催し、平成21年度事業実績、平成22年度事業実施状況及び平成24年度以降及び平成29年度以降の公募展事業について説明聴取の上、意見交換を行った。</p> <p><b>3 管理情報の安全性向上</b> 個人情報保護については、引き続き、個人情報保護に関する説明会への参加や情報漏えいの事例等の通知を行うとともに、個人情報ファイルの保有状況調査の実施</p>	<p>○事業評価のため独立行政法人国立美術館運営委員会や外部評価委員会、評議員会を開催し、意見交換を行うなど、適正に実施されたと認められる。</p>
---	---	--



3 国立美術館が管理する情報の安全性の向上のため、コンピュータウイルスに関連する情報を職員に周知し、情報セキュリティへの意識向上に継続して努めたか。

また、いわゆる情報セキュリティポリシーにあたる「国立美術館情報資産安全対策基本方針」、「国立美術館情報資産安全管理規則」を踏まえ、安全管理のための実施細則の策定を進めたか。

4 人件費については、平成17年度に比較して、5%以上の削減を達成できるよう、より一層、①組織の見直し、②人員の削減等に努めたか。

等にあわせ、重要書類は鍵のかかる保管庫に納めること、個人情報を取り扱う業務中に離席する際は、当該書類やパソコン画面を他の職員等から見られないような措置を講じること、廃棄する際はシュレッダーにかけることなど、厳格に書類管理を行った。また、あわせてウイルス対応ソフトウェアの導入の徹底や最新のプログラムへの更新を随時行うなど、電子メール等による外部からのウイルス進入を回避する安全策を講じた。  
なお、独立行政法人国立美術館保有個人情報管理規則第50条に基づき、当法人の保有個人情報の管理状況について、平成22年6月21日に監事による監査を実施した。

#### 4 人件費の抑制, 給与体系の見直し

##### ① 人件費決算

決算額 922,677 千円(対平成21年度比較 95.4%)

・人件費は常勤職員を対象とし、退職金、福利厚生費を含まない。

##### ●特記事項

退職者の後任不補充、新規採用や人事交流による職員の若返り等により、前年度と比較して4.6%減少した。なお、「行政改革の重要方針」(平成17年12月24日閣議決定)による人件費の削減への取り組みについては、平成22年度は、基準年度に比べ△9.2%(純減率)を達成している。

##### 1. 経過年数に応じた達成状況

行革推進法、「行政改革の重要方針」(平成17年12月24日閣議決定)による人件費削減の取組

①中期目標において、平成18年度から5年間、国家公務員に準じた人件費削減の取組を行うとともに、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを進めた。

②中期計画において、人件費については、退職手当、福利厚生費及び今後の人事院勧告を踏まえた給与改定分を除き、平成22年度において、平成17年度予算額(1,074,071千円)に比較して、5%以上削減することとした。

総人件費改革の取組状況

年 度	基準年度 (平成17年度)	平成18 年度	平成19 年度	平成20 年度	平成21 年度	平成22 年度
給与、報酬等支給総額 (千円)	1,016,067	1,016,276	1,023,008	976,216	967,616	922,677
人件費削減率 (%)		0.0	0.7	△3.9	△4.8	△9.2
人件費削減率(補正值) (%)		0.0	0.0	△4.6	△3.1	△6.0

○管理する情報の安全性の向上のための施策は実施されていると認められる。ただし、IT 監査を実施し、セキュリティの弱点の把握とその改善を検討することが望まれる。また、東日本大震災の経験からデータやシステムのバックアップが十分か検証する必要がある。

○新規採用や人事交流による職員の若返り等を実施しながら、引き続き人件費を削減していることは、大変な努力をされていると評価する。ただし、業務の効率化が人員削減実施に直結しては組織を活性化できる優秀な人材の減少や従業員等の士気を損なうおそれなど、非常に課題が多い。美術館博物館では研究者の経験や学識が直接に組織の活動を支えており、国内外との交流も人的次元での信頼関係に支えられている以上、「アソシエイトフェロー」制度の活用も含めて、法人内での慎重な対応が求められる。

2. 達成するために実施した取り組み内容  
退職者の後任不補充, 人事交流による職員の若返り等により, 前年度と比較して4.6%減少した。

3. 今後の取り組み

引き続き, 定年退職者の後任不補充を行うことにより, 平成22年度の給与, 報酬等支給予定額は, 平成17年度の実績額(1,016,067千円)に対して, 5%以上の削減を達成できた。

② 給与体系の見直し

国家公務員の給与等を考慮して, 平成18年4月から俸給表の水準を全体として平均4.8%引下げるとともに, 級の構成の見直し, きめ細かい勤務実績の反映を行うため号俸の4分割を行ったほか, 調整手当を廃止し, 地域手当を新設するなど, 国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行った。

また, 国立美術館の職員が行う職務は, 国の行政職俸給表(一)又は研究職俸給表の適用を受けるものと同等の職務であるとみなし, 給与についても一般職給与法に準拠した給与制度で支給してきていることを前提に, これらとの比較を行った(「独立行政法人の役職員の給与等の水準(平成21年度)」平成22年8月10日総務省公表資料を参照。)

ア 一般職俸給表の適用を受ける職員の給与水準

<国との比較>

項目	国	国立美術館
平均年齢	41.9歳	39.0歳
学歴(大学卒の割合)	51.6%	72.1%
調整手当支給率 ※1	53.7%	100%

※1 1級地, 2級地及び4級地の支給地の割合

<他の独立行政法人との比較>21年度年間給与額

項目	全独立行政法人	国立美術館
給与総額	7,105千円	6,171千円
平均年齢	43.5歳	39.0歳
ラスパイレス指数 ※2	106.2	105.1

※2 国の行政職俸給表(一)適用者の給与を100としたときの給与水準の指数

イ 研究職俸給表の適用を受ける職員の給与水準

<国との比較>

項目	国	国立美術館
平均年齢	44.6歳	43.9歳
学歴(大学卒の割合)	96.7%	100%
調整手当支給率 ※3	90.5%	100%

※3 1級地, 2級地及び4級地の支給地の割合

＜他の独立行政法人との比較＞21年度年間給与額

項目	全独立行政法人	国立美術館
給与総額	8,823千円	8,185千円
平均年齢	45.2歳	43.9歳
ラスパイレス指数 ※4	100.3	95.8

※4 国の研究職俸給表適用者の給与を100としたときの給与水準の指数

ウ 常勤役員の年間報酬

項目	全独立行政法人	国立美術館
法人の長	18,183千円	18,819千円
理事	15,078千円	17,069千円

③ 平成22年度の役職員の報酬・給与等について

○給与水準の適正化

1. 職員の給与水準

- 国家公務員(行政職(一)) 99.7
- 対国家公務員(研究職) 94.8
- 対他法人(事務・技術職員) 94.7
- 対他法人(研究職員) 95.4

2. 国に比べて給与水準が高くなっている定量的な理由

非該当

3. 適切性の検証

職員数が少ないことから、特に級号俸の高い職員の異動等に伴う給与支給額の変動等が、法人全体の給与水準に及ぼす影響は大きい。  
俸給表等の給与体系は国家公務員に準拠しており、対国家公務員指数は100を下回っていることから、国からの財政支出の割合は大きいものの、平成22年度の事務職員の給与水準は適切なものであると認識している

○福利厚生費と諸手当

1. 法定外福利費の支給状況とその理由、今後の必要な見直し計画

法定外福利費として平成22年度に執行されたのは2,581,230円であり、その内訳は職員健康診断(1,864,850円)、産業医委嘱(700,000円)および永年勤続表彰(16,380円)のみで、必要最小限である。

レクリエーション経費、娯楽費等の執行はない。

2. 国と異なる諸手当の支給状況とその理由、今後の必要な見直し計画

①国と異なる諸手当の支給状況

主任研究員手当

支給内容: 高度の知識経験に基づき困難な研究を独立して行う主任研究員に対し、時間外勤務手当として支給

支給額: 俸給月額に100分の12の割合を乗じて得た額

平成22年度の支給実績: 受給者数37人、金額18,705,276円

<p>【法人の長のマネジメント】 (リーダーシップを発揮できる環境整備)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>法人の長がリーダーシップを発揮できる環境は整備され、実質的に機能しているか。</li> </ul>	<p>②今後の必要な見直し計画 社会一般の情勢に適合したものとなるよう、国家公務員の給与水準を十分考慮して、必要に応じ適宜見直していく。</p> <p>【リーダーシップを発揮できる環境の整備状況と機能状況】</p> <p>○法人の長のマネジメント</p> <p>理事長の召集及び主宰で独立行政法人国立美術館館長会議(以下「館長会議」という。)を開催している。館長会議は、国立美術館の業務の適正かつ円滑な執行を図るため、各館の館長で構成する会議である。</p> <p>館長会議における審議事項は、国立美術館の運営に関する基本方針等であり、原則として隔月に1回開催している。ただし、理事長が特に必要と認めた場合は、臨時に館長会議を開催している。</p> <p>平成22年度においては、5回開催した。当該年度における主要な議題としては、政府から求められている総人件費改革を踏まえつつ国立美術館活動の活性化に資するため「独立行政法人国立美術館任期付研究員の就業に関する規則」「独立行政法人国立美術館アソシエイトフェローの就業に関する規則」を定め、平成23年度から任期付研究員1名、アソシエイトフェロー2名の採用を決定した。</p> <p>また、東日本大震災の発生に伴い、開館時間等について、国立美術館として対処するため臨時館長会議を開催している。</p> <p>なお、館長会議の開催に際しては、各館の館長の他、室長以上の職員の出席を求めており、説明又は意見を求めるとともに、同時に館長会議における決定等について周知を図る場として活用している。</p> <p>(平成22年度 館長会議開催日) 第1回館長会議(平成22年6月24日(木)) 第2回館長会議(平成22年9月16日(木)) 第3回館長会議(平成22年11月25日(木)) 第4回館長会議(平成23年1月20日(木)) 第5回館長会議(平成23年3月17日(木))</p> <p>(平成22年度 臨時館長会議開催日) 第1回臨時館長会議(平成23年3月15日(火)) 第2回臨時館長会議(平成23年3月18日(金)) 第3回臨時館長会議(平成23年3月22日(火)) 第4回臨時館長会議(平成23年3月25日(金)) 第5回臨時館長会議(平成23年3月28日(月)) ※上記の他、3月31日(木)に在京三館長会議を開催した。</p> <p>[参 考]</p>	<p>○館長会議や理事長の補佐体制の整備を通じて、理事長がリーダーシップを発揮できる環境は整備され、実質的に機能していると認められる。ただ、美術館4館の伝統的個性があり、それに加えて新しい使命を持つ国立新美術館の参加という歴史は理解するが、法人としての業務の理念設定や長期的活動構想、及び経常的な活動指針については、今後整理が必要と考えられる。</p>
---	--	--

設置根拠:独立行政法人国立美術館館長会議規則  
(制定 平成13年4月 国立美術館規則第2号)

審議事項:

- ①国立美術館の運営に関する基本方針その他の重要方針の決定に関する事項
- ②中期計画, 年度計画に関する事項
- ③業務方法書, 法人に係る規則の新設, 改廃に関する事項
- ④業務評価に関する事項
- ⑤人事に関する重要な事項
- ⑥予算及び決算に関する事項
- ⑦その他必要な事項

○関係規則の整備と各館長への権限の委任

国立美術館として, ①組織・総務に関するものとして「組織規則」「館長会議規則」等20規則, ②人事に関するものとして「職員就業規則」「職員給与規則」等86規則, ③会計に関するものとして「会計規則」「会計規則の特例を定める規則」等48規則, ④事業に関するものとして「観覧規則」「観覧料減免規則」等16規則を定め, 理事長と各館長の権限に係るものと整理している。

このほか, 懸案事項毎に理事長が判断し, その措置のため必要に応じ理事長裁定又は理事長決裁の決定や各館長に直接委任している。

平成22年度においては, 「独立行政法人国立美術館任期付研究員の就業に関する規則」「独立行政法人国立美術館アソシエイトフェローの就業に関する規則」を定め, 任期付研究員及びアソシエイトフェローに係る各館長の権限の範囲を明確にしたところである。

なお, 特に, 各館の独自性を発揮しつつ, 各館が特色ある活動を展開できるよう, 独立行政法人国立美術館組織規定に基づき, 各館の管理運営に関する重要事項について館長に助言する「評議員会」の設置, 独立行政法人国立美術館美術作品購入又は寄贈受入れに関する規則に基づき, 美術作品の購入又は寄贈受入に際しての「選考委員会」及び「評価委員会」の設置を規定するとともに, その実施については, 各館長に委任している。

○理事長の補佐体制の整備

理事長を補佐するため, 理事2名を任命するとともに, 各館に館長を配置し, 各館の館務を掌理させている。

また, 引き続き, 本部に事務局長を置き, 本部事務局の企画立案機能の充実を図るとともに, 各館の事務組織が有機的に連携し, 効果的・効率的な業務を遂行しうる体制を整備した。

これらのほか, 理事長のマネジメントを補佐するため, 引き続き, 外部の有識者で組織する, 独立行政法人国立美術館運営委員会及び独立行政法人国立美術館外部評価委員会を開催した。

運営委員会(設置根拠:独立行政法人国立美術館組織規則)は, 理事長が諮問する国立美術館の管理運営に関する重要事項について, 理事長の諮問に応じて審議し, 理事長に対して助言する組織で, 平成22年度は, 7月14日及び3月1日の2回開催し, それぞれ平成21年度事業実績及び平成23年度事業計画, その他について, 意見を

<p>(法人のミッションの役職員への周知徹底)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 法人の長は、組織にとって重要な情報等について適時的確に把握するとともに、法人のミッション等を役職員に周知徹底しているか。</li> </ul>	<p>求めたところである。</p> <p>外部評価委員会(設置根拠:独立行政法人国立美術館組織規則)は、単年度ごとの業務の実績について評価を行う組織で、平成22年度については、4月21日、5月12日及び6月9日の3日間開催し、「平成21年度外部評価報告書」をとりまとめ、理事長に報告された。</p> <p><b>【組織にとって重要な情報等についての把握状況】</b></p> <p>独立行政法人国立美術館館長会議、独立行政法人国立美術館運営委員会や独立行政法人国立美術館外部評価委員会の開催を通じて重要な情報等の把握に努めている。なお、館長会議には、監事が常時出席しており、監事から「独立行政法人、特殊法人等監事連絡会」総会及び第9部会など、監事が出席した外部会議における内容・事項等について報告を求めている。また、会計監査人と、独立行政法人会計基準の改正や法人としての重要な会計方針の変更等について意見交換を行っている。</p> <p>このほか、国立美術館を構成する東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術、国立国際美術館及び国立新美術館の館長及び事務局長で構成する館長懇談会(任意組織)を、原則として隔月に1回開催し、法人として対処すべき課題や各館における現状等について意見交換を行い、その対処方針等を決定している。平成22年度は、9回開催し、総人件費改革への対応や独立行政法人の事務事業の見直し、事業仕分けへの対処等について協議検討した。</p> <p><b>【役職員に対するミッションの周知状況及びミッションを役職員により深く浸透させる取組状況*】</b></p> <p>独立行政法人国立美術館館長会議、独立行政法人国立美術館運営委員会、独立行政法人国立美術館外部評価委員会の開催に際しては、各館の館長はもとより、各館の副館長・部長・課長・室長が常時出席しており、これらの会議を通じて、ミッションの周知等を行っている。特に、毎年秋(10月又は11月)に開催される館長懇談会については、特定の課題やその他の課題等について、出席者全員が参加し意見交換を行う場としている。平成22年度は11月の館長会議。</p> <p>このほか、研究系職員を中心とした「学芸課長会議」や事務系職員を中心とした「管理運営会議」を開催し、これらを通じてミッションの周知等を実施している。平成22年度においては、それぞれ5回開催した。</p> <p><b>【組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)の把握状況】</b></p> <p>独立行政法人国立美術館の事務事業に係る政府としての決定を遵守するとともに、外部の有識者で構成する独立行政法人国立美術館運営委員会や独立行政法人国立美術館外部評価委員会の開催を通じて、組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)の把握に努めている。また、独立行政法人国立美術館館長会議や館長懇談会、管理</p>	<p>○各種会議に一定の管理職が参加することによって、法人のミッション等を役職員に周知していると認められる。</p>
--	---	--

<p>(組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)の把握・対応等)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>法人の長は、法人の規模や業種等の特性を考慮した上で、法人のミッション達成を阻害する課題(リスク)のうち、組織全体として取り組むべき重要なリスクの把握・対応を行っているか。</li> </ul>	<p>運営会議・学芸課長会議における状況聴取のほか、監事や会計監査人との意見交換を通じて把握に努めている。</p> <p>このほか、国立美術館理事長としての立場で、他機関の評議員会等に出席することにより、情報の収集とその比較においての課題の把握に努めている。</p> <p>国立美術館として、平成22年度に取り組んだ課題は次のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①総人件費改革を踏まえつつ国立美術館活動を活性化させるための人事計画</li> <li>②「独立行政法人の事務事業の見直しの基本方針」(平成22年12月閣議決定)への対応</li> <li>③法人又は各館に係る諸課題への適切かつ迅速に対応</li> </ol> <p>【組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)に対する対応状況】</p> <p>○総人件費改革を踏まえつつ国立美術館活動を活性化させるための人事計画</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平成22年7月14日開催の人事委員会(根拠規則:独立行政法人国立美術館研究職員選考規則 平成21年6月 国立美術館規則第11号)において、総人件費改革の見通しや欠員を抱える各館の状況等を勘案し、東京国立近代美術館について、従来の採用方式によって平成22年10月1日付けで研究員(近現代美術担当)1名を採用すること、国立西洋美術館及び国立新美術館について、新しい採用方式により平成23年4月1日付けで研究員を採用することを決定した。</li> <li>管理運営検討会議及び学芸課長会議での検討を踏まえ、平成22年11月25日及び平成23年1月13日開催の館長会議において、「独立行政法人国立美術館任期付研究員の就業に関する規則」及び「独立行政法人国立美術館アソシエイトフェローの就業に関する規則」を決定した。また、理事長によって、国立西洋美術館については「任期付研究1名」国立新美術館については「アソシエイトフェロー2名」を採用することを決定した。</li> <li>なお、今後の「任期付研究」制度、「アソシエイトフェロー」制度の活用については、館長会議等において再度検討することとなっている。</li> </ul> <p>○「独立行政法人の事務事業の見直しの基本方針」(平成22年12月閣議決定)への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>管理運営会議及び文化庁との調整を踏まえ、当該基本方針で指摘された事項については、その対処方針を第三期中期計画(平成23年4月～平成28年3月)に可能な限り具体的に明記することで、平成23年3月17日開催の館長会議で中期計画が決定された。</li> <li>なお、具体的な取組状況等については、適宜館長会議等で報告することとなった。</li> </ul> <p>○法人又は各館に係る諸課題への適切かつ迅速に対応</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平成23年1月20日開催の館長会議で、理事長が、法人又は国立美術館各館に係る諸問題に適切かつ迅速に対処するために必要な経費を計上する(理事長裁量経費)が決定された。</li> </ul>	<p>○組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)の把握・対応等は、適切に行われていると判断する。一方で、各館のリスク対応策の設定は重要だが、それは各館の自己防衛的な観点から策定するだけでなく、ナショナルセンターとしての意義に鑑みれば、国内の公立私立美術館にガイドラインとなるような立案やポリシーの提示や周知が求められる。</p>
---	--	---

<p>・ 当該経費については、理事長又は各館の館長の提案を受け、その中から各館長の意見を聴いた上で、当該経費を支出すべき対象及び経費を理事長が決定することとなっている。</p> <p>【未達成項目(業務)についての未達成要因の把握・分析・対応状況】</p> <p>現在のところ、特段なし</p> <p>【内部統制のリスクの把握状況】</p> <p>各館における定例会議等や法人としての管理運営会議、学芸課長会議及び館長懇談会を通じて、内部統制のリスクの把握に努めている。</p> <p>また、監事監査要綱や監事監査監事実施基準による監査のほか、独立行政法人国立美術館会計規則に基づく会計監査、独立行政法人国立美術館内部監査実施規則に基づく資産及び会計に係る事務全般の監査、独立行政法人国立美術館競争的資金等取扱規則に基づく内部監査、独立行政法人国立美術館文書管理規則に基づく監査等を通じて内部統制のリスクの把握に努めている。</p> <p>なお、平成22年度における上述の監査において、国立美術館の事務事業に支障を生じさせるような指摘は認められなかった。</p> <p>【内部統制のリスクが有る場合、その対応計画の作成・実行状況】</p> <p>現在のところ、特段なし。</p> <p>リスクが顕在化した場合には、各館における定例会議等を通じて未達成要因の把握、分析に努め、法人としての管理運営会議、学芸課長会議及び館長懇談会を通じて、適宜対応する事としている。</p> <p>【監事監査における法人の長のマネジメントに関する監査状況】</p> <p>1. 監査規程の整備状況</p> <p>(1) 監事監査</p> <p>①独立行政法人国立美術館監事監査要綱(平成13年4月2日制定 国立美術館規程第4号)</p> <p>②独立行政法人国立美術館監事監査実施基準(平成13年4月2日制定 国立美術館規程第5号)</p> <p>③独立行政法人国立美術館監事等監査要領(平成13年4月2日制定)</p> <p>(2) 内部監査</p> <p>①独立行政法人国立美術館内部監査実施要領</p> <p>②監査事項及び監査手順の準用</p> <p>監事等監査要領第二監査の目的及び着眼点2. 会計の監査を準用(第5条)・・・監</p> <p>・ その際、中期目標・計画の未達成項目(業務)についての未達成要因の把握・分析・対応等に注目しているか。</p> <p>(内部統制の現状把握・課題対応計画の作成)</p> <p>・ 法人の長は、内部統制の現状を的確に把握した上で、リスクを洗い出し、その対応計画を作成・実行しているか。</p>	<p>○中期目標・計画の未達成項目(業務)はない。</p> <p>○内部統制の整備・運用状況は、有効に機能を発揮していると判断される。また、監事監査など各監査等を通じて内部統制のリスクの把握に努める体制が確立していると判断できる。</p>	
---	---	--



<p><b>【監事監査】</b></p> <p>・ 監事監査において、法人の長のマネジメントについて留意しているか。</p>	<p>査事項 監事監査実施基準第3条の規程を準用(第6条)・・・監査手順</p> <p>③監査計画 内部監査実施要領等を参照し、その都度監査員により作成する</p> <p>(3) 独立行政法人国立美術館職員倫理規則(平成18年3月31日制定 国立美術館規則第26号)</p> <p>2. 監査体制の整備状況</p> <p>(1) 監事監査</p> <p>①監事(文部科学大臣任命) 2名(専任:非常勤2名)</p> <p>②監査の事務補助(監事監査要綱第6条) 平成22年度実績 3名 兼務:局長1名・室長2名(独法移行後, 毎年3~4名体制)</p> <p>(2) 内部監査</p> <p>①監査員(内部監査要領第4条) 職員のうちから1名以上 平成22年度実績 7名(兼務:室長1名・係長2名・係員4名)</p> <p>②総括及び調整等(内部監査要領第11条) 総括及び調整:事務局長</p> <p>3. 監査実績(実施項目, 実施時期, 監査手法 等)</p> <p>(1) 監事監査の実績</p> <p>①監事監査の概要 独法移行後(平成13年4月以降)各年度において, 館長会議(隔月1回)その他重要な会議に出席するほか, 役職員から事業の報告を聴取し, 重要な決裁書類等を閲覧し, 本部において, 財務及び業務についての状況を調査した。さらに, 会計監査人から会計監査人の監査方法及びその結果について説明を受け, 会計帳簿等の調査を行い, 財務諸表, 事業報告書及び決算報告書について検討を加え, いずれも適正であることを確認するとともに, 業務の執行に関する法令遵守等の状況についても確認した。</p> <p>②定期監査スケジュール, 報告書, 指摘事項等</p> <p>○ 監事監査計画作成(4月)→ 提出先:理事長</p> <p>○ 定期監査(6月)</p> <p>業務監査(毎年度1回)→ 監査結果報告書(提出先:理事長)</p> <p>会計監査(年度決算時)→ 監査結果報告書(提出先:理事長)</p> <p>監査結果報告については, 運営管理会議, 館長会議で結果を報告することとしており役職員に対して具体的に周知している。また, 監査で指摘を受けた事項の措置状況については, 法人全体の取組として学芸課長会議, 運営管理会議, 館長会議に諮り改善提案を「監査結果報告書の監査意見に対する措置状況について(通知)」として監事に報告している。</p> <p>③その他の監査 館長会議その他重要な会議への出席。聴取, 意見交換等, 重要な書類等の回付(監事監査要綱第13条), 出納計算内訳表等(月末)の回付, 必要に応じた臨時監査(関係役職員からの聴取等)</p> <p>④会計監査人との連携 会計監査人からの監査計画の報告(3月頃), 会計監査人からの監査報告(6月)</p> <p>⑤「独立行政法人, 特殊法人等監事連絡会」総会及び第9部会への参加</p>	<p>○監事監査では、実地監査のほか、重要な会議への出席等による意見聴取や会計監査人等との意見交換を通して、理事長の対応や指示内容を把握した上で、総体的に業務の統制機能の監査を実施していると認められる。</p>
--	---	---

<p>・ 監事監査において把握した改善点等について、必要に応じ、法人の長、関係役員に対し報告しているか。その改善事項に対するその後の対応状況は適切か。</p>	<p>⑥会計検査院実施によるセミナー等 公会計監査フォーラム(8月)など年間数回参加</p> <p>(2) 内部監査の実績</p> <p>①内部監査の概要</p> <p>内部監査実施要領に基づき平成13年度から実施した。平成22年度においては国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館を対象として、契約方法の妥当性、見積徴収方法、旅費・諸謝金の取り扱い等について、2人～3人の監査員が監査に当たった。</p> <p>②監査スケジュール、報告書、指摘事項等</p> <p>○内部監査計画の通知:平成22年10月22日</p> <p>○実地監査実施 :平成22年11月9日(国立西洋美術館) 平成22年11月24日(国立国際美術館) 平成22年11月26日(国立新美術館)</p> <p>○内部監査報告書の提出:監査実施後1か月以内</p> <p><b>【監事監査における改善点等の法人の長、関係役員に対する報告状況】</b></p> <p>監査結果概要</p> <p>監査意見に対する措置状況について(平成22年9月16日館長会議附議)</p> <p>(1)関係諸法令の遵守状況及び諸規定等の整備及び実施状況(2)中期計画の進捗状況(3)年度計画の達成状況(4)事業の企画・実施状況(5)契約の締結及び執行の状況(6)給与水準の状況(7)情報開示の状況(8)財務諸表の法令準拠及び適正性(9)決算報告書の法令準拠及び適正性(10)事業報告書の適正性(11)上記に関連する会計関係帳簿、証拠書類等の管理状況</p> <p>監事監査報告書</p> <p>独立行政法人国立美術館監査要綱(平成13年国立美術館規程第4号)第10条第2項に基づき、平成22年10月27日、平成22年12月6日及び平成22年12月27日付けで監査結果報告書が提出されている。</p> <p><b>【監事監査における改善事項への対応状況】</b></p> <p>監事監査報告書を踏まえ、監査報告書における監査意見については、館長会議(平成22年9月16日及び平成23年3月17日開催)において審議し、独立行政法人国立美術館監査要綱(平成13年4月2日国立美術館規程第4号)第10条第2項に基づき、措置状況等を監事に通知した。</p> <p>主な措置状況:人員配置状況について、任期付き研究員制度及びアソシエイトフェロー制度の構築</p>	<p>○理事長は、内部監査による監査結果等の報告や、監事等との意見交換を通して法人の統制機能の現状を把握するとともに、館長会議等で対応策の検討、各館への通知を行うなど、改善を図る取組を適切に実施していると認められる。</p>
---	--	--

<p>【実物資産】 (保有資産全般の見直し)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実物資産について、保有の必要性、資産規模の適切性、有効活用の可能性等の観点からの法人における見直し状況及び結果は適切か。</li> </ul>	<p>【実物資産の保有状況】</p> <p>① 実物資産の名称と内容、規模</p> <p>有形固定資産 149,744 百万円 (内訳)</p> <p>建物 57,651 百万円 構築物 1,209 百万円</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>建物名称</th> <th>延面積(㎡)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館</td> <td>17,192</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館工芸館</td> <td>1,867</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター</td> <td>6,912</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館</td> <td>9,437</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>9,762</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>17,369</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>13,487</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>49,710</td> </tr> </tbody> </table> <p>土地 34,647 百万円</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>敷地名</th> <th>面積(㎡)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター敷地</td> <td>722</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館敷地</td> <td>14,997</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館敷地</td> <td>5,001</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館敷地</td> <td>2,208</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館敷地</td> <td>11,931</td> </tr> </tbody> </table> <p>機械装置 350 百万円, 車両運搬具 6 百万円, 工具器具備品 664 百万円, 美術品・收藏品 55,195 百万円, 建設仮勘定 21 百万円</p> <p>無形固定資産 21 百万円 ソフトウェア 18 百万円, 電話加入権 3 百万円, 特許権仮勘定 1 百万円</p> <p>② 保有の必要性(法人の任務・設置目的との整合性、任務を遂行する手段としての有用性・有効性等)</p> <p>独立行政法人国立美術館は、東京国立近代美術館(本館・工芸館・フィルムセンタ</p>	建物名称	延面積(㎡)	東京国立近代美術館	17,192	東京国立近代美術館工芸館	1,867	東京国立近代美術館フィルムセンター	6,912	東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館	9,437	京都国立近代美術館	9,762	国立西洋美術館	17,369	国立国際美術館	13,487	国立新美術館	49,710	敷地名	面積(㎡)	東京国立近代美術館フィルムセンター敷地	722	東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館敷地	14,997	京都国立近代美術館敷地	5,001	国立西洋美術館敷地	2,208	国立新美術館敷地	11,931	<p>○実物資産の保有の必要性、資産規模の適切性、有効活用の可能性等については、減損もなく、特に指摘すべき点はない。また、当事業年度より適用された資産除去債務については、財務諸表の注記事項において適切に開示されており、特に問題はない。</p>
	建物名称	延面積(㎡)																														
東京国立近代美術館	17,192																															
東京国立近代美術館工芸館	1,867																															
東京国立近代美術館フィルムセンター	6,912																															
東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館	9,437																															
京都国立近代美術館	9,762																															
国立西洋美術館	17,369																															
国立国際美術館	13,487																															
国立新美術館	49,710																															
敷地名	面積(㎡)																															
東京国立近代美術館フィルムセンター敷地	722																															
東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館敷地	14,997																															
京都国立近代美術館敷地	5,001																															
国立西洋美術館敷地	2,208																															
国立新美術館敷地	11,931																															
<p>項目別－149</p>																																

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 見直しの結果、処分等又は有効活用を行うものとなった場合は、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。</li> <li>・ 「勧告の方向性」や「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」等の政府方針を踏まえて処分等することとされた実物資産について、法人の見直しが適時適切に実施されているか（取組状況や進捗状況等は適切か）。</li> </ul>	<p>一)、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館の五館で組織されているが、いずれの美術館も、国の文化政策の必要性から、その目的・名称・機能・施設・建設場所・運営形態等を国において検討し、国自らが建設し、独立行政法人国立美術館に現物出資されたものであり、その美術館が建設された意義、建設され場所等を最大限に尊重し、法人の目的を達成するためには、五館それぞれが設置された場所において設置目的に相応しい特色ある活動を展開することが必要不可欠である。</p> <p>③ 有効活用の可能性等の多寡 遊休している建物及び土地等の固定資産はない。</p> <p>④ 見直し状況及びその結果 整理合理化計画等において、個別に指摘された資産の見直しはない。また、監事監査において指摘された資産の見直しはない。</p> <p>⑤ 処分又は有効活用等の取組状況／進捗状況 該当なし</p> <p>⑥ 政府方針等により、処分等することとされた実物資産についての分等の取組状況／進捗状況 該当なし</p> <p>⑦ 活用状況が不十分な実物資産の有無とその理由 該当なし</p> <p>⑧ 実物資産の管理の効率化及び自己収入の向上に係る法人の取組 東京国立近代美術館本館及び工芸館の管理・運營業務については、平成 21 年度より公共サービス改革法に基づく民間競争入札を導入している。他館への導入等については、平成 23 年度からの中期計画で「既に実施している東京国立近代美術館での検証結果等を踏まえ、当該館における対象範囲の拡大や他施設への導入に取り組む。」</p>	<p>○見直しの対象となった保有資産はなく、処分等を行う必要はない。</p> <p>○「勧告の方向性」や「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」等の政府方針において処分等することとされた実物資産はない。</p>
---	--	--

<p>(資産の運用・管理)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>資産の活用状況等が不十分な場合は、原因が明らかにされているか。その理由は妥当か。</li> <li>実物資産の管理の効率化及び自己収入の向上に係る法人の取組は適切か。</li> </ul> <p>【金融資産】 (保有資産全般の見直し)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>金融資産について、保有の必要性、事務・事業の目的及び内容に照らした資産規模は適切か。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>資産の売却や国庫納付等を行うものとなった場合は、その法人の取組状況や</li> </ul>	<p>ことを明記した。 (平成 24 年度から実施予定の業務の概要及び入札等の対象範囲)</p> <p>①東京国立近代美術館本館及び工芸館の管理・運営・警備業務 ②東京国立近代美術館フィルムセンターの管理・運営業務 (①は対象範囲の拡大, ②は新規)</p> <p>また、京都国立近代美術館及び国立新美術館では、管理・運営業務を包括的に業務委託し、コストの縮減を図っている。これらについて引き続き実施していく。</p> <p>【金融資産の保有状況】</p> <p>① 金融資産の名称と内容、規模 現金及び預金(2,755 百万円)</p> <p>② 保有の必要性(事業目的を遂行する手段としての有用性・有効性) 平成 22 年度末における未払金(2,559 百万円)の支払い等</p> <p>③ 資産の売却や国庫納付等を行うものとなった金融資産の有無 利益剰余金は独立行政法人通則法第 44 条第 1 項による積立金として計上しており、平成 22 年度が中期目標の最終年度となることから、自己収入により取得した固定資産の価格相当額及びリース損益等影響額を除いた額を国庫に返納することとなっている。</p> <p>④ 金融資産の売却や国庫納付等の取組状況／進捗状況 文部科学大臣との協議のうえ国庫納付額を決定し、速やかに国庫納付を行う。</p> <p>【資金運用の実績】 当法人の金融資産は現金及び預金のみであり、国債や有価証券等の運用実績はない。</p> <p>【資金運用の基本的方針(具体的な投資行動の意志決定主体、運用に係る主務大臣・法人・運用委託先間の責任分担の考え方等)の有無とその内容】 該当なし</p> <p>【資産構成及び運用実績を評価するための基準の有無とその内容】</p>	<p>○活用が不十分な資産はない。</p> <p>○実物資産の管理の効率化について、引き続き官民競争入札の導入を図るなど、適切に行われていると認められる。また、自己収入の拡大についても適切に取り組んでいると認められる。</p> <p>○金融資産の保有の必要性、事務・事業の目的及び内容に照らした資産規模については、特に指摘すべき点はない。</p> <p>○売却等を行う資産はない。</p>
--	---	--

<p>進捗状況等は適切か。</p> <p>(資産の運用・管理)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>資金の運用状況は適切か。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>資金の運用体制の整備状況は適切か。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>資金の性格、運用方針等の設定主体及び規定内容を踏まえて、法人の責任が十分に分析されているか。</li> </ul> <p>(債権の管理等)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>貸付金、未収金等の債権について、回収計画が策定されているか。回収計画が策定されていない場合、その理由は妥当か。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>回収計画の実施状況は適切か。i) 貸</li> </ul>	<p>該当なし</p> <p>【資金の運用体制の整備状況】</p> <p>該当なし</p> <p>【資金の運用に関する法人の責任の分析状況】</p> <p>該当なし</p> <p>【貸付金・未収金等の債券と回収の実績】</p> <p>平成 23 年 3 月 31 日現在の債権は、未収入金 1,493 百万円、立替金 2 百万円となっている。</p> <p>なお、未収入金は当期に工事が完了した施設整備費補助金の未収入(1,476 百万円)が主な要因である。</p> <p>【回収計画の有無とその内容(無い場合は、その理由)】</p> <p>当法人は資金等の貸付を行っておらず、中期目標期間終了後に利益剰余金を国庫納付するため、回収計画及び運用方針は制定していない。</p> <p>【回収計画の実施状況】</p> <p>該当なし</p> <p>【貸付の審査及び回収率の向上に向けた取組】</p> <p>該当なし</p> <p>【貸倒懸念債権・破産更生債権等の金額／貸付金等残高に占める割合】</p> <p>該当なし</p>	<p>○資金は現金及び預金のみであり、運用状況及び運用体制は適切であると判断する。</p>          <p>○未収入金について要因が明確であり、問題ないと認められる。なお、貸付金はない。</p>
---	---	---

<p>倒懸念債権・破産更生債権等の金額やその貸付金等残高に占める割合が増加している場合、ii)計画と実績に差がある場合の要因分析が行われているか。</p> <p>・ 回収状況等を踏まえ回収計画の見直しの必要性等の検討が行われているか。</p> <p>【知的財産等】 (保有資産全般の見直し)</p> <p>・ 特許権等の知的財産について、法人における保有の必要性の検討状況は適切か。</p> <p>・ 検討の結果、知的財産の整理等を行うことになった場合には、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。</p>	<p>【回収計画の見直しの必要性等の検討の有無とその内容】</p> <p>該当なし</p> <p>【知的財産の保有の有無及びその保有の必要性の検討状況】</p> <p>現在保有している特許権等の知的財産はない。</p> <p>なお、平成22年度末現在、特許権仮勘定(1百万円)を計上しているが、これは国立西洋美術館において現在特許出願中である「展示用物品の免震台」に係る経費相当額である。本案件は平成18年度に出願を行い、これまで特許庁と協議を行ってきたが、現状では特許取得の目処は立っていない。しかしながら、本装置を本法人で使用することはもとより、全国の博物館や美術館等で使用する際に他の者が特許を取得した場合、規制等を受けることが懸念されるため、出願を行っているものである。</p> <p>【知的財産の整理等を行うことになった場合には、その法人の取組状況／進捗状況】</p> <p>該当なし</p> <p>【出願に関する方針の有無】</p> <p>【出願の是非を審査する体制整備状況】</p> <p>【活用に関する方針・目標の有無】</p> <p>【知的財産の活用・管理のための組織体制の整備状況】</p> <p>中期目標に定められた、当法人が実施する事業において、知的財産を出願する必要が生じるものは想定されていない。今後、美術館活動の結果として特許取得が可能となるものが創出された場合は、その案件ごとに検討する。</p> <p>【実施許諾に至っていない知的財産について】</p> <p>該当なし</p>	<p>○現在保有している知的財産はないが、国立西洋美術館において特許出願中とのことであり、法人における必要性を確認の上対応を検討しているものと認められる。</p>
---	---	---

(資産の運用・管理)

- ・ 特許権等の知的財産について、特許出願や知的財産活用に関する方針の策定状況や体制の整備状況は適切か。
- ・ 実施許諾に至っていない知的財産の活用を推進するための取組は適切か。

- ① 原因・理由
- ② 実施許諾の可能性
- ③ 維持経費等を踏まえた保有の必要性
- ④ 保有の見直しの検討・取組状況
- ⑤ 活用を推進するための取組

【一般管理費の削減状況】

(単位:千円)

	H17 年度実績	H22 年度実績	削減割合
一般管理費	819,022	650,269	—
人件費(管理系)	484,582	281,225	—
合計	1,303,604	931,494	28.54%

【事業費の削減状況】



(単位:千円)

	H17 年度実績	H22 年度実績	削減割合
業務経費	2,894,686	2,325,033	—
人件費(事業系)	640,915	737,068	—
合計	3,535,601	3,062,101	13.39%

【総人件費改革への対応】

(単位:千円)

	17 年度実績	22 年度実績
人件費決算額	1,016,067	922,677
対 17 年度人件費削減率	—	9.2%
対 17 年度人件費削減率(補正值)	—	6.0%

【ラスパイレス指数(平成22年度実績)】

【事務・技術】

対国家公務員・・・99.7

【研究】

対国家公務員・・・94.8

本年度においては、国家公務員と比べて給与水準は低い状態にあり、法人の設定する目標水準を下回っている。

【福利厚生費の見直し状況】

法定外福利費の支給状況とその理由、今後の必要な見直し計画

法廷外福利費として平成22年度に執行されたのは2,581,230円であり、その内訳は職員健康診断(1,864,850円)、産業医委嘱(700,000円)および永年勤続表彰(16,380円)のみで、必要最小限である。

レクリエーション経費、娯楽費等の執行はない。

【総人件費改革への対応】

- ・ 取組開始からの経過年数に応じ取組が順調か。また、法人の取組は適切か。

【給与水準】

- ・ 給与水準の高い理由及び講ずる措置(法人の設定する目標水準を含む)が、国民に対して納得の得られるものとなっているか。
- ・ 法人の給与水準自体が社会的な理解

○総人件費改革については、順調に進捗しており、特に指摘すべき点はない。

○国家公務員に比べ低い給与水準であり、国民の理解を得られると認められる。

<p>の得られる水準となっているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国の財政支出割合の大きい法人及び累積欠損金のある法人について、国の財政支出規模や累積欠損の状況を踏まえた給与水準の適切性に関して検証されているか。</li> </ul> <p>【諸手当・法定外福利費】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 法人の福利厚生費について、法人の事務・事業の公共性、業務運営の効率性及び国民の信頼確保の観点から、必要な見直しが行われているか。</li> </ul> <p>【契約の競争性、透明性の確保】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 契約方式等、契約に係る規程類について、整備内容や運用は適切か。</li> </ul>	<p>【契約に係る規程類の整備及び運用状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 契約に係る規程類等 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 独立行政法人国立美術館会計規則</li> <li>② 独立行政法人国立美術館会計規程の特例を定める規程</li> <li>③ 独立行政法人国立美術館契約事務取扱細則</li> <li>④ 独立行政法人国立美術館随意契約公表基準</li> <li>⑤ 独立行政法人国立美術館食堂及び店舗貸付取扱要領</li> <li>⑥ 独立行政法人国立美術館における「企画競争・公募」並びに「総合評価落札方式」の取扱いについて</li> </ul> </li> <li>○ 国の契約基準と異なる規程の有無 <p>「独立行政法人等における契約の適正化について(通知)」(平成20年12月3日付け20文科会第583号)を受け、国と同様の契約基準としたため、国の契約基準と異なる規程はない。</p> </li> </ul> <p>【執行体制】</p> <p>法人本部 室長1名, 会計担当係 係長1名, 主任・係員1名  東京国立近代美術館 室長1名, 会計担当係 係長1名, 主任・係員1名(法人本部職員兼務)  京都国立近代美術館 会計担当係 係長1名, 主任・係員2名  国立西洋美術館 室長1名, 会計担当係 係長1名, 主任・係員3名  国立国際美術館 会計担当係 係長1名, 主任・係員2名  国立新美術館 会計担当係 係長1名, 主任・係員1名</p> <p>【審査体制】</p> <p>各館に分任契約担当役を設置し、契約手続等が会計規則等に則り適正に行われて</p>	<p>○ 諸手当については国家公務員に準じたものであり、法定外福利費についてはレクリエーション経費及び娯楽費等の執行はないため、適切であると認められる。</p> <p>○ 契約の競争性、透明性の確保については、特に問題はないと判断している。また、一者応札、一者応募についてはやむを得ない面があると思うが、改善方策も定められており、適切であると認められる。</p>
--	---	---

- ・ 契約事務手続に係る執行体制や審査体制について、整備・執行等は適切か。

【随意契約等見直し計画】

- ・ 「随意契約等見直し計画」の実施・進捗状況や目標達成に向けた具体的取組状況は適切か。

いるかの審査を行い、契約を締結する体制をとっている。また、随意契約の場合は、当該契約を随意契約とすることが適正かを十分に精査した上で、契約を行うよう本部からの指導の徹底を行っている。

各館での契約手続等が適正に行われているかについては、監事監査及び内部監査においても確認を行っている。

なお、平成 21 年度に設置した契約監視委員会において、監事及び外部有識者の意見を踏まえ、契約の点検見直しを行った。

【契約監視委員会の審議状況】

○実施状況

実施回数 1回(平成23年2月3日)

審議内容

- ・平成22年度(12月末まで)に随意契約により契約した案件の適正性について
- ・平成22年度(12月末まで)に一者応札・応募により契約した案件の適正性について
- ・平成23年度以降に契約を予定している案件の事前点検

指摘事項

- ・なし

【随意契約等見直し計画の実績と具体的取組】

	①平成 20 年度 実績		②見直し計画 (H22 年 4 月公 表)		③平成 22 年度 実績		②と③の比較 増減 (見直し計画の 進捗状況)	
	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)
競争性のある契約	82	2,430,355	101	2,639,329	101	2,639,329	0	0
競争入札	81	2,426,890	98	2,623,745	98	2,623,745	0	0

○契約事務手続は会計担当部署において複数体制で実施されており、問題ないと認められる。

○随意契約等の見直しについては各館に分任人契約担当役を設置し、適正性を審査するなど、適切に取り組みされていると認められる。

企画競争、公募等	1	3,465	3	15,584	3	15,584	0	0
競争性のない随意契約	119	9,955,158	100	9,746,184	100	9,746,184	0	0
合計	201	12,385,513	201	12,385,513	201	12,385,513	0	0

【原因、改善方策】

該当無し

【再委託の有無と適切性】

該当無し

【一者応札・応募の状況】

	①平成 20 年度実績		②平成 22 年度実績		①と②の比較増減	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
競争性のある契約	82	2,430,355	111	4,869,896	29	2,439,541
一般競争契約	76	1,841,002	100	4,781,340	24	2,940,338
指名競争契約	1	2,940	0	0	△1	△2,940
企画競争	1	3,465	5	42,831	4	39,366

【個々の契約の競争性、透明性の確保】

・再委託の必要性等について、契約の競争性、透明性の確保の観点から適切

○再委託となっている契約はない。

か。	公募	0	0	5	30,710	5	30,710	
	不 落 随 意 契 約	4	582,948	1	15,016	△3	△567,932	
	うち、一 者 応 札 ・ 応 募 と な っ た 契 約	29	1,404,497	47	1,366,880	18	△37,617	
<p>・ 一般競争入札等における一者応札・応募の状況はどうか。その原因について適切に検証されているか。また検証結果を踏まえた改善方策は妥当か。</p>	<b>【原因、改善方策】</b>							<p>○一般競争入札等における一者応札・応募となった契約については、競争参加資格を必要最小限のものとする、公告期間を延長するなど、契約への参加機会の確保等を図っており、適切に実施されていると認められる。</p>
	<p>入札公告の期間を国に準じて 10 日以上とし、ホームページ上で公告を行っているが、結果的に一者応札・応募の割合が高くなっている。これを受けて、当法人では、平成 21 年度に「一者応札・応募に係る改善方策について」を定めた。内容は以下のとおり。</p> <p>(1)競争参加資格要件については、調達目的を確実に達成するための必要最小限のものとするを徹底する。</p> <p>(2)一者応札、一者応募となっている契約については、業務等の内容に応じ、早期執行に努めるとともに、契約(落札決定)後の準備期間を考慮したうえで入札時期を設定するなど、履行期間及び準備期間の十分な確保を図る。</p> <p>(3)現在、国の規則に準じて 10 日以上としている公告期間について、過去に一者応札・一者応募となった契約については、原則として 20 日以上の公告期間を確保することとする。</p> <p>(4)物品・役務の調達については、入札公告等の時点で調達内容が把握できるよう、原則として仕様書等についてもホームページから閲覧可能とし、競争参加手続の効率化に努めることとする。</p>							
	<p><b>【一般競争入札における制限的な応札条件の有無と適切性】</b></p> <p>業務の特殊性に応じて、応札条件に制限を設けることがある。応札条件については契約監視委員会に諮り、特に問題ない旨の意見を得ている。</p>							

【(大項目)3】	Ⅲ 財務、人事、施設整備に関する目標を達成するためにとるべき措置	【評定】			
		A			
		H18	H19	H20	H21
		A	A	A	A

【(小項目)3-1】	財務の状況	【評定】			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】		A			
Ⅲ 予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画		H18	H19	H20	H21
収入面に関しては、実績を勘案しつつ、外部資金等を積極的に導入することにより、計画的な収支計画による運営を図る。 また、管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に努める。		A	A	A	A
1 予算(中期計画の予算) 別紙のとおり					
2 収支計画					
3 資金計画					

評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績	分析・評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 予算(年度計画の予算) 別紙のとおり。</li> <li>・ 収支計画 別紙のとおり。</li> <li>・ 資金計画 別紙のとおり。</li> </ul>		○制度上、予算設定時に見込めない施設整備関係のかい離については、特に問題はないと認められる。

		1 予算(単位:千円)			○予算と決算の比較においては、オルセー美術館展およびゴッホ展における目標を大きく上回る入館者数が展示事業等収入を増加させている。今後も入館者数が増加する良い企画を期待するが、収益を上げるための事業及び施設ではないことから、中長期的には入館者数の増減に左右されない財務体質の構築が望まれる。	
		区 分	計画額	実績額		増△減額
【収入】	収入					
	運営費交付金		5,858,966	5,856,966	0	
	展示事業等収入(注1)		994,584	1,431,824	437,240	
	寄附金収入		-	12,748	12,748	
	施設整備費補助金(注2)		6,699,018	7,835,968	1,136,950	
	計		13,552,568	15,139,507	1,586,939	
【支出】	支出					
	運営事業費		6,853,555	7,345,837	△492,287	
	管理部門経費		1,730,807	1,600,165	130,641	
	うち人件費(注3)		304,561	284,826	19,734	
	うち一般管理費(注3)		1,426,246	1,315,339	110,906	
	事業部門経費		5,122,743	5,745,672	△622,929	
	うち人件費(注3)		791,011	752,902	38,108	
	うち展覧事業費(注4)		3,307,557	3,642,021	△334,464	
	うち調査研究事業費(注5)		167,276	172,262	△4,986	
	うち教育普及事業費(注5)		856,899	1,178,485	△321,586	
	施設整備費補助金(注2)		6,699,018	7,891,828	△1,192,810	
		計		13,552,568	15,237,666	△1,685,098
		収支差引		-	△98,159	△98,159
	<p><b>【主な増減理由】</b>  (注1)入場料収入等の増加による。  (注2)前年度繰越工事の完了及びに本年度工事未完により次期へ繰越したことによる。  (注3)業務運営の効率化による。  (注4)前年度より繰越した運営費交付金の支出による。  (注5)支出経費の見直しによる。  ※金額は切り捨てのため、合計等が合致しない場合がある。</p> <p>●特記事項  運営費交付金を充当して行う業務では、人員の削減等の効率化により、人件費が予算に比べて57,843千円の支出減となった。物件費は、前年度より繰越した運営費交付金による支出等の要因により、予算に比べ492,154千円の支出増となった。  展示事業等収入は、展覧会の入館者数が目標入館者数を大幅に上回ったことから、</p>					

【収支計画】

予算に比べて 437,240 千円の収入増となった。

施設整備費補助金は工事が未完となっていた東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館増築工事、東京国立近代美術館フィルムセンター外壁他改修工事、東京国立近代美術館工芸館外壁等補修工事、東京国立近代美術館工芸館石垣補修等工事及び京都国立近代美術館建物等改修工事について本年度に竣工したが、東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館映画フィルム等収納設備工事については、東日本大震災の影響で本年度に竣工予定だったものが平成 23 年度に延期となった。このことにより、収入が 1,136,950 千円増加し、支出が 1,192,810 千円増加した。寄附金については、19 件、12,748 千円を獲得した。うち 6,632 千円を本年度の収益(うち 3,000 千円は美術作品購入)とし、残りの 6,116 千円を次年度以降に繰り越して執行する予定である。

2 収支計画(単位:千円)

区 分	計画額	実績額	増△減額
費用の部			
経常経費	5,534,541	5,791,468	256,927
管理部門経費	1,695,203	1,809,660	114,457
うち人件費(注1)	304,561	366,034	61,473
うち一般管理費(注2)	1,390,642	1,443,626	52,984
事業部門経費	3,691,616	3,816,247	124,631
うち人件費(注1)	791,011	670,980	△120,031
うち展示事業費(注3)	1,883,710	1,847,480	△36,230
うち調査研究事業費(注3)	165,737	170,241	4,504
うち教育普及事業費(注3)	851,158	1,127,545	276,387
減価償却費	147,722	165,561	17,839
収益の部			
経常費用	5,534,541	6,333,014	798,473
運営費交付金収益(注4)	4,392,235	4,553,934	161,699
展示事業等の収入(注5)	994,584	1,431,824	437,240
資産見返運営費交付金戻入	131,908	147,478	15,570
資産見返寄附金戻入	-	2,930	2,930
資産見返物品受贈額戻入	15,814	13,901	△1,913
寄附金収益	-	7,632	7,632
施設費収益(注6)	-	175,312	175,312
経常利益		541,545	
臨時損失		3,681	
臨時利益		386	
当期純利益		538,250	

○財務状況については、自己資本比率が高く、当期総利益を計上しているなどから、特段の問題はないと判断している。



前中期目標期間繰越積立金取崩額		250	
当期総利益		538,501	

【主な増減理由】

- (注1)業務配分の見直しによる。
- (注2)施設整備費補助金による費用への計上が増加したことによる。
- (注3)支出経費の見直しを行ったことによる。
- (注4)前年度より繰越した運営費交付金債務の収益化による。
- (注5)入場料収入等の増加による。
- (注6)前年度からの継続工事の完了による。

※金額は切り捨てのため、合計等が合致しない場合がある。

【資金計画】

3 資金計画(単位:千円)

区分	計画額	実績額	増△減額
資金支出	13,552,568	14,550,530	△997,962
業務活動による支出(注1)	6,781,890	7,940,240	△1,158,350
投資活動による支出(注2)	6,770,678	6,610,289	△160,389
財務活動による支出	-	-	-
資金収入	13,552,568	14,873,250	1,320,682
業務活動による収入	6,853,550	8,185,014	1,331,464
運営費交付金による収入	5,858,966	5,858,966	-
展示事業等による収入(注3)	994,584	2,326,048	1,331,464
投資活動による収入	6,699,018	6,688,236	△10,782
施設整備補助金による収入(注2)	6,699,018	6,687,643	△11,375
有形固定資産の売却による収入		592	592

資金に係る換算差額		△3,335	
資金増加額		319,384	
資定期首残高		2,435,453	
資定期末残高		2,754,838	

**【主な増減理由】**

- (注1)前年度未払金の支出を行ったことによる。
  - (注2)前期繰越工事の完了及び当期工事の未完による。
  - (注3)入場料収入等の増加及び補助金の収入による。
- ※金額は切り捨てのため、合計等が合致しない場合がある。

**【当期総利益(当期総損失)】**

当期総利益 538,051,029 円

**【当期総利益(又は当期総損失)の発生要因】**

自己収入の増加及び運営費交付金の節約による収益。

**【利益剰余金】**

前中期目標期間繰越積立金 375,634,433 円  
積立金(通則法第 44 条第 1 項) 1,085,355,545 円  
当期未処分利益 538,501,029 円

**【財務状況】**

(当期総利益(又は当期総損失))

- ・ 当期総利益(又は当期総損失)の発生要因が明らかにされているか。

- ・ また、当期総利益(又は当期総損失)の発生要因は法人の業務運営に問題等があることによるものか。

(利益剰余金(又は繰越欠損金))

- ・ 利益剰余金が計上されている場合、国民生活及び社会経済の安定等の公共上の見地から実施されることが必要な業務を遂行するという法人の性格に照らし過大な利益となっていないか。

○当期総利益の発生要因は自己収入の拡大によるもので、法人の業務運営に問題等があるとは認められない。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・繰越欠損金が計上されている場合、その解消計画は妥当か。</li> </ul> <p>※解消計画がない場合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・当該計画が策定されていない場合、未策定の理由の妥当性について検証が行われているか。さらに、当該計画に従い解消が進んでいるか。</li> </ul> <p>(運営費交付金債務)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・当該年度に交付された運営費交付金の当該年度における未執行率が高い場合、運営費交付金が未執行となっている理由が明らかにされているか。</li> <li>・運営費交付金債務(運営費交付金の未執行)と業務運営との関係についての分析が行われているか。</li> </ul>	<p><b>【繰越欠損金】</b> 計上なし</p> <p>※繰越欠損金がある場合 <b>【解消計画の有無とその妥当性】</b></p> <p><b>【解消計画に従った繰越欠損金の解消状況】</b></p> <p>※解消計画がない場合 <b>【解消計画が未策定の理由】</b> ※既に過年度において繰越欠損金の解消計画が策定されている場合の、同計画の見直しの必要性又は見直し後の計画の妥当性についても記載。</p> <p><b>【運営費交付金債務の未執行率(%)と未執行の理由】</b> 本年度は中期目標期間最終年度であるため、運営費交付金は全額収益化している。</p> <p><b>【業務運営に与える影響の分析】</b> 該当なし</p>	
---	--	--

<b>【(小項目)3-2】</b> 短期借入金の限度額		<b>【評定】</b>			
<b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b> 短期借入金の限度額は、12億円。 短期借入金が想定される理由は、運営費交付金の受入りに遅延が生じた場合である。		A			
		H18	H19	H20	H21
		A	A	A	A
<b>評価基準(年度計画及び評価の視点)</b>	<b>実績</b>	<b>分析・評価</b>			
・ 短期借入金は有るか。有る場合は、その額及び必要性は適切か。	<b>【短期借入金の有無とその額】</b> 該当なし  <b>【必要性及び適切性】</b>	○特になし			

【(小項目)3-3】 重要な財産の処分等に関する計画		【評定】			
<b>【概要】</b> 重要な財産を譲渡、処分する計画はない。		A			
		H18	H19	H20	H21
		A	A	A	A
<b>評価基準(年度計画及び評価の視点)</b>	<b>実績</b>	<b>分析・評価</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>重要な財産の処分に関する計画は有るか。ある場合は、計画に沿って順調に処分に向けた手続きが進められているか。</li> </ul>	<b>【重要な財産の処分に関する計画の有無及びその進捗状況】</b> 重要な財産の処分に関する計画はない。	○重要な財産の処分等に関する計画はない。			

【(小項目)3-4】 剰余金の使途		【評定】			
<b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b> 決算において剰余金が発生した時は、次の購入等に充てる。 1 美術作品の購入・修理 2 調査研究、出版事業の充実 3 企画展等の追加実施 4 入館者サービス、情報提供の質的向上、老朽化対応のための整備の充実		A			
		H18	H19	H20	H21
		A	A	A	A
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績	分析・評価			
<ul style="list-style-type: none"> <li>目的積立金は有るか。有る場合は、それは活用計画等の活用方策は定めるなどとして適切に活用されているか。</li> </ul> <b>【積立金の使途】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>積立金の支出はあるか。有る場合は、その使途は中期計画と整合しているか。</li> </ul>	<b>【目的積立金の有無及び活用状況】</b> 目的積立金は計上していない。  <b>【積立金の支出の有無及びその使途】</b> 積立金の支出はない。	○目的積立金はないため、使途の問題はない。 また、積立金の支出はない。			

【(小項目)3-5】	人事の状況	【評定】 A											
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>1 人事に関する計画</p> <p>(1)方針</p> <p>① 国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討し、導入する。</p> <p>② 人事交流を促進するとともに、職員の資質F向上を図るための研修機会の提供に努める。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。</p> <p>(2)人員に係る指標</p> <p>常勤職員については、その職員数の抑制を図る。</p> <p>(参考1)</p> <p>1)期初の常勤職員数 131人</p> <p>2)期末の常勤職員数の見込み 131人</p> <p>(参考2)中期目標期間中の人件費総額見込額</p> <p>5, 220百万円</p> <p>但し、上記の額は、役職員に対し支給する報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額であり、退職金、福利厚生費を含まない。</p>		<table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="1608 204 1760 245">H18</th> <th data-bbox="1760 204 1912 245">H19</th> <th data-bbox="1912 204 2065 245">H20</th> <th data-bbox="2065 204 2190 245">H21</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="1608 245 1760 363">A</td> <td data-bbox="1760 245 1912 363">A</td> <td data-bbox="1912 245 2065 363">B</td> <td data-bbox="2065 245 2190 363">A</td> </tr> </tbody> </table>				H18	H19	H20	H21	A	A	B	A
H18	H19	H20	H21										
A	A	B	A										
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績	分析・評価											
<p>1 人事に関する計画</p> <p>職員の研修計画</p> <p>① 職員の意識向上を図るため、次の職員研修を実施したか。</p> <p>ア 新規採用者・転任者職員研修</p> <p>イ 待遇研修</p> <p>ウ メンタルヘルスケアに関連する研修</p> <p>② 外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図ったか。特に研究職職員への研修機</p>	<p>職員の研修等</p> <p>待遇・クレーム研修、メンタルヘルス研修等の内部研修を実施するとともに、人事、会計、情報処理、専門的な知識や技術の習得を目的とした外部の研修に積極的に職員を派遣した。</p> <p>ア 東京国立近代美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文部科学省主催「平成 22 年度博物館長研修」(1名)</li> <li>・法務省主催「平成 22 年度人権に関する国家公務員等研修会」(1名)</li> <li>・総務省主催評価・監査中央セミナー(1名)</li> <li>・国立大学協会主催「平成 22 年度関東・甲信越地区国立大学法人等係長研修」(1名)</li> <li>・国立大学協会主催「平成 22 年度関東・甲信越地区及び東京地区実践セミナー(人事・労務の部)」(1名)</li> <li>・第59回全国美術館会議総会(1名)</li> <li>・アジア美術館館長会議(1名)</li> </ul>	<p>○特に問題はないと認められるが、将来において常勤職員数の抑制が本来業務に影響を与えないかの検証が望まれる。</p> <p>○研究員ほかのメンタルヘルスを定期的 to 実施する必要がある。</p>											

<p>会の増大に努めたか。</p> <p>2 メンタルヘルスケアへの対応</p> <p>職員のメンタルヘルスケアの一層の推進を図ったか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第6回アジアキュレーター会議(1名)</li> <li>・第66回FIAF総会(1名)</li> <li>・ブリティッシュ・カウンシル主催「日英キュレーター交流プログラム」(1名)</li> <li>・デジタルアーカイブを核とするコンテンツ情報基盤に関する研究集会(1名)</li> <li>・ボルデノーネ無声映画祭(2名)</li> <li>・東京大学主催「係員研修(7年経験者)」(1名)</li> <li>・国立美術館「平成22年度接遇・クレーム研修」(8名)</li> <li>・国立美術館「平成22年度メンタルヘルス研修」(5名)</li> <li>・消防訓練(平成23年1月24日)</li> </ul> <p>イ 京都国立近代美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人事院主催「第63回近畿地区中堅係員研修」(1名)</li> <li>・人事院主催「平成22年度近畿地区女性職員セミナー(キャリアアップ研修)」(1名)</li> <li>・人事院主催「第1回近畿地区接遇研修指導者養成コース」(1名)</li> <li>・京都府主催「平成22年度新型インフルエンザ対策訓練」(1名)</li> <li>・全国美術館会議「第59回全国美術館会議総会」(4名)</li> <li>・国立美術館「平成22年度メンタルヘルス研修」(3名)</li> <li>・国立美術館「平成22年度接遇・クレーム研修」(2名)</li> <li>・米国国務省主催のインターナショナル・ビジター・リーダーシッププログラム(IVLP)として派遣(1名)</li> <li>・避難誘導訓練・消火訓練(平成22年9月13日)</li> </ul> <p>ウ 国立西洋美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所主催「平成22年度博物館・美術館等の保存担当学芸員研修」(1名)</li> <li>・社団法人国立大学協会支部主催「平成22年度関東・甲信越地区及び東京地区実践セミナー(財務の部)」(1名)</li> <li>・大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館主催「平成22年度アーカイブズ・カレッジ史料管理学研修会」(1名)</li> <li>・東京都主催「総量削減義務と排出量取引制度」管理者講習会(2名)</li> <li>・財団法人日本産業廃棄物処理振興センター主催「平成22年度特別管理産業廃棄物管理責任者に関する講習会」(1名)</li> <li>・第59回全国美術館会議総会(1名)</li> <li>・全国美術館会議 情報・資料研究部会 企画セミナー(1名)</li> <li>・国立美術館「平成22年度接遇・クレーム研修」(1名)</li> <li>・国立美術館「平成22年度メンタルヘルス研修」(2名)</li> <li>・文部科学省学芸員等在外派遣研修生として海外へ派遣(1名)</li> <li>・消防訓練(平成22年12月6日)</li> </ul> <p>エ 国立国際美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大阪大学主催「平成22年度大阪大学係長研修(新任)」(1名)</li> <li>・第59回全国美術館会議総会(5名)</li> </ul>	
--	---	--



- ・第6回アジア次世代美術館キュレーター会議(1名)
- ・国立美術館主催「平成 22 年度新任職員接遇・クレーム研修」(2名)
- ・大阪市主催「特定建築物の衛生管理に関する講習会」(1名)
- ・大阪市主催「飲料衛生管理講習会」(1名)
- ・防災訓練(平成 22 年 5 月 31 日)

才 国立新美術館

- ・人事院関東事務局主催「第 35 回関東地区課長研修」(1名)
- ・人事院関東事務局主催「平成 22 年度関東地区メンター養成研修」(1名)
- ・財務省会計センター主催「第 48 回政府関係法人会計事務職員研修」(1名)
- ・独立行政法人工業所有権情報・研修館主催「平成 22 年度第 3 回知的財産研修(初級)」(1名)
- ・独立行政法人国立公文書館主催「平成 22 年度公文書保存管理講習会」(1名)
- ・公益財団法人文化財虫害研究所主催「第 32 回文化財虫菌害防除作業に関する講習会と作業主任者能力認定試験」(1名)
- ・公益財団法人東京防災指導協会主催「平成 22 年度防火管理技能講習」(1名)
- ・東京都環境局主催「総量削減義務と排出量取引制度」(1名)
- ・日本博物館協会「第 58 回全国博物館大会」(2名)
- ・全国美術館会議「第 59 回全国美術館会議総会」(3名)
- ・国立美術館「メンタルヘルス研修」(6名)
- ・国立美術館「平成 22 年度接遇・クレーム研修」(4名)
- ・自衛消防訓練(業者含む。22 年 5 月 18 日, 23 年 2 月 15 日)

【人事に関する計画】

- ・ 人事に関する計画は有るか。有る場合は、当該計画の進捗は順調か。
- ・ 人事管理は適切に行われているか。

【人事に関する計画の有無及びその進捗状況】

・ 常勤職員の削減状況

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
常勤職員数	127	125	125	119	114

・ 常勤職員、任期付職員の計画的採用状況

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
常勤職員	7	1	6	1	1
任期付職員	0	0	0	0	0

・ 危機管理体制等の整備・充実に関する取組状況

各館において消防訓練を実施し、地震や火災への対応を想定した準備を整え、危機管理のため

	の対策を講じ、不測の事態にも柔軟に対応できるよう危機管理の意識を持つように徹底した。	
--	--	--

【(小項目)3-6】 施設整備の状況		【評価】			
<b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b> 別紙のとおり施設整備に関する計画に沿った整備を推進する。		A			
		H18	H19	H20	H21
		A	A	A	A
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績	分析・評価			
3 施設・設備に関する計画 施設・設備の整備を計画的に推進したか。  <b>【施設及び設備に関する計画】</b> ・施設及び設備に関する計画は有るか。有る場合は、当該計画の進捗は順調か。  <b>【中期目標期間を超える債務負担】</b> ・中期目標期間を超える債務負担は有るか。有る場合は、その理由は適切か。	<b>【施設及び設備に関する計画の有無及びその進捗状況】</b> 中期計画の施設・設備に関する計画に基づき、以下の施設整備が完了した。 ・東京国立近代美術館工芸館外壁他改修 ・東京国立近代美術館フィルムセンター外壁他改修 ・東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館増築 ・国立新美術館土地購入(本年度取得予定分)  <b>【中期目標期間を超える債務負担とその理由】</b> 中期目標期間を超える債務負担はない。	○施設及び整備は中期計画に基づき適切に実施されていると認められる。また、中期目標期間を超える債務負担はない。			

【(小項目)3-7】 関連公益法人		【評定】			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】		A			
		H18	H19	H20	H21
		A	A	A	A
評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績	分析・評価			
<b>【関連法人】</b> ・ 法人の特定の業務を独占的に受託している関連法人について、当該法人と関連法人との関係が具体的に明らかにされているか。  ・ 当該関連法人との業務委託の妥当性についての評価が行われているか。  ・ 関連法人に対する出資、出えん、負担金等(以下「出資等」という。)について、法人の政策目的を踏まえた出資等の必要性の評価が行われているか。	<b>【関連法人の有無】</b> 関連法人はない。  <b>【当該法人との関係】</b>  <b>【当該法人に対する業務委託の必要性、契約金額の妥当性】</b>  <b>【委託先の収支に占める再委託費の割合】</b>  <b>【当該法人への出資等の必要性】</b>	○関連法人はない。			